

四国縦貫自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告 1

赤坂遺跡（Ⅰ）
赤坂遺跡（Ⅱ）
赤坂遺跡（Ⅲ）
金蔵～上井遺跡
天神山遺跡
青谷遺跡

1993

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

四国縦貫自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告

1

赤坂遺跡（Ⅰ）
赤坂遺跡（Ⅱ）
赤坂遺跡（Ⅲ）
金蔵～上井遺跡
天神山遺跡
青谷遺跡

1993

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団



長峰台地東端の遺跡群と吉野川（北より）



赤坂遺跡（Ⅲ）全景（南より）

序 文

本センターは、平成元年4月1日に徳島県内における埋蔵文化財の調査及び研究を目的として設立されました。本年度で設立4年目をむかえ、平成元年度より徳島県から委託を受けました四国縦貫自動車道（徳島～脇間）の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を主な業務としてまいりました。事業を実施するのに必要な体制を整えることができたのは、徳島県教育委員会の御支援の賜であります。

本報告書は、平成元年度から3年度に調査を実施した阿波郡阿波町赤坂遺跡（Ⅰ）、赤坂遺跡（Ⅱ）、赤坂遺跡（Ⅲ）、板野郡土成町金蔵～上井遺跡、同郡上板町天神山遺跡、同町青谷遺跡の6遺跡について発掘調査の成果をまとめたものであります。これらの遺跡は阿讃山脈南麓に位置しており、赤坂遺跡（Ⅰ）からは弥生中期末～後期初頭の遺構等が、赤坂遺跡（Ⅲ）からは弥生中期の住居跡が検出されており、さらに金蔵～上井遺跡からは旧石器群がほぼ原位置で検出されるなど注目される遺物も出土いたしております。

本報告書が調査研究の資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。なお、発掘調査の実施、報告書作成にあたり、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元の皆様に多大の御援助、御協力を頂き、また研究者の方からは貴重な御教示を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

平成5年3月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 近 藤 通 弘

例 言

- 1 本書は平成元年（1989）度から平成3年（1991）度にかけて調査を実施した四国縦貫自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書には赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）（阿波郡阿波町所在）、金蔵～上井遺跡（板野郡土成町所在）、天神山遺跡・青谷遺跡（板野郡上板町所在）調査報告を収録した。
- 3 発掘調査は日本道路公団高松建設局から徳島県が委託を受け、徳島県からの委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。

凡 例

S A	掘立柱建物跡	S E	井戸	S O	窯
S B	竪穴住居跡	S K	土坑（壙）	S P	柱穴
S D	溝	S T	墓	S X	不明遺構

- 5 方位は国土座標第Ⅳ座標系の北、高さは東京湾標準潮位（T. P.）を表す。
- 6 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』1989年度版によった。
- 7 調査に当たっては、次の機関の指導・協力を得た。
徳島県教育委員会 日本道路公団高松建設局 同徳島工事事務所 同脇町工事事務所
徳島県土木部縦貫道推進局 同中央事務所 阿波町 土成町 上板町
- 8 本書の執筆は以下のとおりである。
Ⅰ 菅原康夫 Ⅱ 原 芳伸 Ⅲ 久保脇美朗 Ⅳ－1・3 湯浅利彦 Ⅳ－2 平山義朗

なお、各章の構成はそれぞれの執筆者が担当した。遺物の写真撮影は島巡賢二、全体の編集は菅原が行った。

本文目次

1 調査に至る経緯	1
II 赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）	7
1 調査の経過	9
(1) 調査の経過	9
(2) 調査日誌抄	15
2 遺跡の立地と環境	17
(1) 地理的環境	17
(2) 歴史的環境	17
3 調査成果	20
A 赤坂遺跡（Ⅰ）	20
(1) 基本層序	20
(2) 遺構と遺物	20
B 赤坂遺跡（Ⅱ）	38
(1) 基本層序	38
(2) 遺物	39
C 赤坂遺跡（Ⅲ）	40
(1) 基本層序	40
(2) 遺構と遺物	41
4 まとめ	57
(1) 赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）の年代と性格について	
III 金蔵～上井遺跡	97
1 調査の経過	99
(1) 調査の経過	99
(2) 発掘調査の方法	99
(3) 調査日誌抄	99
2 遺跡の立地と環境	103
(1) 地理的環境	103
(2) 歴史的環境	103
3 調査成果	105
(1) 基本層序	105
(2) 遺構と遺物	106

A地区	106
B・C地区	106
① 第1遺構面の遺構と遺物	106
② 第2遺構面の遺構と遺物	114
③ 包含層出土遺物	115
4 まとめ	122
(1) 旧石器時代の石器群	122
(2) 弥生時代の遺構と遺物	122
(3) 古代・中世関係の遺構	123
IV 天神山遺跡・青谷遺跡	137
1 調査の経過	139
(1) 調査の経過	139
(2) 調査区割	139
(3) 試掘調査	140
(4) 調査日誌抄	145
2 遺跡の立地と環境	147
(1) 地理的環境	147
(2) 歴史的環境	147
3 調査成果	150
A 天神山遺跡	150
(1) 基本層序	150
(2) 遺構と遺物	152
① 弥生時代	152
② 近世	161
③ 遺構に伴わない遺物	161
(3) まとめ	163
B 青谷遺跡	165
(1) 基本層序	165
(2) 遺構と遺物	168
① 縄文時代	170
② 弥生時代	170
③ 古代・中世	173
④ 遺構に伴わない遺物	174
(3) まとめ	178

挿図目次

I	第1図	四国縦貫自動車道（徳島～脇）路線図……………	4	第38図	S B 1001出土石器実測図（1）……………	46	
				第39図	S B 1001出土石器実測図（2）……………	46	
II	第1図	赤坂遺跡（Ⅰ）グリッド配置図……………	10	第40図	S B 1001出土石器実測図（3）……………	47	
	第2図	赤坂遺跡（Ⅲ）グリッド配置図……………	11	第41図	S B 1002実測図……………	48	
	第3図	赤坂遺跡（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）調査地位位置図……………	13	第42図	S B 1002出土石器実測図……………	48	
	第4図	赤坂遺跡（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）周辺の遺跡……………	18	第43図	S B 1002出土石器実測図（1）……………	49	
	第5図	赤坂遺跡（Ⅰ）遺構配置図……………	21	第44図	S B 1002出土石器実測図（2）……………	50	
	第6図	赤坂遺跡（Ⅰ）土層実測図……………	23	第45図	S B 1002出土石器実測図（3）……………	51	
	第7図	S K 1001実測図……………	24	第46図	S B 1002出土石器実測図（4）……………	52	
	第8図	S K 1001出土土器実測図……………	24	第47図	S K 1002実測図……………	53	
	第9図	S K 1003実測図……………	24	第48図	S K 1002出土土器実測図……………	53	
	第10図	S K 1003出土土器実測図……………	25	第49図	S K 1002出土石器実測図……………	54	
	第11図	S K 1003出土石器実測図……………	26	第50図	遺物包含層出土石器実測図（1）……………	55	
	第12図	S K 1004実測図……………	27	第51図	遺物包含層出土石器実測図（2）……………	55	
	第13図	S K 1004出土石器実測図……………	27				
	第14図	S K 1005実測図……………	28	III	第1図	調査地位位置図……………	101
	第15図	S K 1005出土土器実測図……………	28		第2図	金蔵～上井遺跡周辺主要遺跡分布図……………	103
	第16図	S K 1007実測図……………	28		第3図	グリッド配置図……………	104
	第17図	S K 1007出土土器実測図……………	28		第4図	B・C地区内低湿地分布範囲略図……………	105
	第18図	S K 1007出土石器実測図……………	29		第5図	A地区 S X 1001実測図……………	106
	第19図	S K 1008実測図……………	29		第6図	S X 1001出土土器実測図……………	106
	第20図	S K 1008出土土器実測図……………	30		第7図	A地区出土土棒実測図……………	106
	第21図	S K 1008出土石器実測図……………	31		第8図	基本層序……………	107
	第22図	S K 1009実測図……………	32		第9図	遺構配置図……………	109
	第23図	S K 1009出土土器実測図……………	32		第10図	S D 1001実測図……………	111
	第24図	S P 1067出土土器実測図……………	33		第11図	S O 1001実測図……………	112
	第25図	遺物包含層出土土器実測図……………	34		第12図	S O 1002実測図……………	112
	第26図	遺物包含層出土石器実測図（1）……………	35		第13図	S O 1003実測図……………	113
	第27図	遺物包含層出土石器実測図（2）……………	36		第14図	S O 1004実測図……………	113
	第28図	遺物包含層出土石器実測図（3）……………	37		第15図	S O 1006実測図……………	113
	第29図	遺物包含層出土遺物実測図（その他）……………	37		第16図	S K 2001実測図……………	114
	第30図	赤坂遺跡（Ⅱ）柱状土層実測図……………	38		第17図	S K 2002実測図……………	114
	第31図	赤坂遺跡（Ⅱ）トレンチ配置図……………	39		第18図	B・C地区出土古代・中世遺物実測図……………	114
	第32図	出土遺物実測図（須恵器）……………	35		第19図	B地区出土弥生土器実測図……………	115
	第33図	出土遺物実測図（旧石器）……………	40		第20図	B地区第15層出土土器実測図……………	115
	第34図	赤坂遺跡（Ⅲ）土層実測図……………	42		第21図	B・C地区出土弥生時代石器実測図……………	116
	第35図	赤坂遺跡（Ⅲ）遺構配置図……………	43		第22図	B・C地区旧石器出土範囲略図……………	117
	第36図	S B 1001実測図……………	45		第23図	B・C地区出土旧石器実測図（1）……………	118
	第37図	S B 1001出土土器実測図……………	45		第24図	B・C地区出土旧石器実測図（2）……………	119

第25図	B・C地区旧石器分布図	120	第22図	遺物包含層等出土遺物実測図（1）	162
IV 第1図	天神山遺跡調査区割・調査区・試掘トレンチ配置図	140	第23図	遺物包含層等出土遺物実測図（2）	163
第2図	青谷遺跡調査区割・調査区・試掘トレンチ配置図	142	第24図	青谷遺跡基本土層実測図	166
第3図	調査地位置図	143	第25図	青谷遺跡遺構配置図（1）	167
第4図	周辺の遺跡分布図	148	第26図	青谷遺跡遺構配置図（2）	168
第5図	天神山遺跡基本土層実測図	150	第27図	青谷遺跡遺構配置図（3）	169
第6図	天神山遺跡遺構配置図	151	第28図	S K 1027実測図	170
第7図	S B 1001実測図	153	第29図	S K 1027出土遺物実測図	170
第8図	S B 1001出土遺物実測図（1）	153	第30図	S K 1029実測図	170
第9図	S B 1001出土遺物実測図（2）	154	第31図	S K 1029出土遺物実測図	170
第10図	S B 1001出土遺物実測図（3）	155	第32図	S K 1038実測図	171
第11図	S K 1003実測図	156	第33図	S K 1020実測図	171
第12図	S K 1007実測図	156	第34図	S K 1040実測図	171
第13図	S K 1008実測図	157	第35図	S K 1040出土遺物実測図	171
第14図	S K 1008出土遺物実測図	157	第36図	S D 1004実測図	172
第15図	S T 1001実測図	158	第37図	S D 1006実測図	172
第16図	S T 1001出土遺物実測図	158	第38図	S X 1004実測図	173
第17図	S T 1004実測図	159	第39図	S X 1004出土遺物実測図	173
第18図	S T 1004出土遺物実測図	159	第40図	S K 1002実測図	174
第19図	S T 1005実測図	160	第41図	S K 1001実測図	174
第20図	S K 1001実測図	160	第42図	遺物包含層等出土遺物実測図（1）	175
第21図	S K 1001出土遺物実測図	161	第43図	遺物包含層等出土遺物実測図（2）	176
			第44図	遺物包含層等出土遺物実測図（3）	177

表目次

I 第1表	四国縦貫自動車道埋蔵文化財調査地一覧表	5	第3表	天神山遺跡 S K 1008出土遺物観察表	180
II 第1表	赤坂遺跡（I）遺構一覧表	62	第4表	天神山遺跡 S T 1001出土遺物観察表	180
第2表	赤坂遺跡（III）遺構一覧表	64	第5表	天神山遺跡 S T 1004出土遺物観察表	181
第3表	赤坂遺跡（I）出土遺物観察表	67	第6表	天神山遺跡 S K 1001出土遺物観察表	181
第4表	赤坂遺跡（II）出土遺物観察表	72	第7表	天神山遺跡遺物包含層等出土遺物観察表	182
第5表	赤坂遺跡（III）出土遺物観察表	72	第8表	青谷遺跡遺構一覧表	183
III 第1表	出土遺物観察表（1）土器	125	第9表	青谷遺跡 S K 1027出土遺物観察表	187
第2表	出土遺物観察表（2）石器	125	第10表	青谷遺跡 S K 1029出土遺物観察表	187
IV 第1表	天神山遺跡遺構一覧表	179	第11表	青谷遺跡 S K 1040出土遺物観察表	187
第2表	天神山遺跡 S B 1001出土遺物観察表	179	第12表	青谷遺跡 S X 1004出土遺物観察表	188
			第13表	青谷遺跡遺物包含層等出土遺物観察表	188

写真目次

II 写真1 赤坂遺跡(Ⅰ)調査風景……………	15	III 写真1 試掘調査風景……………	100
写真2 赤坂遺跡(Ⅲ)調査風景……………	16		
		IV 写真1 天神山遺跡調査風景……………	145

図版目次

巻頭図版 長峰台地東端の遺跡群と吉野川 赤坂遺跡(Ⅲ)全景		図版18 出土遺物(2)……………	94
		図版19 出土遺物(3)……………	95
II 図版1 赤坂遺跡(Ⅰ)・(Ⅱ)・(Ⅲ)調査区遠景……………	77	図版20 出土遺物(4)……………	96
赤坂遺跡(Ⅰ)調査前風景		III 図版1 金蔵～上井遺跡調査区遠景……………	127
図版2 赤坂遺跡(Ⅱ)調査前風景……………	78	発掘調査風景	
赤坂遺跡(Ⅲ)調査前風景		図版2 S D1001検出状況……………	128
図版3 赤坂遺跡(Ⅰ)遺構検出状況全景……………	79	S D1001完掘状況	
S K1001全景		図版3 S O1001検出状況……………	129
図版4 S K1001遺物出土状況……………	80	S O1001完掘状況	
S K1003全景		図版4 S O1002・1003検出状況……………	130
図版5 S K1003遺物出土状況……………	81	S O1002・1003掘り下げ状況	
S K1005全景		図版5 S K2002検出状況……………	131
図版6 S K1007全景……………	82	S K2002完掘状況	
S K1007遺物出土状況		図版6 石棒出土状況……………	132
図版7 S K1008全景……………	83	石核出土状況	
S K1008遺物出土状況		図版7 B・C地区出土旧石器……………	133
図版8 出土遺物(1)……………	84	図版8 遺物包含層出土遺物(1)……………	134
図版9 出土遺物(2)……………	85	図版9 遺物包含層出土遺物(2)……………	135
図版10 出土遺物(3)……………	86		
図版11 出土遺物(4)……………	87	IV 図版1 天神山遺跡調査前全景……………	191
図版12 出土遺物(5)……………	88	天神山遺跡第1調査区A地区遺構完掘状況	
図版13 赤坂遺跡(Ⅱ)調査風景		図版2 天神山遺跡S B1001完掘状況……………	192
土層堆積状況……………	89	天神山遺跡S K1003掘り下げ状況	
図版14 出土遺物……………	90	図版3 天神山遺跡S K1007掘り下げ状況……………	193
図版15 赤坂遺跡(Ⅲ)遺構検出状況全景……………	91	天神山遺跡S K1008掘り下げ状況	
S B1001全景		図版4 天神山遺跡S T1001掘り下げ状況……………	194
図版16 S B1002全景……………	92	天神山遺跡S T1005掘り下げ状況	
S K1002全景		図版5 天神山遺跡S T1004 完掘状況……………	195
図版17 出土遺物(1)……………	93	図版6 天神山遺跡出土遺物(1)……………	196

図版 7	天神山遺跡出土遺物（2）	197
図版 8	青谷遺跡遠景	198
	青谷遺跡第 7・8 調査区調査前状況	
図版 9	青谷遺跡 S K1027 掘り下げ状況	199
	青谷遺跡 S K1029・S K1037 掘り下げ状況	
図版10	青谷遺跡 S K1038 完掘状況	200
	青谷遺跡 S K1020 完掘状況	
図版11	青谷遺跡 S K1040 完掘状況	201
	青谷遺跡 S D1004 完掘状況	
図版12	青谷遺跡第 2 調査区遺構掘り下げ状況	202
	青谷遺跡 S X1004・S D1007 掘り下げ状況	
図版13	青谷遺跡 S K1002・S K1003 掘り下げ状況	203
	青谷遺跡第 8 調査区完掘状況	
図版14	青谷遺跡出土遺物（1）	204
図版15	青谷遺跡出土遺物（2）	205

I 調査に至る経緯

四国縦貫自動車道は「国土開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づき、四国4県を連結する幹線道路として計画された。徳島県内では徳島～脇間については昭和48年（1973）10月19日「道路整備特別措置法」に基づき建設大臣から第7次の施行命令が出され（昭和54年3月2日整備計画変更、施行命令）、昭和55年12月19日実施計画の認可、昭和56年1月19日に路線発表がされた。

これは徳島市川内町の徳島 I.C を起点とし、吉野川に平行して西進し、板野郡板野町の沖積平野を横断した後、同郡上板町から阿波郡阿波町にかけて阿讃山麓を通過して脇 I.C を結ぶ、区間延長41.4 km、用地取得面積259 ha に及ぶ事業である。

昭和61年4月24日道路局長通達により暫定施工に変更され、62年11月6日徳島～脇間の起工式が行われた。昭和63年5月31日には藍住 I.C（追加 I.C）の施行命令が出され、6月30日に実施計画が認可されている。

この間徳島県教育委員会（以下「県教委」という。）は昭和60～62年度にかけて脇～板野間、63年度には徳島～板野間の路線に係る分布調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握に努めた。これと前後し、分布調査結果を基に県教委と協議を重ねた日本道路公団高松建設局（以下「公団」という。）は、昭和63年6月17日、文化庁に脇～板野間に係る58遺跡の取扱いについて協議を申し入れ、平成元年3月30日、工事の施工に先立って発掘調査を実施する旨の協議を終了した。

一方、県教委では供用が第10次5か年計画に取り入れられ、平成5年が目標となっていることを受けて、63年度に大規模開発に即応した調査体制の整備を図り、平成元年4月1日、財団法人徳島県埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）を発足させ、調査に対応することとした。センター発足時には未確定であった徳島～板野間の調査については、平成2年1月22日に10遺跡の取扱いについての協議が終了し、路線内に68遺跡、約360,000㎡（暫定分約340,000㎡）、事業地区面積のほぼ13パーセントにあたる文化財対象地が確定した（第1図）。

県と公団との委託契約をふまえ、県とセンターとの委託契約は元年6月1日付けで締結された。センターでは発掘調査にあたって、機械掘削等工事請負方式と空中写真撮影図化を導入することによって、調査の迅速化に努める方針で臨んだ。しかし、文化財対象地があくまで分布調査結果に基づくものであり、特に工事請負として設計・発注するためには掘削土量の把握が不可欠であるため、試掘調査を先行し、遺構の遺存状態及び層厚の把握に努めた。また、用地取得状況を勘案しつつ、散布地・集落跡・古墳など、遺跡の性格・遺構の累積数

に応じた調査方法、調査工期について検討を行い、調査を実施した。

前述したように、試掘調査を先行する事によって層厚・調査範囲を絞り込んだことに加えて、徳島～板野間の沖積平野では現地表面下 3 m 以深に遺跡が存在することから、遺物の採集が行われなくとも、慎重を期して微高地が調査対象地とされていたこともあり、最終の実掘面積は当初見込みに比べて減少した。

平成元年度には、14遺跡14,500㎡、2年度は33遺跡76,390㎡、3年度は30遺跡35,748㎡、4年度は残件であった14遺跡6,826㎡について、用地取得がなされた地区から調査を進め、当該区間の調査を完了した（第1表）。

それぞれの調査の進捗状況については、既刊の徳島県埋蔵文化財センター年報を参照されたい。

出土遺物の整理、調査報告書作成業務は平成3年度に一部着手し、4年度からは本格的な作業に入り、今後順次刊行の予定である。

なお、本書に収録した報告のうち、土成町金蔵～上井遺跡は元年5月30日、用地買収団体交渉が妥結し、事業地内の文化財対象地として最初に用地取得がなされた地区である。センターが県内ではじめて実施する工事請負方式の調査として、その可否とともに、以後の調査の進め方を問うものといえた。従来の直営発掘とは異なる調査担当者の分掌をはじめ、工程管理、土量管理、対外交渉など、組織を挙げての訓練の場となった。

ここにセンター調査報告書第1集として収録する次第である。

調査組織及び整理体制は以下である。

事務局長	日下 昭（平成元・2年度）
	佐藤信博（平成3・4年度）
総務課長	吉田 寛（平成元・2年度）
	木内正幸（平成3年度）
	岡本一仁（平成4年度）
主 事	佐藤 馨（平成2～4年度）
研究補助員	扶川道代
臨時補助員	田村隆子 上田暁美
	岸いくみ 大岸さとみ
	福原幸恵
	柴田みのり 藤川淑江

調 査 課 長 桑原邦彦（平成元・2年度）
 羽山久男（平成3・4年度）
調 整 係 長 菅原康夫（平成元年度）
 島巡賢二（平成2～4年度）
技 師 森長 進（平成元・2年度技術主任）
 堀江隆治（平成3・4年度）
調 査 係 長 島巡賢二（平成元年度）
 菅原康夫（平成2～4年度）

調査担当

金蔵～上井遺跡

研 究 員 久保脇美朗 結城孝典（当時）
 谷 匡人（当時） 高岡 裕（当時）

赤坂遺跡（Ⅰ）

研 究 員 松永住美（当時） 米倉康博（当時）
 中野健次
研究補助員 佐藤誠二

赤坂遺跡（Ⅱ）

研 究 員 松永住美 中野健次
研究補助員 佐藤誠二 十川道雄（当時）

赤坂遺跡（Ⅲ）

第1次調査
研 究 員 松永住美 石川直章（当時）
第2次調査
研 究 員 松永住美 中野健次
研究補助員 佐藤誠二

天神山遺跡

研 究 員 計盛真一郎（当時） 湯浅利彦
 安友克佳 平山義朗

青谷遺跡

第1次調査

研 究 員 計盛真一郎 湯浅利彦
安友克佳 平山義朗

第2次調査

研 究 員 高岡 裕 近藤隆弘（当時）

調査報告書作成業務

赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）

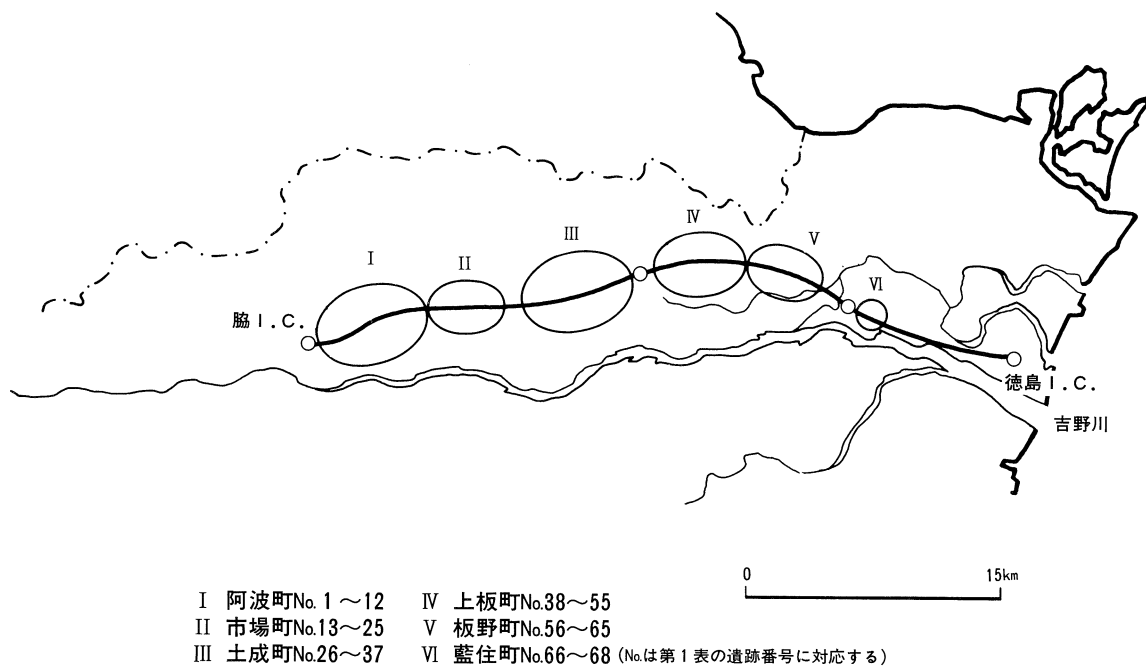
研 究 員 原 芳伸

金蔵～上井遺跡

研 究 員 久保脇美朗

天神山遺跡・青谷遺跡

研 究 員 湯浅利彦 平山義朗



第1図 四国縦貫自動車道（徳島～脇）路線図

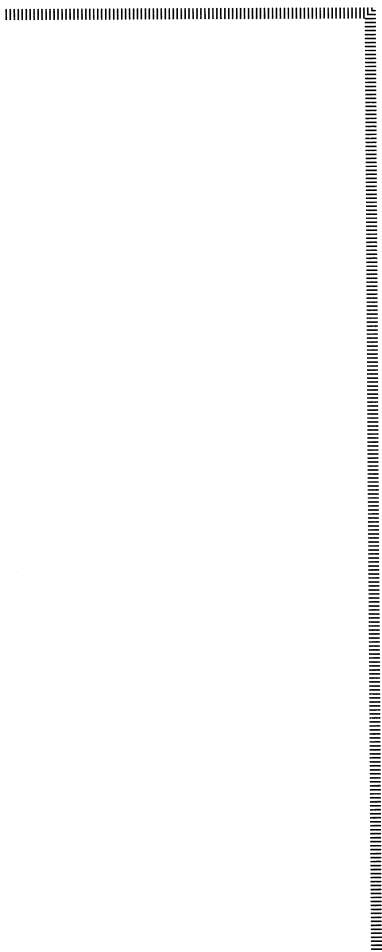
第1表 四国縦貫自動車道埋蔵文化財調査地一覧表

遺跡 番号	遺跡名	所在地	面積 (㎡)					備 考
			実掘面積	元年度	2年度	3年度	4年度	
1	西長峰遺跡	阿波郡阿波町西長峰	170	170				
2	中長峰遺跡	阿波郡阿波町中長峰	100	100				
3	東長峰遺跡	阿波郡阿波町東長峰	30		30			
4	日吉谷遺跡	阿波郡阿波町日吉谷	4,080	1,840	2,240			
5	赤坂遺跡 (Ⅰ)	阿波郡阿波町赤坂	800		800			本報告書所収
6	赤坂遺跡 (Ⅱ)	阿波郡阿波町赤坂	50		50			本報告書所収
7	赤坂遺跡 (Ⅲ)	阿波郡阿波町赤坂	1,600	600	1,000			本報告書所収
8	桜ノ岡遺跡 (Ⅰ)	阿波郡阿波町桜ノ岡	8,000	2,690	5,310			
9	桜ノ岡遺跡 (Ⅲ)	阿波郡阿波町桜ノ岡	240	240				
10	桜ノ岡～東正広遺跡	阿波郡阿波町小倉	1,000		1,000			
11	山ノ神遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	10		10			
12	山ノ神～八丁原遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	30		30			
13	上喜来遺跡	阿波郡市場町大俣	1,160		900	260		
14	大俣山路～大俣宇佐遺跡	阿波郡市場町大俣	250			250		
15	上喜来蛭子～中佐古遺跡	阿波郡市場町上喜来	12,560		11,720	840		
16	八坂遺跡 (Ⅰ)	阿波郡市場町尾開	11			11		
17	八坂遺跡 (Ⅱ)	阿波郡市場町尾開	360	360				
18	八坂遺跡 (Ⅲ)	阿波郡市場町尾開	114			85	29	
19	八坂遺跡 (Ⅳ)	阿波郡市場町尾開	2,000	2,000				
20	日吉～金清遺跡	阿波郡市場町尾開	3,100	2,850	250			
21	古田遺跡 (Ⅰ)	阿波郡市場町切幡	60		60			
22	古田遺跡 (Ⅱ)	阿波郡市場町切幡	510	510				
23	坤山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	60			60		
24	乾山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	850			850		
25	乾山遺跡	阿波郡市場町切幡	2			2		
26	金蔵～上井遺跡	板野郡土成町浦池	2,730	2,730				本報告書所収
27	北原～大法寺遺跡	板野郡土成町土成	4,890		4,890			
28	前田遺跡	板野郡土成町土成	10,810		7,710	3,100		
29	椎ヶ丸～芝生遺跡	板野郡土成町吉田	3,550		3,550			
30	北門～涼堂遺跡	板野郡土成町吉田	200			200		
31	広坪～宮ノ下遺跡	板野郡土成町宮川内	60		60			
32	向山古墳群	板野郡土成町宮川内	50				50	
33	葬ヶ丸遺跡	板野郡土成町高尾	1,400		1,400			
34	けやき原～林遺跡	板野郡土成町高尾	210		210			
35	西谷遺跡	板野郡土成町高尾	7,300		5,650	1,650		
36	法教田遺跡 (Ⅰ)	板野郡土成町高尾	10		10			
37	十楽寺遺跡	板野郡土成町高尾	430		430			
38	安楽寺谷墳墓群	板野郡上板町引野	2,140			2,140		
39	関堀窯跡	板野郡上板町引野	20			20		
40	天神山遺跡	板野郡上板町引野	1,330		1,330			本報告書所収
41	青谷遺跡	板野郡上板町引野	3,980		3,110	870		本報告書所収
42	明神池古墳群	板野郡上板町引野	194		80	114		

遺跡 番号	遺 跡 名	所 在 地	面積 (㎡)					備 考
			実掘面積	元年度	2年度	3年度	4年度	
43	柿谷遺跡	板野郡上板町泉谷	8,930		3,280	5,650		
44	新池遺跡	板野郡上板町泉谷	31			31		
45	神宮寺遺跡	板野郡上板町神宅	15,649			11,507	4,142	
46	菖蒲谷西山A遺跡	板野郡上板町神宅	460		130	330		
47	菖蒲谷西山B遺跡	板野郡上板町神宅	1,980			1,730	250	
48	菖蒲谷東山古墳群	板野郡上板町神宅	115			115		
49	山田古墳群A	板野郡上板町神宅	2,200			2,200		
50	山田古墓	板野郡上板町神宅	8			8		
51	山田古墳B	板野郡上板町神宅	775			525	250	
52	大谷古墳群	板野郡上板町神宅	30				30	
53	大谷薬師遺跡	板野郡上板町神宅	180		180			
54	祝谷古墳	板野郡上板町神宅	90				90	
55	聖天山遺跡	板野郡上板町神宅	115				115	
56	黒谷窯跡	板野郡板野町黒谷	91				91	
57	松谷遺跡	板野郡板野町松谷	900		40	860		
58	蓮華谷古墳群(Ⅰ)	板野郡板野町犬伏	353			65	288	
59	蓮華池遺跡(Ⅰ)	板野郡板野町犬伏	340		340			
60	蓮華谷古墳群(Ⅱ)	板野郡板野町犬伏	1,220		1,220			
61	蓮華池遺跡(Ⅱ)	板野郡板野町犬伏	40	40				
62	黒谷川宮ノ前遺跡	板野郡板野町犬伏	10,580	130	10,450			
63	古城遺跡	板野郡板野町古城	10,000	240	8,920		840	
64	西中富遺跡(Ⅰ)	板野郡板野町西中富	975			975		
65	西中富遺跡(Ⅱ)	板野郡板野町西中富	125			125		
66	東中富遺跡	板野郡藍住町東中富	760			550	210	
67	前須遺跡	板野郡藍住町徳命	876			625	251	
68	新居須遺跡	板野郡藍住町徳命	190				190	
計			133,464					



Ⅱ 赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）



- 1 本章は四国縦貫自動車道建設に伴う赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）発掘調査報告である。
- 2 発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

発掘調査期間 赤坂遺跡（Ⅰ） 平成2年5月17日～7月5日

赤坂遺跡（Ⅱ） 平成2年9月17日～9月24日

赤坂遺跡（Ⅲ） 第1次調査 平成2年1月6日～2月22日

第2次調査 平成2年9月26日～11月1日

報告書作成期間 平成4年4月1日～平成5年3月31日
- 3 遺物番号は各遺跡ごとに通し番号とした。また挿図番号及び図版番号は編集の都合上、赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）をまとめて通し番号とした。
- 4 第4図の地形図は建設省国土地理院発行の1／25,000の地形図「脇町」「西赤谷」を転載したものである。

遺跡抄録

遺 跡 名	赤坂遺跡（Ⅰ）	赤坂遺跡（Ⅱ）	赤坂遺跡（Ⅲ）
読 み	あかさか		
所 在 地	阿波郡阿波町字赤坂65－1	同159－3	同165－1
種 別	集落	散布地	集落
時 代	弥生・中近世	旧石器・弥生・古墳・中近世	弥生
主な遺構	土坑	無	竪穴住居跡・土坑
主な遺物	弥生土器・石器	石核・須恵器	弥生土器・石器

1 調査の経過

(1) 調査の経過

赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）は、四国縦貫自動車道建設予定地に弥生土器片、石鏃等の分布が認められたため、平成元年度・２年度に試掘調査を行い、弥生時代に位置付けられる遺構の存在が確認されたため、本調査の必要性があるとの結論に達した（第３図）。

赤坂遺跡（Ⅰ）

本調査は800㎡の調査区を設定し、平成２年５月17日から発掘調査を開始した。調査区割は5m×5mのメッシュを国土座標軸、X軸・Y軸の線の上に組み、X軸方向は西から東へ1～12の数字を、Y軸方向は南から北へA～Kの記号をつけて、それぞれグリッド名とした（第1図）。

遺構は調査区南部および東部に集中してみられ、長方形および方形の土坑と楕円形の土坑が9基、その他75基のピットが検出された（第1表）。

包含層から出土遺物の大半を占める弥生土器や石鏃、石庖丁の他、古墳時代の須恵器片などが出土しており、弥生時代を中心として古墳、鎌倉、江戸時代の各期にわたっている。

赤坂遺跡（Ⅱ）

50㎡の調査面積を設定し、平成２年９月17日～24日までの調査期間で試掘調査を行ったが、調査区の北半分は開墾による削平をうけて平らになっており、自然地形を残している南半分には2カ所、削平された部分に2カ所、その境界部分に1カ所トレンチの計5カ所を設定した（第31図）。

当該地は、赤坂遺跡（Ⅱ）は地元の伝承や「阿波町史」などで西林城跡の所在が想定されており、今回の発掘調査ではそのことを立証するものと期待された。

西林城跡は『古城諸將記』や『林町史』などによると、三橋上総守範清の子常陸介宗忠の居城で王子神社の後西北方、赤坂の丘陵上にあつたとされている。天正十年に長曾我部元親の奸言により脇城主武田上野介信顕援兵の為脇町へ出陣した留守中に落城したと伝えられている。

しかし、試掘調査の結果それに伴う遺物および遺構を検出することはできなかった。また出土遺物の点数も非常に少なく遺跡の存在の可能性が希薄なため、本調査は行わず試掘調査のみで本遺跡の発掘調査を終了することとなった。

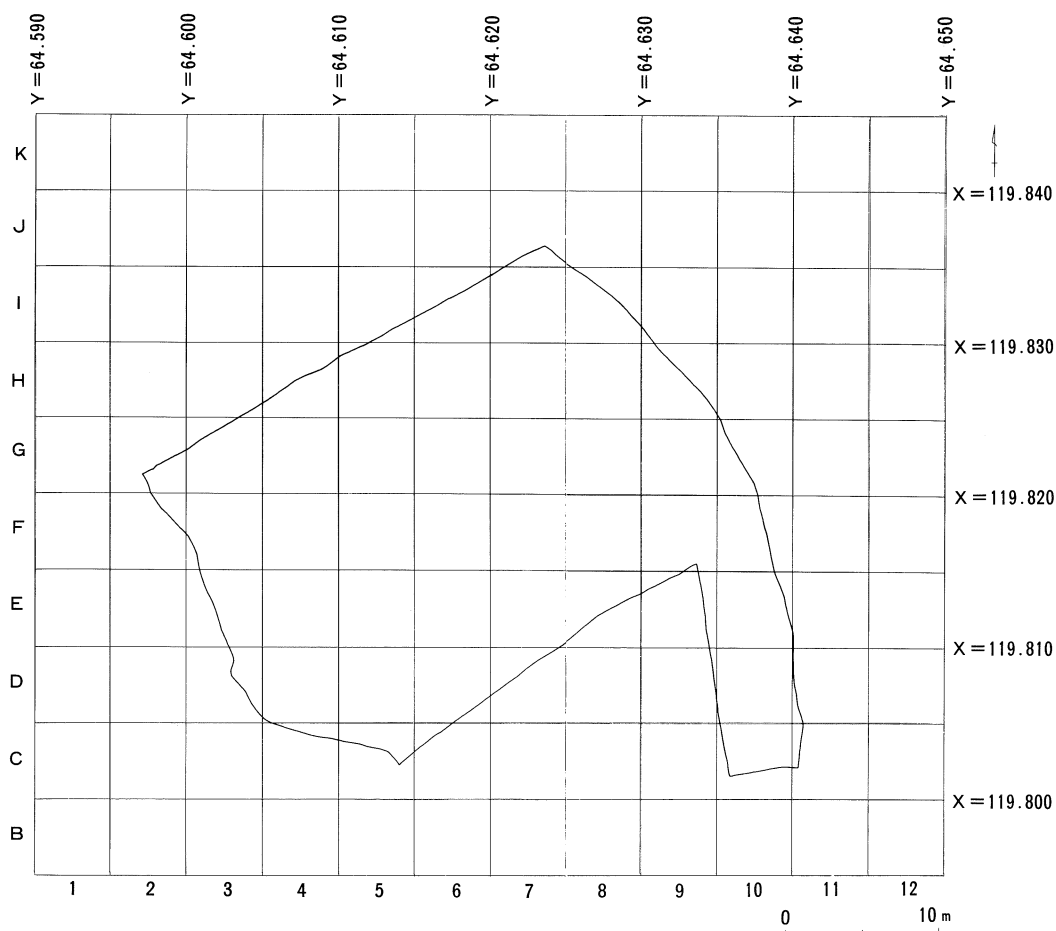
赤坂遺跡（Ⅲ）

平成元年度に試掘調査を行った結果、弥生時代～中世に位置付けられる遺構の存在が濃厚であると予想されたため、引き続き600㎡の調査区域を設定し、1月6日から2月22日まで調査を行った。

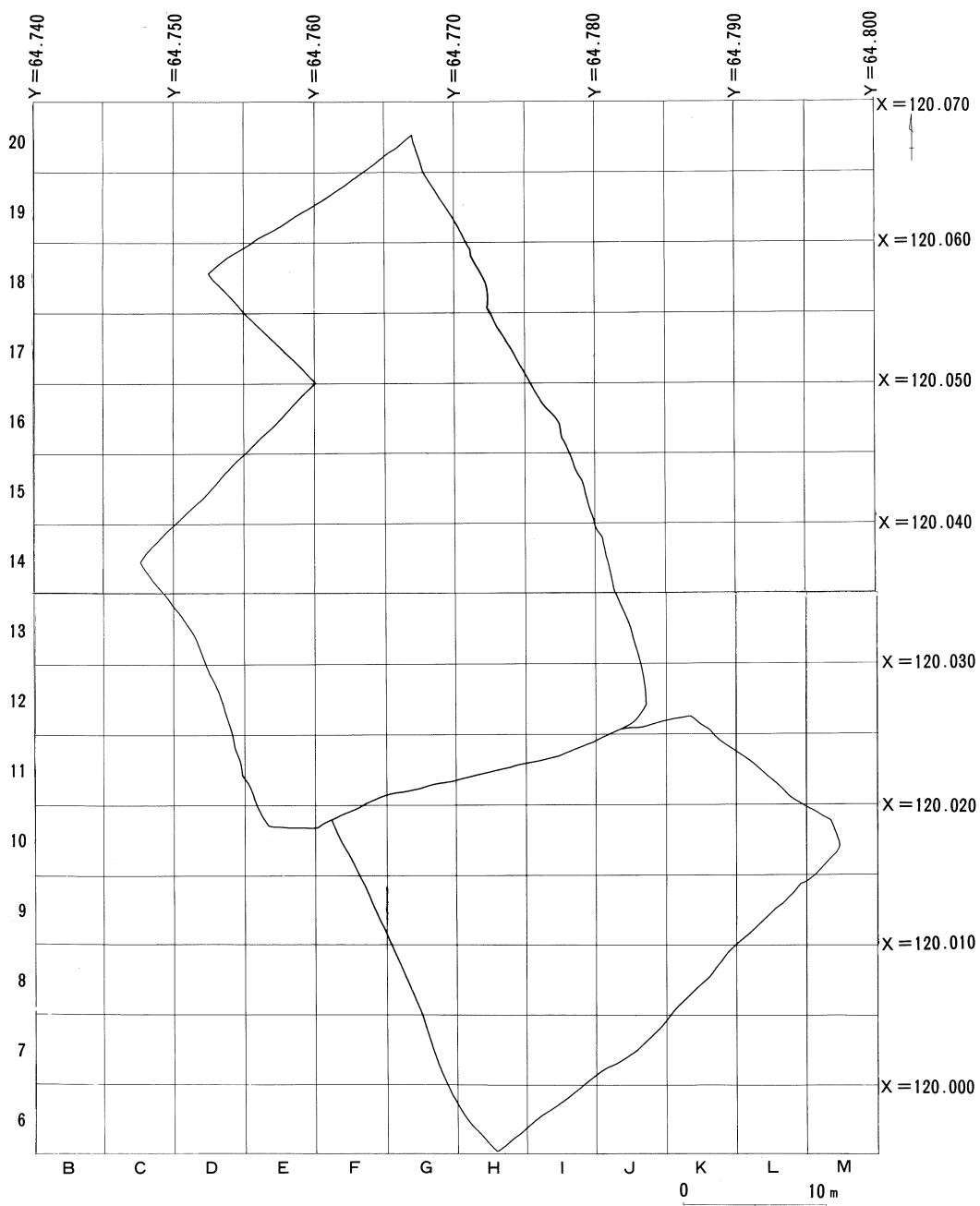
調査区域内のグリッド設定に際しては、5m×5mのメッシュを国土座標の座標軸、X軸、Y軸の線上に組み、X軸方向は西から東へA～Nの記号を、Y軸方向には南から北へと1～12の数字をつけてグリッドを設定した（第2図）。調査の結果、弥生土器片、瓦器片、サヌカイト剥片等が出土したが、良好な遺物包含層および遺構を発見することはなかった（第1次調査）。

平成2年度は、新たに前年度の調査区の北側に1,000㎡の調査区を設定し、9月26日より約1ヶ月間の調査を行った（第2次調査）。

調査区内のグリッド設定に際しては、前年度に続く記号・数字を付けてグリッドを設定し



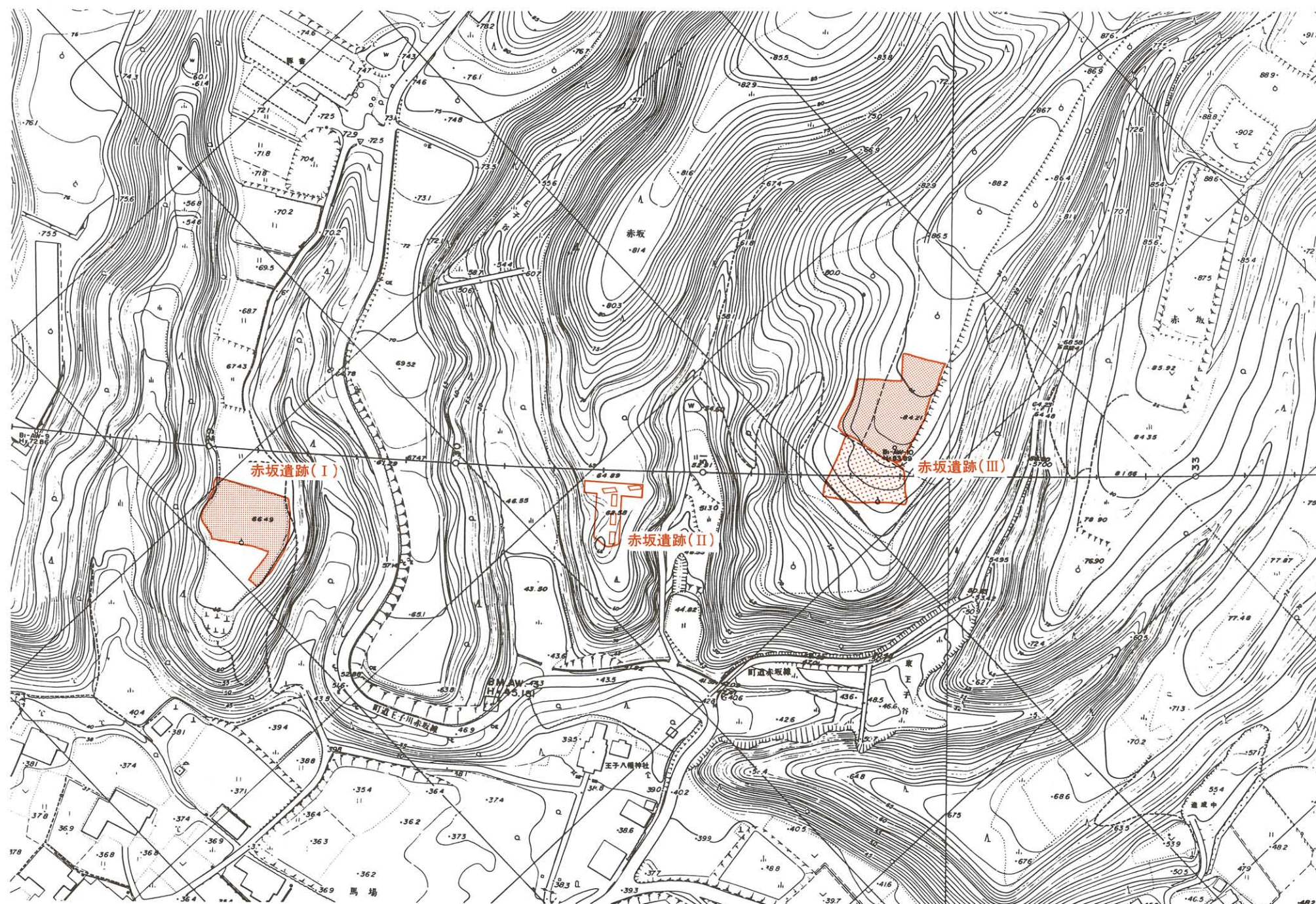
第1図 赤坂遺跡（Ⅰ）グリッド配置図



第2図 赤坂遺跡（Ⅲ）グリッド配置図

た（第2図）。

遺構は調査区の東部と西部で多く検出され、弥生時代中期の竪穴住居跡2、土坑5、溝2、ピット95基を検出した（第2表）。



第3図 赤坂遺跡(I)・(II)・(III)調査地位置図

- 平成元年度調査区
- 平成2年度調査区
- 試掘トレンチ

0 100 m

(2) 調査日誌抄

赤坂遺跡 (I)

1990年

- 5月8日 試掘トレンチ設定。
- 5月10日 試掘トレンチ掘り下げ。弥生土器、サヌカイト片等を出土。
- 5月16日 本調査開始。調査区地形測量及びD7～F10グリッド第1層掘り下げ。
- 5月18日 プレハブ設置。資材搬入。
- 5月24日 D、E5グリッド第2層掘り下げ、及び遺構面精査を行う。ピット18、土坑1基確認。
- 5月28日 E7～F8グリッド遺構検出。E8～G10グリッドからサヌカイト石槍、弥生土器、須恵器等出土。
- 5月30日 D7～F10グリッド遺構検出状況写真撮影。G3～F10グリッド遺構配置図作成。G3～15グリッド第2層掘り下げ。弥生土器、サヌカイト片が出土。G7～I10グリッド遺構検出作業。
- 6月1日 G7～I10グリッド遺構検出状況写真撮影。F7～11グリッド東西セクション南壁及びD7～F7列南北セクション東壁の土層堆積状況写真撮影。のち土層断面実測。F3～6グリッド第2層掘り下げ。C3～F6、D10～F10グリッドの遺構掘り下げ。
- 6月5日 F3～6グリッド東西セクション西半分の土層堆積状況写真撮影

及び土層断面実測。南東部、北東部D7～H9グリッド土層断面実測。

- 6月7日 土坑(SK1001・1003・1005・1007・1008・1009)掘り下げ。写真撮影及び土層実測。

- 6月8日 遺構の平・断面実測開始。



写真1 赤坂遺跡 (I) 調査風景

- 6月12日 遺構及び調査区全景写真撮影。
- 6月14日 遺構の平・断面実測終了。
- 6月18日 第3層掘り下げ開始。
- 6月27日 第3層掘り下げ完了。
- 6月29日 調査終了。

赤坂遺跡 (II)

1990年

- 9月20日 試掘調査に入る。第1トレンチ、第2トレンチ完掘。弥生土器、須恵器等出土。
- 9月21日 第3～5トレンチ掘り下げ。第1～5トレンチ土層断面実測及び土層堆積状況写真撮影。試掘トレンチ配置図作成。試掘調査をもって発掘調査を終了。

赤坂遺跡（Ⅲ）

1990年（第1次調査）

- 1月5日 赤坂遺跡（Ⅲ）現地踏査。
- 1月8日 地形測量及び試掘トレンチ設定。
- 1月9日 トレンチ掘り下げ。試掘調査の結果、調査区を600㎡に拡大。
- 1月19日 掘り下げ開始。
- 1月22日 掘り下げ完了。
- 1月25日 遺構面精査開始。
- 1月30日 遺構面精査完了。少量の弥生土器が出土したが、確実な遺構と判断できるものはなかった。
- 2月5日 調査区全景写真撮影。

2月21日 調査区埋め戻し。

2月22日 現場撤収。

赤坂遺跡（Ⅲ）

1990年（第2次調査）

- 9月3日 地形測量開始。
- 9月4日 表土除去。
- 9月5日 掘り下げ。
- 9月17日 S B 1002検出。
- 9月19日 包含層掘り下げ完了。
- 10月11日 S B 1001検出。
- 10月22日 遺構検出状況写真撮影。遺構配置図作成。
- 10月31日 遺構完掘状況写真撮影。
- 11月1日 調査終了。



写真2 赤坂遺跡（Ⅲ）調査風景

2 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

四国東部に位置する徳島県は、山地が大部分を占めており、平野の部分は段丘・扇状地を含めても全県面積の二割ほどにすぎない。中央構造線と呼ばれる大断層に沿う吉野川下流域平野をはさんで北は阿讃山脈が連なり、南は四国山地・剣山地・海部山地がそれぞれ東西に併走しており、いずれの山地も西に高く東に低くなる傾向がある。また阿讃山脈と四国山地の二列の山脈の間を四国最大の河川である吉野川が直線的に東流して紀伊水道に注いでいる。その流域の北岸には扇状地が発達し、南岸には段丘地形がみられる。

赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）は、この吉野川左岸のほぼ中央部の阿波郡阿波町字赤坂に位置する。地形は中位砂礫台地であり、本流性の厚い砂礫層およびこれをおおう新規扇状地礫層よりなる。台地面は断層によって南北に階段状をなす他、南北方向の側刻崖を境として東西に階段状をなすこともある。北部には阿讃山脈が東西に連なり、徳島・香川県境をなす阿讃山脈の脊梁は西より北東へ連なっている。この山腹を蛇行削刻して小河川が数多く南北に流れており、日開谷川・曾江谷川といった先行谷が走り、山地から大量の土砂を流出させ、吉野川に押し出し多くの扇状地を形成する。その高位緩斜面の台地上には、多くの旧石器～古墳時代の遺跡が点在しており、3遺跡とも長峰台地と呼ばれる南北幅1～2km、海拔50～150mの緩やかな中位河岸段丘上に位置し、赤坂遺跡（Ⅰ）は標高65～66.5mに、赤坂遺跡（Ⅱ）は標高65m、赤坂遺跡（Ⅲ）は標高80～85mの丘陵先端部に位置している（第4図）。

阿波町の地質は白亜系和泉層群（内帯）からなる阿讃山脈とその阿讃山脈と吉野川との間にあって、第4系の種々の地層からなる平地との二つからできている。また中央構造線以南に分布する三波川変成帯（外帯）があり、切戸・岩津では三波川結晶片岩類の露頭がみられる。

(2) 歴史的環境

本遺跡周辺には、旧石器～古墳時代の遺跡が数多く展開されている⁽¹⁾（第4図）。

旧石器時代遺跡の展開は、主として吉野川北岸中流域、阿波町から上板町まで阿讃山脈裾に形成された扇状地に認められ、旧石器の宝庫となっている。

従来、阿波町で確認された旧石器資料・遺跡数は24地点を数える。しかしながら、これらはすべて表面採集によるものであった。

この中で四国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査により、阿波町内では日吉谷遺跡・桜ノ岡遺跡（Ⅰ）・（Ⅲ）の調査が行われ⁽²⁾、ナイフ形石器など多くの旧石器資料が出土したが、それでもなお層位的に安定した遺跡はごく僅かであり、石器組成を含め旧石器文化の実態の解明が今後の追求課題である。

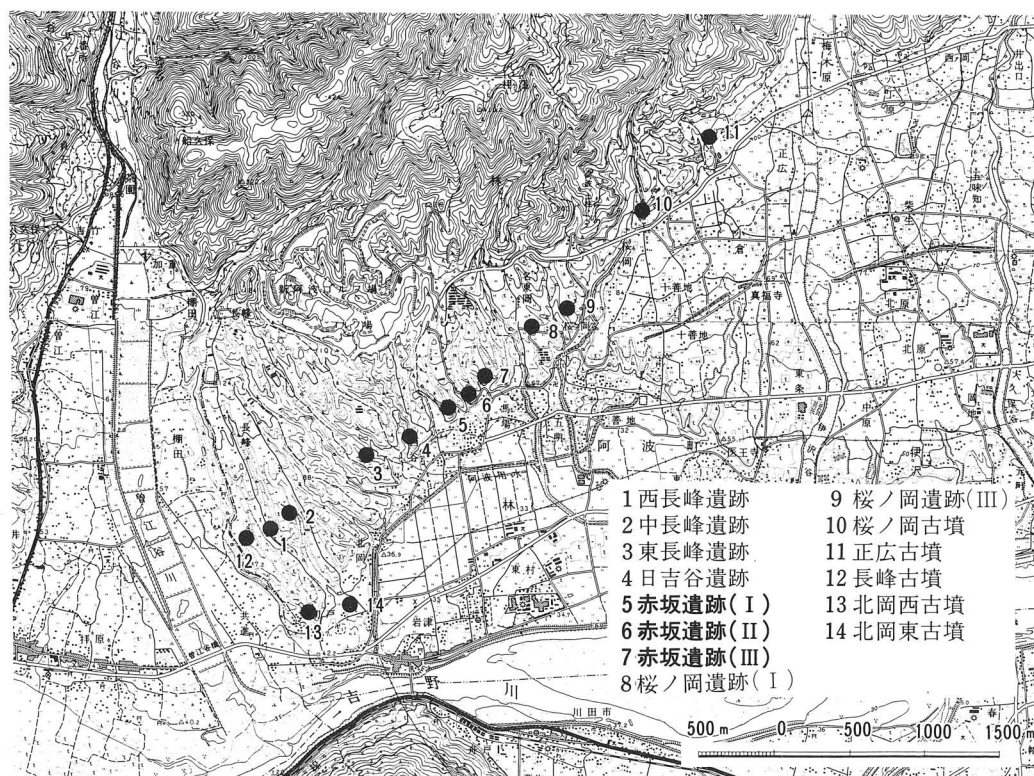
縄文時代の遺跡は、旧石器時代よりさらに希薄である。阿波町内では縄文時代の遺跡はまだ確認されてはならず、表面採集された石鏃等があるのみである。

弥生時代では、曾江谷川左岸、段丘先端上に東西約2 kmの範囲に西長峰遺跡⁽³⁾、日吉谷遺跡、桜ノ岡遺跡（Ⅰ）など弥生時代中期中葉～後期初頭の遺跡群が形成されている。

一方「久勝町史」によると、明治15年頃、久勝地区の山王から銅鐸が出土したと伝えられているが、その出土地点および所在は不明である。

古墳時代では、阿波町内で確認されている古墳は、北岡西・東古墳、西林古墳、長峰古墳、桜ノ岡古墳、正広古墳、八つ塚古墳の七カ所で、他に古墳らしき形跡の認められるもの、伝承や地名から推定されるものが数カ所ある。

いずれも、古墳時代後期の6世紀から7世紀前半に造営されたと推定される小規模の横穴



第4図 赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）周辺の遺跡「脇町」「西赤谷」

式石室の円墳である。その多くは山麓丘陵部に位置している。

石室の構造については、北岡西・東古墳はいわゆる「段の塚穴型石室」であり、正広古墳は「忌部山型石室」の構造を呈している。本地域は、「段の塚穴型」・「忌部山型」の石室構造の異なる両グループが共存していることから、両グループの政治・文化の接点に当たるものとして、石室構造の違いの背後にある造営氏族の領域を検討する上で重要である⁽⁴⁾。

古代～中世についてせ、文献以外の具体的な社会構造を解明するような調査事例は希薄である。文献などに7城の古城跡の存在が記されており、赤坂遺跡(Ⅱ)の所在する赤坂地区には西林城があったとされているが、それを実証する成果はあがっていない。

注

- (1) 菅原康夫 『日本の古代遺跡 37 徳島』 保育社 1988
- (2) 徳島県埋蔵文化財センター 『徳島県埋蔵文化財センター年報V o 1. 2』 1991
- (3) 徳島県教育委員会 『西長峰遺跡現地説明会資料』 1990
- (4) 前掲注(1)

参考文献

- 曾父江勝孝・野崎利夫 「第一編 自然」『阿波町史』 阿波町史編纂委員会 1979
- 岡 泰 『阿讃峠みち 地理・歴史編』 1985
- 香川県・徳島県 「国土調査 脇町」『阿讃山地開発地域 土地分類基本調査』 1977
- 東端節也・金岡慶男 「第二編 歴史」『阿波町史』 阿波町史編纂委員会 1979
- 天羽利夫・岡山真知子 『徳島の遺跡散歩』 徳島市立図書館 1985

3 調査成果

A 赤坂遺跡（Ⅰ）

(1) 基本層序

赤坂遺跡（Ⅰ）の基本層序は、次の通りである（第6図）。

1 にぶい黄褐色砂質土。ブドウ畑の耕作土である。当該地はブドウ畑であり、調査区全域にわたり確認される。

2 黄褐色砂質土。弥生～江戸時代の各期にわたる遺物包含層である。層厚は20cm前後であり、調査区の全域で確認される。出土する遺物の主体は弥生時代中期後半のものであり、古墳～江戸時代の出土遺物については戦後の農地開墾による削平などにより混入したものと思われる。石器はサヌカイト製の石鏃、結晶片岩製の石庖丁などが出土する。

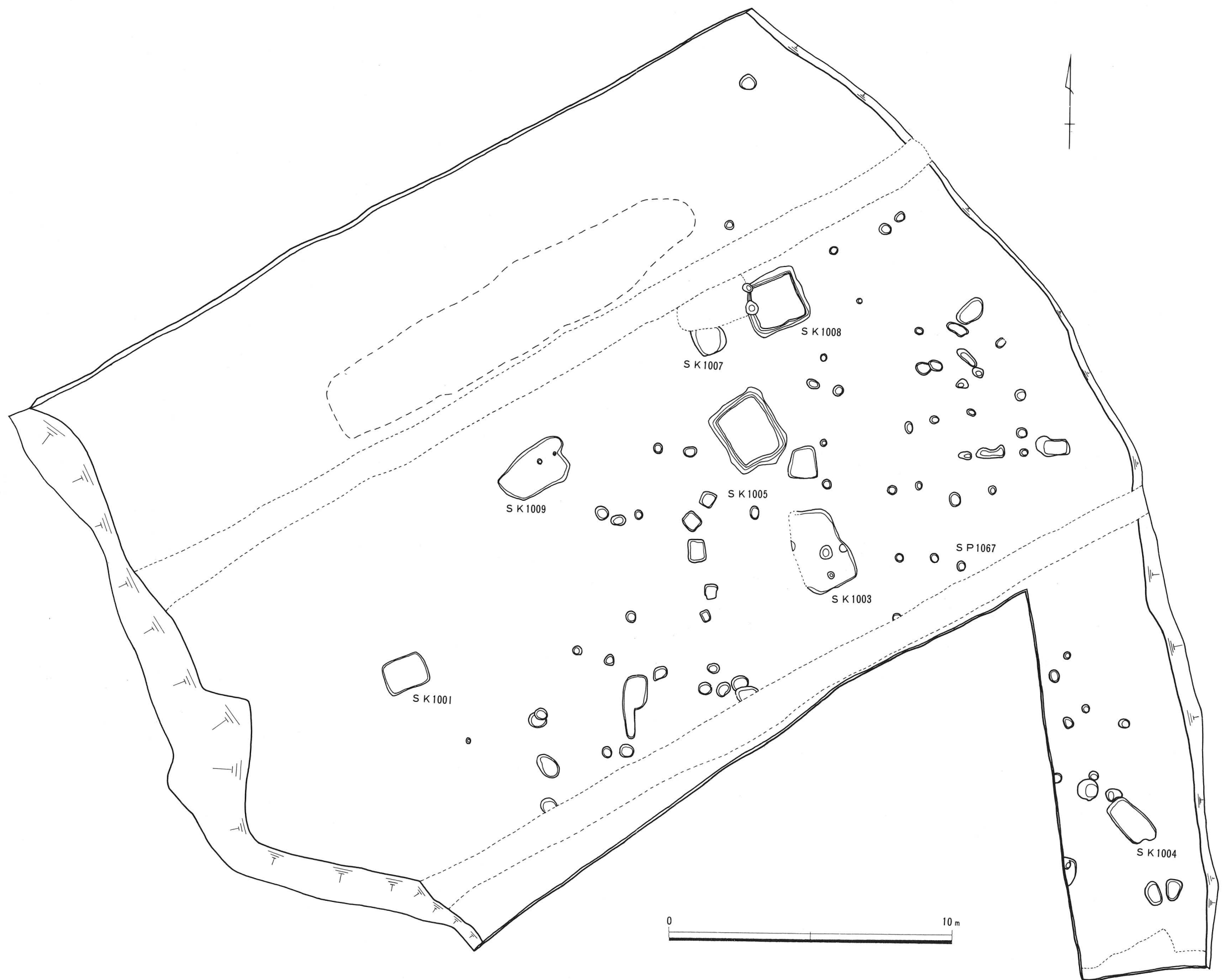
3 にぶい黄橙色砂質土。弥生時代の遺構面である。遺構は調査区南部及び東部に集中している。検出された遺構には、土坑、ピットなどがある。いずれも弥生時代中期後半を中心とした遺構である。遺物、遺構の重なりが少ないことから、弥生時代中期のごく短期間に存続していたものと思われる。

4 明黄褐色砂質土。いわゆる山土である。場所によって多少粘性が異なる。基本層序の確認ができる場所は、D～F－7列の南北セクション（東壁）とF列の東西セクション（南壁）である。おそらくこの基本層序は赤坂遺跡（Ⅰ）のほぼ全域を覆っていたものと思われるが、戦後の農地開墾などの人為的活動にともない度重なる削平をうけている。地形測量図と現況より、ブドウ畑の開墾の際に丘陵地上方部（北側）を削平し、丘陵先端部（南側）および両端（谷側）へ客土していることがうかがえる。また調査区北側では、戦後まで行われていた瓦窯のにぶい黄橙色砂質土と暗赤褐色焼土層がみられる。

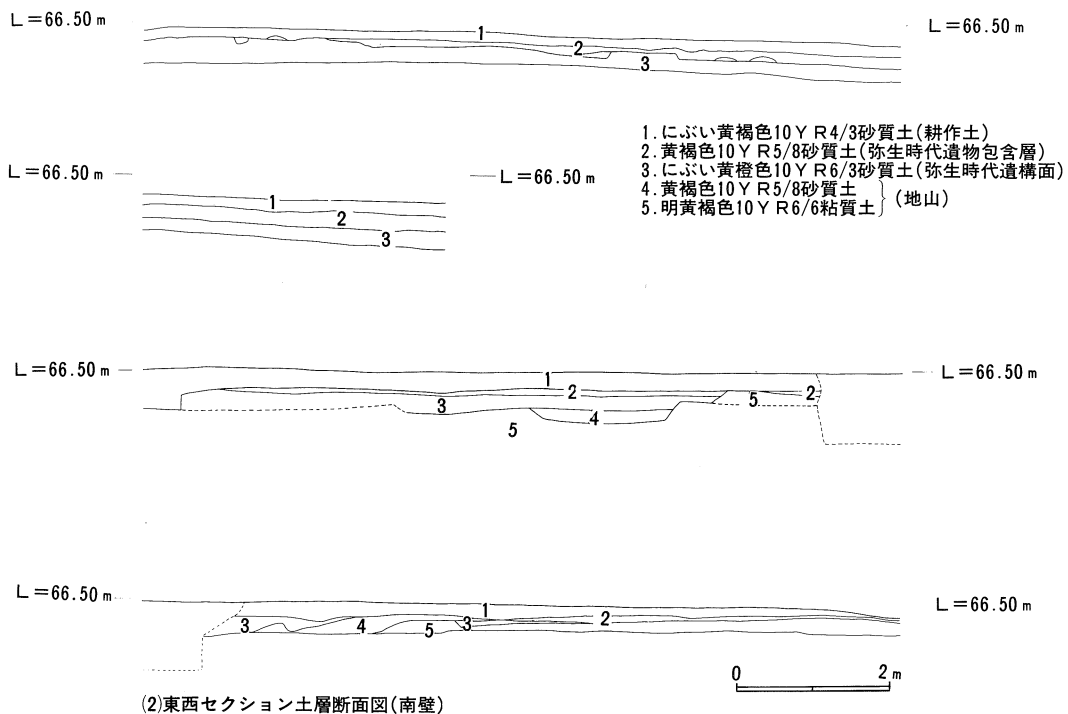
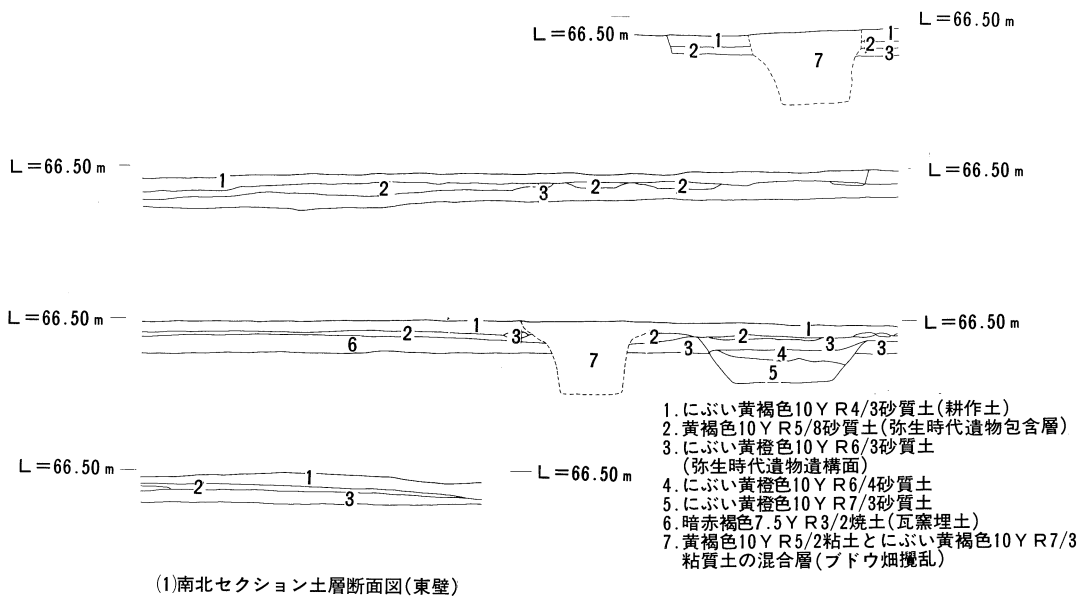
(2) 遺構と遺物

検出された遺構には土坑9、ピット75がある（第5図）。遺構は調査区南部および東部に集中しており、いずれも標高66m前後である。

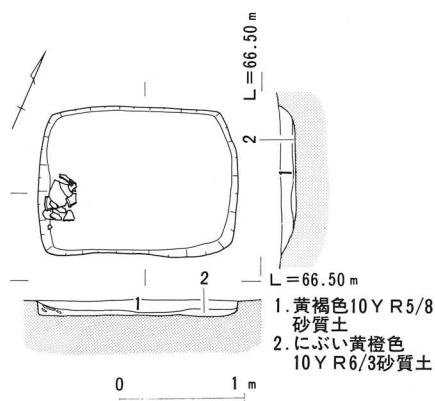
出土土器は全体に弥生時代中期後半から後期にかけての時期を示し、壺型土器、甕型土器等の口縁部に凹線文が施されている。土器類はいずれも小片となって出土しており、出土遺物で全体の器形の判明する個体は極めて少ない。



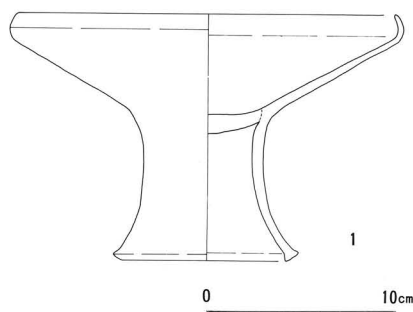
第5図 赤坂遺跡(I)遺構配置図



第6図 赤坂遺跡 (I) 土層実測図



第7図 SK1001実測図



第8図 SK1001出土土器実測図

土坑1 (SK1001)

E-5グリッドで検出された土坑で、貯蔵穴と思われる。方形の平面プランを呈し、長軸160cm、短軸138cmの東西方向の主軸をもち、深さ12cmの浅い土坑である。断面形状は舟底状を呈する(第7図)。

埋土は2層に分層され、1 黄褐色砂質土、2 にぶい黄橙色砂質土である。底面から土器が壊れた状態で検出されたが、復元できる土器の個体数は少ない。底面には炭化物の薄い層が堆積⁽¹⁾している。

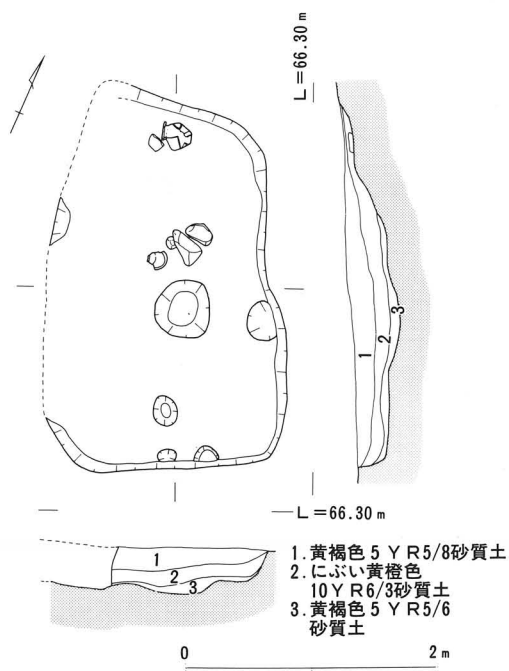
出土遺物

土器(第8図)

高杯形土器(1)が出土している。杯部は直線的に外方へのびる。口縁端部は内彎し、丸くおさめる。脚部はゆるやかに外下方へひろがり、端部を方形状におさめる。杯部底面は円板充填技法が認められる。器体の内外面とも剥落が著しく、調整技法は不明である。

土坑3 (SK1003)

F-8グリッドで検出された方形の土坑である。長軸300cm、短軸180cm、深さ38cmを測る。断面形状は舟底形を呈すが、南北断面では北部分で一段



第9図 SK1003実測図

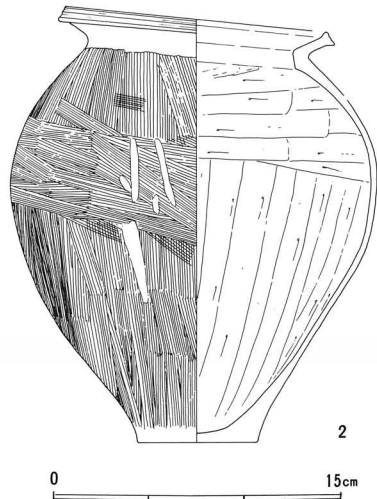
状の傾斜をもつ。主軸は南北方向である（第9図）。

埋土は3層に分層され、1 黄褐色砂質土、2 にぶい黄橙色砂質土、3 黄褐色砂質土となる。底面直上には炭化物の薄い層が堆積している。中央部よりに砂岩の礫が集中していた。底面直上より甕形土器が出土している。

出土遺物

土器（第10図）

甕形土器（2）。弥生時代中期末に属するものと思われる。口縁部が外反し、端部をわずかにつまみ上げる。口縁端部外面に2条の凹線文を施す。体部上位に最大径をもち、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は全体にハケが施され、体部上位と下位はタテハケ、体部中位はヨコハケである。底面はヘラミガキである。体部内面上部はヨコヘラケズリ、中～下部は上方向ヘタテヘラケズリである。



石器（第11図）

叩き石（3）は砂岩の円礫を用いている。敲打痕はあまり顕著ではない。砥石（4）は砂岩の自然礫を用い、表面には研磨の使用痕による窪みがみられる。

第10図 S K 1003出土土器実測図

土坑 4（S K 1004）

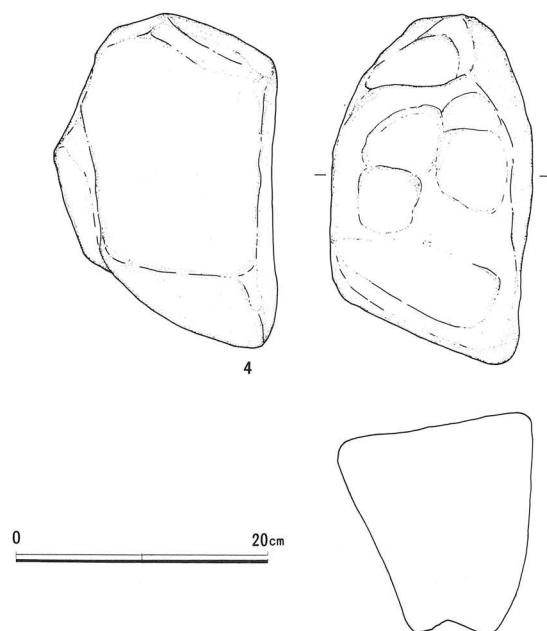
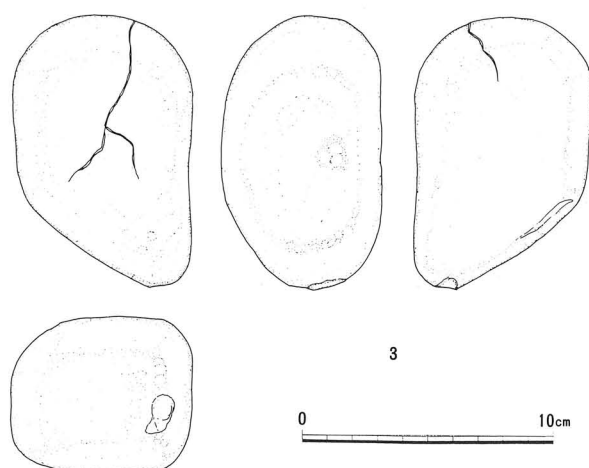
D-10グリッドで検出された不整形の土坑である。北東方向に主軸をもち、長軸100cm、短軸60cm、深さ26cmを測る。断面形状は舟底状を呈すが、南北断面では南部分で段状になっている（第12図）。

埋土は2層に分層され、1 黄褐色砂質土、2 にぶい黄橙色砂質土となる。他の土坑に比べ、出土遺物は少ない。底面直上で結晶片岩製の石庖丁が出土している。

出土遺物

石器（第13図）

薄手の剥片を素材とし、両側縁に調整加工を施し、直線状の刃部を作出した石庖丁で完形である（5）。

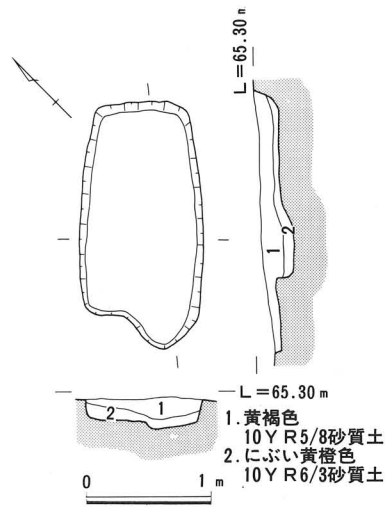


第11図 S K 1003出土石器実測図

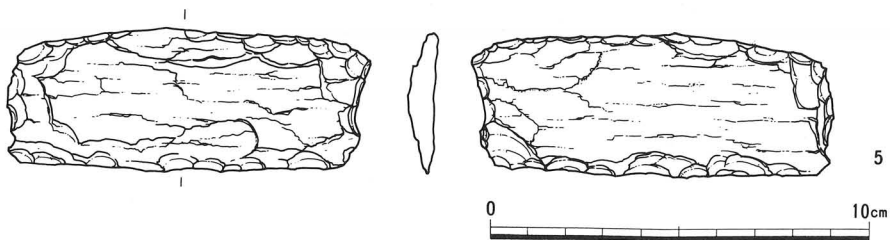
土坑 5 (S K 1005)

F・G-7グリッドで検出された方形形状の土坑である。南北方向の主軸をもち、長軸270cm、短軸21cm、深さ24cmを測る。断面形状は舟底状を呈す。底面には幅8～10cm、深さ5cm、断面形状U字形の周壁溝がめぐらされている(第14図)。

埋土は2層に分層され、1 黄褐色砂質土、2 にぶい黄橙色砂質土となる。また底面直上には薄い炭化物の層が堆積している。出土遺物は底面直上のものは少なく、埋土中より出土したものが多。



第12図 S K 1004実測図



第13図 S K 1004出土石器実測図

出土遺物

土器 (第15図)

壺形土器・甕形土器の口縁部などが出土している。

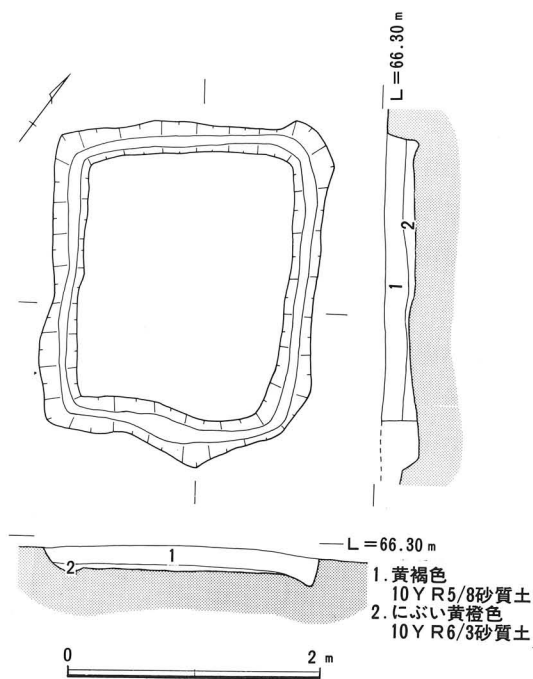
6は壺形土器の口～頸部である。口縁部は外反し、口縁端部をつまみあげている。頸部は直立気味に立ち上がる。調整は器面の剝落が著しく、不明である。

甕形土器(7～9)は口縁部が「く」の字状に外反する。7は口縁端部をつまみ上げて、丸くおさめる。口縁端部外面には2条の凹線文が施される。口縁部外面タテハケのちヨコナデ、内面はヨコハケのちタテハケで調整する。8は口縁端部がわずかに上下に拡張する。口縁端部外面には1条の凹線文が施されている。口縁～体部外面はナデ、口縁部内面はヨコナデで調整する。体部内面はヨコヘラケズリである。9は口縁端部を方形状におさめる。調整技法は土器の内外面とも剝落が著しく、不明である。

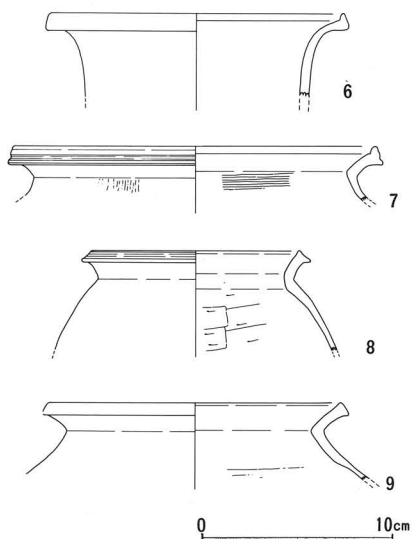
土坑 7 (S K 1007)

G-7 グリッドで検出された土坑である。遺構の一部がブドウ畑の濠堀りによる攪乱を受けており、全体の規模・形は不明であるが、残存部分で長軸80cm、短軸76cm、深さ28cmである。主軸方向は南北である（第16図）。

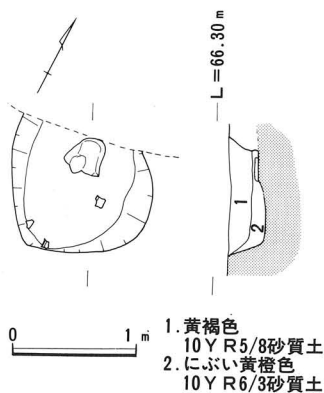
埋土は2層に分層され、
1 黄褐色砂質土、2 に
ぶい黄橙色砂質土である。
出土遺物には、甕形土器の
口縁部および底部などがあ
る。



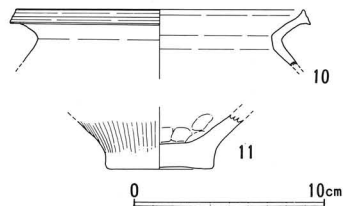
第14図 S K 1005実測図



第15図 S K 1005出土土器実測図



第16図 S K 1007実測図



第17図 S K 1007出土土器実測図

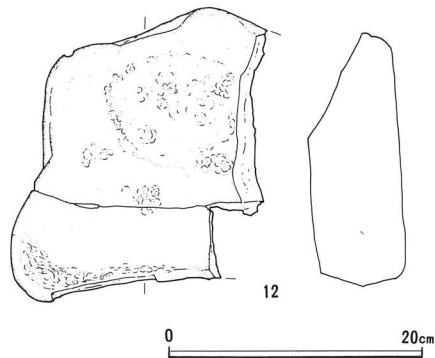
出土遺物

土器（第17図）

甕形土器（10・11）が出土している。10は口縁部である。口縁部は外反し、端部は上下に拡張する。口縁端部外面は2条の凹線文が施される。調整技法は口縁内外面ともヨコナデである。11は底部である。底部は直立し、内彎気味に立ち上がり、上方へのびる。底面はわずかに上げ底を呈する。底部外面はタテヘラミガキ、内面はユビオサエのちナデ、底面はナデで調整する。

石器（第18図）

台石（12）。被熱を受けており、一部赤褐色に変色している。砂岩の自然礫を用い、礫の表面中央部および稜部に激しい敲打痕がみられる。



土坑 8（S K 1008）

G・H-7, 8 グリッドで検出された方形の土坑である。長軸210cm、短軸200cmではほぼ方形を呈し、深さ28cmを測る。断面形状は舟底状を呈する。土坑 5 と同様に幅 8～10cm、深さ 5 cm、断面形状 U 字形の周壁溝がめぐらされている（第19図）。

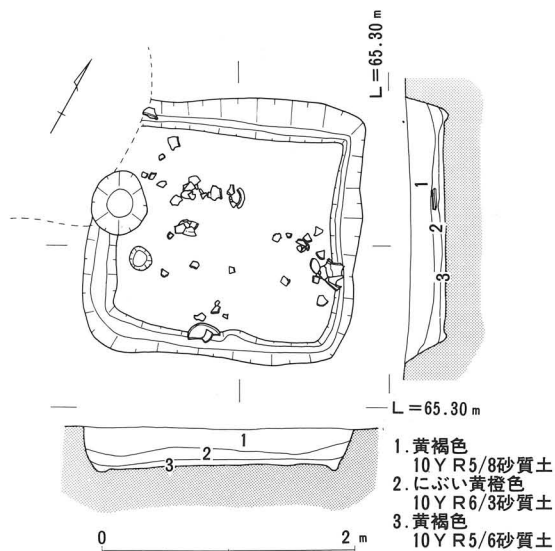
埋土は 3 層に分層され、1 黄褐色砂質土、2 にぶい黄橙色砂質土、3 黄褐色砂質土となる。また底面直上には薄い炭化物の堆積層がみられる。底面直上からは北西部のピットを中心にして、壺形土器や甕形土器など多量の遺物出土している。

出土遺物

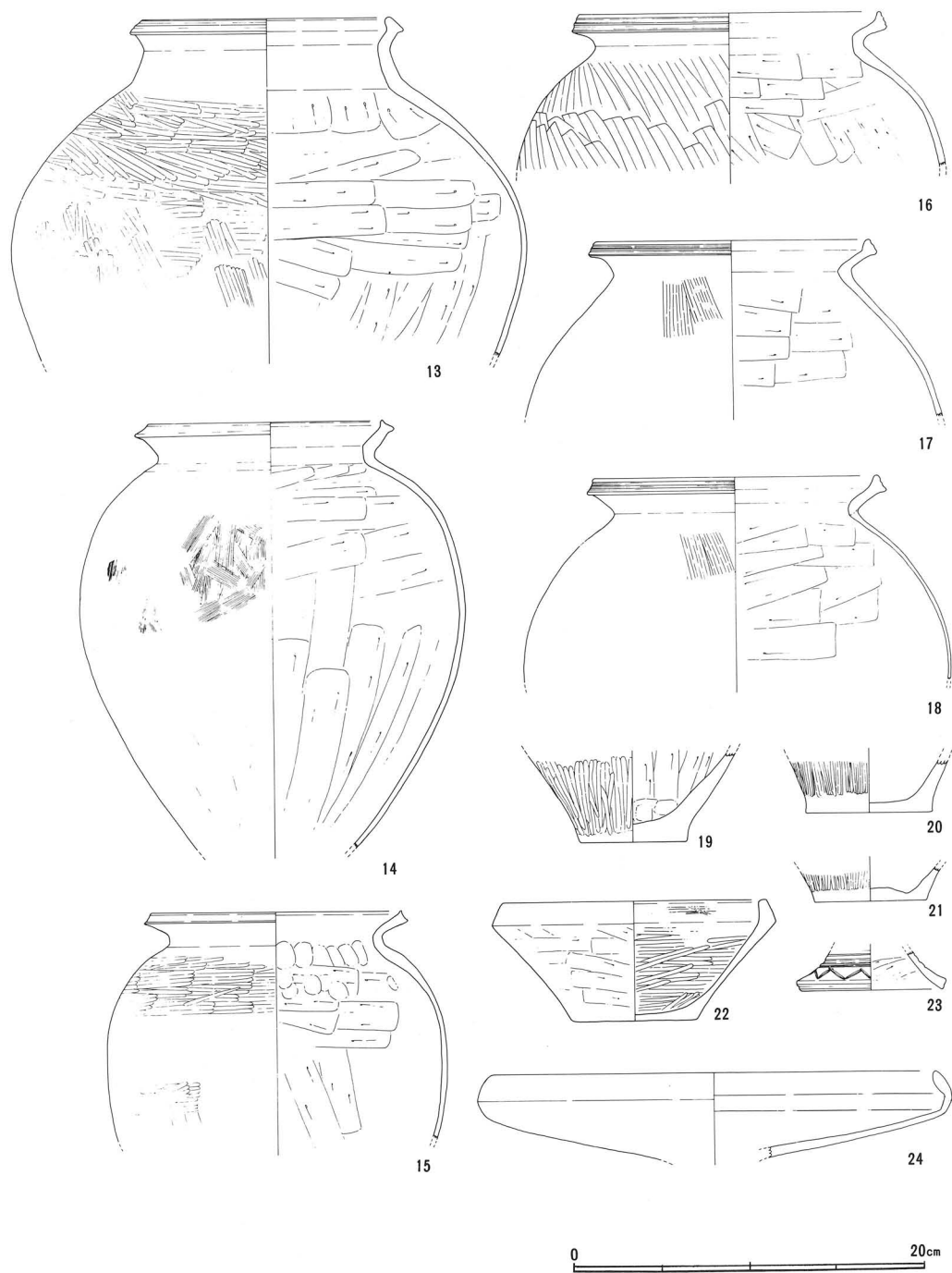
土器（第20図）

甕形土器（13～21）を中心として、鉢形土器（22）、高杯形

第18図 S K 1007出土石器実測図



第19図 S K 1008実測図



第20図 S K 1008出土土器実測図

土器（23・24）のほか壺形土器などが出土している。

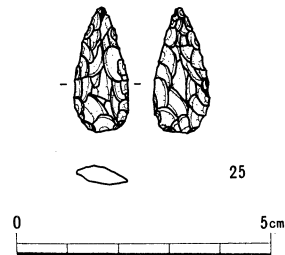
甕形土器はやや肩の張った体部を呈し、内面のヘラケズリは明瞭である。外面はナデまたはヘラミガキで調整している。口縁部は内外面をナデで仕上げる。13は器体の下半部を欠損するが、口縁部はわずかに内傾して立ち上がり、外反する。口縁端部は内側につまみ上げて丸くおさめ、上下に拡張する。口縁端部外面には2条の擬凹線文⁽²⁾を施す。体部中位上部に最大径がくる。14は底部を欠損するが、ほぼ完形である。口縁部は外反し、口縁端部を鋭くつまみ上げている。倒卵形の体部をもち、体部中央部に最大径がくる。体部中位外面に一部ハケが残存し、下位はイタナデを施す。15は口縁部がやや立ち上がり外反し、端部を方形状におさめる。口縁端部外面はやや凹みをもつ。体部上位に最大径がくる。体部外面は部分的にヨコヘラミガキを施す。内面は口縁部と体部との境にユビオサエが顕著である。16は口縁部がやや立ち上がり外反する。口縁端部を内側につまみ上げ平坦面を作出し、外面には3条の凹線文を施す。体部外面は幅1cm単位のイタナデの痕跡が顕著である。17・18は口縁部が「く」の字状に外反し、端部をつまみ上げ、丸くおさめる。体部外面に一部ハケ調整が残存する。18はやや肩の張った体部をもつ。17は口縁端部外面に2条の凹線文、18は3条の凹線文を施す。底部（19～21）の底面はいずれも平底である。19の体部はやや直立して上方に外反し、20・21はゆるやかに上方に外反する。底部外面はヘラミガキをおこなったのち底部最下部をヨコナデで仕上げる。

22は鉢形土器である。鉢体部は直線気味に外上方へひろがり、鉢口縁部は内彎する。口縁端部は方形状におさめる。

23・24は高杯形土器である。23は脚部で、脚裾部は外下方にひろがり、端部は方形状におさめる。脚裾部に3条の沈線文、その下に鋸歯状の沈線文が施される。脚端部には1条の沈線文が施される。24は杯部である。口縁部は直線的に外方へのびる。口縁端部は肥厚な粘土帯を貼り付けて作出し、上方へ立ち上がり内彎している。口縁端部は丸くおさめる。調整技法は土器表面の剥落が著しく不明である。

石器（第21図）

サヌカイト製の石鏃である(25)。両面とも押圧剝離によって器体が整えられ、基部は円基式で丸みを帯びる。最大幅は器体の下位1/3にくる。



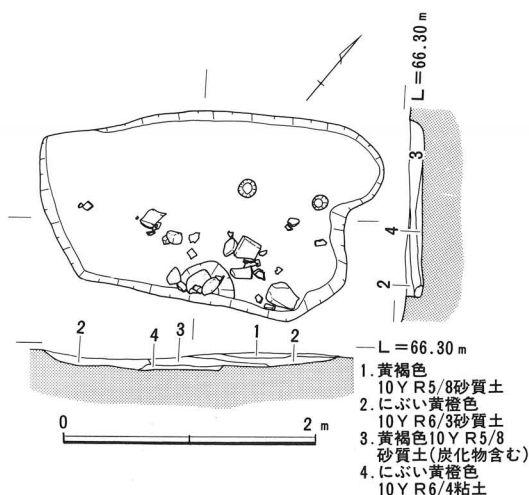
第21図 S K 1008出土石器実測図

土坑9（S K 1009）

F・G-6グリッドで検出された楕円形の土坑である。いびつな楕円形の平面プランを呈する。北東方向の主軸をもち、長軸244cm、短軸152cm、深さ14cmの浅い土坑である。断面形

状は舟底状を呈する（第22図）。

埋土は4層に分層され、1 黄褐色砂質土、2 にぶい黄橙色砂質土、3 黄褐色砂質土、4 にぶい黄褐色粘土となる。底面直上には薄い炭化物の層が堆積している。底面からは壺形土器、甕形土器などの土器片が出土している。完形のものではなく、投棄されたものと思われる。

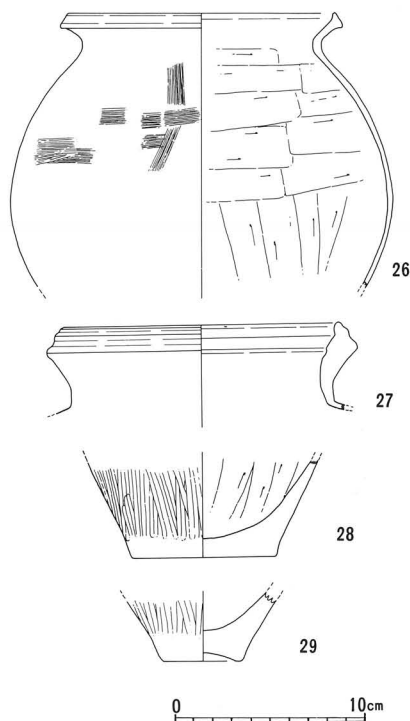


第22図 SK 1009実測図

出土遺物

土器（第23図）

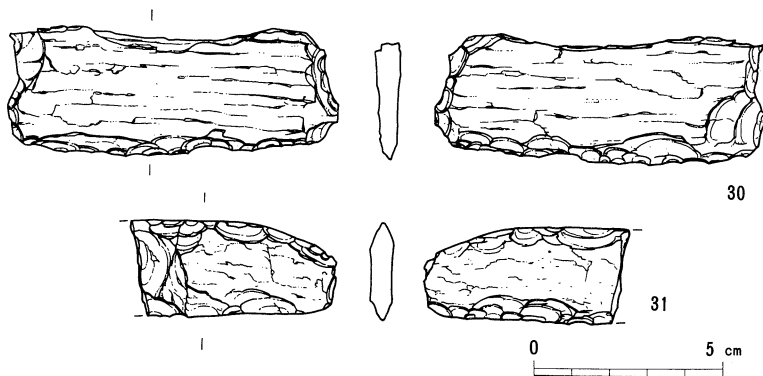
甕形土器(26～28)、壺形土器（29）が出土している。26は球形に近い体部を呈し、最大径が体部中央にくる。口縁部は外反し、端部をつまみあげる。口縁端部外面は平坦で、やや凹みをもつ。体部内面のヘラケズリは明瞭である。27は口縁部が直立気味に短く立ち上がり、端部は肥厚し外反する。口縁端部外面および口縁部内面に2条の凹線文を施す。28・29は体部が直線的に立ち上がり、上外方にのびる。28の底面は平底、29はあげ底である。



第23図 SK 1009出土土器実測図

ピット67（SP 1067）出土遺物（第24図）

ピット67からは結晶片岩製の石庖丁が2点出土している。30は完形品である。素材となる剥片の一侧縁に調整加工を施し刃部を作出している。31は器体の一部を欠損している。素材となる剥片の両側縁に刃部を作出している。



第24図 SP1067出土石器実測図

遺物包含層出土の遺物

本遺跡では遺物包含層および表採の遺物も多量に出土している。出土遺物は各時代に渡っており、その中で図化し得る主な遺物を提示したい。

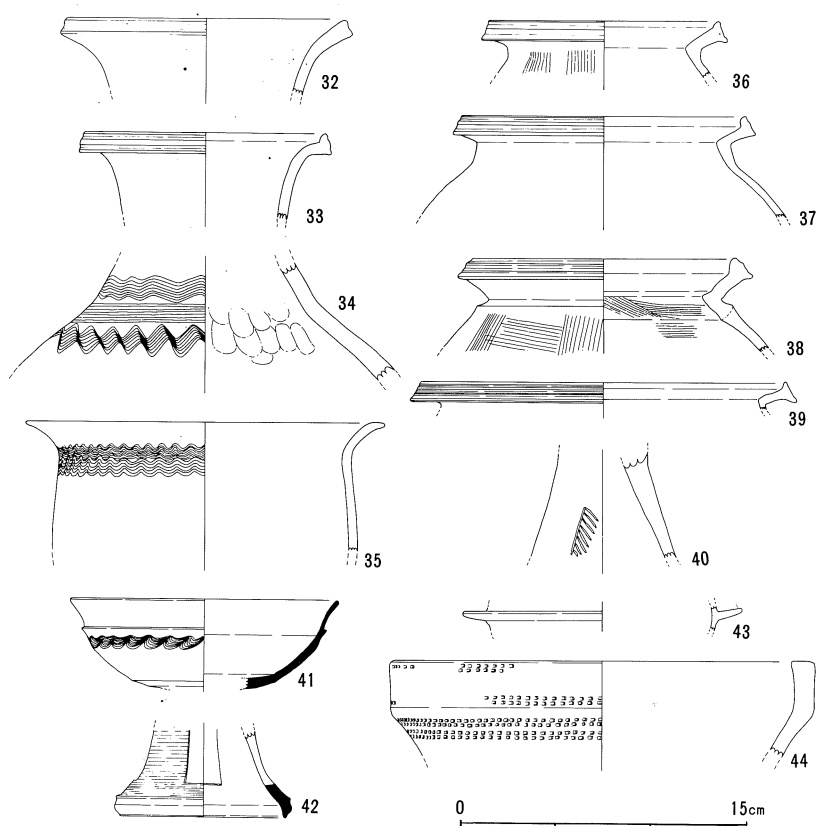
土器（第25図）

弥生時代

32・33は壺形土器の口縁部である。口縁部はゆるやかに外反する。32は口縁端部が、やや肥厚して方形状におさめ、端部外面に1条の凹線文が施される。33は口縁端部が上方に拡張し、端部外面に2条の凹線文が施される。32・33ともに内外面はヨコナデで調整する。34は壺形土器の体部である。頸部と体部の境に櫛描直線文、その上下に櫛描波状文が施されている。調整は内外面ともナデである。35～39は甕形土器である。35は如意形の口縁部を持ち、口縁部と体部との境に2種類の櫛描波状文が施されている。内外面ともヨコナデで調整する。36～39は口縁部が「く」の字状に外反する。36・38・39は口縁端部が上下に拡張し、39は端部を鋭くつまみ上げる。口縁端部外面に36は2条の擬凹線文、38は3条の凹線文、39は3条の擬凹線文が施されている。37は口縁端部が上方に拡張し、口縁端部外面に2条の凹線文が施されている。38は口縁部と体部の境に粘土紐痕がみられる。調整は36～39は口縁部内外面ともヨコナデである。38は体部内外面を部分的にハケで調整する。40は高杯の脚部で、外面は鋸歯状の文様がみられる。外面にはイタナデ、内面は無調整である。

古墳時代

41は無蓋高杯の杯部である。口縁部はやや外反し、端部は丸みを持つ。口縁部と底部を分ける稜は鋭く、その下には波状文を巡らす。内外面は回転ナデ調整、底部は回転ヘラケズリ



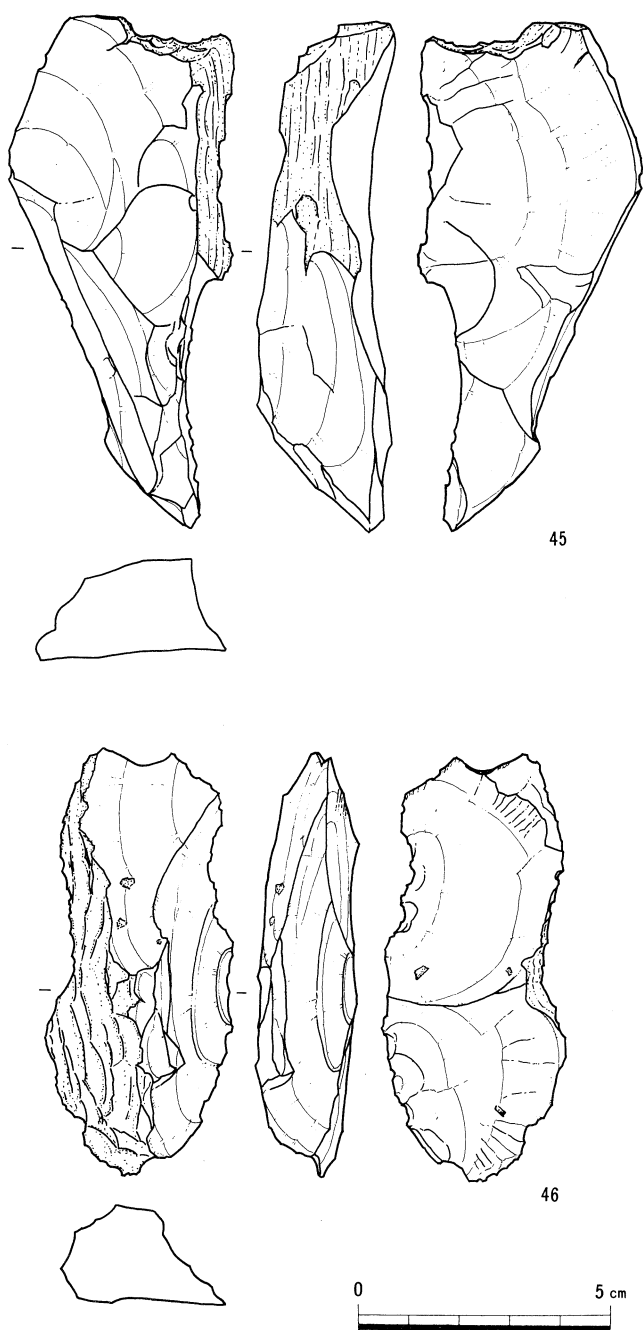
第25図 遺物包含層出土土器実測図

調整である。42は高杯の脚部で二方に透窓を有している。脚注部はやや外下方へひらき、裾部でさらに外下方へひらく。脚端部はやや肥厚して内彎する。脚端部の段は鋭く尖る。調整技法は脚部外面はカキ目調整、内面は回転ナデ調整である。脚部端部外面は回転ナデ調整である。

ともに陶邑編年TK-23段階⁽³⁾に位置付けられるものと思われる。

中～近世

43は須恵質土器の羽釜である。鰐は口縁端部より1.3cmの幅で横方向にのびる。内外面をヨコナデで仕上げる。44は江戸時代のものと思われる焼き締め陶器の火鉢である。口縁部は段をもち、外面には櫛先状の工具による列点文が施されている。内外面および口縁端部をヨコナデで仕上げる。



第26図 遺物包含層出土石器実測図 (1)

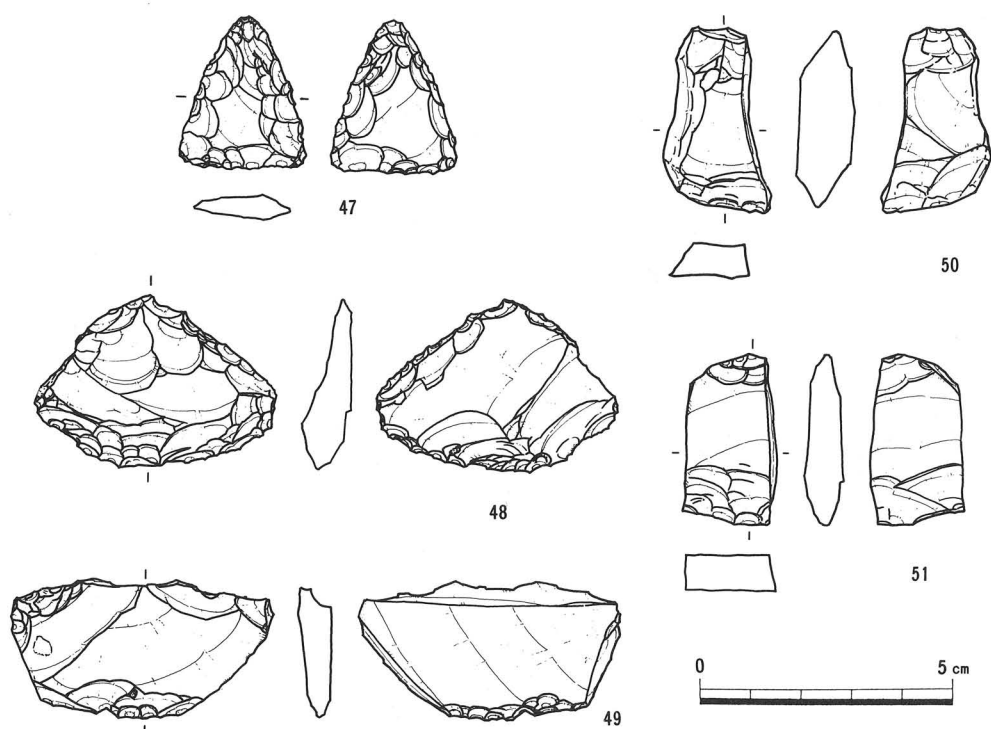
石器

旧石器時代（第26図）

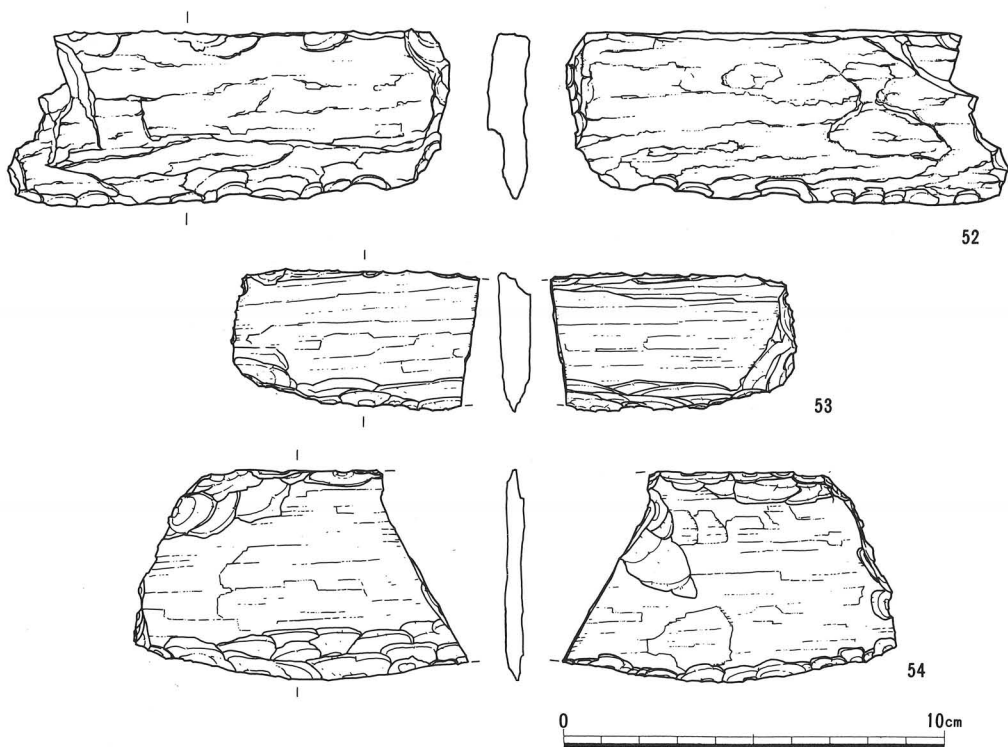
石核が2点出土している。石材はサヌカイトで風化が著しい。45は横長剥片石核である。打面転移が行われており、定形的な剥片剥離技術はみられない。46も横長剥片石核である。打面転移はみられず連続的に剥片を剥離している。

弥生時代（第27・28図）

47はサヌカイト製の石鏃である。両面とも調整加工が施されている。形態はやや細身の二等辺三角形であり、基部は平基式で直線状を呈する。48はサヌカイト製のスクレイパーである。幅広の剥片を素材とし、ほぼ全周縁に調整加工を施す。49は石庖丁である。サヌカイト製の幅広の剥片を素材として用い、剥片の両端および上部を折断し器形を整えている。粗雑な調整加工により刃部を作出している。50・51は楔形石器である。石材はサヌカイトである。ともに横長剥片の両端を折断し、器形を整えている。縦断面形は凹レンズ状を呈する（第27図）。52～54は結晶片岩製の石庖丁である（第28図）。いずれも横長の剥片を素材とし、両



第27図 遺物包含層出土石器実測図 (2)

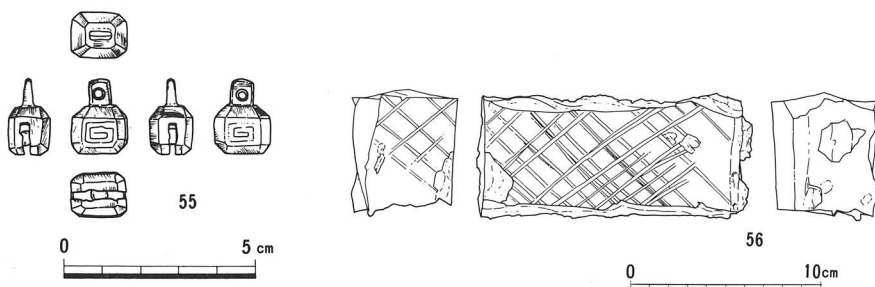


第28図 遺物包含層出土石器実測図 (3)

側縁に直線状の刃部を作出している。

その他の遺物 (第29図)

55は青銅製の鈴である。正面および裏面に雷文がみられる。56は磚である。表面および側面に格子目の模様がみられる。いずれも時期は不明であるが、近世（江戸時代以降）のものと思われる。



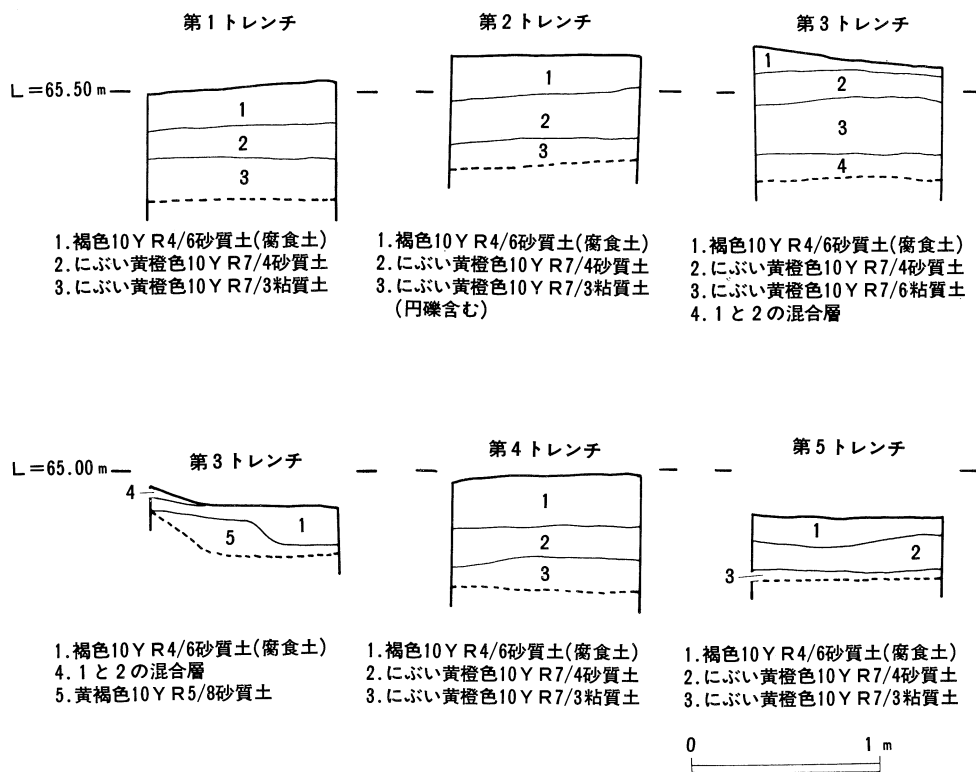
第29図 遺物包含層出土遺物実測図 (その他)

B 赤坂遺跡（Ⅱ）

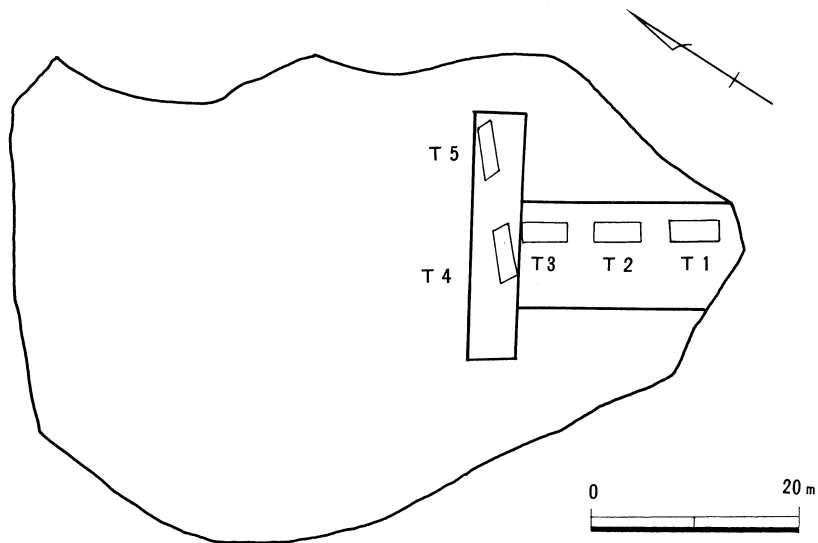
(1) 基本層序

赤坂遺跡（Ⅱ）における基本層序は、1 褐色砂質土。腐食土である。調査区全域で確認される。2 にぶい黄橙色砂質土。遺物包含層である。層厚は20cm前後である。出土遺物にはサヌカイト製ナイフ形石器、チャート製石核、弥生土器片、須恵器杯蓋、瓦片など各期に渡っているが、出土点数は17点と少量である。3 にぶい黄橙色砂質粘土。地山。いわゆる山土であり、調査区全域で確認されている。場所により多少粘性が異なる（第30図）。この堆積は丘陵先端部に向かってやや傾斜して厚くなっている。

この基本的層序は調査区の全域を覆っていたと思われるが、調査区北半分は戦後の農地開墾による大幅な削平をうけている。この調査区現況から、自然地形を残している南半分に2カ所、削平されている北半分に2カ所、その境界部分に1カ所の合計5カ所に試掘トレンチを設定し、調査を行った（第31図）。



第30図 赤坂遺跡（Ⅱ）柱状土層実測図



第31図 赤坂遺跡（Ⅱ）トレンチ配置図

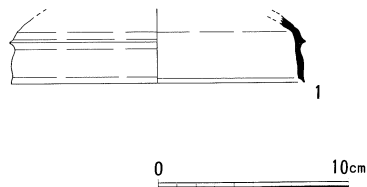
(2) 遺物

今回の調査では少量の遺物は出土したが、遺構および遺構面を検出することはできなかった。出土遺物にはサヌカイト製ナイフ形石器、チャート製石核、弥生土器片、須恵器杯蓋、瓦片など各期に渡っているが、出土点数は17点と少量でいずれも小片ばかりである。その中で図化し得る主な遺物を提示したい。

出土遺物

土器

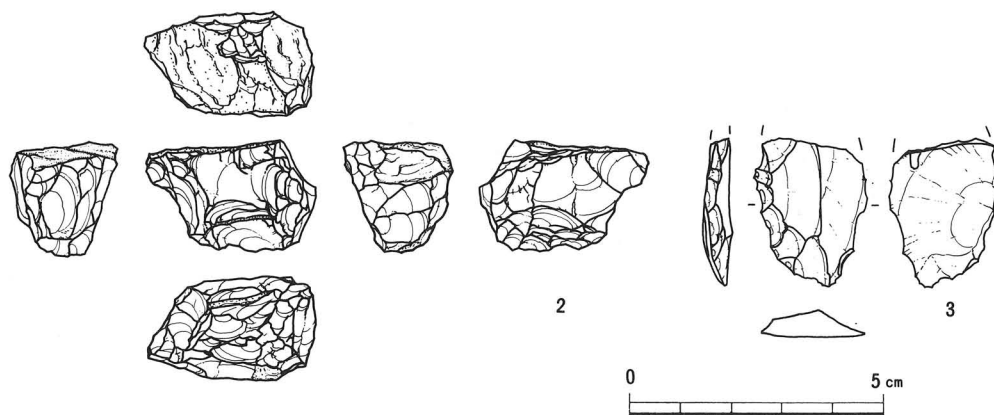
1は第1トレンチの2層中より出土した須恵器の杯蓋である（第32図）。口縁部は直立し、端部は尖り内面に面を有する。天井部の稜は鋭く、断面形は三角形を呈する。調整技法は内外面ともナデである。小片であるため詳細は不明であるが、陶邑編年TK-43段階に位置付けられるものと思われる。



第32図 出土遺物実測図（杯蓋）

石器

旧石器時代の遺物が出土している（第33図）。



第33図 出土遺物実測図（旧石器）

2は第2トレンチの2層中より出土したチャート製の石核である。形態はサイコロ状を呈する。一部に自然面が残存している。打面転移により剥片が剥離されており、剥片剥離が進行するにしたがい小形化している。打面転移による交互剥離が施されているような石核は瀬戸内海の櫃石島、井島などで認められ、宮田山期⁽⁴⁾以後の所産と考えられている。3は第1トレンチの2層中より出土したナイフ形石器の下半部である。石材はサヌカイトである。横長で薄手の剥片を素材とし、裏面より打点側の一侧縁に調整加工を施している。これらの旧石器は瀬戸内海との関係でいえば、井島Ⅰの段階に相当するものと思われる。

C 赤坂遺跡（Ⅲ）

(1) 基本層序

赤坂遺跡（Ⅲ）における基本層序は、次の通りである（第34図）。

1 にぶい黄褐色砂質土。ミカン畑の耕作土である。当該地はミカン畑であり、調査区全域に渡り確認される。1層からは江戸時代のものと思われる遺物が少量出土している。

2 黄褐色砂質土。弥生時代の遺物包含層である。層厚は20cm前後であるが、削平を受けており、安定した堆積はしていない。出土する遺物は弥生時代中期後半のものが主体である。土器は壺、甕類が出土しているが、完形のものはないいずれも破片ばかりである。また調整技法も土器表面の剥落が著しく、ほとんど不明である。石器はサヌカイト製の石鏃、スクレ

イパー、楔形石器、石錐や結晶片岩製石庖丁などが出土する。

3 明黄褐色砂質土。弥生時代の遺構面である。遺構は調査区東部および西部で集中して検出されている。検出された遺構には、住居跡、溝、土坑、ピットなどがある。いずれも弥生時代中期後半を中心とした遺構である。遺構内からは弥生土器の他、サヌカイト製の石鏃、スクレイパー、楔形石器、石錐、結晶片岩製の石庖丁や磨製柱状片刃石斧、大型の磨製蛤刃石斧など多種多彩な石器が出土している。住居跡は調査区東側の斜面で検出されている。遺構の重なりは少なく、弥生時代中期のごく短期間に存続していた小集落と考えられる。

4 黄橙色粘性砂質土。地山。いわゆる山土である。場所によって多少粘性が異なる。

1～3層はいずれも遺物を包含している。この基本層序は赤坂遺跡（Ⅲ）の調査区のはほぼ全域を覆っている。しかし、後世の農地開墾などの人為的活動にともない削平をうけている場所も多く、特に調査区東側ではその影響が大である。

(2) 遺構と遺物

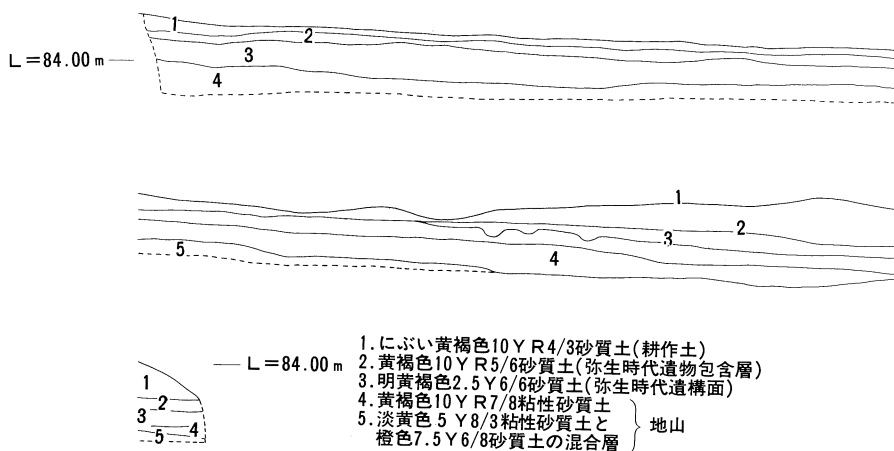
元年度に行われた1次調査では遺構を検出することができなかったが、2年度の2次調査では弥生時代中期後半の遺構を検出することができた。検出された遺構には竪穴住居跡2、溝2、土坑5、ピット95がある（第35図）。遺構は調査区の東部および西部で集中してみられ、いずれも標高84.5m前後に位置する。

1号住居跡（S B 1001）

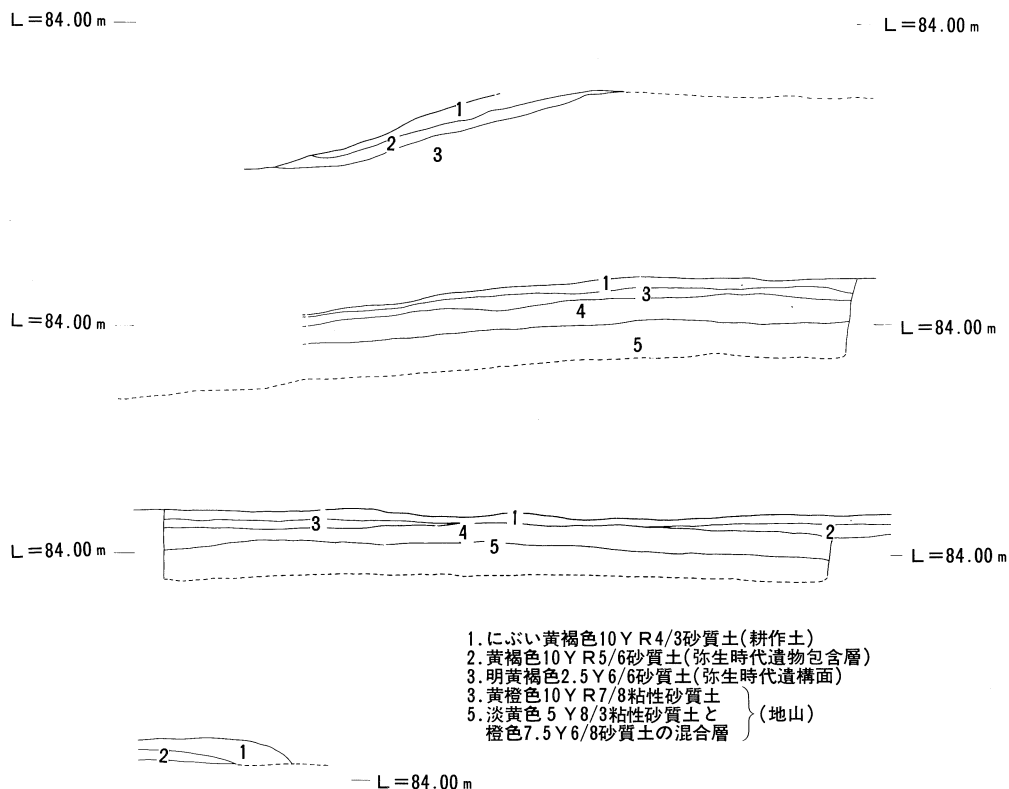
I-14・15グリッドで検出された円形の竪穴住居跡である（第36図）。調査区東端に位置し、一部調査区外へのびている。東側は農地の開墾による削平をうけており、遺構全体の規模は不明である。本住居跡は約1/2程度が遺存している。復元径約5mを測り、床面までの深さは18cmである。住居跡内の堆積土は、黄褐色砂質土の一層である。

床面より、深さ20～30cmのピットが7カ所検出された。主柱穴と思われるP1とP2の柱心間距離は約1.4mを測り、6～8本主柱の構造と推定される。周壁溝は検出されなかった。また炉跡は確認できなかった。住居の南端には長方形の10cm程度の浅い落ち込みがあるが、これが住居に伴うものであるのか、その性格は不明である。

床面の遺物には土器類は壺形土器の底部、甕形土器の体部などが出土しているが、いずれも完形復元できるものではなく、また土器表面の剝落が著しく詳細は不明である。石器類は砥石、局部磨製石ノミ、磨製柱状片刃石斧などが出土している。覆土の出土遺物には弥生土器片、サヌカイト製の楔形石器、スクレイパー、結晶片岩製石庖丁などがある。



(1)南北セクション土層断面図(東壁)



(2)東西セクション土層断面図(南壁)

第34図 赤坂遺跡(Ⅲ) 土層実測図

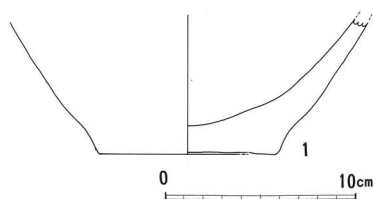


第35図 赤坂遺跡(Ⅲ)遺構配置図

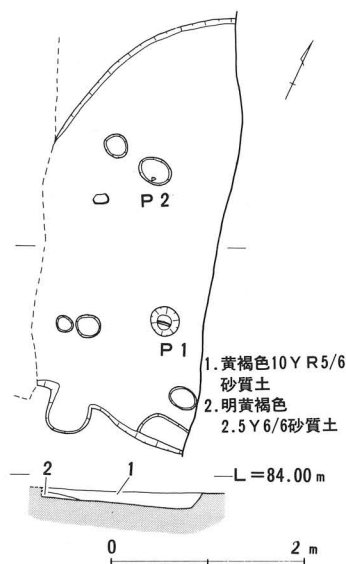
出土遺物

土器（第37図）

数点の土器が出土しているが、いずれも破片であり、実測可能なものは1点のみである。1は壺形土器の底部である。底面は平底であり、上外方へ体部がのびている。調整技法は土器の内外面とも剥落が著しく不明である。



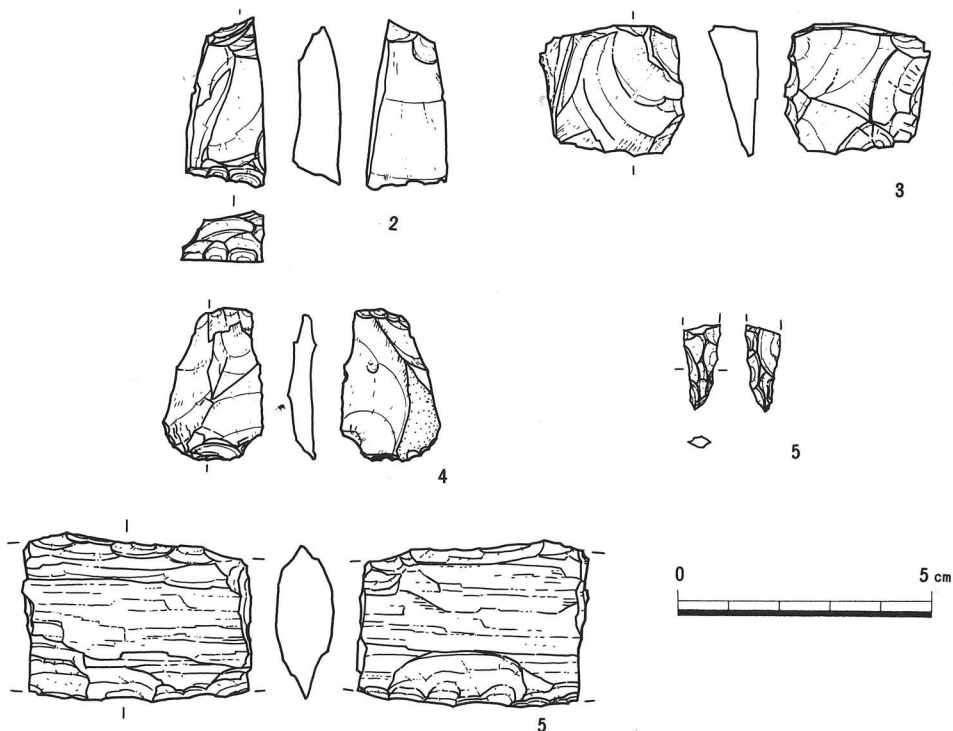
第37図 S B 1001出土土器実測図



第36図 S B 1001実測図

石器（第38・39・40図）

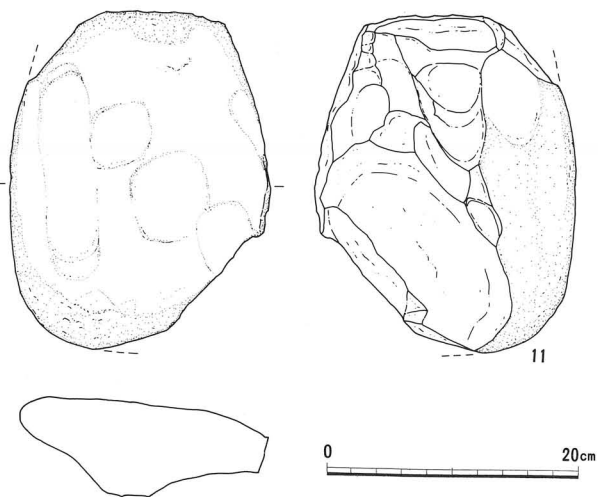
1号住居跡からは多数の石器が出土している。2はサヌカイト製のスクレイパーである。厚手の横長剥片を素材とし、両端を折断して器形を整えている。剥片の端部に調整加工を施し刃部を作出する。3・4はサヌカイト製の楔形石器である。3は厚手の横長剥片を素材とし、折断によって器形を整えている。縦断面形は三角形を呈する。4は両極打法によって素材となる剥片を作出している。一部に自然面が残存する。5は石錐の先端部である。石材はサヌカイトである。細かな調整加工により、鋭い刃部を作出している。横断面形は菱形を呈する。6は片岩製の石庖丁で両端は欠損している。厚手の剥片を素材とし、一側縁に刃部を作出している。縦断面形は凸レンズ状を呈する（第38図）。7は局部磨製石ノミである。石材は片岩である。厚手の剥片を素材とし、片岩の片理面と直交する表裏面を研磨している。横断面は四角形である。8は片岩製の磨製ノミ状石器である。器体全面を研磨している。先端部は両面とも丁寧に研磨されており、鋭利な刃部を形成している。9は片岩製の磨製石斧である。裏面側は欠損している。全面を研磨しており、正面は短軸方向に、側面は長軸方向に研磨している。10は打製の柱状片刃石斧である。石材は結晶片岩を用いている。体部は激しい敲打痕が顕著にみられ、石斧の未製品と思われる（第40図）。11は砥石である。被熱をうけており、一部赤褐色に変色している。砂岩の自然礫を用い、表面には研磨の使用痕による直径3 cm程度の窪みがみられる（第39図）。



第38図 S B 1001出土石器実測図 (1)

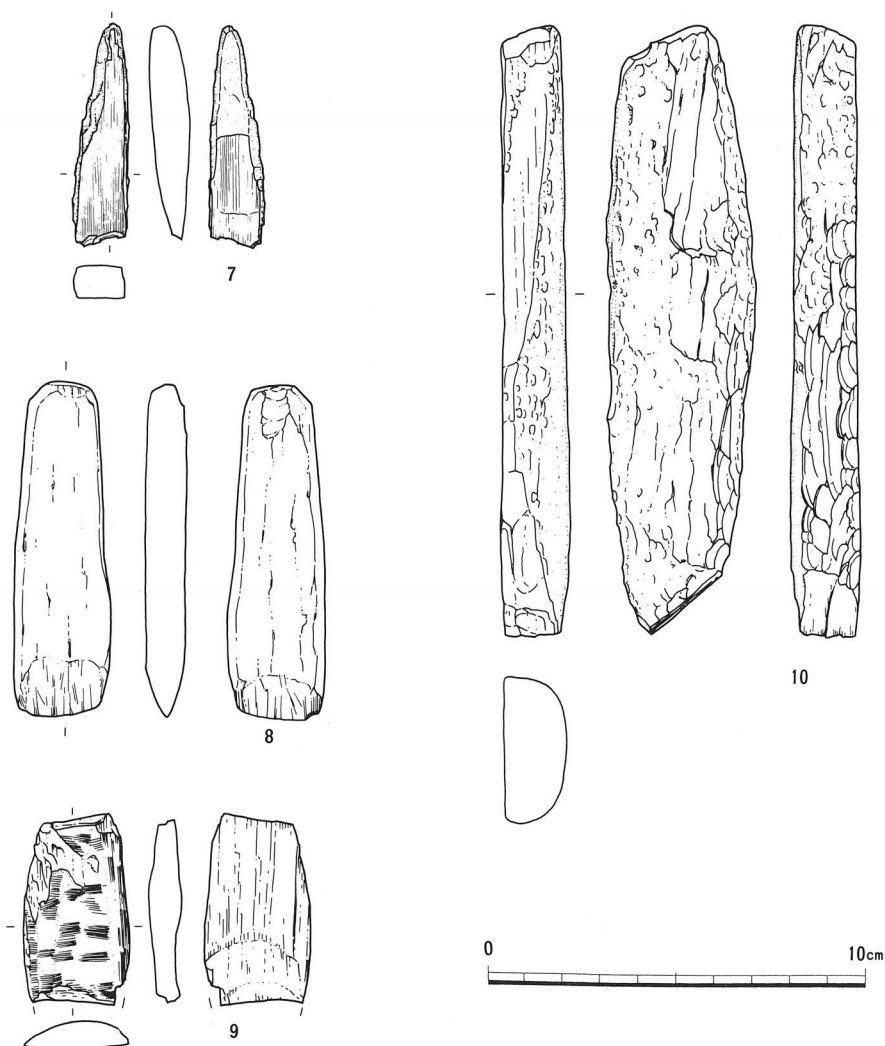
2号住居跡 (S B 1002)

G, H-17, 18グリッド
で検出された不整円の平面
プランをもつ円形の竪穴住
居跡である(第41図)。調
査区の東端に位置し、遺構
の一部が調査区外にかかっ
ているため、全体の規模は
不明である。復元径約7m
を測り、床面までの深さは
25cmである。住居跡内の埋
積土は、1 灰黄褐色砂質
土、2 黄褐色砂質土であ
る。



第39図 S B 1001出土石器実測図 (2)

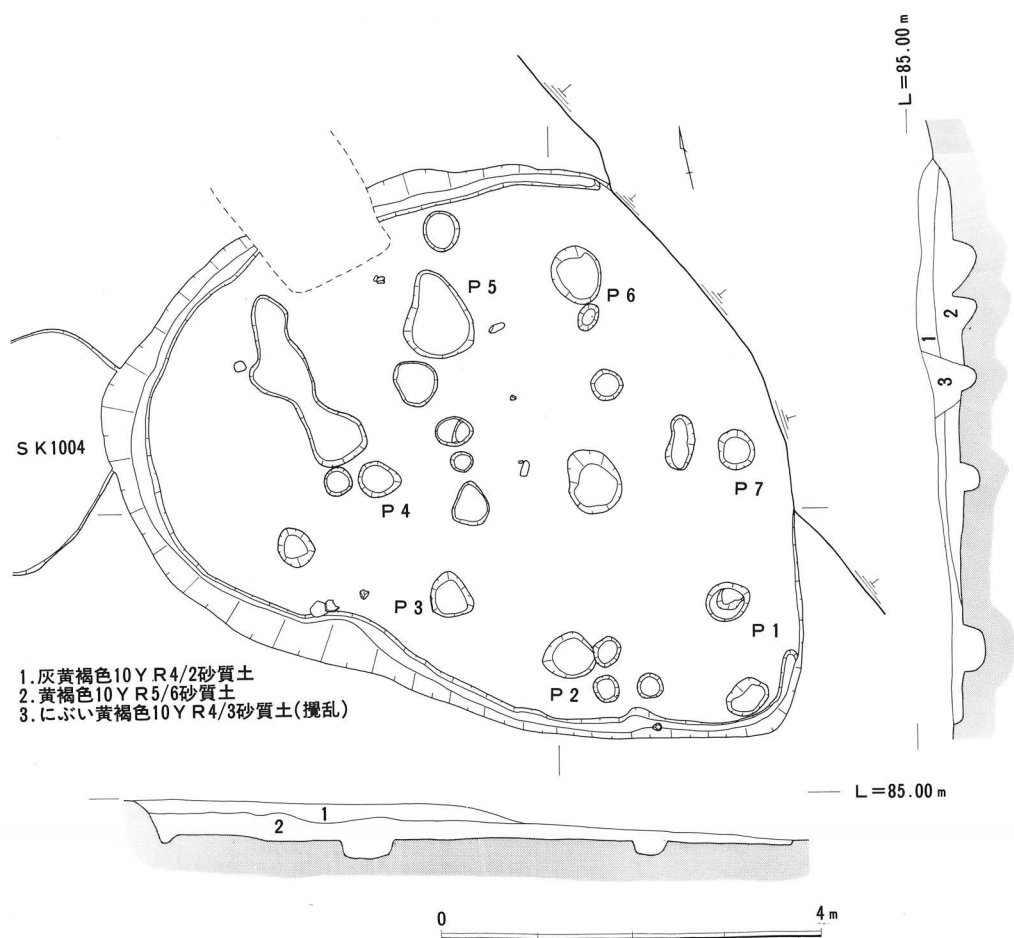
床面では24カ所の柱穴が



第40図 S B 1001出土石器実測図 (3)

検出され、このうち支柱穴は7本であると思われる。各柱心間距離はP 1 - P 2 : 1.4m、P 2 - P 3 : 1.5m、P 3 - P 4 : 1.4m、P 4 - P 5 : 1.6m、P 5 - P 6 : 1.6m、P 6 - P 7 : 2.4m、P 7 - P 1 : 1.4mを測り、8本支柱の構造と推定される。周壁溝は幅15~20cm、深さ5~15cm、断面形U字状を呈する浅いものが、住居周縁にめぐらされている。また炉跡は確認できなかった。

床面出土の遺物には、土器類では壺形土器の底部、甕形土器の体~底部などが出土しているが、いずれも完形復元できるものではなく、また土器表面の剝落が著しく詳細は不明であ



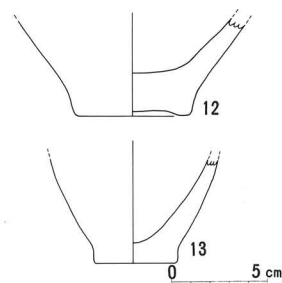
第41図 SB1002実測図

る。石器類はサヌカイト製の石鏃、楔形石器、スクレイパーのほか結晶片岩製の石庖丁、太形の蛤刃石斧、磨石、砥石など多種多様である。覆土からは弥生土器片、サヌカイト製の石鏃、楔形石器、スクレイパー、結晶片岩製の石庖丁などが出土している。

出土遺物

土器（第42図）

弥生土器は数点出土しているが、いずれも破片ばかりであり、実測可能なものは2点しかない。12は壺形土器の底部で、輪台技法によって製作されている。底面はドーナツ状の上げ底（5）を呈し、体部はやや直立して上外方にのびる。底面

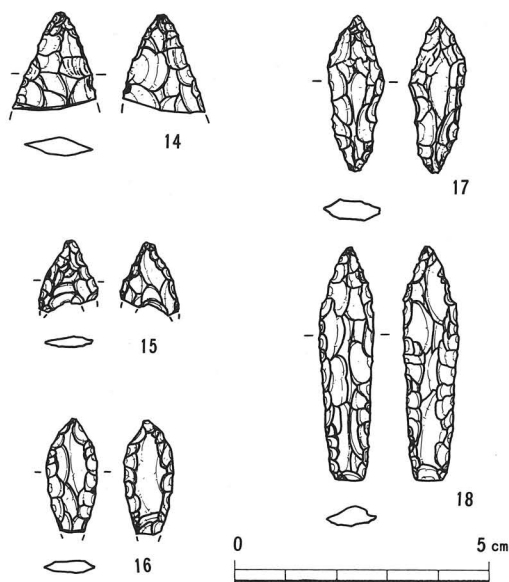


外部および底部内外面ともナデ調整である。13は甕形土器の 第42図 SB1002出土土器実測図
体～底部である。底面は平底で、体部は底面から直立し、やや内彎しながら上外方へのび

る。外面はナデ、内面はヘラケズリのち下部をナデ調整で仕上げる。

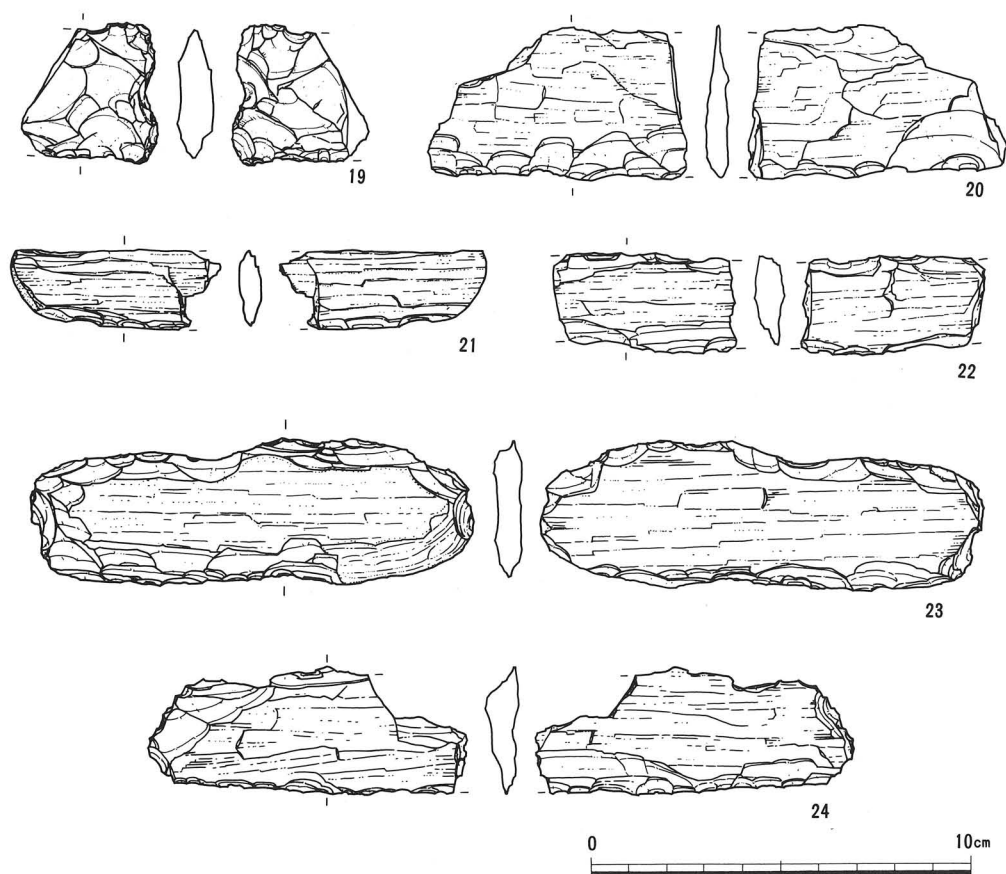
石器（第43・44・45・46・47
図）

サヌカイト製の石鏃(14~18)
である。いずれも表裏面とも細
かな押圧剥離による調整加工が
施される。14は石鏃の先端部
である。横断面形は凹レンズ状を
呈する。15は小型の石鏃である。
基部は無茎の凹基式である。16
は無茎の石鏃である。最大幅は
器体の上半部 $1/3$ ところにく
る。17は無茎で細身の菱形を呈
する。最大幅は器上体半部 $1/3$
のところにあり、肩が張った
形状を示す。18は細身の柳葉形



第43図 S B 1002出土石器実測図 (1)

をなす無茎の石鏃である。最大幅は器体の上半部 $1/4$ のところにある（第43図）。石庖丁
（19~24）である。いずれも薄手で横長の剥片を素材としており、19はサヌカイト、20~24
は結晶片岩を石材として用いている。完形品は23のみであり、19~22・24はいずれも器体の
一部を欠損する。19・22・23は素材となる剥片の両側縁に、20・21・24は一侧縁に細かな調
整加工を施し、直線状の刃部を作出している。21・23は自然面が一部残存している（第44図）。
サヌカイト製のスクレイパー（25~29）である。25は厚手の横長剥片の打点側を折断し、器
形を整えている。剥片の端部に急斜度な調整加工を施し、刃部を作出している。26~29は器
体の一部を欠損する。26は薄手で横長の剥片を素材とし、縁辺に刃部を作出している。27は
薄手で横長の剥片を素材とし、全周にわたって調整加工を施し、刃部を作出している。28は
厚手の剥片を素材としている。全周にわたって調整加工を施し、刃部を作出している。29は
薄手で横長の剥片を素材と、端部に鋸歯状の刃部を作出している。30はサヌカイト製の楔形
石器である。両極打法によって剥離された厚手の剥片を折断し、器形を整えている。縦断面
形は凸レンズ状を呈する。31はU. F. である。厚手の横長剥片を素材とし、石材はサヌカ
イトである。端部に使用痕がみられる。風化が著しく旧石器時代のものであると思われる（第
45図）。磨製石斧（32・33）である。32は太型蛤刃石斧である。横断面形は楕円形を呈する。
砂質片岩の礫を素材として用いている。基部側半分を欠損する。33は刃部を一部欠損する。



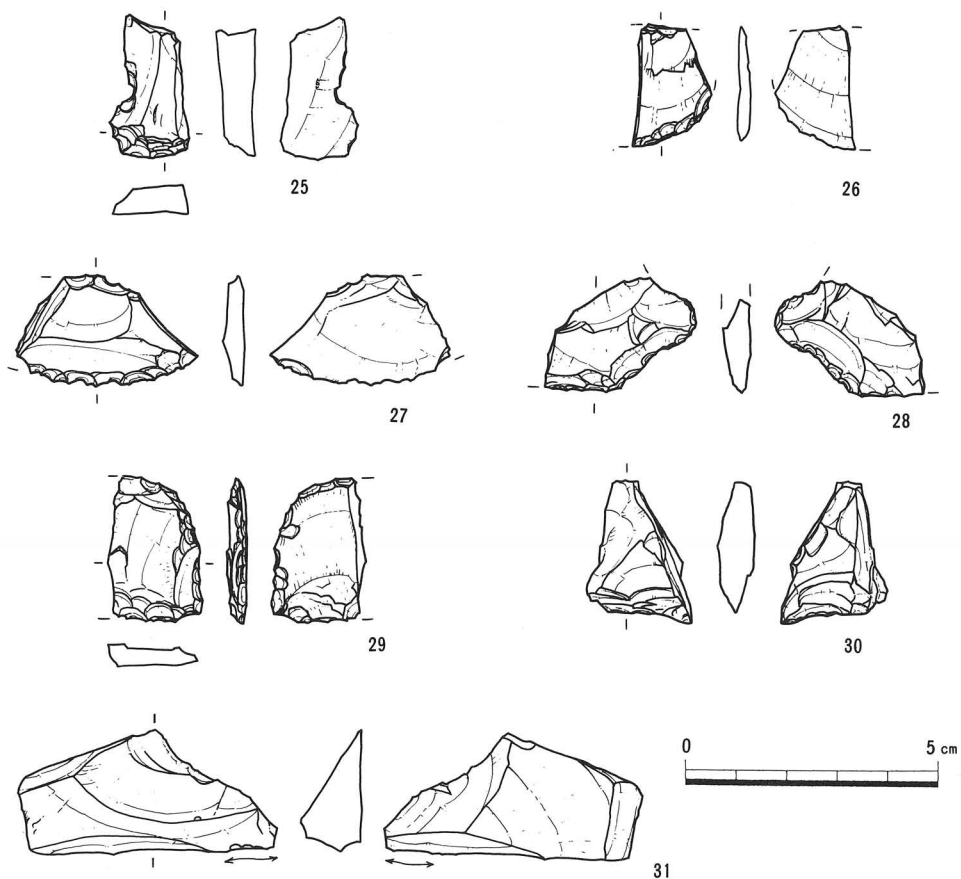
第44図 S B 1002出土石器実測図 (2)

片岩の礫を素材とし、器体全面を長軸方向に研磨している。一部敲打痕があり叩石としても使用していたものと思われる。34は磨石である。偏平な砂岩の楕円礫を用い、ほぼ全面に長軸方面に擦痕がみられる。また器体の両側面および正面には、叩石としても使用されたとと思われる激しい敲打痕がみられる。35は偏平な砂岩の礫を用いた砥石である。表裏面とも研磨による使用痕がみられ、直径2～3cmの凹みが切り合っている（第46図）。

土坑2（S K 1002）

F-19・20で検出された楕円形の土坑である。遺構の一部は調査区外にかかっており、全体の規模は不明である。残存部分で長軸208cm、深さ28cmを測る（第47図）。

埋土は黄褐色砂質土の1層である。出土遺物には壺形土器や片岩製の石庖丁などがある。



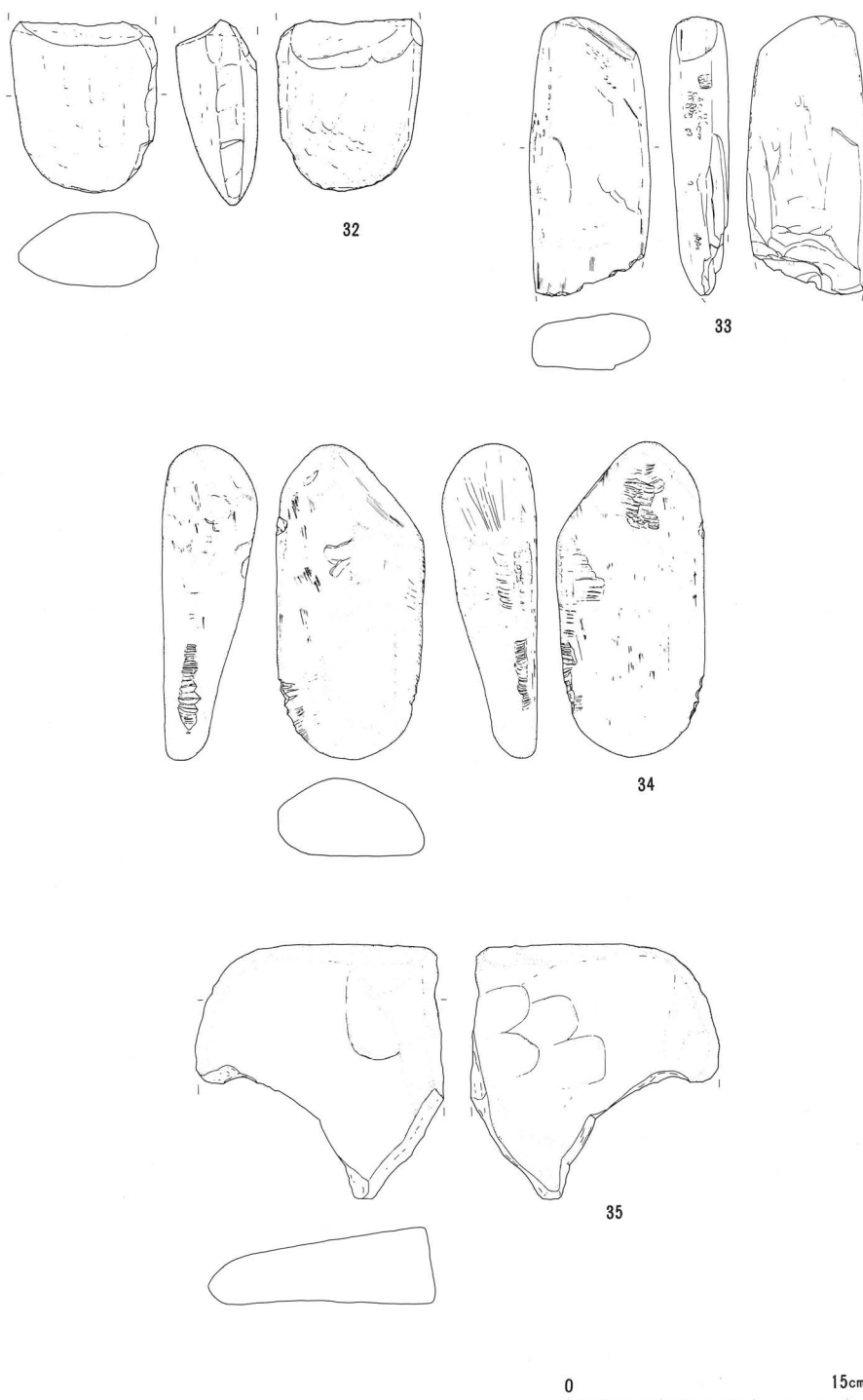
第45図 S B 1002出土石器実測図 (3)

出土遺物

土器 (第48図)

土坑 2 からは壺形土器 (36~40) のほか甕形土器等が出土しているが、いずれも破片ばかりであり、実測可能なものは少ない。

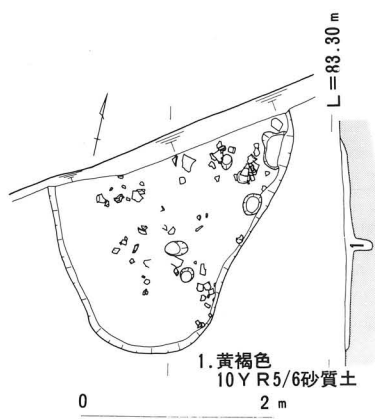
36は口縁～頸部である。ゆるやかに外方へ開き、口縁端部は方形状におさめている。土器の内外面とも剥落が著しく、調整は不明である。37は体～底部である。底面はわずかにあげ底であり、体部は底部よりやや内彎しながら上方へひろがっている。体部外面の調整はナデ、内面は剥落が著しく不明である。38~40は底部で内外面ともナデ調整する。38は平底、39はわずかにあげ底である。38の体部は底面よりやや内彎して外上方に、39は底面より直立し上外方へのびる。40は輪台技法によって製作されている。底面はドーナツ状のあげ底を呈し、体部は底面より、外上方へひろがる。



第46図 S B1002出土石器実測図 (4)

石器（第49図）

片岩製の石庖丁（41～43）である。いずれも器体の一部を欠損する。41は片岩の円礫を分割して生じた剥片を素材とし、一側縁に直線状の刃部を作出している。自然面が残存している。42・43は薄手の横長剥片を素材としている。42は剥片の両側縁に、43は一側縁に直線状の刃部を作出している。44は不明石器である。一部自然面が残存している。形態は槍先形を呈し、先端部は研磨されている。基部～体部は調整加工が施され、細身に仕上げられている。



第47図 SK 1002実測図

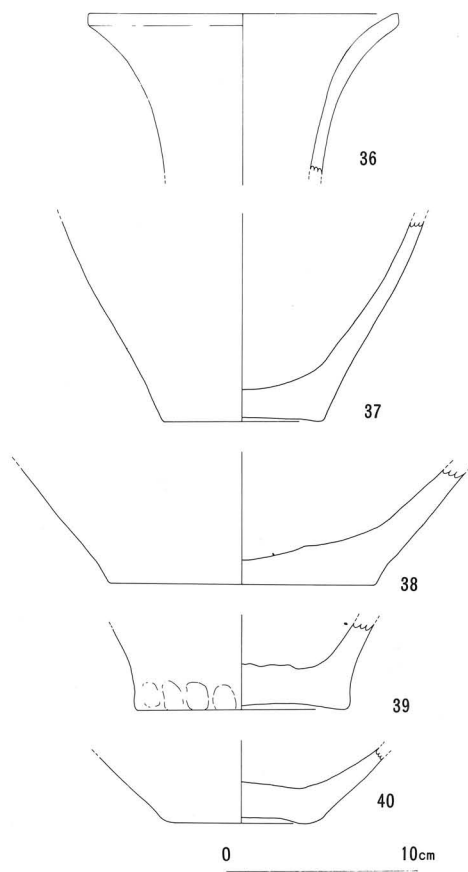
遺物包含層出土の遺物

本遺跡からは弥生土器片、石器など遺物包含層出土の遺物があるが、いずれも小片である。その中で図化し得た主なものを提示したい。

石器（第50・51図）

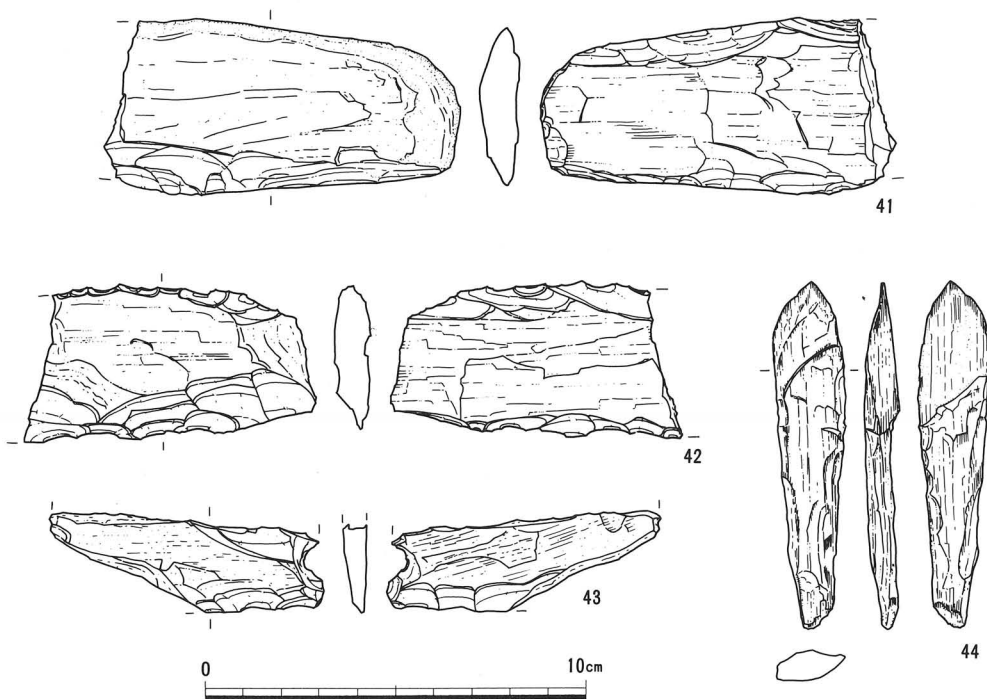
本遺跡では遺物包含層からの出土、あるいは表採の石器も多い。

45・46は結晶片岩製の石庖丁である。45は大形の剥片を素材とし、両側縁に刃部を作出している。46は器体の一部欠損している。素材となる剥片の両側縁に調整加工を施し、刃部を作出している（第50図）。サヌカイト製の石鏃（47～49）である。47は細身の木葉形であり、基部は無茎の平基式である。両面とも押圧剥離による調整加工が施され、断面形は凸レンズ状を呈する。48は両端を欠損している。剥片の両側縁に調整加工が施され



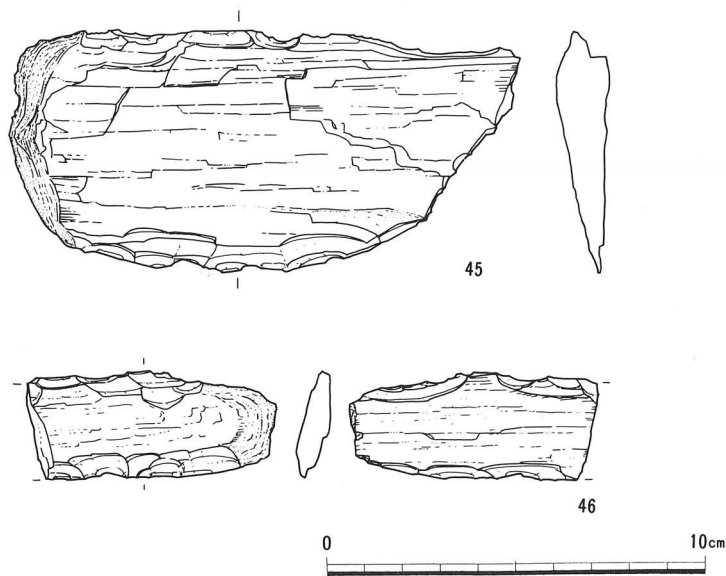
第48図 SK 1002出土土器実測図

ている。49は石鏃の未製品である。両面とも押圧剥離による調整加工が施され、一部自然面が残存している。50は石錐である。石材はサヌカイトである。素材となる剥片の縁辺を抉る

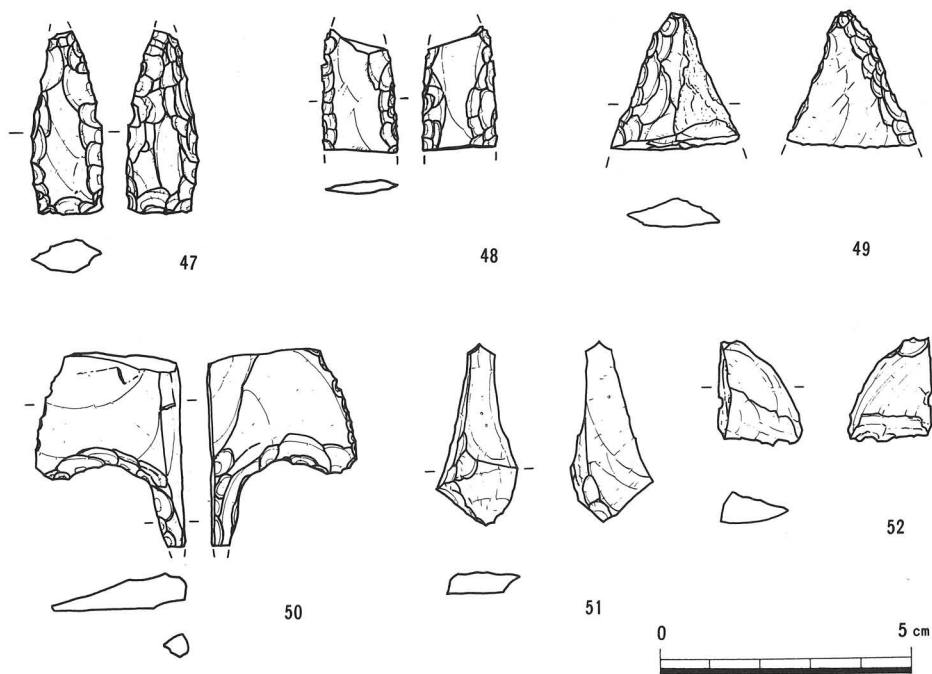


第49図 S K1002出土石器実測図

ように調整加工を施し、刃部を作出している。51・52はR. F. である。風化が著しく、旧石器時代の遺物であると思われる（第51図）。



第50図 遺物包含層出土石器実測図 (1)



第51図 遺物包含層出土石器実測図 (2)

注

- (1) 床面に草等を敷代としていたものと思われる。
- (2) 擬凹線文の呼称については、「壺形土器・甕形土器・器台形土器の口縁部などに凹凸のある施文具で直線的に引いた場合などの紋様が擬凹線紋と呼ばれている。」という使用が一般的であるが徳島県内では鳴門市光勝院寺内遺跡の分類以来、「ヨコナデによる起伏で凹線状を呈する」文様と捉えられている場合が多い。本書でも後者に従った。
- (3) 野上文助 編 『陶邑Ⅳ』 (財)大阪文化財センター 1988
- (4) 杉原莊助・麻生 優・加藤 稔 編 『日本の旧石器文化 2・3』 雄山閣 1975
- (5) 底部周縁に環状の平底面を有するものを主として指し、底部輪台技法との連関が議論されている。

参考文献

- 石野博信 『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館 1990
- 佐原 真・金関 恕 編 「弥生集落」『弥生文化の研究 7』 雄山閣 1986
- 菅原康夫・高橋正則 『光勝院寺内遺跡』 徳島県教育委員会 1984
- 寺沢 薫・森岡秀人 編 「近畿編Ⅰ・Ⅱ」『弥生土器の様式と編年』 木耳社 1989
- 平井 勝 他 『野原遺跡群 早風A地点』 岡山県教育委員会 1979
- 正岡睦夫 「凹線文・擬凹線文」『弥生文化の研究 3』 雄山閣 1986

4 まとめ

(1) 赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）の年代と性格について

以上、前章までは各々の遺跡で検出された遺構と遺物について述べた。赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）は、長峰台地と呼ばれる平坦な台地上にほぼ同時期に形成された一連の小規模な集落であると思われる。ここでは、本遺跡の営まれた年代と性格についてまとめておきたい。

赤坂遺跡（Ⅰ）の出土土器の器種構成として壺形土器・甕形土器・高杯形土器・鉢形土器があるが、図化し得なかったものも含め、その大半を甕形土器が占めるという傾向を示している。一方、赤坂遺跡（Ⅲ）においては壺形土器が器種構成の大半を占めており、その他の器種はごくわずかに出土しているにすぎない。

本遺跡は出土点数におよび遺存状態に恵まれず、土器の詳細な検討は困難である。しかし比較的遺存状態の良好な土器を観察すれば、本遺跡の弥生土器は口縁部端部が肥厚・上方または上下に拡張されて、外面に2～3条の凹線文を施しているものが多いという傾向を示す。赤坂遺跡（Ⅰ）では凹線文がほとんどの甕形土器の口縁部に施されている。弥生土器の編年観では、凹線文の盛行期は弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式併行期）の時期とされている⁽¹⁾。

県内で確認されている中期後半の弥生土器が出土した遺跡は多く、鳴門市光勝院寺内遺跡⁽²⁾、土成町北原遺跡⁽³⁾、北原～大法寺遺跡⁽⁴⁾、分銅型土製品の出土した阿波町西長峰遺跡⁽⁵⁾、桜ノ岡遺跡（Ⅰ）・（Ⅲ）⁽⁶⁾、日吉谷遺跡⁽⁷⁾、赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅲ）、徳島市庄遺跡⁽⁸⁾、南庄遺跡⁽⁹⁾、名東遺跡⁽¹⁰⁾、矢野遺跡⁽¹¹⁾、銅鐸型土製品の出土した石井町高川原遺跡⁽¹²⁾、高地性集落とされる阿南市正福寺山遺跡⁽¹³⁾などがあり、今後さらに資料の増加が見込まれる。

ここで、比較的遺存状態の良好な赤坂遺跡（Ⅰ）の出土土器について詳細に見ていきたい。本遺跡で検出された遺構の中で、最も多くの土器を出土した土坑8出土の土器（13～24）についてみると、これらはすべて同時期に投棄されたものと認められるものである。14・16～18の甕形土器は口縁部を上方につまみあげ、端部外面に凹線文または擬凹線文が施されている。北原遺跡では甕B₁に、香川県吉原町矢ノ塚遺跡⁽¹⁴⁾では甕₃に、香川県詫間町紫雲出山遺跡⁽¹⁵⁾では甕₂に形態分類され、紫雲出山Ⅱ式（中期3・新）以降出現するとされている。内面下半はタテヘラケズリ、上半はヨコヘラケズリが施され、煮沸効率を高めるためか器壁は3～5mm程度にまで薄く仕上げている。外面の調整技法はほとんどがハケのちナデ調整で

仕上げている。15・19は体部全体をナデたのち部分的に粗雑なヘラミガキを施しており、若干後期的な様相をみせている。

また他の出土土器についても同様であり、口縁部の形状は上方に拡張またはわずかに上下に拡張しており、端部には凹線文が施されている。外面の調整はナデがほとんどを占め内面は全面にわたってヘラケズリで仕上げている。ただし土坑1出土の高杯形土器(1)は杯部底面を円板充填技法が認められ、また土坑3出土の甕形土器(2)は器体外面全体にハケで調整されており、弥生時代後期の様相を呈しているものも認められる。

以上のように、赤坂遺跡(I)の出土土器は、数量的に口縁端部外面に2～3条の凹線文が施され、体部外面をナデ調整で仕上げているものが主体であるが、凹線文が退化したもの(9・14・15・26など)もあり、無文化の傾向も見られる。一方、赤坂遺跡(Ⅲ)ではさらに無文化が進み、後期の土器にみられるドーナツ状のあげ底(12・40)を呈するものがみられる。

したがって、本遺跡の出土土器は弥生時代中期末～後期初頃(第Ⅳ様式～第Ⅴ様式)の様相を呈しているものとみて大過ないものと思われる。

遺構については、赤坂遺跡(I)からは土坑9、ピット75が検出され、赤坂遺跡(Ⅲ)からは、住居跡2、溝状遺構2、土坑5、ピット95が検出された。最初に述べたように赤坂遺跡(I)は標高66～66.5mに、赤坂遺跡(Ⅲ)は標高80～85mに位置しており、麓の平野部からの比高差は赤坂遺跡(I)が約20m、赤坂遺跡(Ⅲ)が約30mを測る。したがって、本遺跡は緩やかに傾斜した丘陵先端部に立地する高位台地性集落⁽¹⁶⁾ととらえることができる。

赤坂遺跡(I)で検出された9基の土坑のうち、土坑3・5・8・9は柱穴をもたない非常に簡略な構築物の可能性がある。これらを住居跡とするならば、1辺3m未満の小規模な住居跡である。平面プランは土坑9が楕円形状、その他は方形状を呈している。しかし、上屋構造等については推定しうる資料に欠け不明である。これらは奈良県唐古遺跡から検出された第Ⅳ様式期の竪穴の27・68・83号跡の事例と類似しており、非常に簡略な上屋構造をもつ施設、例えば畑作経営に関わる簡略な構造の作り小屋⁽¹⁷⁾的なものであると思われる。これらの土坑内からは石庖丁の出土点数が多く、このことは本遺跡が農耕集落であったことを示唆するものといえるだろう。

その他の土坑については、そのいずれにも床面直上に炭化物が薄く堆積しており、用途としては貯蔵穴であると解釈することが妥当であろう。

赤坂遺跡(Ⅲ)では、住居跡と認められるものが2基検出された。両者共弥生時代中期後半に属すると思われる円形の竪穴住居跡であり、平面プラン、規模、構造など近似性をしめしている。また出土遺物に関しても、1号住居跡・2号住居跡ともに土器の出土点数は少なく、石庖丁・磨製石斧などの石器類の出土が多い。

徳島県内で現在までに判明している弥生時代の竪穴住居跡の出土例は、約110例を数える。このうち弥生時代中期後半に属するものは、徳島市矢野遺跡変電所内地点3例、矢野遺跡養護学校内地点1例、南庄遺跡12例、名東遺跡（天神地区）4例、名東遺跡7例、名西郡石井町高川原遺跡1例、鳴門市光勝院寺内遺跡2例、板野郡土成町北原遺跡2例、北原～大法寺遺跡1例、椎ヶ丸～芝生遺跡3例⁽¹⁸⁾、西谷遺跡1例⁽¹⁹⁾、前田遺跡4例⁽²⁰⁾、阿波郡市場町上喜来蛭子～中佐古遺跡1例⁽²¹⁾、阿波郡阿波町西長峰遺跡16例、桜ノ岡遺跡（Ⅰ）11例、赤坂遺跡（Ⅲ）2例、三好郡三好町土取遺跡1例⁽²²⁾、円通寺遺跡1例⁽²³⁾、大柿遺跡2例⁽²⁴⁾の75例を数える。

竪穴住居跡の平面プランは、いずれも円形または不整円形を呈し、徳島県の弥生時代全時期を通して類例の大部分に共通する⁽²⁵⁾。赤坂遺跡（Ⅲ）の2号住居跡の床面積は32.9㎡であり、徳島県における中期の竪穴住居跡の床面積の傾向に合致するものである⁽²⁶⁾。

2基の住居跡からは石器が多く出土しており、開墾に使用したと思われる大型の磨製石斧や農耕具である石庖丁やスクレイパー等の出土点数は33点を数える。器種別に分類すれば狩猟具（武器）、農耕具、加工具と大別することができる。狩猟具は2号住居跡から石鏃が5点まとまって出土している。農耕具は結晶片岩製の石庖丁が多いが、その他開墾などに使用されたと思われる大型の両刃の磨製石斧がある。加工具ではスクレイパーの他に楔形石器や石錐などがみられる。

また検出された5基の土坑からは炭化物および焼土は検出されていない。これらの土坑は貯蔵穴と捉えておきたい。

以上、出土土器および住居形態などから、本遺跡は弥生時代中期末～後期初頭（第Ⅳ様式～第Ⅴ様式）にかけて台地上に営まれた1～4棟の竪穴住居と貯蔵穴と思われる数基の土坑で構成される、きわめて小規模な集落であるといえる。本遺跡の遺構の性格として、出土遺物などから台地上に営まれた畑作経営に関わる管理小屋あるいは食料採集のためのベースキャンプ的な小集落であったと捉えられよう。

赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）における成果は、以上述べてきた通りである。赤坂遺跡（Ⅲ）においては形態的に弥生時代中期後半に属すると思われる竪穴住居跡2基が検出され、弥生時代の集落研究の一つの資料を提示することができた。

しかし、本遺跡からは明らかに一括といえる弥生土器は出土しておらず、弥生土器の様式と年代についても十分に明らかにすることはできなかった。

赤坂遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）の立地する曾江谷川左岸、吉野川に張り出した長峰台地を中心とする段丘先端には東西約2kmの範囲に西長峰遺跡、日吉谷遺跡、桜ノ岡遺跡（Ⅰ）など継続時期の微差はあるが、ほぼ同時期の弥生時代の遺構が存在している。とくに西長峰遺跡では大規模な堀立柱建物跡を囲む形で多数の竪穴住居跡が検出されており⁽²⁷⁾、長峰台

地遺跡群の中心的存在であったことをうかがわせている。これら一連の遺跡は各台地上に営まれた枝集落として把握する必要があり、それぞれの枝脈での土地利用形態の分析を通して、当該地域の集落構造を検討していく必要があろう。

注

- (1) 正岡睦夫 「凹線文・擬凹線文」『弥生文化の研究 3』 雄山閣 1986
寺沢 薫・森岡秀人 編 「近畿編Ⅰ・Ⅱ」 『弥生土器の様式と編年』 木耳社 1989
- (2) 菅原康夫・高橋正則 『光勝院寺内遺跡』 徳島県教育委員会 1984
- (3) 林 慎二・谷 匡人 『土成町北原遺跡』 徳島県教育委員会 1988
- (4) 徳島県埋蔵文化財センター 『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 2』 1991
- (5) 徳島県教育委員会 『西長峰遺跡現地説明会資料』 1990
- (6) 前掲注(4)
- (7) 前掲注(4)
- (8) 「弥生時代の徳島市」 埋蔵文化財資料展 徳島市教育委員会 1983
「庄遺跡人々のくらしと文化」 第6回埋蔵文化財資料展 徳島市教育委員会 1985
- (9) 森 直樹 編 『南庄遺跡』 徳島県教育委員会 1989
一山 典・滝山雄一 他 「南庄遺跡発掘調査現地説明会資料」 徳島市教育委員会 1985
- (10) 松永住美・森 直樹 編 『名東遺跡(天神地区)』 徳島県教育委員会 1990
一山 典 編 『徳島市文化財だよりNo.27』 徳島市教育委員会 1992
- (11) 小林勝美・松永雅行 「矢野国府変電所緊急発掘調査概報」『徳島県文化財調査概報』
徳島県教育委員会 1976
徳島県教育委員会 『矢野遺跡現地説明会資料』 1983
- (12) 高川原遺跡発掘調査委員会 『高川原遺跡発掘調査報告書』 石井町教育委員会 1980
- (13) 伊藤勇輔 「四国地方の弥生系高地性集落遺跡の資料」『古代学研究』66 古代学研究会
1973
- (14) 薦田耕作 編 『矢ノ塚遺跡』 香川県教育委員会 1987
- (15) 小林行雄・佐原 真 『紫雲山』 詫間町文化財保護委員会 1964
- (16) 小野忠熙 『高地性集落論』 学生社 1982
佐原 真・金関 恕 編 「弥生集落」『弥生文化の研究 7』 雄山閣 1986
- (17) 例えば琵琶湖東地域にみられる収穫時における耕作現地での倉庫としての機能を持つ「ホシ小屋」と呼ばれる簡略な構築物のようなものであると思われる。石野博信氏はこれを「簡略な伝統的構造原理」として住居の原初形態を示すものと着目している。石野博信 『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館 1990 所収。

- (18) 前掲注(4)
- (19) 前掲注(4)
- (20) 前掲注(4)
- (21) 前掲注(4)
- (22) 森 浩一 編 『土取遺跡調査概況報』 徳島県教育委員会・三好郡三好町教育委員会
1973
- (23) 小林勝美 編 『徳島県文化財調査概報』 徳島県教育委員会 1980
- (24) 小林勝美・松永住美 『大柿遺跡発掘調査概報』 1976
- (25) 前掲注(2) 徳島県における弥生時代の中期の住居形態は円形の平面プランをもち、後期になっても原則として住居形態は円形を踏襲している。これらのことは近接する、紀伊、讃岐、播磨地方の弥生時代の中期の様相と共通している。
- (26) 前掲注(2)
- (27) 前掲注(5)

参考文献

- 井守徳男 編 『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』 兵庫県教育委員会 1983
- 岡本健児 「入門講座・弥生土器－四国4・5」 『考古学ジャーナル92・93』 ニュー・サイエンス社 1974
- 佐原 真 「弥生土器の製作技術 1. 粘土から焼き上げまで」 『弥生文化の研究 3』 雄山閣
- 菅原康夫 『黒谷川郡頭遺跡Ⅰ』 徳島県教育委員会 1986
- 菅原康夫 「吉野川中流域」 『日本の古代遺跡 37 徳島』 保育社 1986
- 寺沢 薫・森岡秀人 編 「近畿圏Ⅰ・Ⅱ」 『弥生土器の様式と編年』 木耳社 1989
- 長井数秋 「農耕文化の形成と発展」 『愛媛県史 原始古代Ⅰ』 愛媛県史編纂委員会 1982
- 安田喜憲 「Ⅳ 水田稲作農業の文化－弥生時代－」 『環境考古学事始 日本列島2万年』 日本放送出版協会 1980
- 渡辺光 「竪穴住居」 『百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1』 岡山県教育委員会 1982

第1表 赤坂遺跡（I）遺構一覧表

遺構名	出土地点	規模（cm）			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S K 1001	E-5	160	138	12	高杯、甕等	
S K 1002	D-7, E-6, 7	220	90	18	無	
S K 1003	F-8	300	180	38	甕、叩き石、砥石等	住居跡？
S K 1004	D-10	100	60	26	弥生土器片、石庖丁等	
S K 1005	F, G-7	270	210	24	壺、甕口縁～底部、鉢等	
S K 1006	F, G-8	100	100	20	弥生土器片	
S K 1007	G-7	120	76	28	甕口縁～底部、台石等	
S K 1008	G, H-7, 8	210	200	28	甕口縁～底部、石鏃等	
S K 1009	F, G-6	244	154	14	甕口縁～底部、台石等	住居跡？
S P 1004	D-5	36	25	10	無	
S P 1007	D-6	25	—	12	無	
S P 1011	D-6	(70)	50	26	無	
S P 1013	D-6	100	60	20	無	
S P 1014	D-6	42	32	10	無	
S P 1015	D-6	50	44	12	無	
S P 1016	E-6	74	64	14	無	
S P 1019	E-6	30	30	10	無	
S P 1020	E-6	38	34	12	無	
S P 1021	E-6	44	44	18	無	
S P 1023	F-6	50	46	20	無	
S P 1024	F-6	50	38	20	無	
S P 1025	F-6	32	27	17	無	
S P 1027	E-7	60	40	24	弥生土器片	
S P 1029	E-7	48	42	16	弥生土器片	
S P 1030	E-7	53	41	14	無	
S P 1031	E-7	76	—	12	無	
S P 1032	E-7	59	50	10	無	
S P 1033	E-7	42	36	10	無	
S P 1037	E-7	32	—	14	無	
S P 1042	E-7	36	29	11	無	
S P 1044	F-7	54	42	10	無	
S P 1045	F-7	78	58	12	無	
S P 1046	F-7	38	30	10	無	
S P 1049	F-7	52	40	15	無	
S P 1050	F-7	42	32	16	無	
S P 1053	E-8	32	32	10	無	
S P 1055	F-8	30	30	17	無	
S P 1060	F-8	32	30	11	無	
S P 1061	F-8	32	28	14	無	

遺構名	出土地点	規模 (cm)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S P 1063	F - 8	26	23	10	無	
S P 1065	F - 9	30	28	16	無	
S P 1067	F - 9	32	28	24	石庖丁	
S P 1069	F - 9	47	36	18	無	
S P 1070	F - 9	28	26	23	無	
S P 1071	E - 10	24	22	12	無	
S P 1072	E - 9	42	34	13	無	
S P 1075	E - 10	40	28	26	無	
S P 1076	E - 10	27	25	13	無	
S P 1078	E - 10	40	31	21	無	
S P 1079	D - 9	(50)	33	16	無	
S P 1080	D - 10	34	28	13	無	
S P 1081	D - 10	75	72	22	無	
S P 1082	D - 10	53	36	20	無	
S P 1084	D - 10	—	—	24	弥生土器片	
S P 1087	C - 10	88	54	10	無	
S P 1088	C - 10	72	52	16	弥生土器片	
S P 1091	G - 8	22	21	10	無	
S P 1093	G - 9	47	27	12	無	
S P 1094 95	G - 9	103	29	12	無	
S P 1096	G - 9	32	25	21	無	
S P 1097	G - 9	40	33	24	無	
S P 1098	G - 9	120	58	22	無	
S P 1099	G - 8	35	30	23	無	
S P 1100	G - 9	31	26	21	無	
S P 1101	G - 9	33	22	16	無	
S P 1102	G - 9	41	40	20	無	
S P 1103	G - 8	46	31	19	無	
S P 1104	G - 8	40	34	18	無	
S P 1105	G - 8	26	20	10	無	
S P 1106	G - 8, 9	50	41	18	無	
S P 1107	G - 9	56	34	20	無	
S P 1108	G - 9	44	34	26	無	
S P 1109	G - 9	40	30	18	無	
S P 1110	G - 9	86	32	16	無	
S P 1111	G - 9	(37)	30	24	無	
S P 1112	G - 8	30	25	24	無	
S P 1113	G, H - 9	72	34	23	無	

遺構名	出土地点	規模 (cm)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S P 1114	H-9	110	70	14	無	
S P 1116	G-8	30	24	26	無	
S P 1117	H-8	30	26	17	無	
S P 1118	H-8	42	36	10	無	
S P 1119	H-8	40	28	10	無	
S P 1121	H-7	33	32	12	無	
S P 1122	I-7	60	54	20	無	

第2表 赤坂遺跡(Ⅲ)遺構一覧表

遺構名	出土地点	規模 (cm)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S B 1001	I-14, 15	479	—	18	壺底部、磨斧、砥石等	
S B 1002	G, H-17, 18	680	500	25	壺、甕磨斧、石鏃等	
S D 1001	D-15	169	66	14	無	
S D 1002	D-14, 15	207	58	19	無	
S K 1001	F-12, 13	169	—	14	弥生土器片	
S K 1002	F-19, 20	208	—	28	壺口縁～底部、石庖丁等	
S K 1003	G-8	160	80	25	無	S B 1002内
S K 1004	F, G-18	258	190	14	無	
S K 1005	E-12	260	175	11	無	
S P 1001	H-17	54	53	13	無	
S P 1002	H-16	71	46	21	無	
S P 1003	I-16	45	29	21	無	
S P 1004	H, I-16	38	31	19	無	
S P 1005	I-16	29	27	17	無	
S P 1006	I-16	51	34	17	無	
S P 1007	H-15	44	30	20	無	
S P 1008	H, I-15	30	22	39	無	
S P 1009	I-15	54	22	20	無	
S P 1010	H, I-14, 15	34	33	10	無	
S P 1011	I-14	—	48	20	無	
S P 1012	I-14	26	20	23	無	
S P 1013	I, J-14	38	29	17	無	
S P 1014	I-14	30	26	16	無	
S P 1015	I-14	32	25	18	無	
S P 1016	I-14	35	29	19	無	
S P 1018	I-14	30	25	18	無	
S P 1021	H, I-14	26	21	31	無	
S P 1022	H-14	36	17	17	無	

遺構名	出土地点	規模 (cm)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S P 1023	I - 14	96	67	34	無	
S P 1024	I - 13, 14	102	81	27	無	
S P 1025	I - 13, 14	52	47	22	無	
S P 1026	H, I - 13	26	24	21	無	
S P 1027	H - 13	39	34	10	無	
S P 1028	H - 13	33	26	25	無	
S P 1030	H - 13	31	24	20	無	
S P 1032	H - 13	43	30	27	無	
S P 1033	H - 13	33	30	21	無	
S P 1034	H - 13	88	56	24	無	
S P 1035	H - 13	52	44	26	無	
S P 1036	H - 12, 13	33	29	20	無	
S P 1037	H - 12	48	38	43	無	
S P 1038	H - 13	34	24	31	無	
S P 1039	I - 13	32	31	23	無	
S P 1040	I - 13	38	37	20	無	
S P 1041	I - 13	69	57	20	無	
S P 1042	I - 12, 13	69	54	25	無	
S P 1043	I - 13	58	47	24	無	
S P 1044	I - 12	36	28	14	無	
S P 1045	I, J - 12	84	60	15	無	
S P 1046	E - 16	40	29	15	無	
S P 1047	E - 15, 16	40	31	20	無	
S P 1048	E - 15	42	34	11	無	
S P 1049	E - 15	54	31	15	無	
S P 1050	E - 15	44	38	22	無	
S P 1051	E - 15	34	28	24	無	
S P 1052	D - 15	38	33	10	無	
S P 1053	D, E - 15	84	36	12	無	
S P 1054	D - 13	26	20	33	無	
S P 1055	D - 13	20	18	14	無	
S P 1056	D - 13	25	16	19	無	
S P 1057	D - 13, 14	82	64	11	無	
S P 1058	D - 14	54	36	16	無	
S P 1059	E - 14	74	66	21	無	
S P 1061	F - 14	38	27	17	無	
S P 1062	F - 14	29	25	25	無	
S P 1063	F - 14	21	20	20	無	
S P 1064	F - 14	24	19	13	無	

遺構名	出土地点	規模 (cm)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S P 1065	F - 14	34	26	11	無	
S P 1066	F - 14	43	40	13	無	
S P 1067	F - 14	35	29	10	無	
S P 1068	F - 14	22	19	19	無	
S P 1069	F - 14	27	24	15	無	
S P 1071	F - 13, 14	41	36	21	無	
S P 1072	F - 13	46	40	30	無	
S P 1073	F - 13	70	25	11	無	
S P 1074	F - 13	110	105	16	無	
S P 1075	G - 14	21	20	33	無	
S P 1076	G - 14	36	32	28	無	
S P 1077	G - 13	38	34	14	無	
S P 1078	G - 14	37	30	20	無	
S P 1079	D, E - 13	59	51	16	無	
S P 1080	E - 13	48	38	11	無	
S P 1081	D, E - 12, 13	69	56	22	無	
S P 1082	F - 15	26	24	14	無	
S P 1083	E - 12, 13	54	44	19	無	
S P 1084	F - 12	63	50	13	無	
S P 1085	E - 11, 12	73	50	22	無	
S P 1086	F - 12	53	38	14	無	
S P 1087	I - 12	38	35	16	無	
S P 1088	I - 12	46	36	27	無	
S P 1089	I - 12	30	28	17	無	
S P 1090	E - 11	88	60	15	無	
S P 1091	E, F - 11	140	62	40	無	
S P 1092	F - 11	54	36	13	無	
S P 1093	F - 11	36	32	48	無	
S P 1094	F - 11	67	58	10	無	
S P 1095	G - 12	38	35	21	無	
S P 1096	G - 11	33	26	21	無	
S P 1097	G - 11	92	52	15	無	
S P 1098	E - 10	56	42	28	無	
S P 1099	I - 15	34	24	38	無	
S P 1100	F - 14	70	60	17	無	
S P 1101	H - 12	31	28	23	無	
S P 1102	I - 14	38	29	20	無	

第3表 赤坂遺跡（Ⅰ）出土遺物観察表（土器）

番号	器種	地点 層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
1	高杯	S K1001	口径 20.0 脚台部径8.7 器高 13.1	杯部 直線的に外方へのびる。 口縁端部 内彎し、丸くおさめる。 脚部 ゆるやかに外下方にひろがる。 脚端部 方形状におさめる。	内外面 損傷激しく調整不明。 杯部底面門板充填技法。	石英 チャート 雲母	明赤褐色	
2	甕	S K1003	口径 14.0 底径 6.4 体部最大径19.4	口縁部 外反。 口縁端部 わずかにつまみあげる。 口縁端部外面に2条の凹線文を施す。 体部 内彎気味に立ちあがり上方へのびる。	口縁部内外面 ヨコナデ 体部外面全体に7条/cmの粗いハケ。 一部ナデ。体部上位～下位 タテハケ。のち体部中位ヨコハケ。 体部 内面 幅1.7cmのヘラケズリ。 体部内面上位 ヨコヘラケズリ。 体部内面中位～下位 タテヘラケズリ。	緻密 片岩	黒褐色	
6	壺	S K1005	口径 15.6	頸部 直立気味に立ち上がる。 口縁部 外反 口縁端部 上方につまみあげる。	内外面損傷激しく調整不明	石英 チャート 雲母	橙色	
7	甕	S K1005	口径 19.1	口縁部 外反。 口縁端部 上方につまみあげ丸くおさめる。 口縁端部外面に2条の凹線文を施す。	口縁部 外面タテハケのちヨコナデ。 口縁部内面ヨコハケのちヨコナデ。	石英 雲母	明赤褐色	
8	甕	S K1005	口径 11.0	口縁部 外反 口縁端部 わずかに下方に拡張する。 口縁端部 外面に1条の凹線文を施す。	口縁部～体部外面ナデ 口縁部内面ヨコナデ。 体部内面幅1.5cmのヨコヘラケズリ。	石英 チャート 雲母	にぶい赤褐色	
9	甕	S K1005	口径 15.4	口縁部 外反。 口縁端部 方形状におさめる。 口縁端部わずかに拡張。	内外面損傷激しく調整不明	石英 チャート	明褐色	
10	甕	S K1007	口径 15.2	口縁部 外反。 口縁端部 上下に拡張。 口縁端部の栓は鋭い 口縁端部 外面に2条の凹線文を施す。	口縁部 内外面ヨコナデ	石英 チャート	内面 黒褐色 外面 明赤褐色	
11	甕底部	S K1007	底径 5.8	底部直立し、内彎気味に立ち上がり上方へのびる。 わずかにあげ底	底部 外面に7条/cmのタテヘラミガキ。 底部 内面ユビオサエのちナデ。 底面 外部ユビナデ	石英 チャート 雲母	内面 にぶい赤褐色 外面 橙色	
13	甕	S K1008	口径 14.2 体部最大径29.6	口縁部 わずかに内傾して立ち上がる。 口縁部 外反。 口縁端部 上下に拡張して、丸くおさめる。 口縁端部 外面に2条の擬凹線文を施す。 体部 中位に最大径。	口縁部 内外面ヨコナデ。 体部外面3条/cmのヘラミガキ。 体部外面上位ヨコヘラミガキ。 体部外面中位タテヘラミガキ。 体部内面幅1.7cmのヘラケズリ。 体部内面上位～下位タテヘラケズリ。 体部内面中位 ヨコヘラケズリ。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	内面 暗赤褐色 外面 明赤褐色	
14	甕	S K1008	口径 13.4 体部最大径 22.0 復元器高 27.0	口縁部 外反。 口縁端部 上下に拡張。 体部中位に最大径。 倒卵形の体部。	口縁～体部中位下部外面ナデ。 体部中位外面に一部ハケ残存。 口縁部内面ヨコナデ。 体部内面 幅2cmのヘラケズリ。 体部内面上位ヨコヘラケズリ。 体部内面中位～下位 タテヘラケズリ。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	明赤褐色	口縁～底部 外面に黒斑。
15	甕	S K1008	口径 14.4 体部最大径19.4	口縁部やや立ち上がり外反。 口縁端部方形状におさめる。 口縁端部外面やや凹みをもつ。 体部上位やや肩が張る。	口縁部内外面ヨコナデ。 口縁部と体部の境にユビオサエ。 体部外面全体ナデのち体部外面上位～中位に5条/cmのヨコヘラミガキ。 体部内面幅1.6cmのヘラケズリ。 体部内面上位ヨコヘラケズリ。 体部内面中位～下位タテヘラケズリ。 内面ケズリ明瞭。	石英 チャート 雲母	内面 にぶい 赤褐色 外面 明赤褐色	

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
16	甕	S K 1008	口径 17.2	口縁部やや立ち上がり、短く外反する。 口縁端部上方に拡散し、外面に平坦面を作出。 口縁端部外面に3条の凹線文を施す。 体部上位やや肩が張る。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面約幅1 cm単位のイタナデ。 体部内面幅1.7 cmのヘラケズリ。 体部内面上位ヨコヘラケズリ。 体部内面中位タテヘラケズリ。 内面ケズリ明瞭。	石英 チャート 雲母	明赤褐色	
17	甕	S K 1008	口径 15.8	口縁部「く」の字状に外反。 口縁端部つまみ上げて、丸くおさめる。 口縁端部外面に2条の凹線文を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ヨコ・ナナメハケのちナデ。 体部内面幅1.8 cmのヨコヘラケズリ。 内面ケズリ明瞭。	石英 チャート 雲母	内面 黄褐色 外面 明赤褐色	
18	甕	S K 1008	口径 16.4 体部最大径24.4	口縁部「く」の字状に外反。 口縁端部つまみ上げて、丸くおさめる。 口縁端部外面に3条の凹線文を施す。 体部中位に最大径。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ナデ、一部タテハケ残存。 体部内面幅1.8 cmのヨコヘラケズリ。 内面ケズリ明瞭。	石英 チャート 雲母	内面 赤褐色 外面 橙色	
19	甕底部	S K 1008	底径 6.2	底部 やや直立して、上方に外反。平底。	底部外面4条/cmのタテヘラミガキ、のち底部最下位ヨコナデ。 底部内面幅1.6 cmのタテヘラケズリのち、底面内部ユビナデ。 底面外部ユビナデ。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	内面 にぶい赤褐色 外面 明赤褐色	
20	甕底部	S K 1008	底径 7.2	底部内面ユビオサエまたはナデ。平底。	底部外面7条/cmのタテヘラミガキ、のち底部最下位ヨコナデ。 底面外部ナデ。	石英 チャート 雲母	内面 にぶい褐色 外面 明赤褐色	
21	甕底部	S K 1008	底径 6.4	底部内面ユビオサエまたはナデ。平底。	底部外面6条/cmのタテヘラミガキ、のち底部最下位ヨコナデ。	石英 チャート 雲母	内面 にぶい橙色 外面 にぶい赤褐色	
22	鉢	S K 1008	口径 15.1 底径 7.2 器高 6.8	口縁端部内彎し方形におさめる。 体部直線気味に外上方にひろがる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面イタナデ。 体部内面5条/cmのヨコヘラミガキ。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	橙色	
23	高杯 (脚部)	S K 1008	底径 8.0	脚部 外下方にひろがる。 脚部方形におさめる。 脚部外面に3条の沈線文 その下に鋸歯状の沈線文を施す。 脚部外面に1条の沈線文を施す。	脚部外面ヨコナデ。 脚部内面ヨコヘラケズリのち脚部内面ヨコナデ。	石英 チャート 精緻	明赤褐色	
24	高杯 (杯部)	S K 1008	口径 25.0	杯部直線的に外方へのびる。 口縁端部上方へ立ち上がり、内彎する。 口縁端部丸くおさめる。 口縁端部肥厚な粘土帯貼り付け。	内外面損傷激しく調整不明	石英 チャート 雲母	にぶい 橙色	
26	甕	S K 1009	口径 14.0 体部最大径20.2	口縁部外反。 口縁端部つまみ上げる。 口縁端部外面平坦、やや凹みをもつ。 球形に近い体部。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面タテ、ヨコハケのちナデ。 体部内面幅2 cmのヘラケズリ。 体部内面上位～中位ヨコヘラケズリ。 体部内面中位～下位タテヘラケズリ。 内面ケズリ明瞭。	石英 チャート 雲母	内面 暗赤褐色 外面 明赤褐色	

番号	器種	地点 層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
27	甕	S K1009	口径 14.6	口縁部外反。 頸部直立気味に短く立ち上がる。 口縁端部肥厚。 口縁端部外面に2条の凹線文を施す。 口縁部内面に2条の凹線文を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	チャート 雲母 結晶片岩	橙色	
28	甕底部	S K1009	底径 7.4	底部直線的にひろがる。 平底。	底部外面4条/cmのタテヘラミガキ。 底部最下位ヨコナデ。	石英 チャート 雲母 精緻	明赤褐色	
29	壺底部	S K1009	底径 4.1	底部直線的にひろがる。 あげ底。	底部外面3条/cmのタテヘラミガキ。 底部外面最下位ユビナデ。 底面内外面ユビナデ。	石英 チャート 雲母	内面 赤灰色 外面 にぶい 橙色	
32	壺	遺物包含層 (2層)	口径 14.6	口縁部ゆるやかに外反。 口縁端部肥厚し、方形状におさめる。 口縁端部外面に1条の凹線文を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	石英 雲母 結晶片岩	橙色	
33	壺	遺物包含層 (2層)	口径 12.6	口縁部ゆるやかに外反。 口縁端部上方に拡張し、丸くおさめる。 口縁端部外面に2条の凹線文を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	石英 雲母	明赤褐色	
34	壺	遺物包含層 (2層)		頸部と体部の境に櫛描直線文、その上下に櫛描波状文を施す。	体部外面ナデ。 体部内面(頸部と体部の境)ユビオサエ、のちユビナデ。	石英 雲母	黄橙色	
35	甕	表土層 (1層)	口径 18.8	口縁部外反(如意形)。 体部直立し、内彎気味に下方へおさめる。 口縁部と体部との境に2種類の櫛描波状文を施す。	口縁～体部内外面ナデ。	石英 雲母 結晶片岩	明黄褐色	
36	甕	遺物包含層 (2層)	口径 12.0	口縁部「く」の字状に外反。 口縁端部上下に拡張し、丸くおさめる。 口縁端部外面に2条の凝凹線文を施す。	口縁部内外面ナデ。	石英 雲母	橙色	
37	甕	遺物包含層 (2層)	口径 15.0	口縁部やや直立して外反。 口縁端部つまみ上げて丸くおさめる。 口縁端部外面に2条の凹線文を施す。	口縁部内外面ナデ。	石英 チャート 雲母	明赤褐色	
38	甕	表土層 (1層)	口径 14.0	口縁部「く」の字状に外反。 口縁端部上下に拡張し、丸くおさめる。 口縁端部外面に3条の凹線文を施す。 口縁部と体部の境に粘土紐痕が残存。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ヨコハケのちタテハケ。 体部内面ヨコハケ。	石英 チャート 雲母	内面 橙色 外面 明赤褐色	内面に黒斑

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
39	甕	試掘第8 トレンチ (2層)	口径 19.2	口縁部外反。 口縁端部上下に拡張し、鋭くおさ める。 口縁端部外面に3条の凝凹線文を 施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	石英 チャート 雲母	明赤褐色	
40	高杯 (脚部)	試掘第8 トレンチ (2層)	脚台部径4.8	脚部外面杉目状の文様。	脚部外面ヘラミガキ。 脚部外面無調整	石英 雲母	赤褐色	
41	無蓋高杯 (杯部)	G-9 遺物包含層 (2層)	口径 14.2	口縁部やや外反。 口縁端部丸みをもつ 口縁部と底部を分ける稜は鋭い。 稜線の下には櫛描波状文を巡ら す。	ミズビキ成形。 杯部内外面回転ナデ調整。 杯底部外面回転ヘラケズリ調整。	精緻	灰色	硬質須恵器
42	高杯 (脚部)	G.H-9.10 遺物包含層 (2層)	脚台部径8.7	外下方へ開き、裾付近でさらに外 下方に開く。 脚端部はやや肥厚し、やや内彎す る。 脚端部の段は鋭く尖る。 二方に透し窓を有する。	ミズビキ成形。 脚部外面カキ目調整。 脚端部外面回転ヨコナデ調整。 脚部内面回転ヨコナデ調整。	精緻	明緑灰色	硬質須恵器
43	須恵質土 器 (釜口縁)	ブドウ濠 掘北(2層)	口径 11.5	鐔は口縁端部より幅1.3cmで横方 向にのびる。	口縁部内外面ヨコナデ。	密	灰白色	
44	火鉢	遺物包含層 (2層)	口径 12.2	口縁外反。 口縁端部直立。 口縁部外面に櫛状工具による列点 文を施す。	口縁部内外面および口縁部外面ヨコ ナデ。	石器 長石 雲母 赤色砂粒	明赤褐色	近世焼き締め陶器

第3表 赤坂遺跡（Ⅰ）出土遺物観察表（石器）

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
3	叩き石	S K1003	10.9	7.2	6.1	710	完形	砂岩	卵形の円礫を使用。 敲打痕は顕著にみられない。
4	砥石	S K1003	27.6	16.2	17.4	9950	完形	砂岩	砂岩の巨礫を使用。 表面には研磨の使用痕による窪みが見られる。
5	石庖丁	S K1004	9.6	3.8	0.8	39.3	完形	結晶片岩	薄手の剥片を素材とする。 両側縁に調整加工を施し、直線状の刃部を作成。
12	台石	S K1007	23.4	20.4	7.5	5200	半分欠損	砂岩	砂岩の自然礫を使用。 礫の表面中央部および稜部に激しい敲打痕がみられる。 被熱を受け一部変色している。
25	石鏃	S K1008	2.5	1.1	0.35	1.0	完形	サヌカイト (石質 良)	円基。 やや細身の木葉形を呈する。(涙滴形) 最大幅が器体の下位1/3にくる。 両面押圧剥離による二次加工を施す。
30	石庖丁	S P1067	8.8	3.4	0.6	30.9	完形	石英片岩	幅広で薄手の剥片を素材とする。 一側縁に直線状の刃部を作成。
31	石庖丁	S P1067	5.5	2.6	0.6	15.0	半分欠損	緑泥片岩	幅広で薄手の剥片を素材とする。 両側縁に直線状の刃部を作成。
45	石核	G.H-9.10 遺物包含層 (2層)	4.5	10.1	2.7	79.8	完形	サヌカイト	横長剥片石核(旧石器)。 風化著しい。
46	石核	試掘第4 トレンチ 遺物包含層 (2層)	3.7	8.5	2.0	48.7	完形	サヌカイト	横長剥片石核(旧石器)。 打撃痕明瞭。
47	石鏃	F-6 表採	3.0	2.5	0.5	4.0	完形	サヌカイト (石質 良)	半基。 やや細身の二等辺三角形を呈する。 両面押圧剥離による二次加工を施す。
48	スクレイ パー	遺物包含層 (3層)	3.5	4.8	1.0	11.5	完形	サヌカイト (石質 良)	幅広の剥片を素材とする。 剥片のほぼ全周縁に調整加工を施す。
49	石庖丁	試掘第8 トレンチ 遺物包含層 (3層)	5.2	2.8	0.7	11.7	完形	サヌカイト (石質 良)	幅広の剥片を素材とする。 両端および上端を折断し、器形を整える。 粗雑な調整加工により刃部を作成。
50	楔形石器	試掘第4 トレンチ 遺物包含層 (2層)	3.7	2.2	1.2	11.0	完形	サヌカイト (石質 良)	厚手の横長剥片を素材とする。 両端を折断し、器形を整える。 縦断面は凸レンズ状を呈する。 横断面は台形を呈する。
51	楔形石器	G.H-9.10 遺物包含層 (2層)	3.4	1.9	0.85	8.4	完形	サヌカイト (石質 良)	厚手の横長剥片を素材とする。 両端を折断し、器形を整える。 縦断面は扁平な凸レンズ状を呈する。 横断面は四角形を呈する。
52	石庖丁	遺物包含層 (2層)	11.8	4.6	1.1	85.0	完形	結晶片岩	幅広の剥片を素材とする。 一側縁に直線状の刃部を作成。
53	石庖丁	G.H-5.6 遺物包含層 (2層)	3.7	6.5	0.9	35.7	半分欠損	結晶片岩	幅広の剥片を素材とする。 両端縁に直線状の刃部を作成。
54	石庖丁	G.H-5.6 遺物包含層 (2層)	8.7	5.5	0.5	37.9	半分欠損	結晶片岩	幅広で薄手の剥片を素材とする。 両端縁に直線状の刃部を作成。

第3表 赤坂遺跡（Ⅰ）出土遺物観察表（その他）

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	材質	特徴・備考
55	鈴	H-4 遺物包含層 (1層)	2.0	1.5	1.2	6.5	完形	青銅	時期不明。(近世以降) 正面及び裏面に雷文。
56	磚	表土層 (1層)	14.5	6.6	5.6	600	部分	粘土	時期不明。(近世以降) 正面および側面にヘラ状工具による格子目文様を裝飾。

第4表 赤坂遺跡（Ⅱ）出土遺物観察表（土器）

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
1	杯蓋	試掘第1 トレンチ 遺物包含層 (2層)	口径 15.4	口縁部 直立し、端部は尖り内面に面を有する。 天井部の稜は鋭く、断面形は三角形を呈する。	ミズビキ成形。 内外面回転ナデ調整。	密	緑灰色	焼成良好 硬質

第4表 赤坂遺跡（Ⅱ）出土遺物観察表（石器）

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
2	石核	試掘第2 トレンチ 遺物包含層 (2層)	2.2	3.4	2.1	15.7	完形	チャート	サイコロ状の形態を呈する。 打面転移により剥片剥離が行われる。 一部自然面残存。
3	ナイフ形 石器	試掘第1 トレンチ 遺物包含層 (2層)	2.9	2.3	6.0	3.7	上半分欠損	サヌカイト	薄手の横長剥片を素材とする。 裏面側より打点側の側縁に調整加工を施す。

第5表 赤坂遺跡（Ⅲ）出土遺物観察表（土器）

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
1	壺底部	S B1001	底径 9.4	底部より上外方へのびる。 平底。	内外面損傷激しく調整不明。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	橙色	
12	壺底部	S B1002	底径 6.2	底部 やや直立して上外方へのびる。 ややあげ底。	内外面ナデ。 輪台技法。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	にぶい 赤褐色	
13	甕底部	S B1002	底径 4.4	体部 底面から直立し、やや内彎しながら上外方へのびる。 平底。	内外面ナデ。	石英 雲母 結晶片岩	内面 黒色 外面 明黄褐色	内面に黒斑
36	壺	S K1002	口径 16.4	口～頸部 ゆるやかに外方にひろく。 口縁端部方形におさめる。	内外面損傷激しく調整不明。	石英 チャート 雲母	明黄褐色	
37	壺底部	S K1002	底径 8.4	体部 底部よりやや内彎しながら上方へひろがる。 わずかにあげ底。	外面ナデ。 内面損傷激しく調整不明。	石英 チャート 雲母	内面 橙色 外面 にぶい 橙色	
38	壺底部	S K1002	底径 14.0	底部よりやや内彎しながら外方にひろがる。 平底。	内外面ナデ。 底面外面ユビヒデ。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	内面 黒色 外面 黄褐色	内面および底面外面に黒斑。
39	壺底部	S K1002	底径 11.2	体部 底部より直立して上外方へのびる。 わずかにあげ底。	底部 外面ユビオサエのちナデ。 底部内面ナデ。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	内面 黒褐色 外面 明赤褐色	内面および底面外面に黒斑。
40	壺底部	S K1002	底径 8.4	底部より外上方へひろがる。 あげ底。	内外面ナデ。 輪台技法。	石英 チャート 雲母 結晶片岩	橙色	

第5表 赤坂遺跡(Ⅲ) 出土遺物観察表 (石器)

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
2	エンド・スクレイパー	S B1001	3.4	1.6	1.0	6.5	完形	サヌカイト	厚手の横長剥片を素材とする。 両端を折断し、器形を整える。 剥片の端部に急斜度の調整加工を施し刃部を作出。
3	楔形石器	S B1001	2.6	2.9	1.0	7.1	完形	サヌカイト	厚手の剥片を素材とする。 折断により器形を整える。 縦断面形は三角形を呈する。
4	楔形石器	S B1001	3.0	2.0	0.6	3.0	完形	サヌカイト	両極打法により素材となる剥片を作出。 一部自然面残存。
5	石錐	S B1001	1.7	0.7	0.3	0.3	刃部のみ	サヌカイト	細かな調整加工により、鋭い刃部を作出。 横断面形は菱形を呈する。
6	石庖丁	S B1001	4.6	3.3	1.1	27.1	両端欠損	結晶片岩	厚手の剥片を素材とする。 剥片の一侧縁に刃部を作出。 断面形は凸レンズ状を呈する。
7	局部磨製石ノミ	S B1001	5.9	1.5	1.1	14.7	完形	結晶片岩	厚手の剥片を素材とする。 片岩の片理面と直交する表裏面を研磨。 横断面形は四角形を呈する。
8	磨製ノミ状石器	S B1001	8.7	2.5	1.0	44.1	完形	結晶片岩	器体全面を研磨。 先端部は両面とも丁寧な研磨されており、鋭利な刃部を作出。
9	磨製石斧	S B1001	5.1	2.8	0.8	17.8	半分欠損	結晶片岩	器体前面を研磨。 正面は短軸方向に、側面は長軸方向に研磨。 裏面側欠損。
10	柱状石斧	S B1001 pit No5	16.0	4.0	1.7	230	刃部欠損	結晶片岩	器体表面は激しい敲打状態。 石斧未製品。
11	砥石	S B1001	27.0	20.7	7.8		一部欠損	砂岩	砂岩の自然礫を使用。 表面には研磨の使用痕による直径3cm程度の窪みがみられる。
14	石鏃	S B1002	1.9	1.7	0.4	1.0	下半分欠損	サヌカイト	両面押圧剥離による調整加工。 横断面形は凸レンズ状を呈する。
15	石鏃	S B1002	1.4	1.2	0.2	0.25	一部欠損	サヌカイト	無茎の凸基。 両面押圧剥離による調整加工。
16	石鏃	S B1002	2.3	1.0	0.3	0.6	一部欠損	サヌカイト	無茎。 最大幅が器体の1/2より上にくる。 涙滴を逆にしたような形状を呈する。 両面押圧剥離による調整加工。
17	石鏃	S B1002	3.1	1.1	0.5	1.5	完形	サヌカイト	無茎。 最大幅が器体上位1/3にくる。 偏平な菱形を呈する。 両面押圧剥離による調整加工。
18	石鏃	S B1002	4.6	1.1	0.4	1.9	完形	サヌカイト	無茎。 最大幅が器体上位1/4にくる。 細身の柳葉形を呈する。 両面押圧剥離による調整加工。
19	石庖丁	S B1002	3.6	3.7	1.0	13.9	半分欠損	サヌカイト	剥片の両側縁に細かな剥離を施し、刃部を作出。
20	石庖丁	S B1002	6.1	4.1	0.6	23.7	半分欠損	結晶片岩	薄手で幅広の剥片を素材とする。 一侧縁に直線状の刃部を作出。
21	石庖丁	S B1002	5.5	2.4	0.6	10.3	半分欠損	結晶片岩	剥片の一侧縁に刃部を作出。 自然面一部残存。
22	石庖丁	S B1002	4.9	2.6	0.8	14.6	両端欠損	結晶片岩	薄手で幅広の剥片を素材とする。 両側縁に直線状の刃部を作出。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
23	石庖丁	S B1002	10.7	3.7	0.8	53.0	完形	結晶片岩	厚手の剝片を素材とする。 両側縁に直線状の刃部を作出。 一部自然面残存。
24	石庖丁	S B1002	8.4	3.4	0.9	29.2	一部欠損	結晶片岩	薄手で幅広の剝片を素材とする 一側縁に直線状の刃部を作出。
25	エンド・スクレイパー	S B1002	2.8	1.6	0.8	3.3	完形	サヌカイト	厚手の横長剝片を素材とする。 打点側を折断し器形を整える。 剝片端部に急斜度な調整加工を施し刃部を作出。
26	スクレイパー	S B1002	2.4	1.6	0.3	1.3	一部欠損	サヌカイト	薄手の横長剝片を素材とする。 縁辺に刃部を作出。
27	スクレイパー	S B1002	2.9	1.9	0.4	3.0	一部欠損	サヌカイト	薄手の横長剝片を素材とする。 全周縁に調整加工を施し刃部を作出。
28	エンド・スクレイパー	S B1002 pit Na1	2.2	3.0	0.7	3.8	一部欠損	サヌカイト	厚手の剝片を素材とする。 剝片の周縁に調整加工を施す。
29	スクレイパー	S B1002	2.2	3.6	0.5	3.9	一部欠損	サヌカイト	薄手の横長剝片を素材とする。 端部に鋸歯状の刃部を作出。
30	楔形石器	S B1002	2.8	2.1	0.8	4.2	完形	サヌカイト	両極打法による剝片剝離。 厚手の剝片の両端を折断し器形を整える。 縦断面形は凸レンズ状を呈する。
31	U-フレーク	S B1002	3.5	5.1	1.2	13.9	完形	サヌカイト	厚手の横長剝片（旧石器）。 端部に使用痕がみられる。
32	磨製太形蛤刃石斧	S B1002	9.3	8.0	4.4	410	基部欠損	砂質片岩	厚手の礫を素材とする。 両面を研磨し刃部を作出。
33	磨製石斧	S B1002	15.0	6.6	3.2	640	刃部欠損	結晶片岩	扁平な楕円礫を素材とする。 全面長軸方向に研磨。 一部敲打痕が残存。 叩き石としても使用された可能性あり。
34	磨石	S B1002	17.0	8.1	5.1	790	完形	砂岩	扁平な楕円礫を使用。 ほぼ全面に長軸方向に擦痕がみられる。 礫の正面および両側面には叩き石としても使用したと思われる激しい敲打痕がみられる。
35	砥石	S B1002	13.6	13.5	4.2	850	一部欠損	砂岩	扁平な自然礫を使用。 表裏面とも研磨の使用痕による直径2～3cmの窪みがみられる。
41	石庖丁	S K1002	9.4	4.6	1.2	79.3	一部欠損	結晶片岩	片岩の円礫を分割して生じた剝片を素材とする。 一側縁に直線状の刃部を作出。 自然面残存。
42	石庖丁	S K1002	5.7	4.1	1.0	34.9	半分欠損	結晶片岩	幅広の剝片を素材とする。 両側縁に直線状の刃部を作出。
43	石庖丁	S K1002	7.2	2.3	0.6	17.3	一部欠損	結晶片岩	薄手の剝片を素材とする。 一側縁に刃部を作出。
44	磨製不明石器	S K1002	9.1	1.9	0.9	16.6	完形	結晶片岩	器形は槍先状を呈する。 器体の2/3に調整加工が施され、細身に仕上げられている。 先端部研磨。 一部自然面残存。
45	石庖丁	遺物包含層 (2層)	13.6	6.4	1.4	160	完形	結晶片岩	大形で薄手の剝片を素材とする。 剝片の端部を折断し器形を整える。 両側縁に直線状の刃部を作出。 一部自然面残存。
46	石庖丁	遺物包含層 (2層)	6.7	2.8	0.8	24.8	半分欠損	結晶片岩	薄手の剝片を素材とする。 一側縁に直線状の刃部を作出。自然面残存。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
47	石鏃	遺物包含層 (2層)	3.6	1.4	0.7	3.3	先端部一部 欠損	サヌカイト	無茎の平基。 厚手の剥片を素材とする。 両面押圧剥離による調整加工。 細身の木葉形を呈する。 横断面形は凸レンズ状を呈する。
48	石鏃	遺物包含層 (2層)	2.5	1.5	0.3	1.3	先端部および 基部欠損	サヌカイト	薄手の横長剥片を素材とする。 縁辺に細かな押圧剥離による調整加工。 横断面形は扁平な凸レンズ状を呈する。
49	石鏃 (未製品)	I-9 遺物包含層	2.7	2.5	0.6	3.4	下半部欠損	サヌカイト	横長剥片を素材とする。 一側縁に押圧剥離による調整加工。 一部自然面残存。
50	石錐	遺物包含層 (2層)	3.9	2.9	0.6	7.1	先端部一部欠 損。	サヌカイト	横長剥片を素材とする。 剥片の縁辺を抉るように調整加工を施し、刃部を 作出。
51	R-フレー ク	G-8 遺物包含層 (2層)	3.6	1.7	0.5	2.1	完形	サヌカイト	横長剥片を素材とする。 一部に調整加工を施す。
52	R-フレー ク	I-9 遺物包含層 (2層)	2.0	1.2	0.7	1.8	完形	サヌカイト	一部に調整加工を施す。 風化著しく旧石器の可能性あり。



調査区遠景 (1. 赤坂遺跡 (I) 2. 赤坂遺跡 (II) 3. 赤坂遺跡 (III)) (南より)



赤坂遺跡 (I) 調査前風景



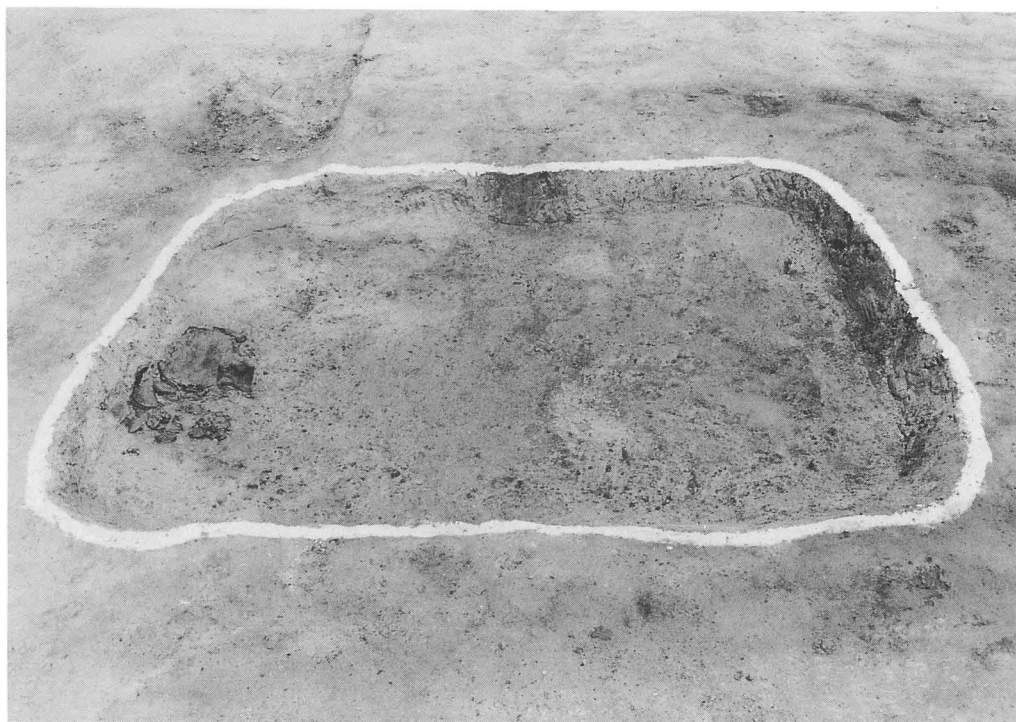
赤坂遺跡（Ⅱ）調査前風景



赤坂遺跡（Ⅲ）調査前風景

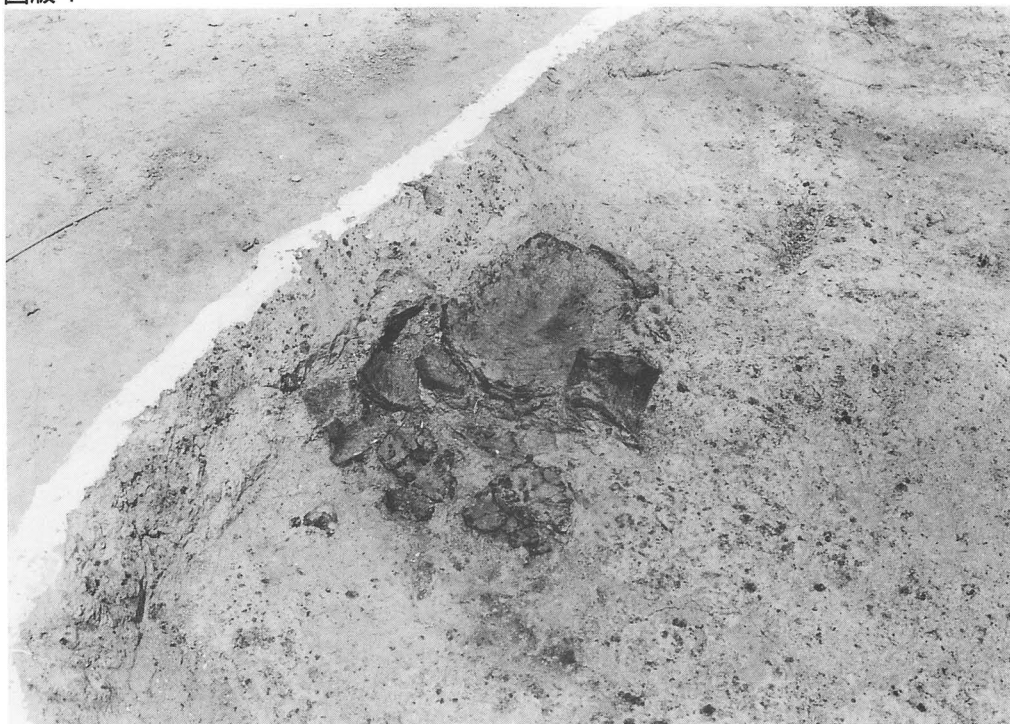


赤坂遺跡（Ⅰ）遺構検出状況全景



S K 1001全景

図版 4



S K 1001遺物出土状況



S K 1003全景



S K 1003遺物出土状況



S K 1005全景

図版 6



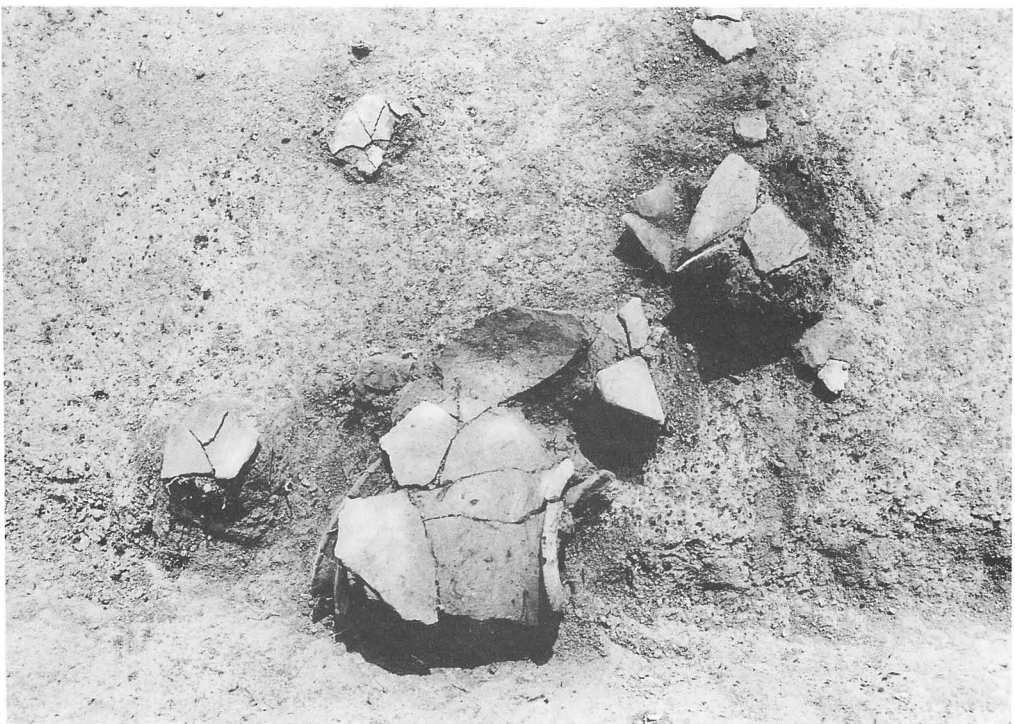
S K 1007全景



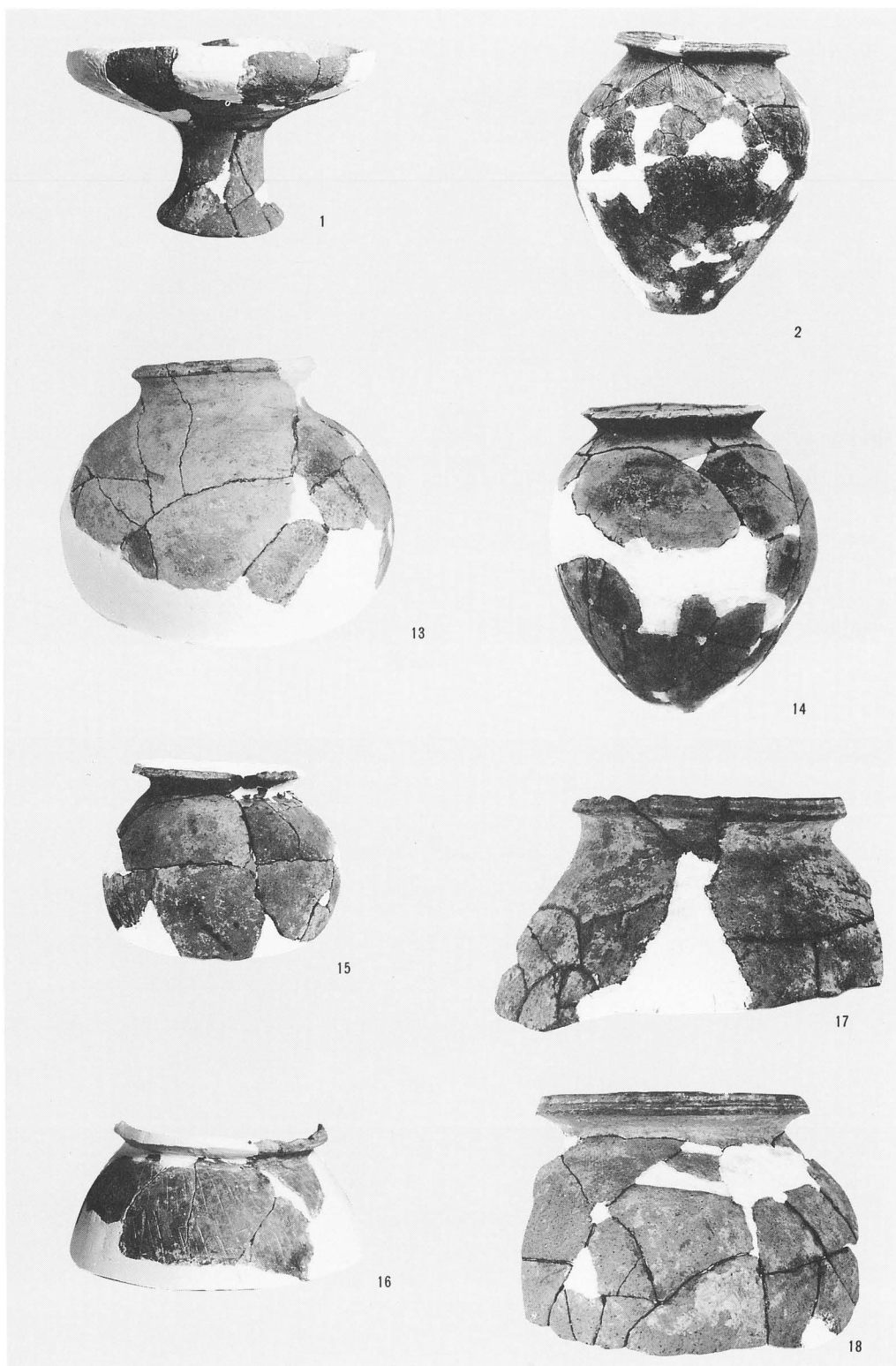
S K 1007遺物出土状況



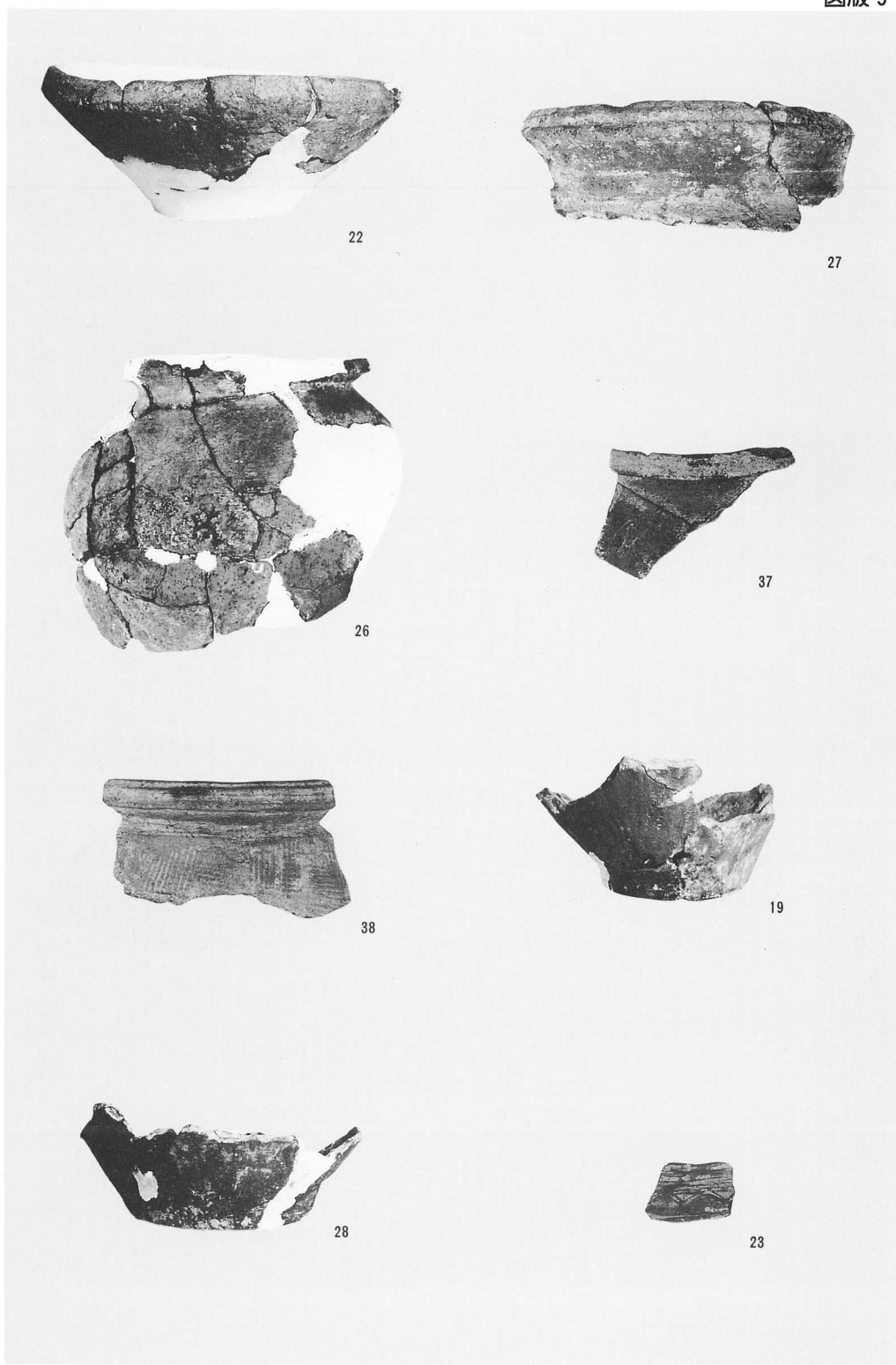
S K 1008全景



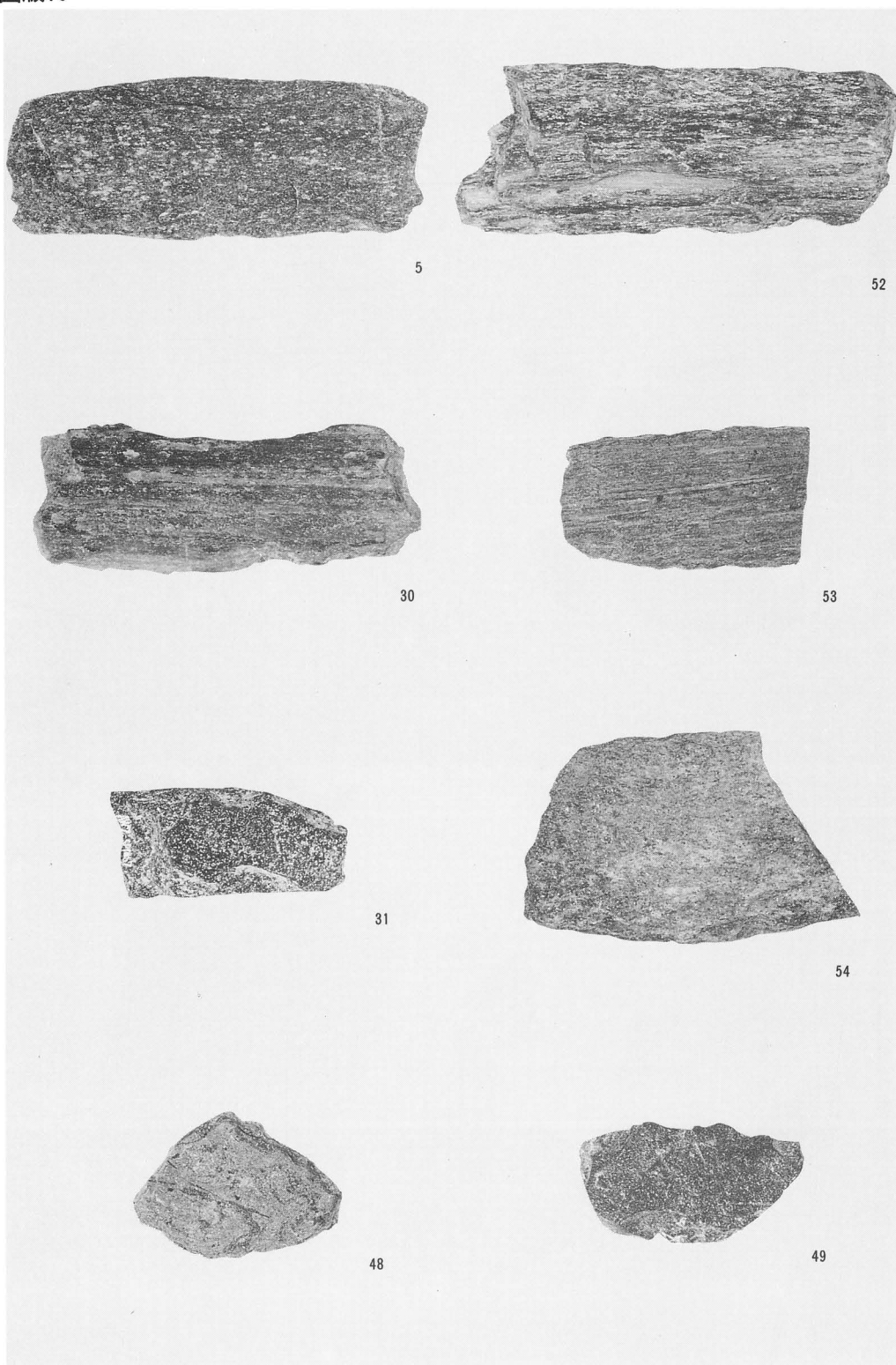
S K 1008遺物出土状況



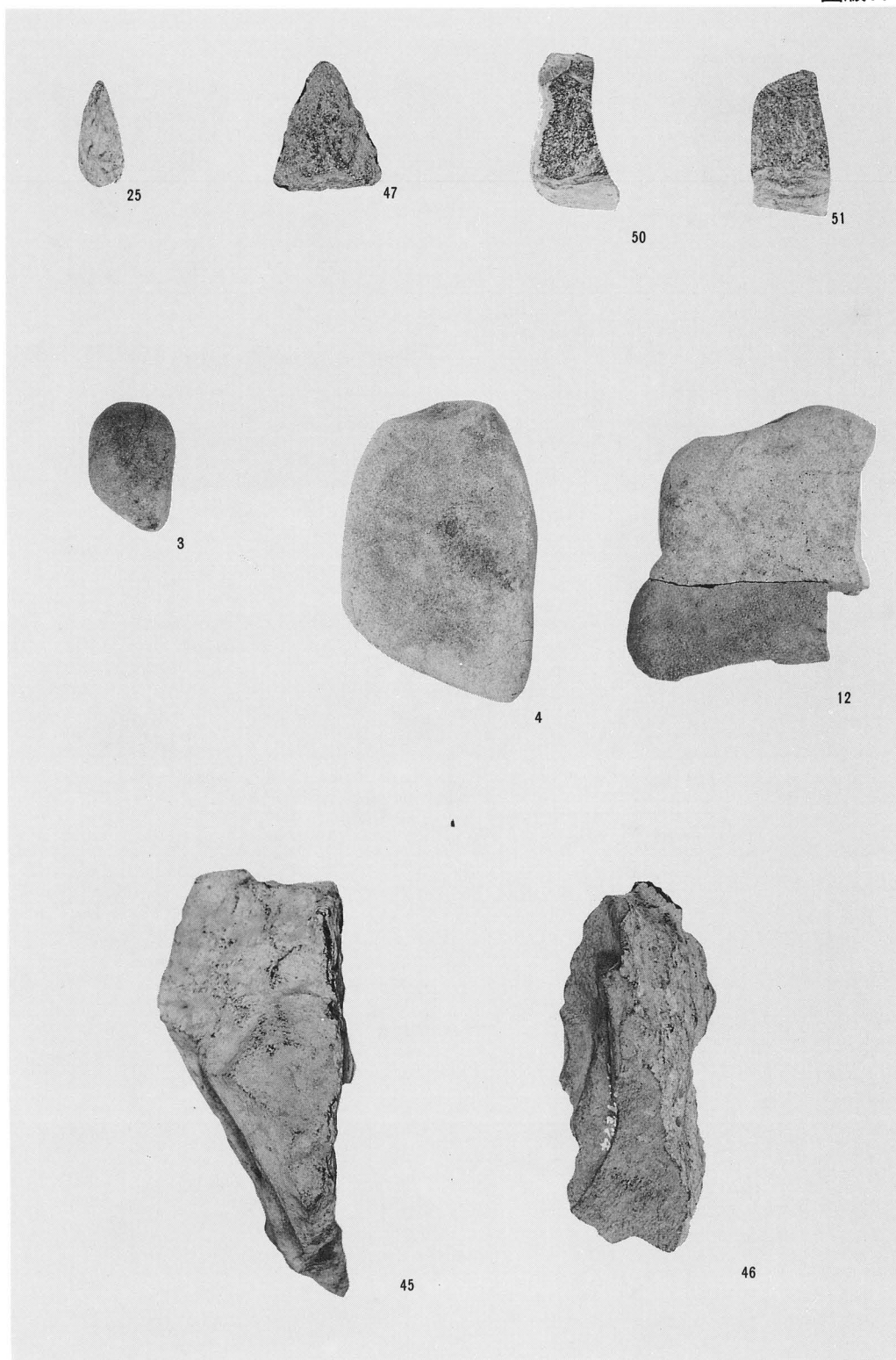
出土遺物 (1)



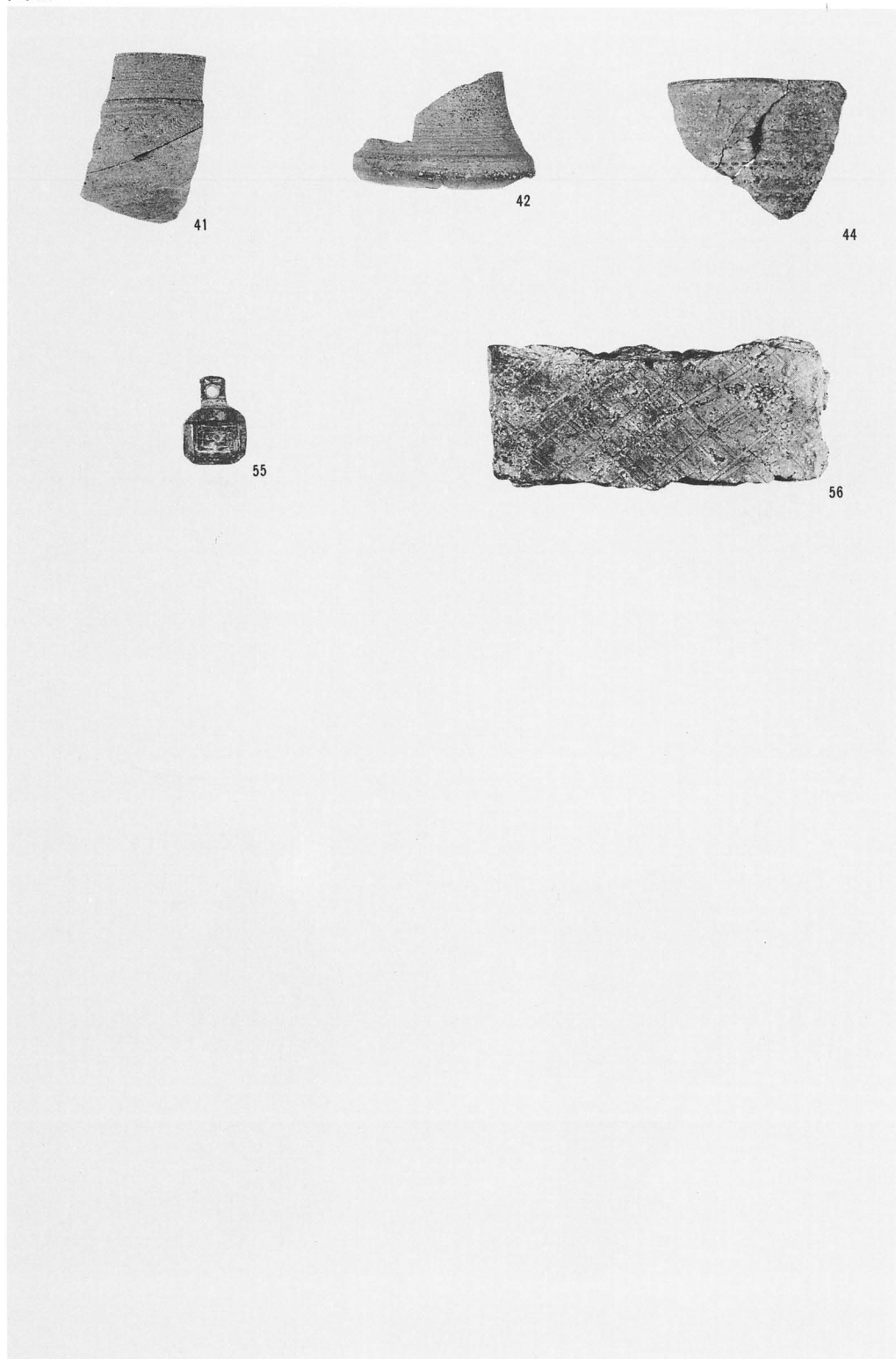
出土遺物 (2)



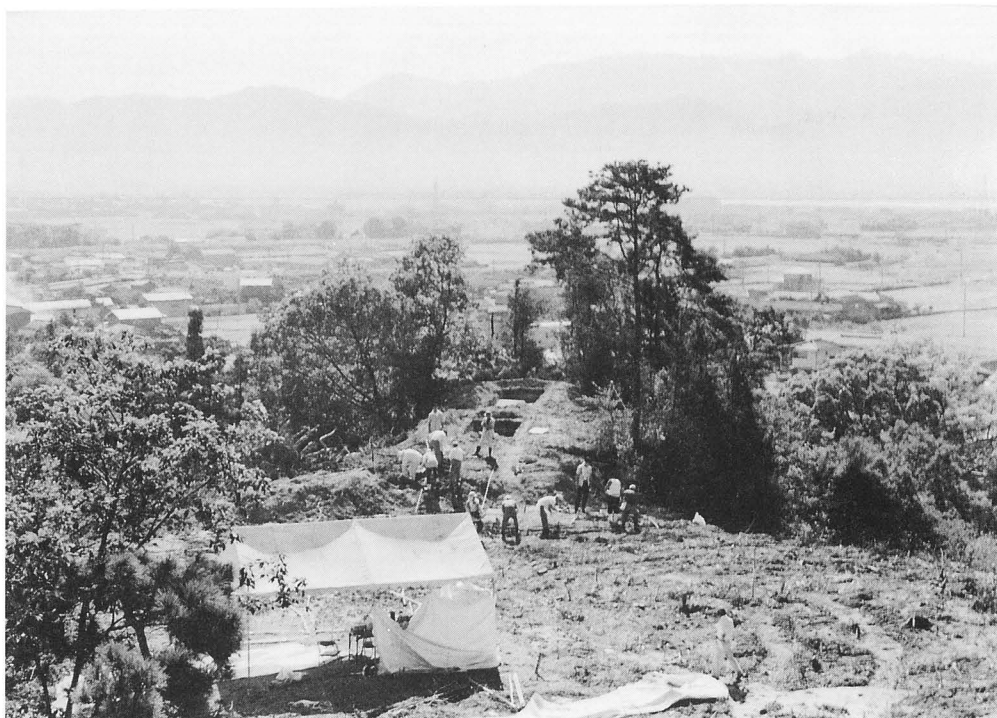
出土遺物 (3)



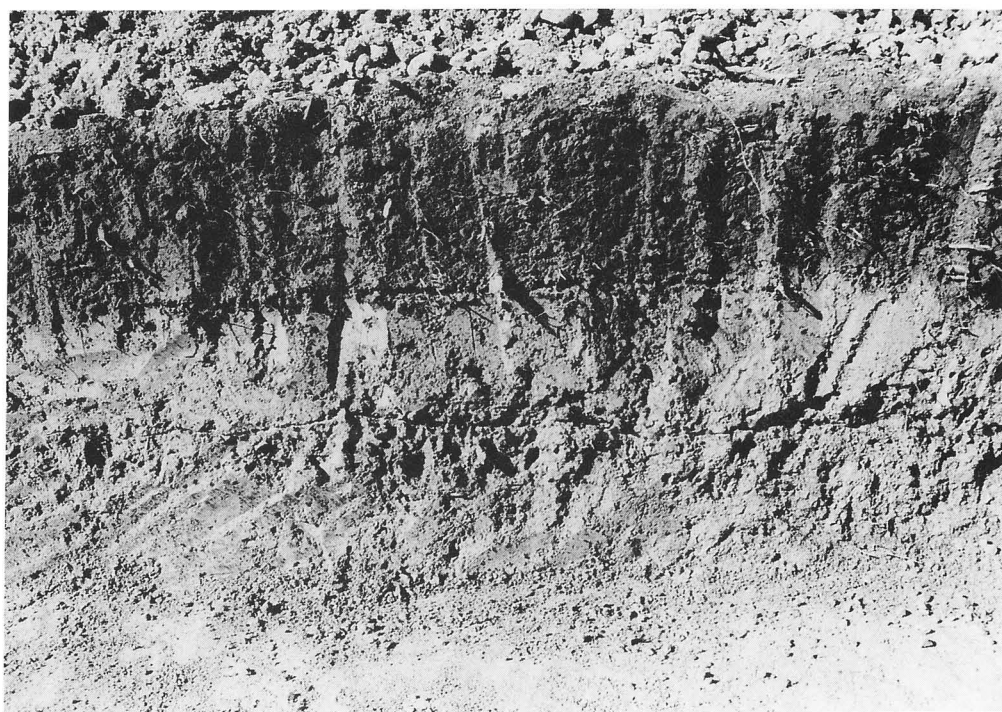
出土遺物 (4)



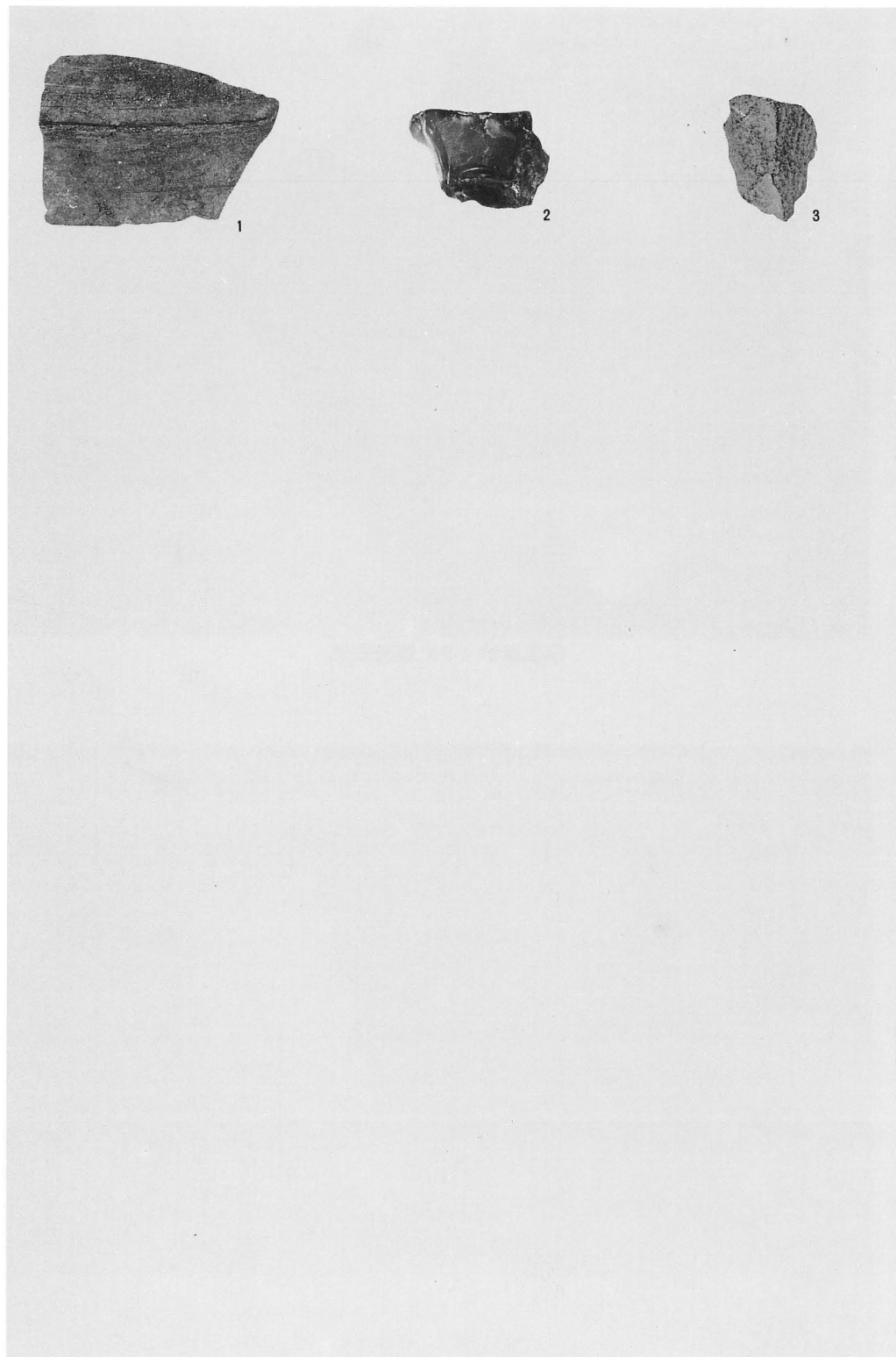
出土遺物 (5)



赤坂遺跡（Ⅱ）調査風景



土層推積状況



出土遺物



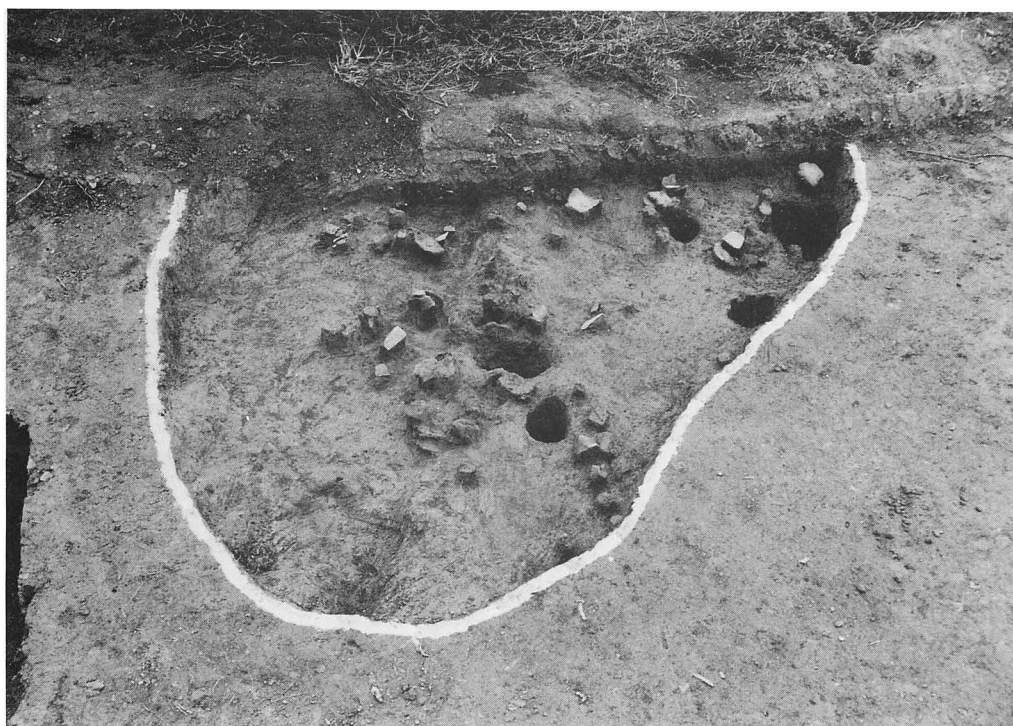
赤坂遺跡（Ⅲ）遺構検出状況全景



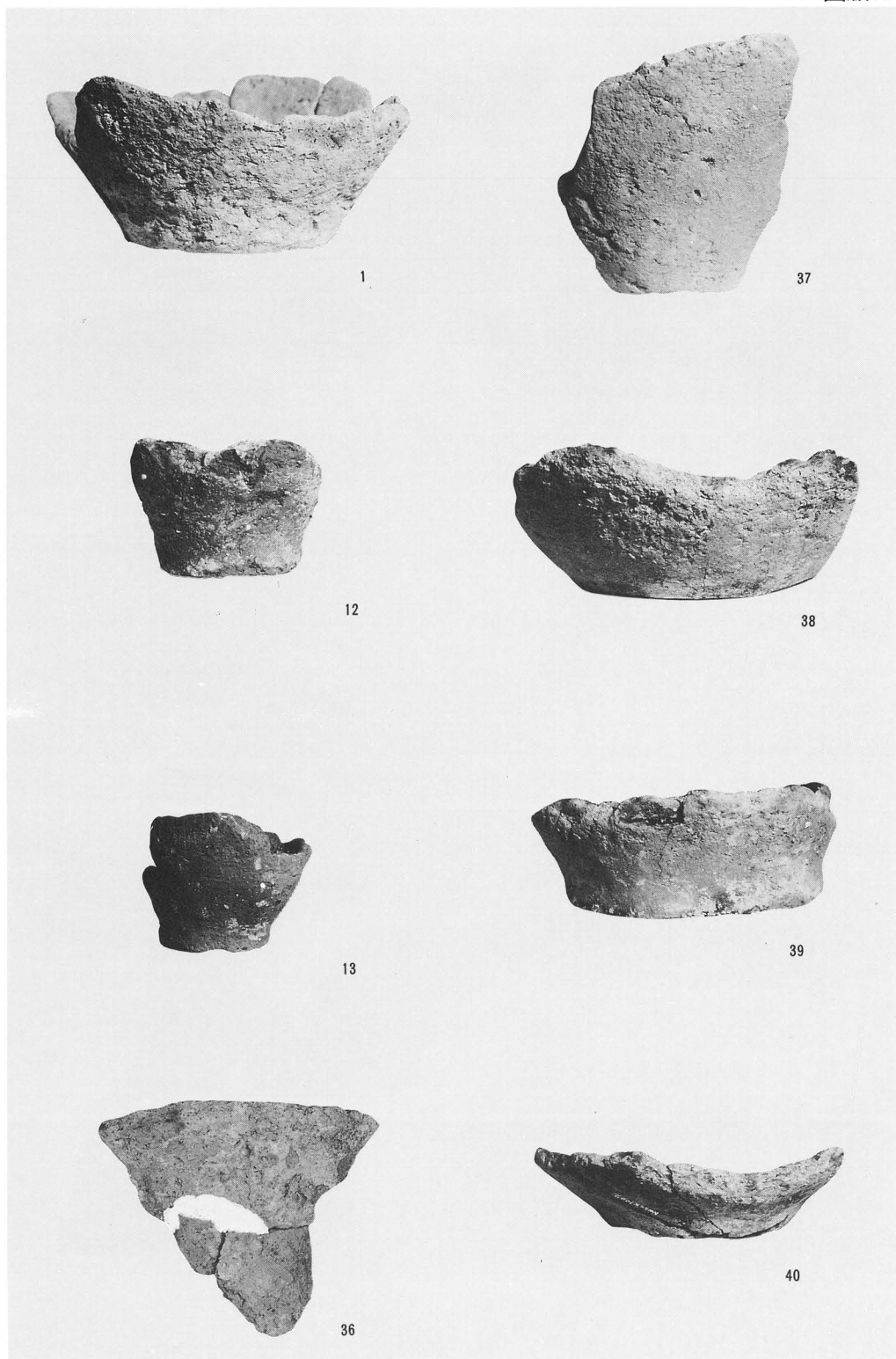
S B 1001全景



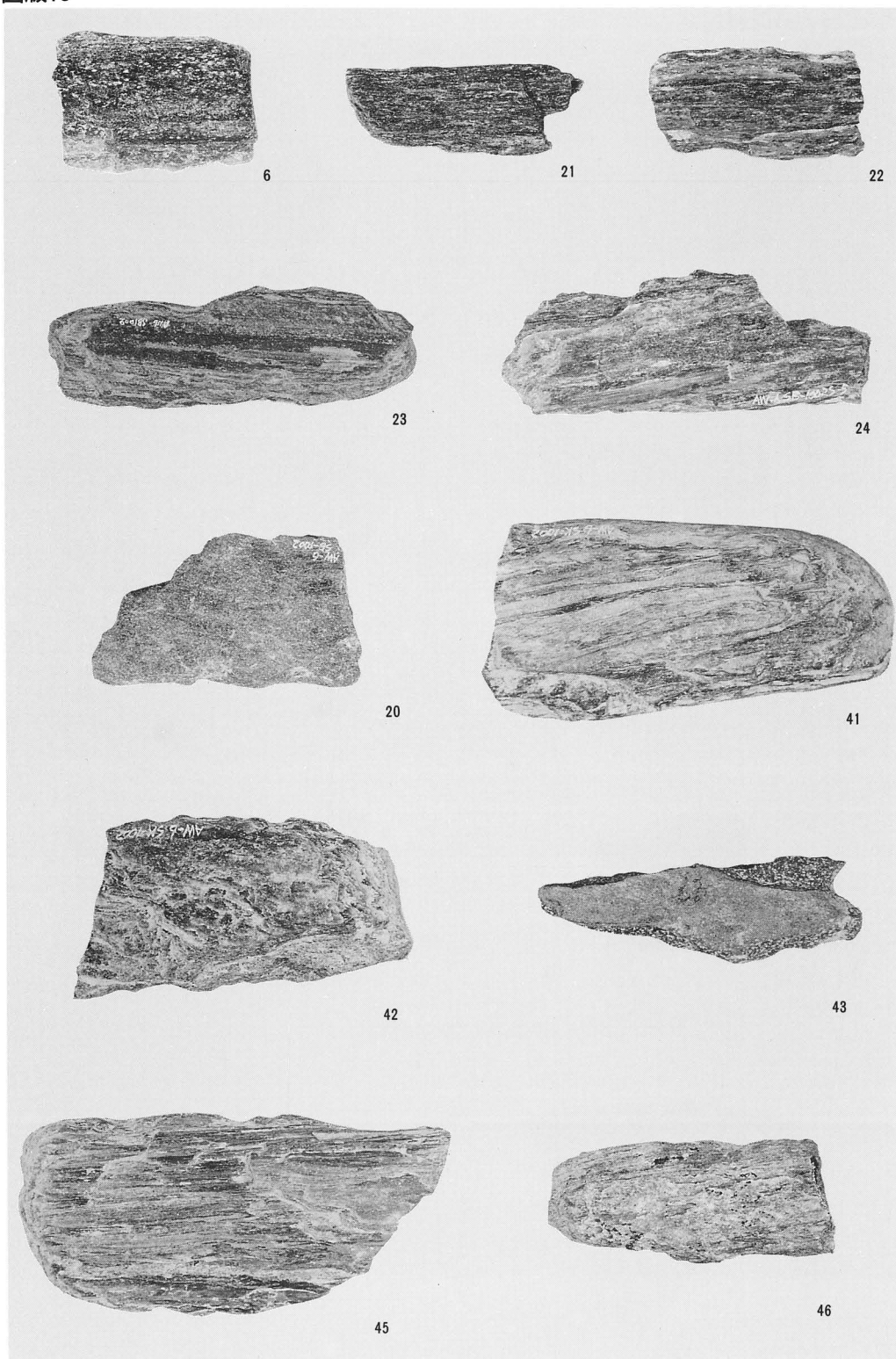
S B 1002全景



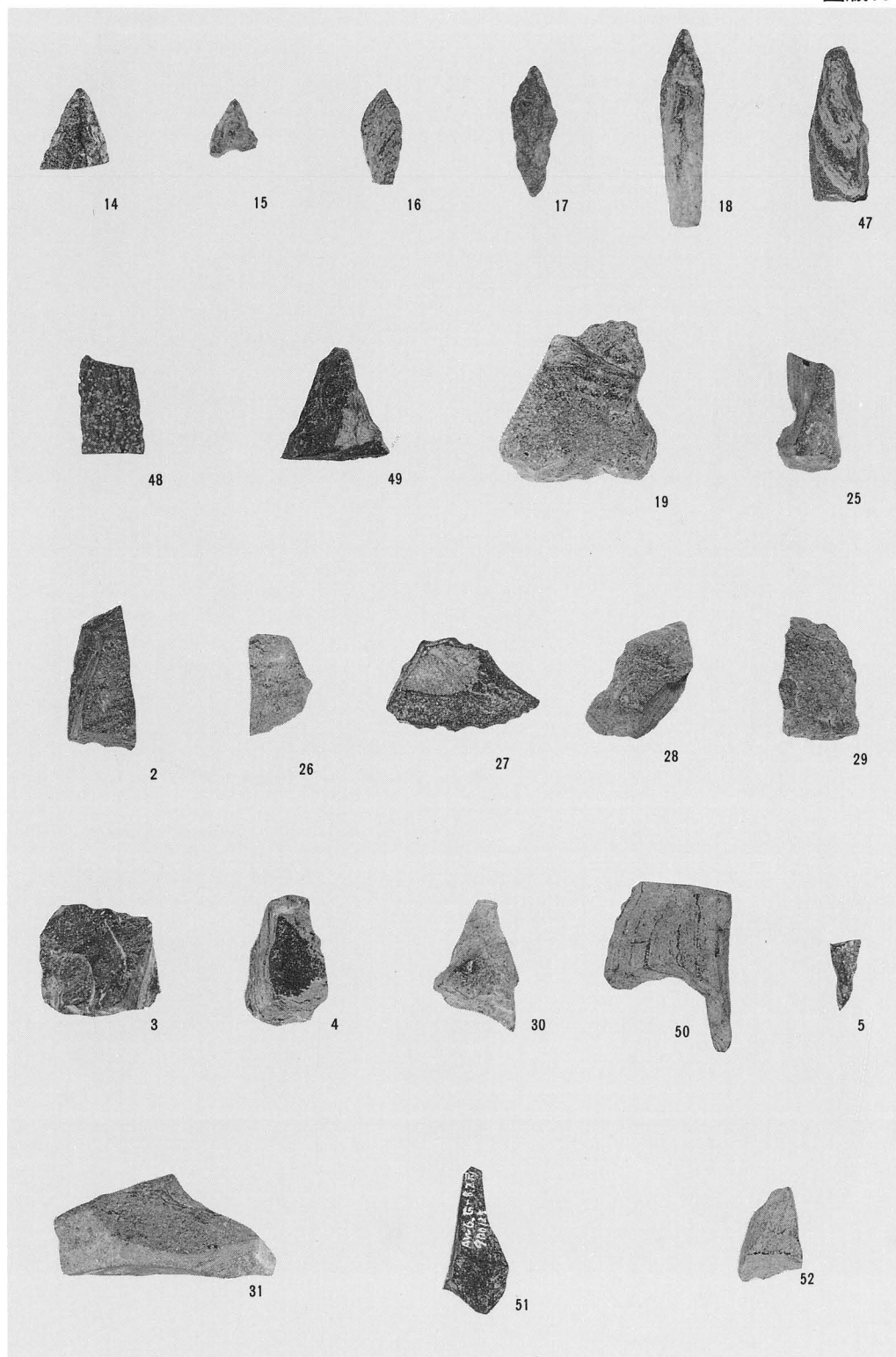
S K 1002全景



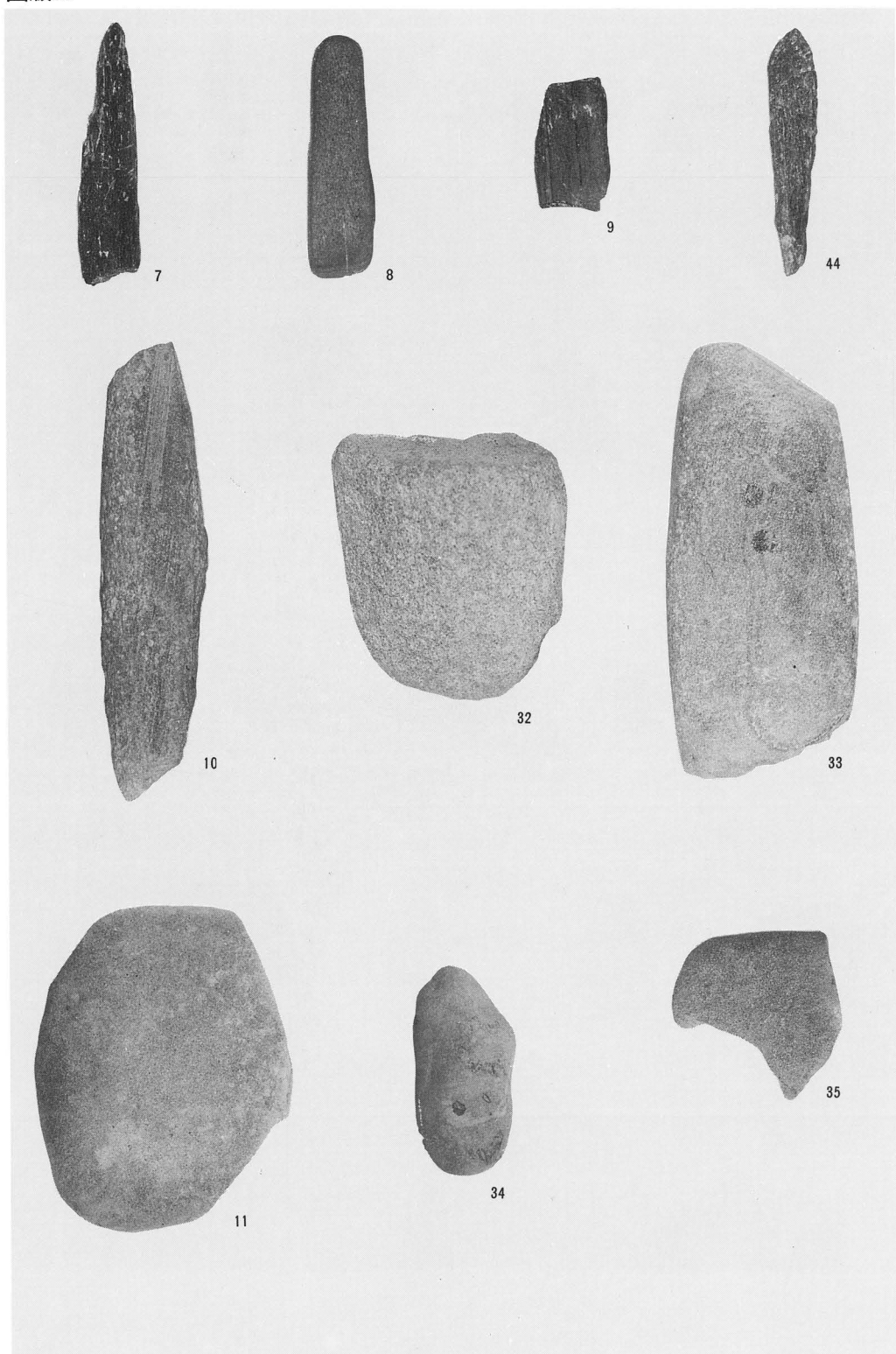
出土遺物 (1)



出土遺物 (2)



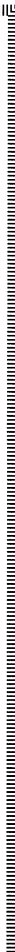
出土遺物 (3)



出土遺物 (4)



Ⅲ 金蔵～上井遺跡



- 1 本章は四国縦貫自動車道建設に伴う金蔵～上井遺跡の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次のとおりである。

調査期間 平成元年 8 月 1 日～10月16日

整理期間 平成 4 年 4 月 1 日～平成 5 年 3 月31日
- 3 遺物番号、挿図番号はすべて通し番号とした。
- 4 第 2 図の地形図は建設省国土地理院登録の 1 / 25, 000 の地形図 「市場」を転載したものである。

遺跡抄録

遺 跡 名	金蔵～上井遺跡
読 み	こんぞう～うわえ
所 在 地	板野郡土成町浦池字金蔵～上井1575他
種 別	散布地
時 代	旧石器・縄文・弥生・古代・中世
主な遺構	土坑・溝・炭窯
主な遺物	旧石器・縄文石器・弥生土器・石器・土師器・須恵器・陶磁器

1 調査の経過

(1) 調査の経過

金蔵～上井遺跡は、分布調査によって7,620㎡が試掘の調査対象面積としてあげられていた。試掘は、対象地域内に25箇所の試掘坑を設け、1990年6月1日から20日にかけて実施された。この結果、本調査の面積を2,530㎡に決定し7月14日入札、8月1日より本調査を開始し、10月16日調査を終了した。

(2) 発掘調査の方法

調査の基準となるグリッドの位置は、発掘調査統一基準にならい第4系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドの大きさとして調査区を覆い、南西の隅を基準として北にはアルファベット、東にはアラビア数字を記号として順にふりグリッド名とした。またこれとは別に、3カ所に分散している調査区に北からABCの記号つけて地区名とした(第1図)。

(3) 調査日誌抄

1989年		査にはいる。
8月3日	発掘調査開始。機械掘削による A地区の表土除去作業終了。	9月5日 C地区の遺構検出作業を終了。 遺構検出状況の写真撮のため、 午前中で作業中止。
8月4日	B地区の表土除去開始。	9月9日 B地区の遺構掘り下げ作業を終了。
8月7日	A地区の遺構面精査開始。B地区の表土除去終了。	9月12日 C地区の遺構掘り下げ作業を終了。空撮のため清掃とライン引きの作業にはいる。
8月10日	A地区の精査終了。B地区の人力掘削開始。	9月13日 今日、第一遺構面の空撮を予定していたが雨天のため中止。16日に延期する。
8月11日	A地区の写真撮影。	9月16日 第一遺構面の空撮と、遺構の完掘状況写真の撮影を終了。
8月18日	A地区の土層図作成開始。B地区の遺構面精査を開始。	9月18日 B・C地区の人力掘削作業を再開。第一遺構面下のシルト層から弥生土器が出土し始める。
8月22日	B地区の遺構検出作業終了。C地区の人力掘削開始。	
8月24日	B地区の遺構検出状況写真を撮影後、遺構の掘り下げを開始。	
8月29日	C地区の人力掘削終了。すぐ精	

9月21日 B地区の土層図作製を開始。

9月23日 B・C地区の弥生時代の遺物包含層の掘り下げを継続。

9月27日 B・C地区の弥生時代の遺物包含層の掘り下げを終了。

9月28日 A地区再掘削中、焼土の広がり
と弥生土器を検出。
B地区では弥生包含層下の掘削
中旧石器が出土。

9月29日 A地区の焼土溜まりの精査。B
地区の旧石器出土地点の精査。
包含層を確認する。

10月2日 B・C地区の旧石器包含層の掘
り下げ開始。

10月6日 A地区の焼土だまりの精査を終
了。土層図作製にかかる。
B地区の一角で弥生時代の遺構
を検出。

10月7日 A地区の調査を終了。

10月9日 C地区の土層図作製。

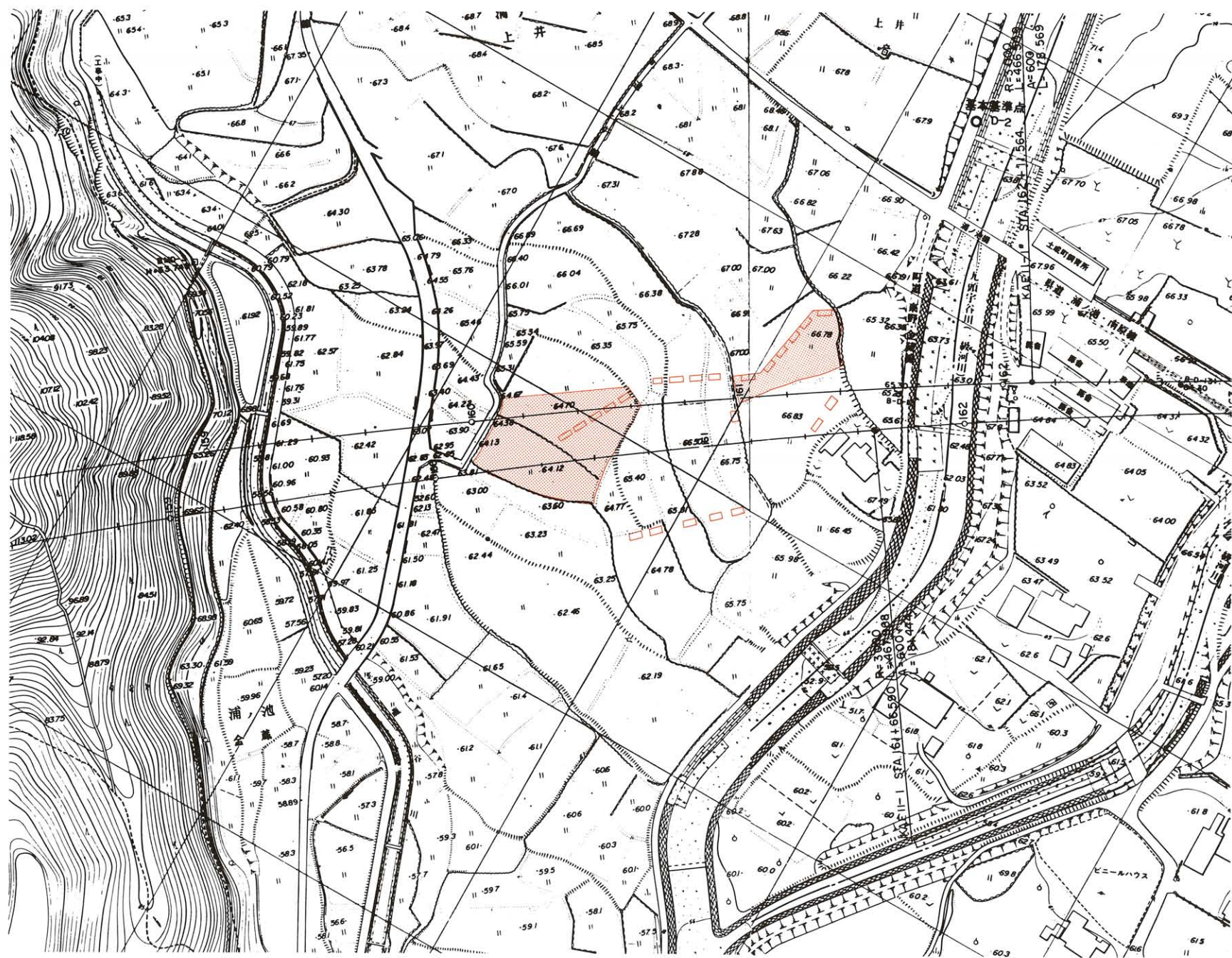
10月12日 B地区の弥生時代の遺構掘り下
げを終了。図化作業と写真撮影。

10月13日 C地区で石核出土。B・C地区
の旧石器の包含層の掘り下げを
完了。

10月16日 土層図の追加事項の記載を終え
調査終了。



写真1 試掘調査風景



第1図 調査地位置図

本調査区

試掘トレンチ

0 100 m

2 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

本遺跡は、阿讃山脈南麓を流れる九頭宇谷川によって形成された扇状地上に位置する遺跡である。北と南をそれぞれ阿讃山脈と吉野川に挟まれ、東を宮川内谷川、西を切幡丘陵によって区切られたこの地域では、九頭宇谷川をはじめ、檜原谷川、鈴川谷川、宮川内谷川の各河川がそれぞれ扇状地を形成しているが、それらは合流して県下最大の合流扇状地を形造るとともに、宮川内扇状地は御所神社付近で段丘面を作出している。また、おなじ合流扇状地上には、四国を東西に横切る中央構造線の影響によって引き起こされたと考えられている北池から浦池の間にのびる地溝状地や、御所神社から土成中学校の間に見られる断層崖など特異な地形が存在している。

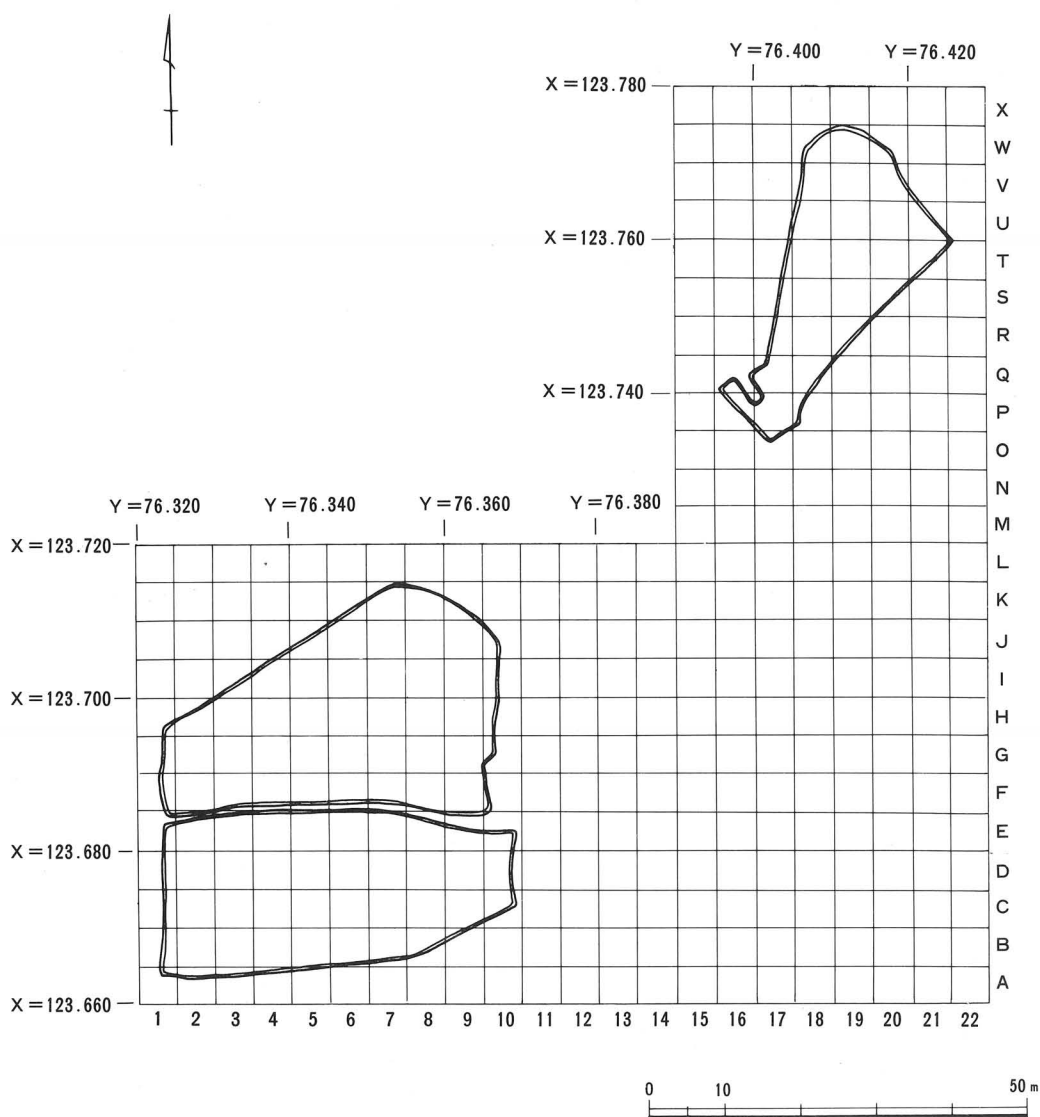
(2) 歴史的環境

本遺跡の位置する九頭宇谷川と東を流れる宮川内川によって形成された広大な土成の扇状地上には、前田遺跡をはじめとして、北原遺跡、大木峰延遺跡などの遺跡が点在している。これらは主に弥生時代中期から後期にかけての時期を中心とする遺跡であるが、その他にも、旧石器が前田遺跡から、縄文土器や平安から鎌倉時代にかけて



第2図 金蔵～上井遺跡周辺主要遺跡分布図

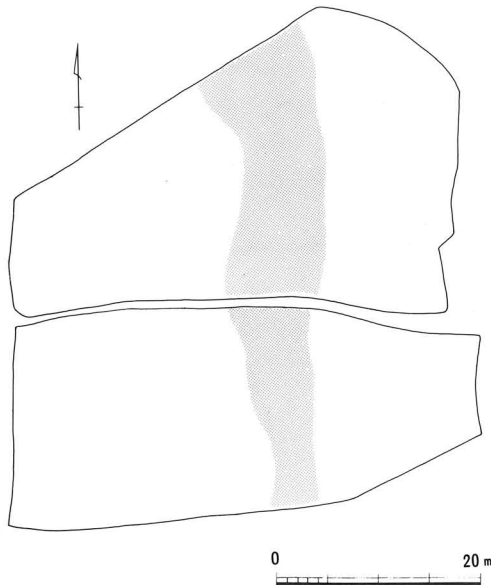
ての掘立柱建物群が前田、大木峰延の両遺跡で検出されている。この扇状地の扇央部から扇端部近くにかけては姫塚古墳、遊塚古墳、穴薬師古墳等の古墳が築かれ、背後の段丘上には県下有数の旧石器の散布地である椎ヶ丸遺跡が位置している。また、遺跡のすぐ北側には、平安時代に山田古嗣によって築かれたと伝えられる浦池が位置し、西側の切幡丘陵にはかつて赤田山古墳が存在していた事が知られている他、旧石器時代の遺跡として金地遺跡が報告されている。



第3図 グリッド配置図

3 調査成果

(1) 基本層序



第4図 B・C地区内低湿地分布範囲略図

調査区の設定されたA・B・Cの各地点は、先述したようにいずれも扇状地上に位置しているが、九頭宇谷川に面したA地区と、それより50m南西の緩斜面上に設定されたB・C地区では、堆積の状況が若干異なっている。A地区の場合、1層から10層までの水田土壌下に11層以下の礫混じりのシルトが堆積しているが、部分的に水田土壌直下に泥岩または砂岩の岩盤が露出する地点がある。これは扇状地の下に埋没している中央構造線の一部が部分的に地表近くにまで持ち上がってきたものだと考えられる。

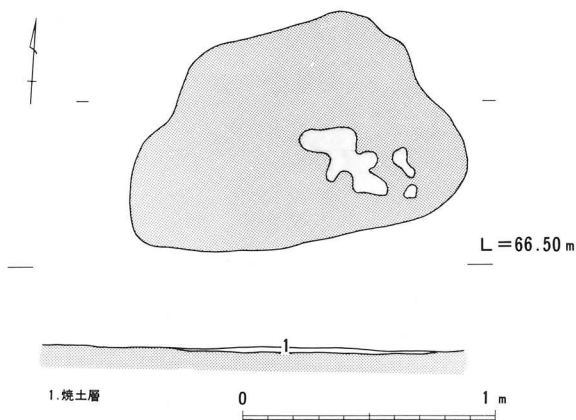
これに対して、B・C地区では、それぞれ1層から8層までの水田土壌の堆積の下に何枚かのシルト層が見られたが、岩盤の存在は認められなかった。ここでは記述が煩雑になることを避けるため、B地区の層序を用いて説明を行うが、B地区とC地区のシルト層の対応関係は、B地区の第14層がCの11層に、第15層が12層、第16層が14層にそれぞれ対応する。B地区の第16層は、調査区の東側から西にむかって一端下がったのち再び上がり、調査区の東側に南北に延びた浅い溝状の窪地を形成している。この窪地のなかに堆積している14層は弥生時代の遺物包含層であるが、層中に葦科植物の根の痕跡が点在しており、当時は湿地であったと考えられる。これは14層と16層の間に見られる薄い粘土層が水を透し難かったためと考えられる。また、16層の上に堆積している15層からは、旧石器時代の遺物が少数ながらまとまって出土しているが、同じ層の上部からは縄文時代の遺物が僅かながら検出されており、旧石器時代から縄文時代にかけての遺物包含層と考えられる。

(2) 遺構と遺物

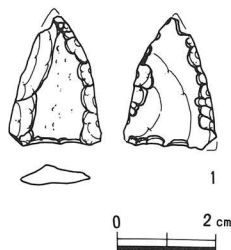
A地区

性格不明遺構 S X1001 (第5図)

調査区の北東側の九頭宇谷川に面した緩斜面上で検出された遺構で、東西1.3m、南北1.9mの範囲に焼土の広がりが出た。焼土は部分的にかなりの厚みをもっているものの全体的に薄く、掘り込みの痕跡などは認められなかった。この焼土に伴ってサヌカイト製の打製石鏃(第6図)が1点出土している他、周辺からは二次加熱を受けてぼろぼろになった少量の弥生土器の破片が出土している。出土した土器の残りが悪く正確な年代は明らかではないが、弥生時代に属することはまちがいないものと考えられる。



第5図 A地区 S X1001実測図

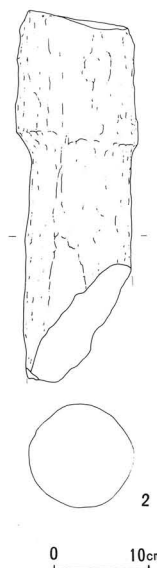


第6図 S X1001出土石鏃実測図

包含層出土の遺物

石棒 (第7図)

S X1001と同じ北東の緩斜面部の水田土壌直下から単独で出土したもので、周辺には遺構の痕跡らしきものはなら確認することはできなかった。石棒の大きさは、長さ39cm、胴部の最大径11cmを計り、緑色片岩製で全面に敲打痕が残されているが研磨は行われていない。素材は大形の転石が用いられているらしく、部分的に自然面がのこされている。



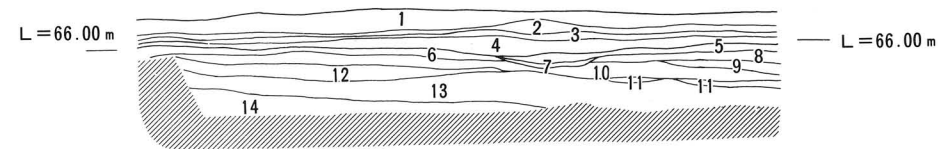
B・C地区

①第1遺構面の遺構と遺物

水田土壌直下の第9層上面で検出された遺構である。

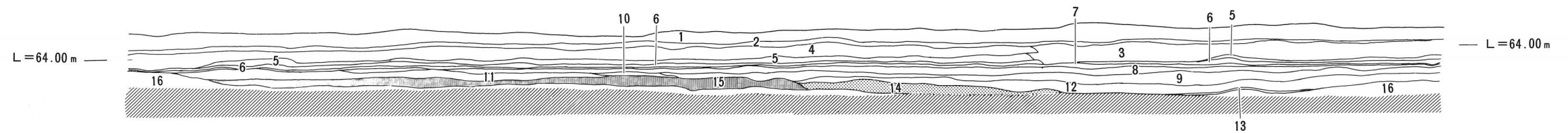
溝 (S D1001) (第10図)

B・Cの調査区西側をほぼ北から南に向かって走る遺構で、第7図 A地区出土石棒実測図



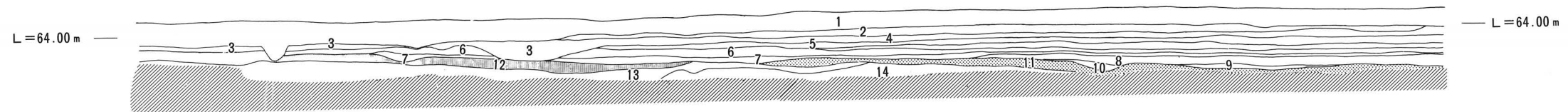
A 地区北西壁土層図

1. 暗灰黄色シルト層 2.5 Y 4/2
2. 明黄褐色シルト層 2.5 Y 6/6
3. 灰白色シルト層 5 Y 7/2
4. 黄褐色シルト層 2.5 Y 5/4
5. 灰黄色シルト層 2.5 Y 6/2
6. 黄褐色シルト層 2.5 Y 5/3
7. 灰黄色シルト層 2.5 Y 6/2
8. 浅黄色シルト



B 地区南壁土層図

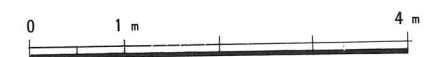
1. 暗灰黄シルト層 2.5 Y 4/2
2. 黄褐色シルト層 10 Y R 5/8
3. 黄褐色シルト層 10 Y R 5/8
4. 黄褐色シルト層 2.5 Y 5/4
5. 暗灰黄色シルト層 2.5 Y 5/2
6. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/3
7. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/3
8. 暗灰黄色シルト層 2.5 Y 5/2
9. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/2
10. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/2
11. 浅黄色シルト層 2.5 Y 7/4
12. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/2
13. 褐灰色粘土層 10 Y R 4/1
14. 灰黄色シルト層 2.5 Y 5/2
15. 灰色シルト層 2.5 Y 7/2
16. 淡黄シルト層 2.5 Y 8/3

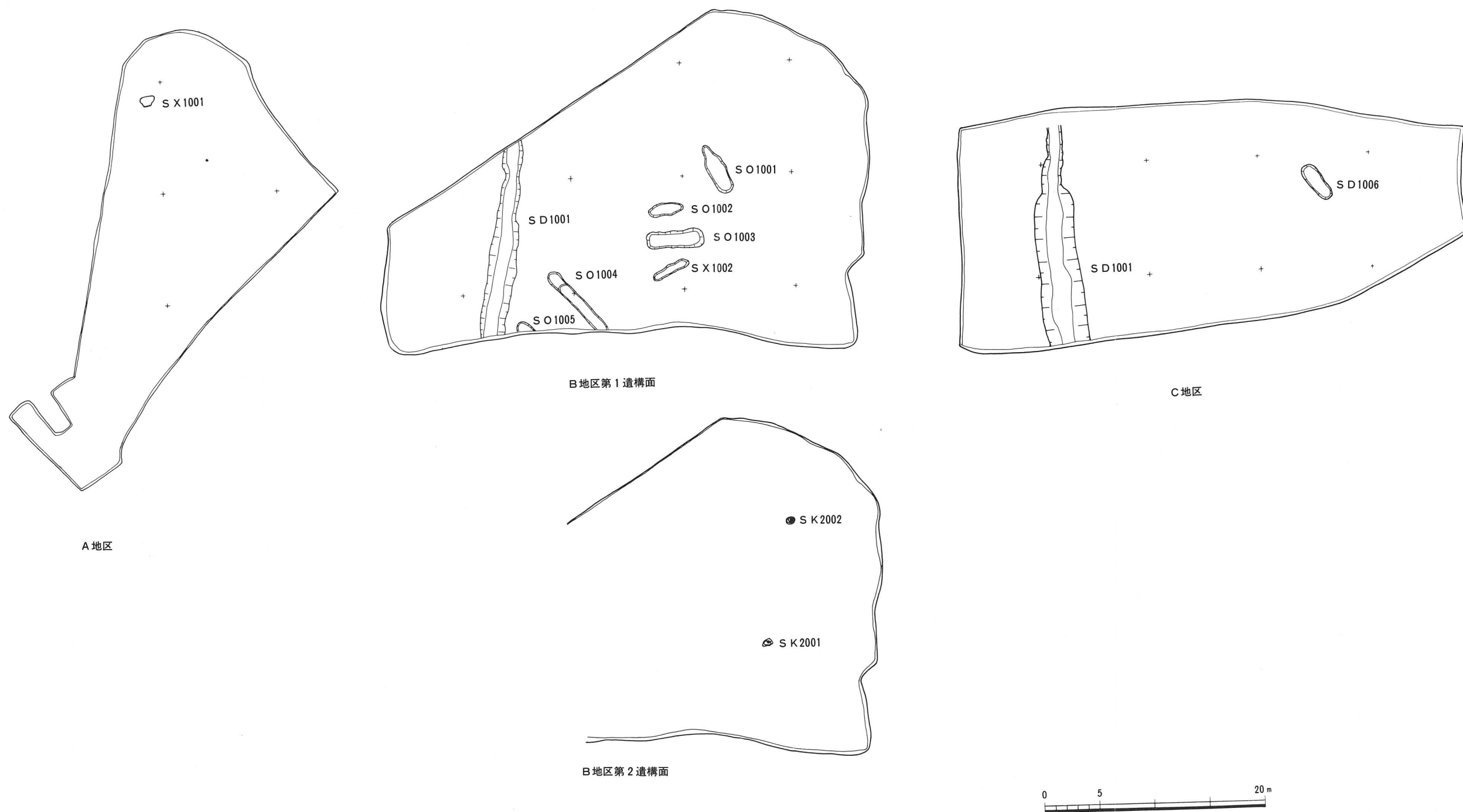


C 地区南壁土層図

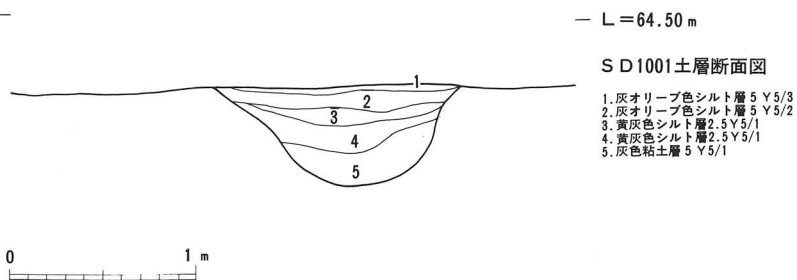
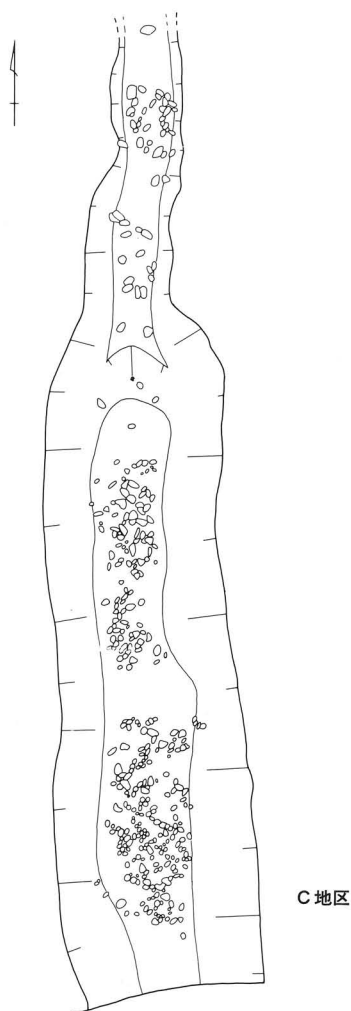
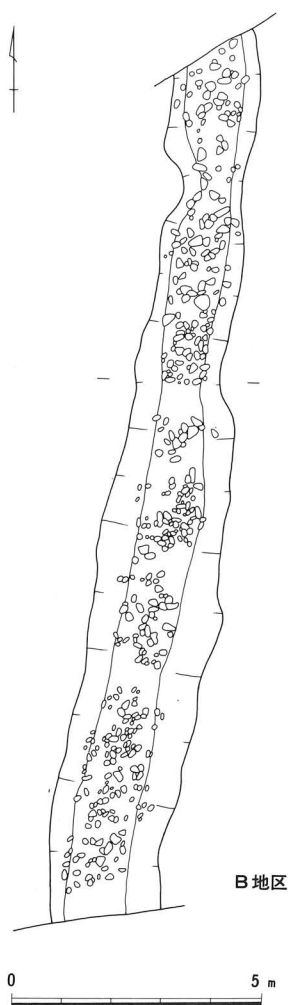
1. 暗灰色シルト層 2.5 Y 4/2
2. 黄褐色シルト層 2.5 Y 5/4
3. オリーブ褐色シルト層 2.5 Y 4/3
4. 暗灰黄色シルト層 2.5 Y 5/2
5. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/3
6. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/3
7. 灰オリーブ色シルト層 5 Y 5/3
8. 暗灰黄色シルト層 2.5 Y 5/2
9. 灰褐色粘土層 10 Y R 4/1
10. にぶい黄色シルト層 2.5 Y 6/4
11. 灰黄色シルト層 2.5 Y 6/2
12. 灰色シルト層 2.5 Y 7/2
13. 淡黄色シルト層 2.5 Y 8/3
14. 黄灰色黄灰色シルト層 2.5 Y 4/1

第8図 基本層序

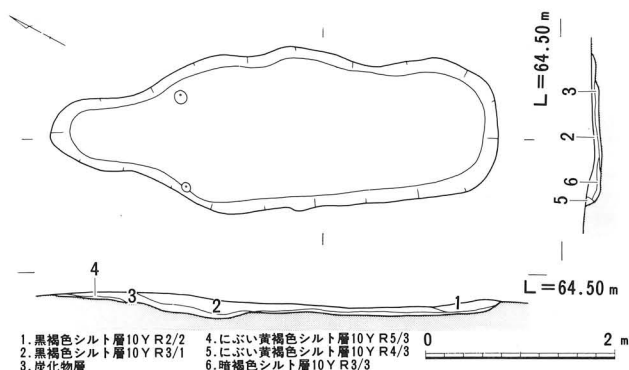




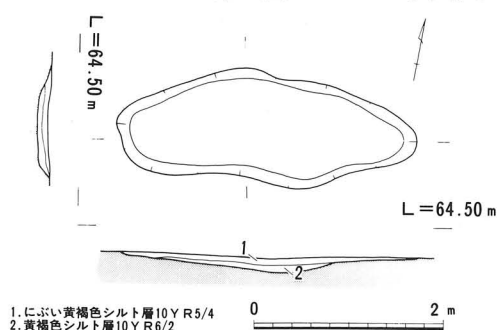
第9図 遺構配置図



第10図 SD1001実測図



第11図 SO1001実測図



第12図 SO1002実測図

幅は広い所では3.9m、狭い所では1.2mと一定せず、深さも0.9mから0.3mとまちまちである。溝の断面はU字型で底には拳大の円礫が多量に混入している。遺物は、覆土中から平安時代頃のものと考えられる土師器の杯の小片が若干出土しているだけで、遺物だけでは正確な年代はあ

きらかにはできないが、B地区C地区共最下層の水田土壌が溝の埋土の上を覆っていることから、少なくとも水田が造成された時点では溝としての機能を停止していたものと考えられる。

炭窯 (SO1001) (第11図)

長さ約4.8m、幅1.7mの炭窯の機能を持つと考えられている浅い土坑で、一端は楕円形であるが、もう一端は尖りぎみに細くなって煙道を形成し、煙道と窯本体の境の底面に一對の小孔が認められる⁽¹⁾。上部を開田の際にかなり削平されていると思われるが、側壁及び底面は焼けて焼土が溜り埋土中にも木炭片が多量に含まれている。遺物としては、器壁が厚く胎土中に砂粒を多量に含んだ粗い刷毛目調整の施された甕と考えられる土器の小片が、小量ではあるが出土している。これは、刷毛目とか胎土の特徴から、平安時代に属するものとおもわれる。

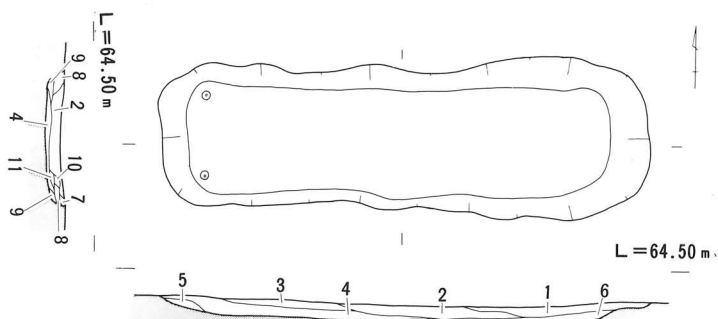
炭窯 (SO1002) (第12図)

長さ約3.2m、幅1.2mの不正楕円形で一端がやや尖りぎみの形状をした浅い土坑である。SO1001同様壁面は焼けて焼土が認められるが、埋土中に含まれる炭化物は小量で遺物の出土は認められなかった。

炭窯 (SO1003) (第13図)

隅丸方形のプランをもつ長さ約5.2m、幅1.8mの土坑で、埋土中には多量の木炭が含まれているが、その量は底近くなるほど多く、西側の縁には炭化物のブロック状の塊が認められ

た。また、側壁及び底面は著しく焼けている。S O 1001のような煙道は認められなかったが、北側の底面には1001同様一対の小孔が設けられている。



炭窯(S O 1004) (第14図)

一部がB区とC区の境に設けられたベルトにかかっているため全長は明らかではないが、長さ7 m以上、幅1.2 mの土坑で北西の縁が一段高くなりテラス状を逞し、これに接する窯本体の底面にはS O 1001、1003同様小孔が認められ

る。他の土坑同様底近くでの焼土と炭化物の混入が著しい。

炭窯 (S O 1005)

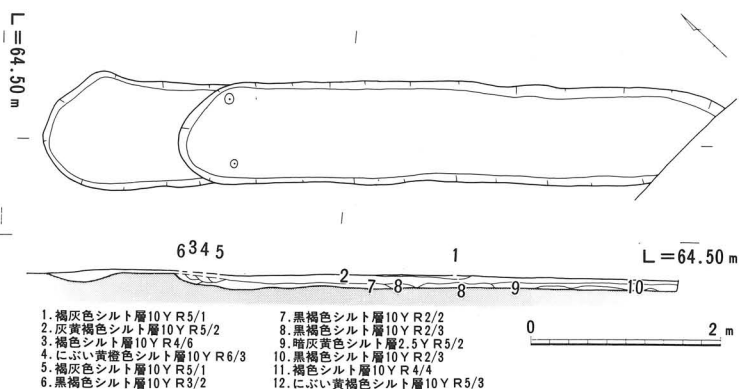
S O 1004同様、遺構の大部分がB、C区の境界のベルトにかかっているため大きさは不明であるが他の土坑と同様の性格の遺構であろう。

炭窯(S O 1006) (第15図)

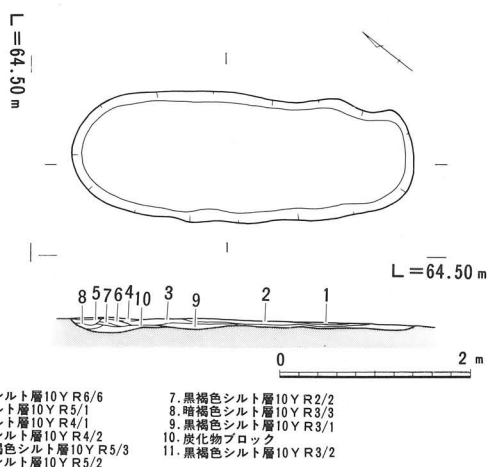
長さ3.6 m、幅1.4 mの楕円形

に近い形態の土坑で、上部を大きく削平されているが、残った埋土の中には他の土坑同様炭

第13図 S O 1003実測図



第14図 S O 1004実測図

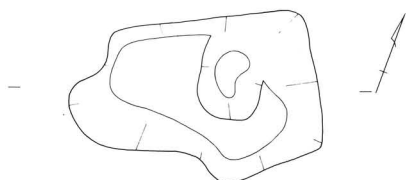


第15図 S O 1006実測図

化物と焼土の堆積が著しい。遺物の出土は認められなかった。

性格不明遺構 (S X1002)

S O1003の南側で検出された浅い不正形の長楕円形の土坑で、他の土坑と異なり埋土中に



炭化物がほとんど含まれず、焼土もほとんど認められないことから一応炭窯と区別した。遺物は出土していない。

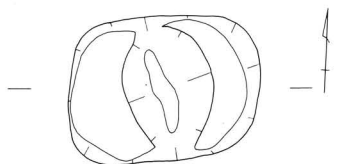
L=64.20 m ②第2遺構面の遺構と遺物



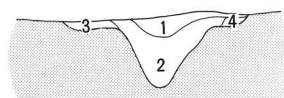
1. 黄灰色シルト層2.5Y5/1
2. 灰黄色シルト層10YR5/2
3. にぶい黄褐色シルト層10YR6/3
4. にぶい黄褐色シルト層10YR5/3



第16図 S K2001実測図



L=64.20 m



1. 黄灰色シルト層2.5Y5/1
2. 灰黄褐色シルト層10YR5/2
3. 黄灰色シルト層2.5Y5/1
4. にぶい黄褐色シルト層10YR6/3



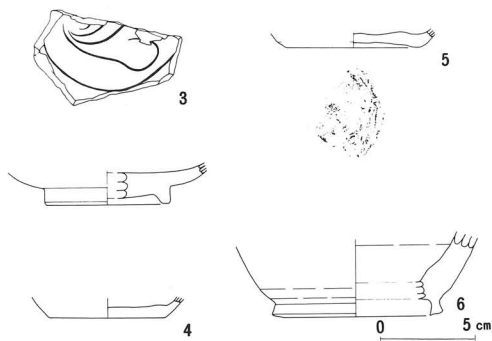
第17図 S K2002実測図

土坑 (S K2001)(第16図)

谷状低地東側の緩斜面から検出された不正形の浅い土坑で、底の一部が浅く掘り込まれている。埋土中に炭化物と焼土粒が多量に含まれている他は遺物の出土は認められなかったが、上部に堆積している第14層から出土している遺物が弥生時代以外のものが含まれないことや、隣接するS K2002から弥生土器の細片が出土していることから、弥生時代に属することは間違いないものと考えられる。

土坑 (S K2002)(第17図)

S K2001の北側で検出された長さ0.7m、幅0.6mの楕円形の土坑で、中央部にさらに一段深い掘り込みが見られる。S K2001同様に埋土中に炭化物と焼土粒が多量に含まれ、細片ではあるが弥生土器が出土している。遺構の性格は不明である。



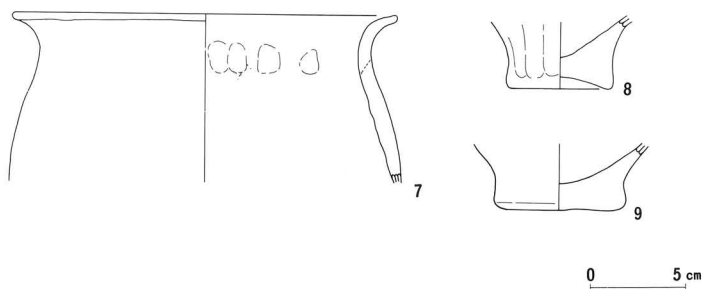
第18図 B・C地区出土古代・中世遺物実測図

③包含層出土遺物

古代・中世

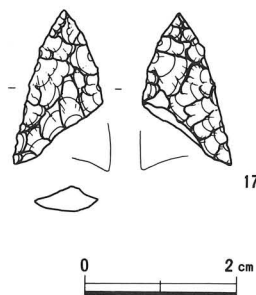
B地区の水田土壌最下層の第8層からは青磁碗と白磁皿が、また水田土壌直下の9層上面からは、底部切り放しに回転糸切り技法を用いた土師器の杯の破片と、須恵器の長頸壺の底部の破片が出土している（第18図）。青磁碗3は高台まで施釉されているが、畳付きと高台内部は露胎で、内面見込み部には片切り彫りによる幾何学文が描かれている。白磁皿4はい

わゆる口禿とよばれているタイプである。これらは何れも13世紀後半から14世紀前半に多く出土するものである。また、9層から出土した回転糸切り技法を用いた土師器の杯5は、回転糸切り技法が12世紀代に出現して13世紀に最も盛行する技法であると考えられること



第19図 B地区出土弥生土器実測図

から、平安時代末期から鎌倉時代前期のものと思われる。同じ層から出土している須恵器の長頸壺6についても、これ以前の9～10世紀代の年代が考えられる資料である。

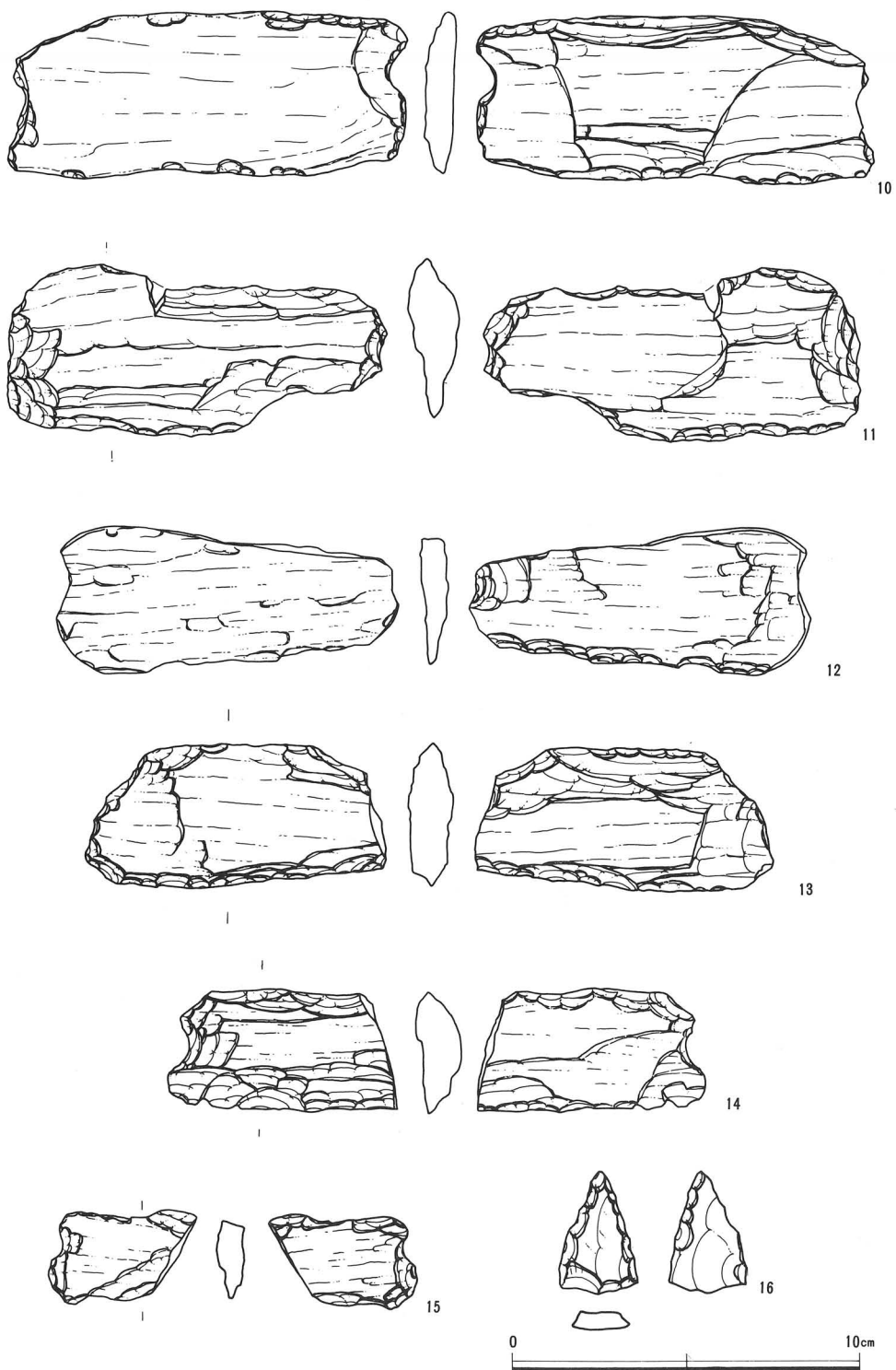


第20図 B地区第15層出土石鏃実測図

弥生時代

主としてB地区の谷状低地の中に堆積した第14層を中心に出土した遺物である。出土した弥生土器（第19図）はいずれも遺存状態が悪く、器形や文様をうかがえる資料に乏しい。

7は甕の破片であるが、器内外面とも風化が著しく調整方法は不明であるが、外反する口縁の内面には僅かに指オサエの痕が残されている。8、9は同じく甕の底部の破片で、8の個体には上げ底の底部がつき、外面は篋削りで調整されている。この他にも櫛描きの波状文が施された壺の破片が出土している。いずれも弥生中期に属するものであろう。この他の遺物として打製石庖丁と打製石鏃が出土している（第21図1）。打製石庖丁には何れも結晶片岩が用いられているが、形態的には両端に挾をもちほぼ方形の左右対象の形態をもつもの、同じく両端に挾が施されるが左右非対象の形態のもの、挾をもたないものの3種類に分類される。石鏃はサヌカイトの剥片の周囲に簡単な加工が施

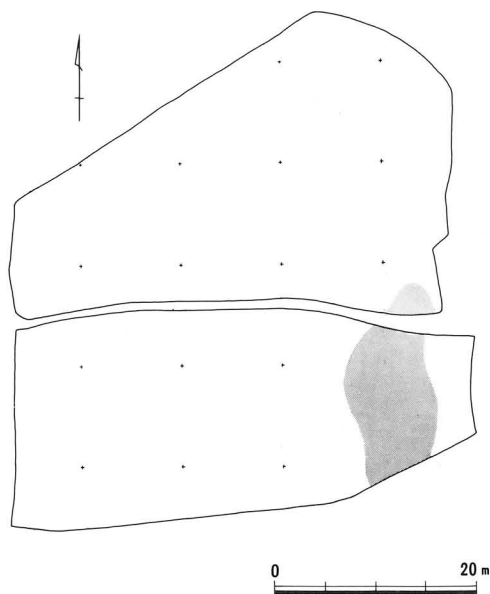


第21图 B・C地区出土弥生時代石器実測図

されたものなど、無茎のものを中心として出土している。

縄文時代

B地区の第15層上部から、条痕の施こされた縄文土器の小片が若干とサヌカイト製の石鏃が一点出土している。石鏃は長さ2.1cmの無茎式のもので全面に入念な加工が施されているが、片方の脚を欠いている（第20図）。

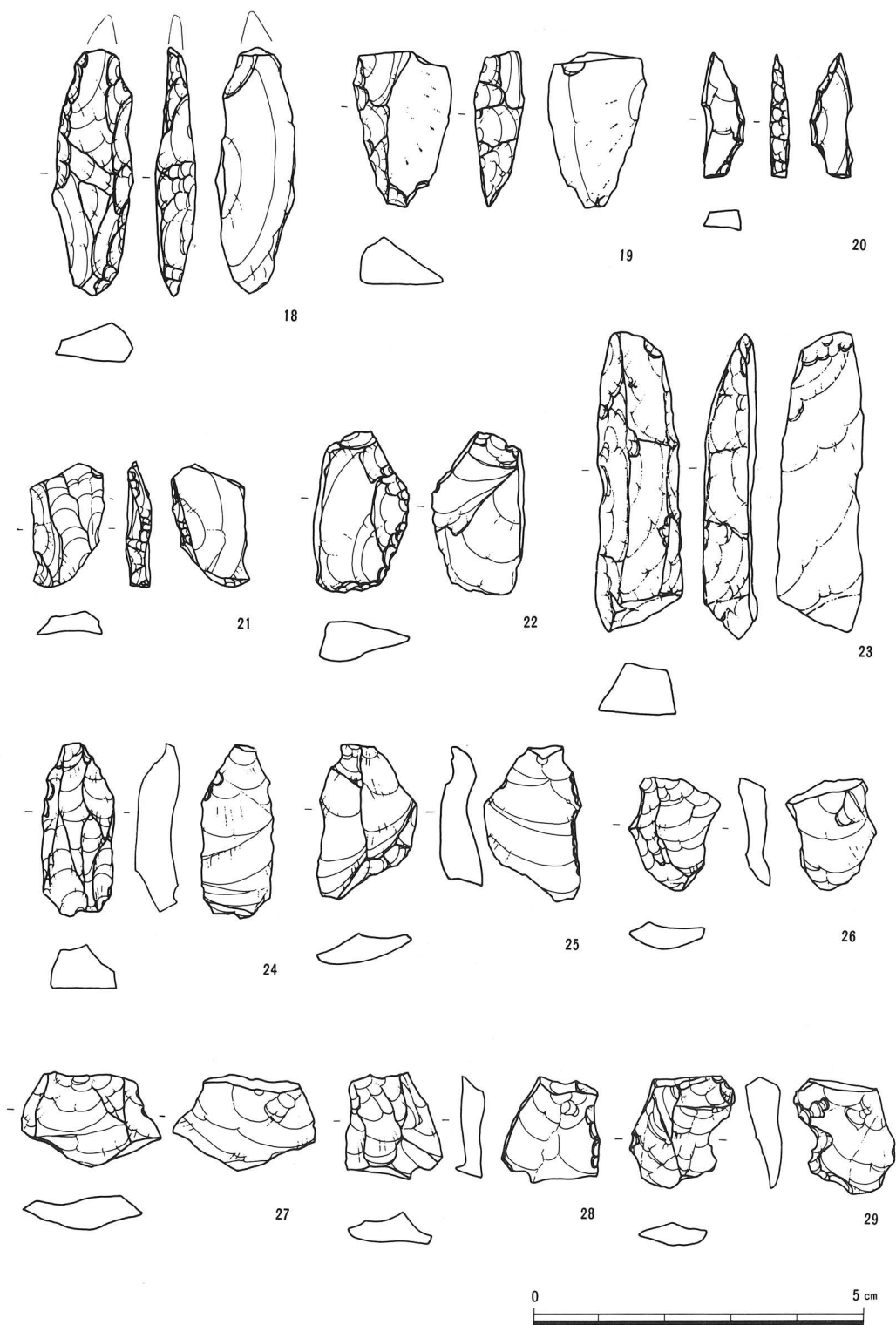


旧石器時代

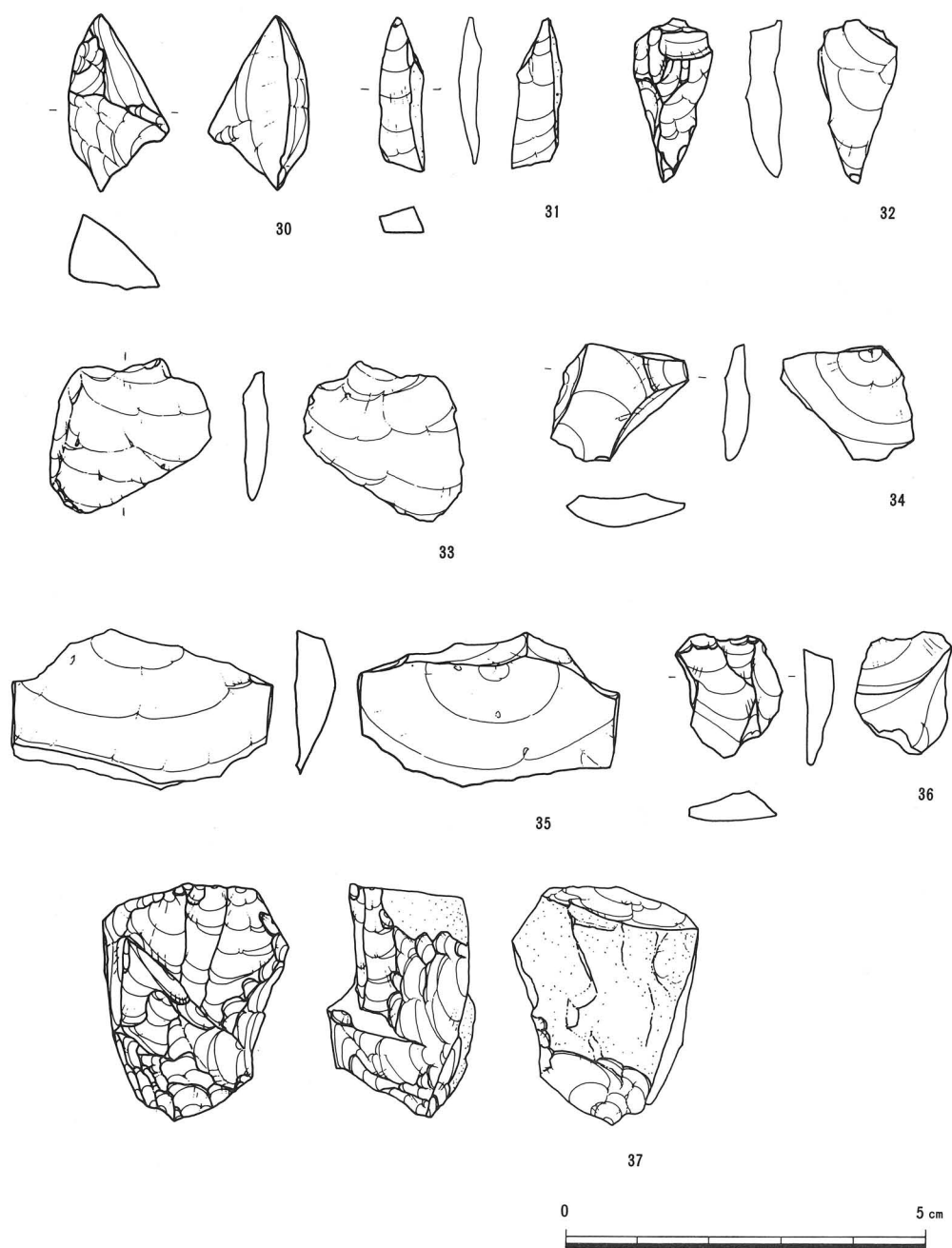
B・C地区に跨る東西10m、南北17mの範囲から少数ながら旧石器がまとめて出土した。遺物の出土した第15層は、調査区内を北東から南西にむかって緩やかに傾斜し、厚い所では20cmほどの堆積がある。遺物は総数42点と少なく、約半数がチャートを素材とする剥片によって占められ（第23図20、21、24～32）、他はハリ質安山岩（第23図22、第24図34、36）、サヌカイト（第23図18、19、23、第24図33、35）が用いられている。19は横長剥片を素材としたサヌ

第22図 B・C地区旧石器出土範囲略図

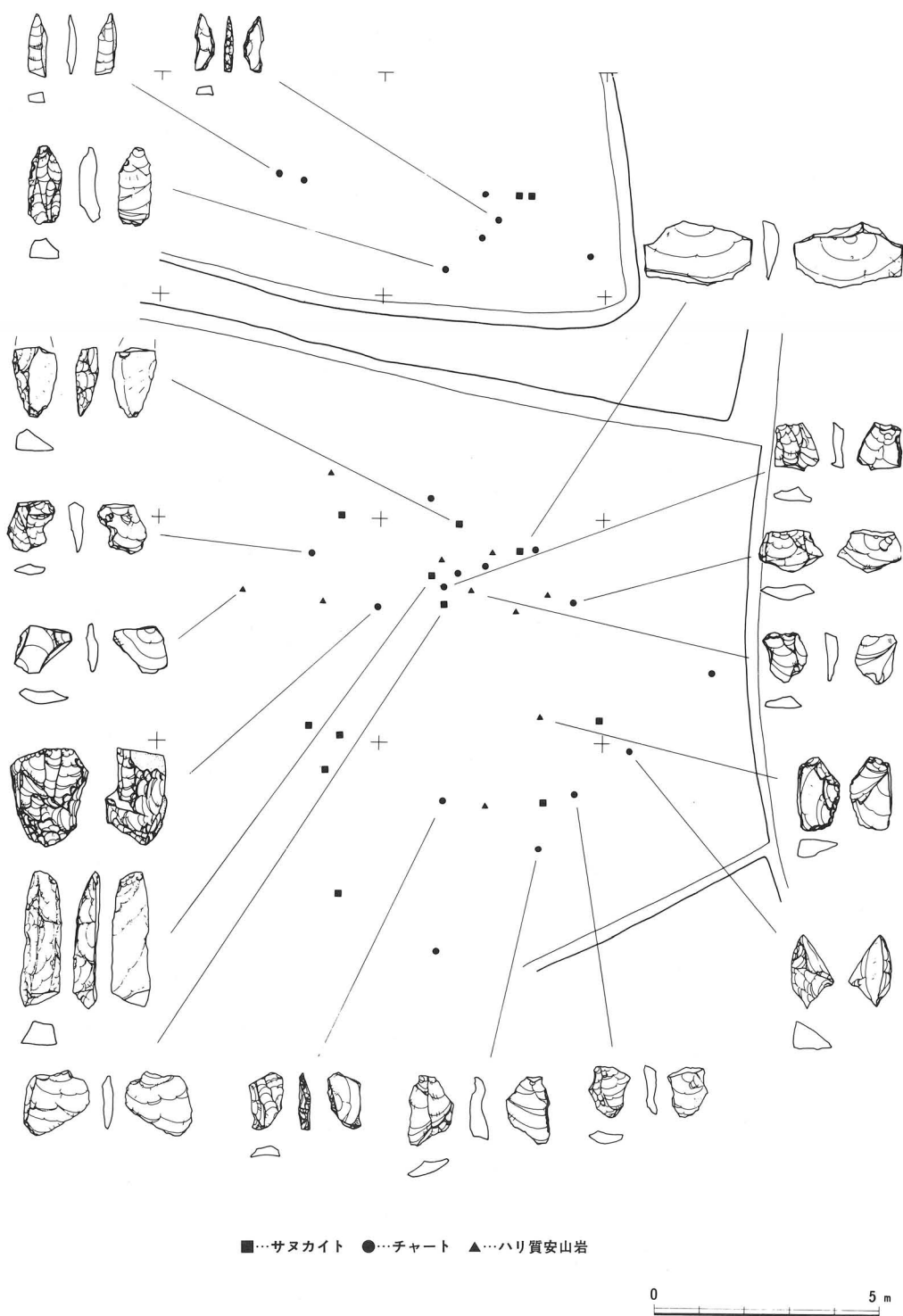
カイト製のナイフ形石器で、身の半分を欠損しているが恐らく5cmに満たない小形のものであろう。調整は片側縁のみにほどこされている。B地区の弥生時代の包含層から出土した18のナイフ形石器も、横長剥片をもちいた同様の大きさのものであるが、調整が両側縁におこなわれている。20は同じく小形のナイフ形石器でチャートを素材としているが剥離の方向は明瞭ではなく、剥片の形状は縦長か横長か正確なところは不明である。片側の側縁を欠いているため全体の形状は不明であるが、残されたもう一方の側縁部への調整は両面からおこなわれている。22は、ハリ質安山岩の剥片の側縁部に簡単なリタッチを施しスクレイパーとしたものである。チャートを素材とした剥片は、縦長のものと横長のものに分かれ、いずれの剥片にも打面調整の行われているものと、全く行われないものが存在する。主剥離面と背面の剥離の方向は同一方向のものもあるが、中には20や21のように直行するものもあり一定していない。またその形態も、24のように石刃に類似する非常に整った形態の剥片もあるが、その多くは大きさや形状が不揃いなことが目立っている。これは、打面転移がさかんにおこなわれたためとも考えられる。調整は21の剥片に簡単なリタッチが施されている以外、明瞭な加工が行われているものはないが、使用



第23图 B·C地区出土旧石器实测图 (1)



第24图 B·C地区出土旧石器实测图 (2)



第25図 B・C地区旧石器分布図

痕と思われる刃こぼれは、ほぼ全ての剥片に認められる。ハリ質安山岩を素材とする剥片の形態もチャート製のものに類似しているが、使用痕の有無は不明である。サヌカイト製の剥片は横長の形態のものしか認められないが、中に1点だけ翼状剥片が出土している（第24図35）。石核はチャート製のものが1点出土している（同図37）。素材に角礫を用いた高さ3.4cmの小型のもので、背面と側面の一部に自然面を残している。片側の側面には、この礫の表皮を取り除く目的からか背面から調整剥離が行われているが、もう一方の面には正面方向からの剥離が認められる。打面は上下両端に設けられているが、剥片剥離に際しての打面調整は行われていない。石核正面には上設打面から3回剥片を剥ぎ取った痕が認められるが、石核を斜めに横断する節理面のため、何れも末端まで及んでいない。

4 まとめ

(1) 旧石器時代の石器群

今回出土した旧石器は数量的には42点と少ないものの、サヌカイト製のナイフ形石器1点以外は、同じ層からある程度のまとまりをもった状態で検出されたものである。使用された石材にはチャート、サヌカイト、ハリ質安山岩の3種類が認められるが、なかでもチャートが最も多く、全体の約半数をしめている。従来、徳島県下でも旧石器時代の遺跡が集中している吉野川北岸地域で発見される石器に使用される石材としては、そのほとんどがサヌカイト製で、チャートを素材とする石器を出土している遺跡としては、県南の阿南市廿枝遺跡だけであった。廿枝遺跡の石器については、報告者の天羽、立花両氏によって国府・宮田山段階の廿枝Ⅰ、井島1段階の廿枝Ⅱ、井島2段階の廿枝Ⅲの3時期に分けられた。その後、高橋氏によって資料の追加と再検討が行われ、年代観についても疑問が投げかけられている⁽²⁾。今回の資料を廿枝遺跡の遺物と比較すると、使用される石材がチャートを主体とすることや、出土したナイフ形石器も、廿枝遺跡の一点を除けば5cmにみえない小型であること、剥片に縦長横長の2種類が存在すること、石核、剥片ともに打面調整の行われない平坦なものが多く、剥片の主剥離面と背面の剥離の方向が必ずしも一致せず、打面が一定ではなかったことが考えられること、石核の素材として角礫が使用されていることなど共通する点が多い。しかし、金蔵遺跡では肝心のナイフ形石器の出土数が少なく十分な比較検討がおこなえない状態にあることや、一点ではあるが廿枝遺跡にはない翼状剥片が出土していることなど、異なる点も存在している。ただ、個々の遺物の出土したレベル差が最大40cm近くあることや、同じ層の上部に縄文時代の遺物が含まれていて層自体堆積の状況が不安定と考えられること、また、出土した数少ないナイフ形石器の類例を敢えて求めようとするならば、宮田山またはそれ以後のナイフに分類できるものと考えられ、この翼状剥片との共時性を疑える資料であることなどから、この一群の出土遺物をすべて同一時期に属するものと考えことはできないと思われる。ともあれ、廿枝遺跡との類似点は指摘できるものの、正確な時期的位置付けなどについては今後の資料の増加を待たねばならないものと思われる。

(2) 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、焼土溜り1基と性格不明の土坑2基だけで、住居跡などは出土しなかった。この扇状地上に立地する他の弥生時代の遺跡でも、一般的に住居跡をはじめとする遺構の検出数は少なく、遺構の密集する度合いが極めて低かったことが伺えるが、これには、水に乏しい扇状地という自然条件をぬきにして考えることはできない。今回の調

査でも、遺構の検出された場所が九頭宇谷川に面した緩斜面上や自然にできた湿地状の低地に隣接しているなど、比較的水を得やすい所に遺構や遺物が集中していることからその様な事情を推察することができる。もっとも出土遺物のなかに打製石庖丁が存在することは、生産活動のなかに、農耕の占める割合がかなり高かったことを伺わせるが、水稻耕作かそれ以外のものか興味をいだかせるところであろう。

(3) 古代、中世関係の遺構

B・C地区の水田土壌下の第1遺構面からは、溝状遺構と炭窯と考えられる土抗が検出されている。B地区では、この9層の上に堆積している水田面最下層の第8層から、青磁碗と白磁皿がそれぞれ一点ずつ出土しているが、それらは13世紀から14世紀代に位置づけられる遺物である。このことから、B地区の水田の造成された時期は少なくともそれ以降と考えるのが妥当だと思われるが、遺物の出土していないC地区の水田も、ほぼ同じ様な年代に位置づけてよいのではないと思われる。このB地区の第1遺構面については、遺物が検出されているSD1001、SO1001で出土した土師器の破片が、いずれも平安時代くらいのものであることや、同じ第9層から出土した土師器の杯が、少なくとも12世紀代に出現し、13世紀から14世紀を中心に多用される回転糸切り技法を用いたものであることと、上層の水田面の年代が13～14世紀である事を考慮にいれると、その下限を12～13世紀頃までのものと考えておきたい。この場合、SD1001の性格であるが、この様な水に乏しい扇状地上に設けられた溝であることから、恐らく灌がいを目的としたものであったと思われるが、実際に確認された水田面は溝より後の時代のもので、その水田の時期にはすでに埋没してしまい、水利施設として機能していなかったと考えられる。ただ、この遺跡の北には、平安時代に築造されたと伝えられる浦池が位置している。もしこのSD1001の年代が正しいとすれば、この浦池と何らかの関係のもとに造られた水利を目的とした遺構の可能性も考えられる。

今回の金蔵～上井遺跡の調査によって出土した遺構や遺物は極めて少ないもので、年代的にも不確かなものがそのほとんどを占めている。しかし、今回の調査で新たに明らかにされた事も若干ではあるが認められる。特に、旧石器時代の遺物については、時期的にも量的にも不完全な資料ではあるが、従来、吉野川北岸地域で全く出土しなかったチャート素材とする石器群を検出することができたばかりでなく、県南地域でのただ一箇所のナイフ形石器の出土遺跡で、県内では他に比較する資料の全くなかった廿枝遺跡の遺物と関係づけられるものが出土したことは、今後の県内の旧石器時代の研究をおこなううえで、少なからぬ意義を持ってくるものと考えられる。

注

- (1) 炭窯の構造については菅原康夫氏の論考「遺物をもたない遺構」『徳島県埋蔵文化財センター年報V o 1. 2』1991を参照。
- (2) 天羽利夫、立花博両氏の論考については、天羽、立花「徳島県廿枝遺跡採集の石器」『古代学』16-1 (1969)、天羽「徳島県下出土のナイフ形石器・細石器」『徳島県博物館紀要』1 (1970) 天羽「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化 3 遺跡と遺物<下>』(1976) 雄山閣を、また高橋氏の論功は、「徳島県阿南市・廿枝遺跡の採集の石器再考」『旧石器考古学 29』旧石器文化談話会(1984)をそれぞれ参照。高橋氏はこの中で、和歌山県松瀬遺跡、壁川崎遺跡、大分県岩戸遺跡など廿枝遺跡に類似する遺跡をあげているが、その編年の位置づけについては明確な発言はおこなわれてはいない。

参考文献

- 地学団体研究会吉野川グループ「土成町の地形・地質と古生物」『総合学術調査報告土成』土成町阿波学会・徳島県立図書館 1990
- 天羽利夫・立花博「徳島県廿枝遺跡採集の石器」『古代学』16-1 1969
- 天羽利夫「徳島県下出土のナイフ形石器・細石器」『徳島県博物館紀要1』1970
- 天羽利夫「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化 3』遺跡と遺物<下> 1976
- 高橋正則「徳島県阿南市・廿枝遺跡採集の石器再考」『旧石器考古学 29』1984
- 徳島県教育委員会「土成町北原遺跡」『内陸工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1988
- 徳島県教育委員会「土成前田遺跡」『県道舟戸切幡上板線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1989
- 菅原康夫「遺物をもたない遺構－伏焼木炭窯に関する予察－」『徳島県埋蔵文化財センター年報V o 1. 2』1991

第1表 出土遺物観察表 1 (土器)

番号	器種	法量	形態	胎土焼成	出土地点	備考
3	青磁椀	底径6.7cm	高台の高さは0.9cm 高台畳付及び内面は露胎	釉の色は緑灰色	F-5	
4	白磁皿	底径6.1cm	体部は斜上方に直線的に立ち上がる 釉は底部まで施こされる		G-2	いわゆる口禿げ皿
5	土師器杯	底径7.2cm	底部からやや内弯気味に外上方に立ち上がる	橙色	G-5	底部切り離しは回転糸切り技法
6	須恵器壺	底径9cm	底部からゆるやかに内弯しながら外上方に立ち上がる	灰白色		
7	弥生甕	口径20.5cm	肩部に最大径をもっと考えられ口縁部はゆるやかに外反する	径1~2mmの礫を含み焼成不良	F-7	
8	弥生甕	底径5.8cm	底部付近でわずかにくびれる 強いあげ底の土器	径1~3mmの礫を混入する	F-7	
9	弥生甕	底径7cm	底部付近でわずかにくびれる 平底の土器	橙色で焼成は不良	F-7	

第2表 出土遺物観察表 2 (石器)

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	出土地点	備考
1	打製石鏃	2.5cm	1.8cm	0.4cm	1.6g	サヌカイト	V-18	断面に自然面を残す
2	石棒	39.3cm	12cm		9,500g	緑色片岩	V-19	自然の転石を利用
10	打製石庖丁	11.5cm	4.7cm	0.7cm	69g	結晶片岩	G-7	片面に自然面を残す
11	打製石庖丁	10.8cm	4.7cm	1.3cm	74.8g	結晶片岩	D-7	
12	打製石庖丁	9.8cm	4.3cm	0.7cm	39.7g	結晶片岩	H-7	側縁部に自然面を残す
13	打製石庖丁	8.5cm	4cm	1.2cm	60.8g	結晶片岩		
14	打製石庖丁	6.6cm	3.3cm	1.3cm	39.4g	結晶片岩	I-6	片面に自然面を残す
15	打製石庖丁	4.1cm	2.6cm	0.7cm	12.7g	結晶片岩	F-8	
16	打製石鏃	1.8cm	1.1cm	0.2cm	0.5g	サヌカイト	F-6	周縁部にのみ調整が加えられる
17	打製石鏃	2.1cm	1.4cm	0.3cm	0.4g	サヌカイト	G-9	全面に入念な調整が加えられる

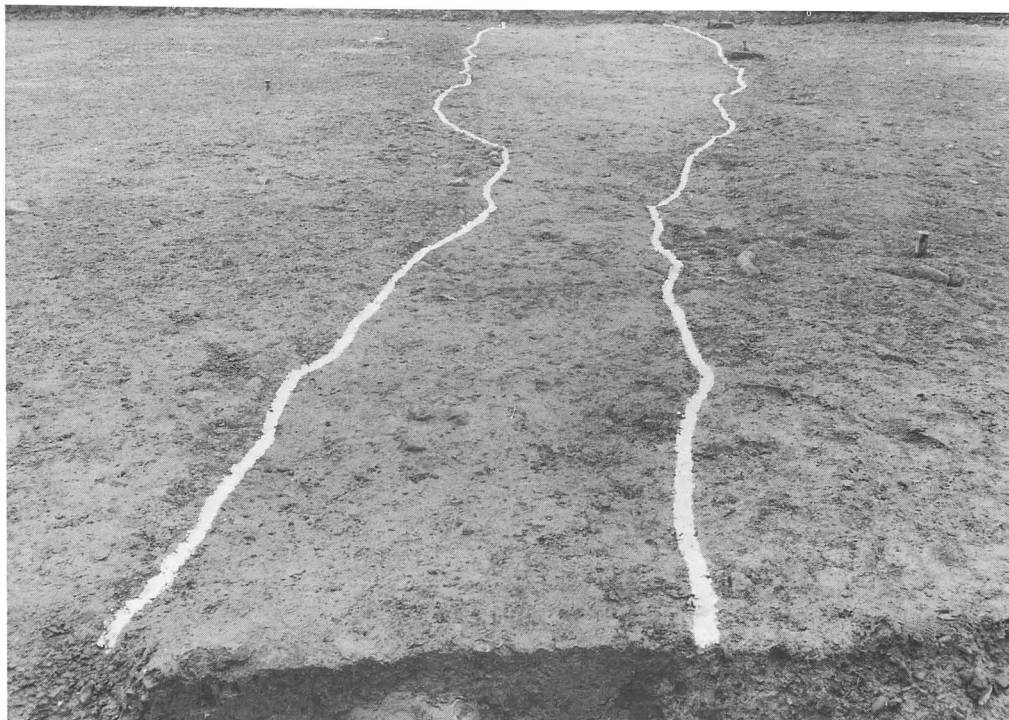
番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考
18	ナイフ形石器	3.7cm	1.2cm	0.6cm	2.6g	サヌカイト	J-7	弥生の包含層より出土
19	ナイフ形石器	2.3cm	1.4cm	0.7cm	1.9g	サヌカイト	E-9	
20	ナイフ形石器	1.9cm	0.5cm	0.3cm	0.9g	チャート	F-9	
21	剥片	1.9cm	1.2cm	0.3cm	0.9cm	チャート	C-9	側縁の一部に調整が加えられる
22	スクレイパー	2.5cm	1.5cm	0.5cm	2.2g	ハリ質 安山岩	D-9	
23	ナイフ?	4.6cm	1.4cm	0.8cm	6.3g	サヌカイト	D-9	
24	剥片	3cm	1.1cm	0.6cm	2.1g	チャート	F-9	側縁に使用痕が認められる
25	剥片	2.4cm	1.5cm	0.6cm	1.8g	チャート	C-9	側縁に使用痕が認められる
26	剥片	1.8cm	1.2cm	0.5cm	0.9g	チャート	C-9	
27	剥片	1.4cm	2.2cm	0.5cm	1.8g	チャート	D-9	側縁に使用痕が認められる
28	剥片	1.7cm	1.5cm	0.5cm	1.2g	チャート	D-9	
29	剥片	1.7cm	1.3cm	0.6cm	1.3g	チャート	D-8	
30	剥片	2.4cm	1.6cm	1.0cm	2.0g	チャート	C-10	
31	剥片	2.1cm	0.5cm	0.3cm	0.5g	チャート	F-8	
32	剥片	2.2cm	1.1cm	0.8cm	1.4g	チャート	E-8	
33	剥片	2.0cm	2.2cm	0.3cm	1.9g	サヌカイト	D-9	
34	剥片	1.2cm	2.1cm	0.5cm	1.2g	ハリ質 安山岩	D-8	
35	翼状剥片	3.7cm	2.2cm	0.5cm	4.0g	サヌカイト	D-9	
36	剥片	1.2cm	1.8cm	0.4cm	0.9g	ハリ質安山岩	D-9	
37	石核	3.4cm	2.5cm	2cm	16.8g	チャート	D-9	素材に角礫を用いる



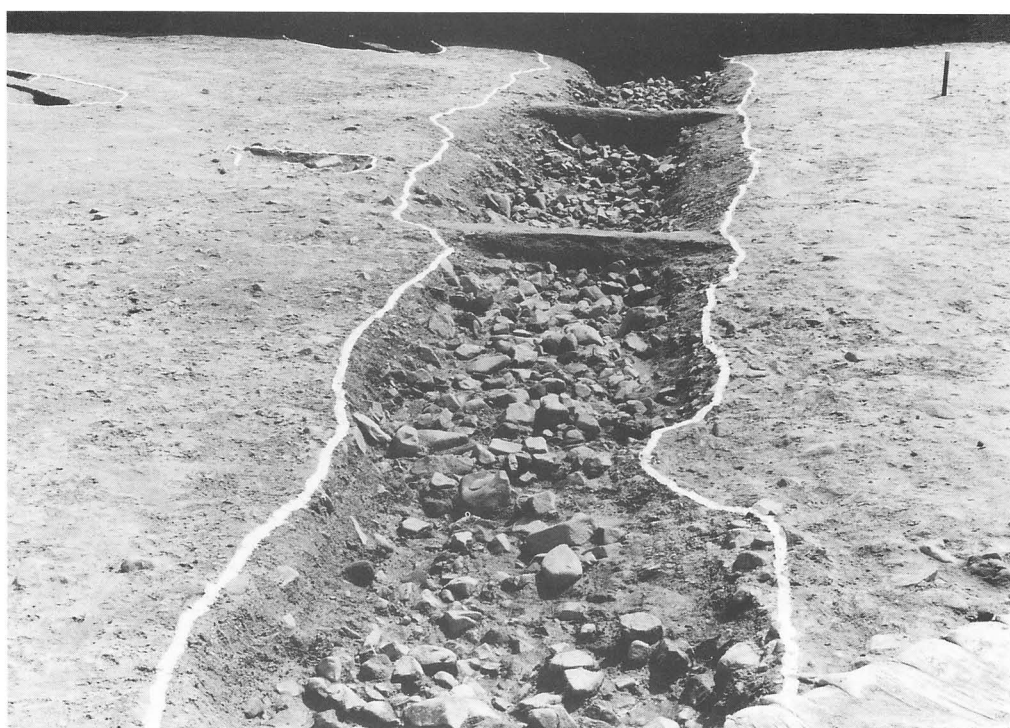
金蔵～上井遺跡調査区遠景（南東より）



発掘調査風景



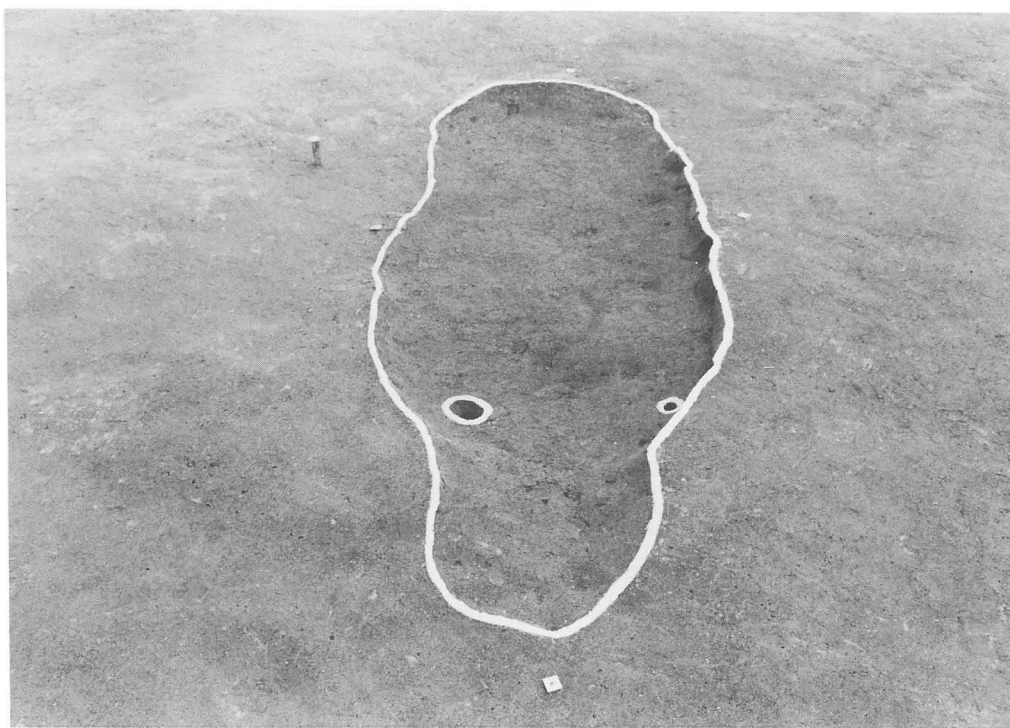
S D 1001検出状況



S D 1001完掘状況

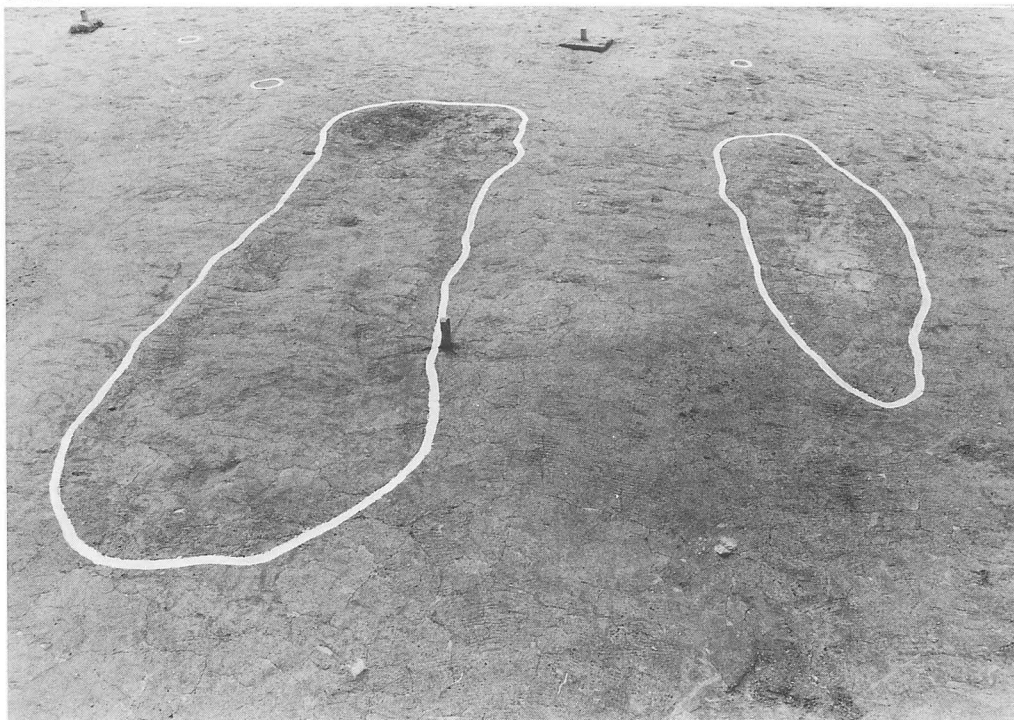


S O 1001検出状況

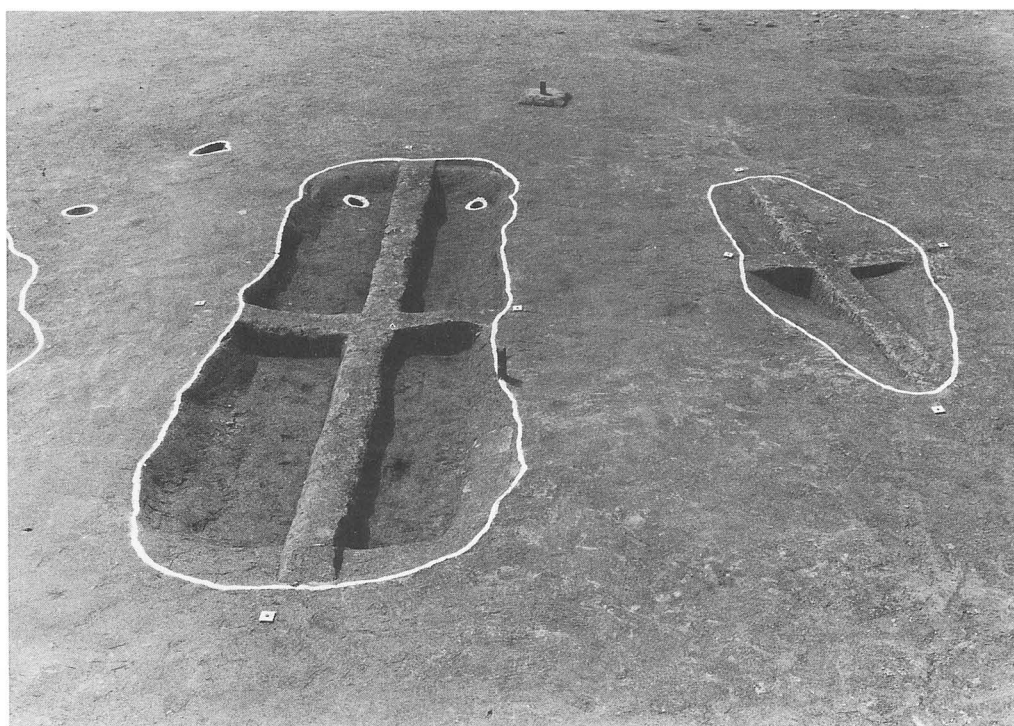


S O 1001完掘状況

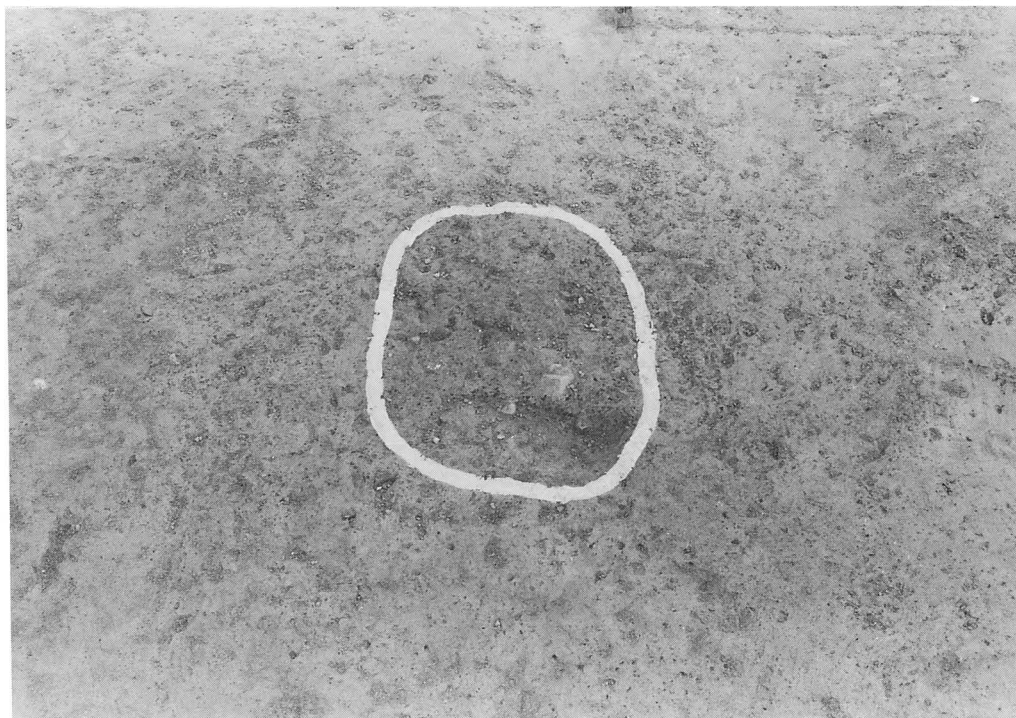
図版 4



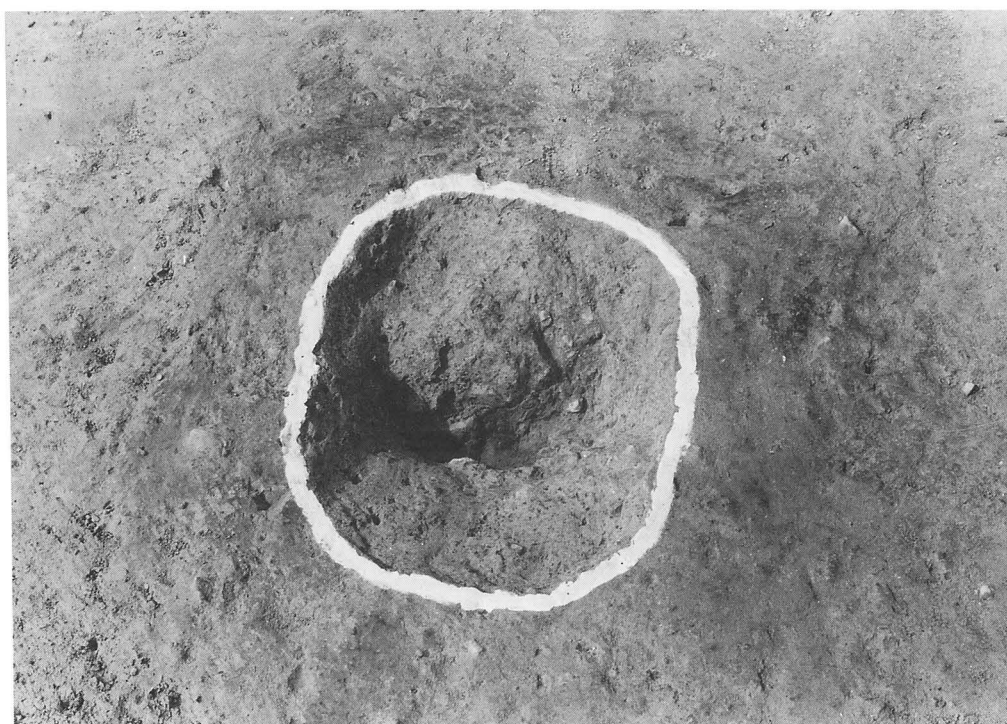
S O 1002・1003検出状況



S O 1002・1003掘り下げ状況



S K 2002検出状況



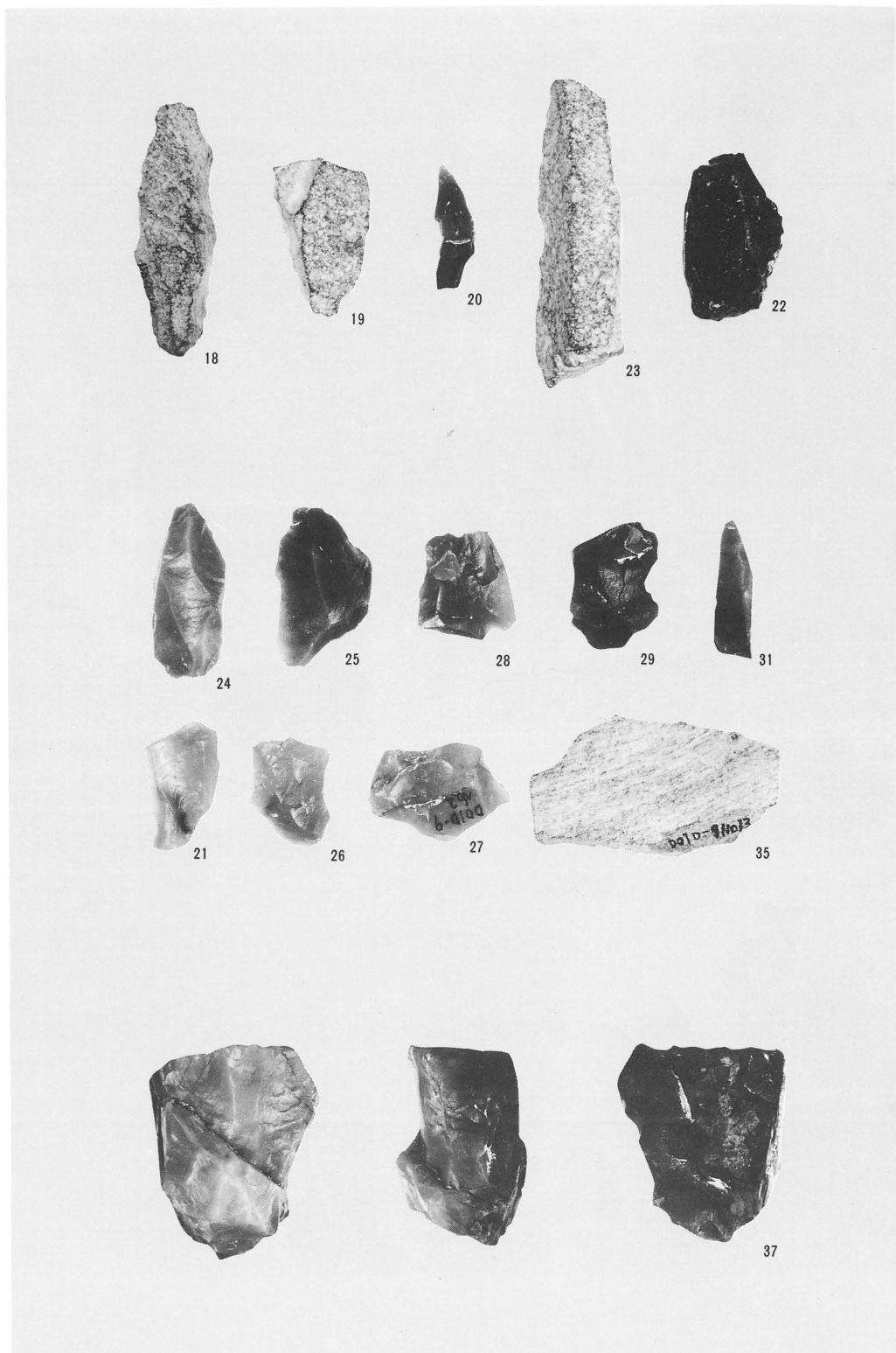
S K 2002完掘状況



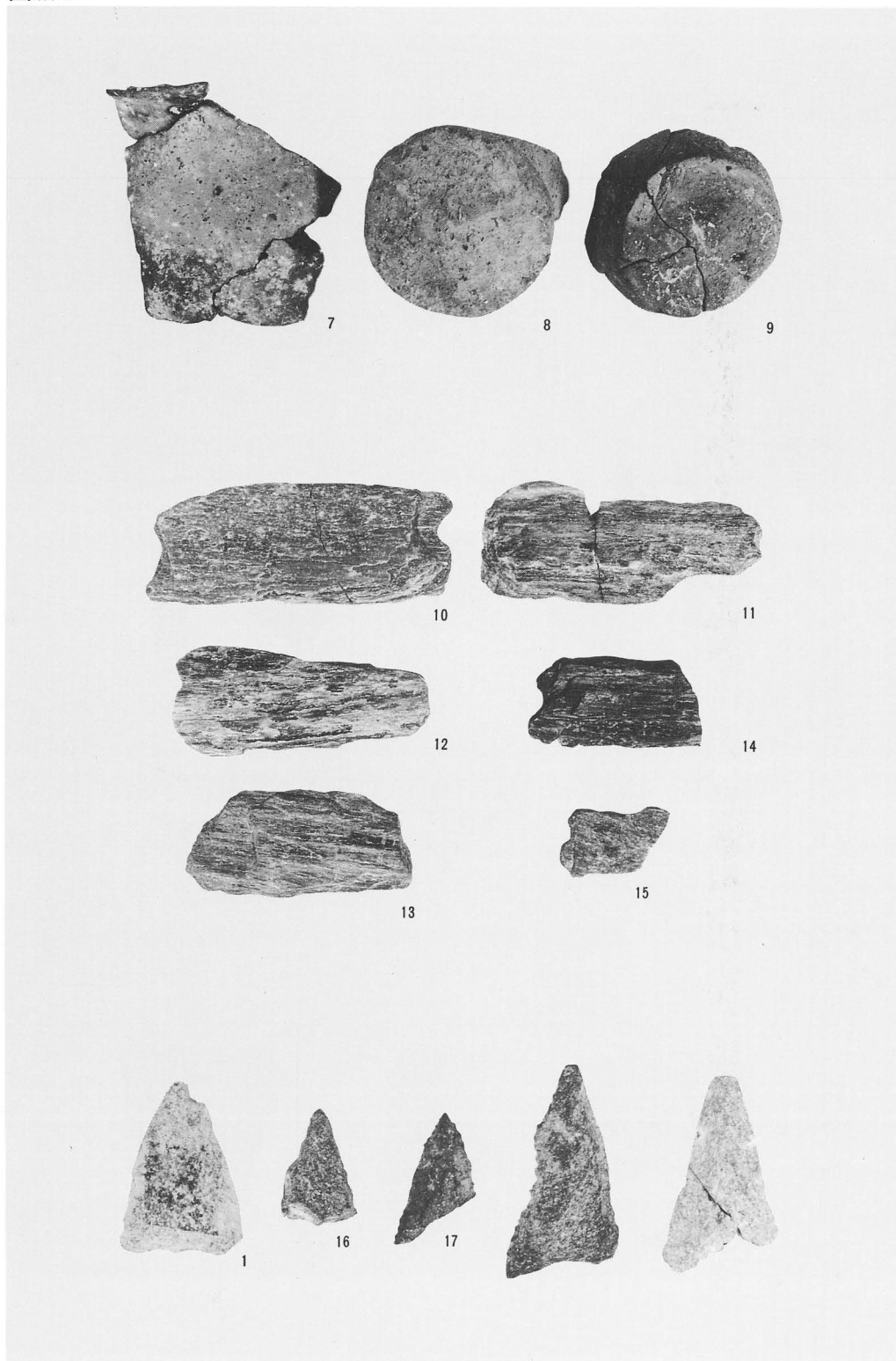
石棒出土状況



石核出土状況



B · C 地区出土旧石器



包含層出土遺物 (1)



包含層出土遺物 (2)

IV 天神山遺跡・青谷遺跡

1 調査の経過

(1) 調査の経過

分布調査による天神山遺跡の推定範囲は8,200㎡、東に隣接する青谷遺跡は推定範囲8,450㎡であった。当初は天神山遺跡西半4,540㎡と、青谷遺跡の4,620㎡を対象として、試掘調査を行った。試掘開始時においては、天神山・青谷両遺跡にそれぞれ1班が配置され、着手した。しかし、試掘の結果、調査対象範囲がかなり絞りこまれたので、本調査は1班で両遺跡の調査を並行して行うこととした。天神山遺跡を先行し、青谷遺跡を工程によって間にいれながら進めた。青谷遺跡では調査途中で新たな用地が入り、同様に試掘を行って調査範囲を絞りこんだ。天神山遺跡は、7月12日に完了し、青谷遺跡の調査は9月12日に終了した。調査面積は天神山1,330㎡、青谷遺跡3,110㎡である。

天神山遺跡は試掘結果と現地地形から、残りの推定範囲には遺跡の広がりがないことを十分に推定できたので、完了とした。青谷遺跡については遺物包含層の広がりの確認できた地点を1991年11月21日から12月12日までの間に2次調査として870㎡の発掘調査を行った（第3図）。

(2) 調査区割

調査を始めるに当たってグリッドの配置は、発掘調査統一基準にならい、第4系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして当初の推定範囲を包み込む南西隅から北にABC…、東に123…の順に記号をふり、その組み合わせでグリッドを表現するように設定した。

なお、便宜上調査地のまとまりを調査区として、天神山遺跡は第1調査区から第4調査区まで、青谷遺跡は第1から第8調査区まで設定した。さらに、両遺跡とも田畑一筆ごとに、また分割調査が必要であった地区については分割ごとにABC…（地区）を副記号としてつけた（第1～3図）。

また、遺構記号・遺構番号は検出時に決定し、掘削後、遺構の確実性が乏しいと判断されたものについては欠番とした。これは、遺構番号・遺構記号の変更による混乱を避ける目的であり、変更は必要最小限にとどめた。したがって、遺構番号は、その最大の値が全体の遺構数を表すものではない。

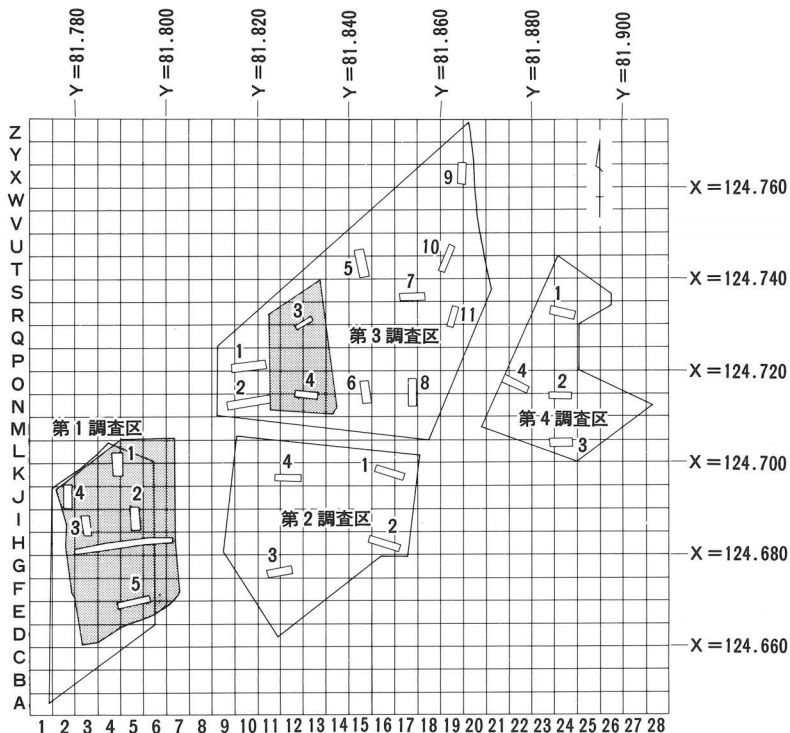
(3) 試掘調査

天神山遺跡

試掘のトレンチは2m×5mを基本として設定した。トレンチは遺物包含層上面ないしは遺構面直上で止めるのを原則とするが、各調査区ごとに下層の確認が必要と考えられる地点については、幅2mのうち1m分だけを深く掘り下げた（第1図）。

天神山遺跡については、尾根上の第1調査区で、まず頂上に5ヵ所設定し掘り下げたが、削平を受けていることが判明、最終確認のため尾根の両斜面にかかる東西に長いトレンチを設定し、深く掘り下げたところ、両斜面部でサヌカイトや弥生土器片を含む遺構および遺物包含層を確認し、本調査の対象とした。

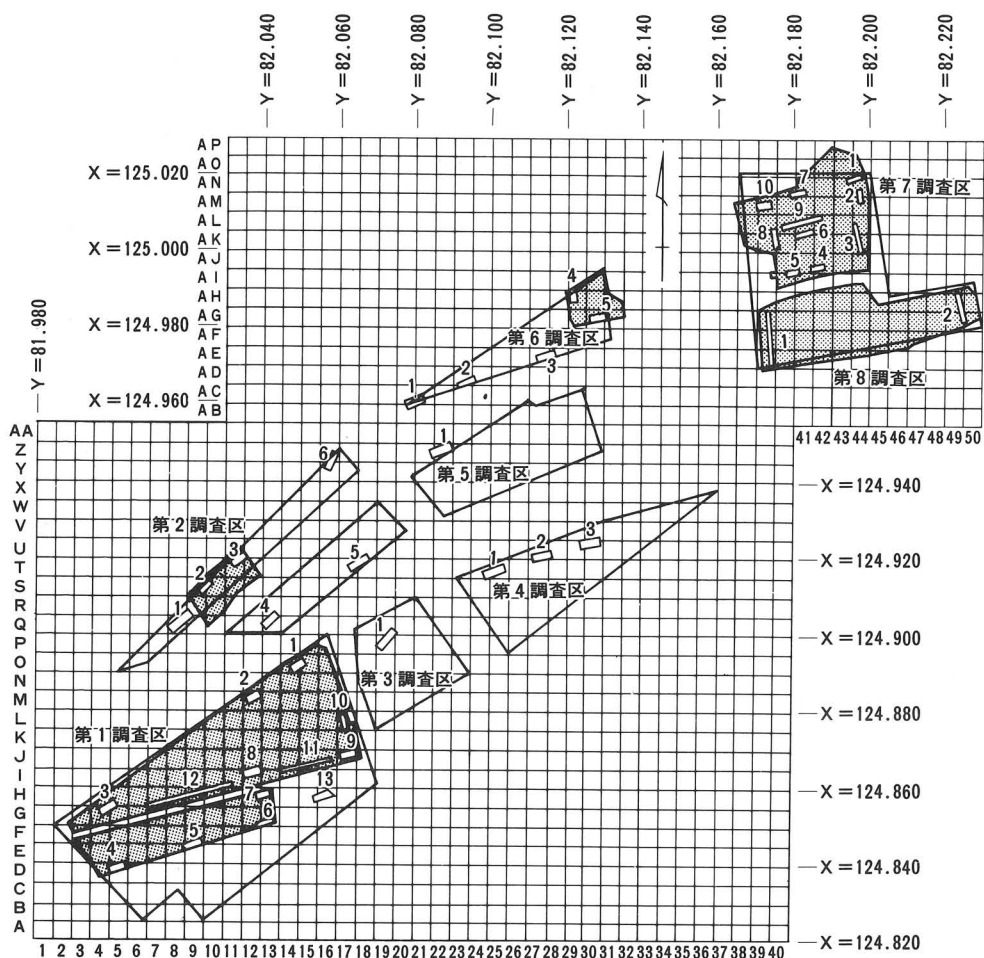
第2調査区は第1調査区の東側斜面部である。耕地整理で1枚の水田になっているが、東



第1図 天神山遺跡 調査区割・調査区・試掘トレンチ配置図

端に原地形が残存している可能性があったので4ヵ所のトレンチを設定、掘り下げた。4トレンチとも耕作土下は削平された地山であり、特に北西隅のNo.4トレンチでは黒色の断層破碎粘土が確認された。

第3調査区は第2調査区の北側、尾根の東側斜面部にあたり、斜面を数段に耕地整理をしている。一筆ごとに2～3ヵ所のトレンチを設定し、堆積状況を確認したところ、No.5～No.11トレンチについては削平が進み、遺構面の存在は確認できなかった。No.1～No.4トレンチについては、かつて屋敷地であったとの伝承の通り種々雑多な遺物が出土した。それらに混



第2図 青谷遺跡 調査区割・調査区・試掘トレンチ配置図

じって、弥生土器片、サヌカイトがNo.4 トレンチから出土、南東側斜面部で遺構面の存在を確認できたので、No.3、No.4 トレンチを設定した畑地（B地区）を本調査の対象とした。

第4調査区は大規模農道東側で第2・3調査区に続く斜面部にあたる。4ヵ所のトレンチを設定し、調査したが、いずれも耕作土下は削平された地山であった。

以上25ヵ所の試掘結果から、第1調査区と第3調査区B地区の2ヵ所を本調査の対象とした。

青谷遺跡（第1次）

試掘トレンチは、2m×5mを基本として、39ヵ所に設定し調査した（第2図）。

第1調査区は、まず10ヵ所設定し、掘り下げたが、どのトレンチも堆積状況は基本的に同じであった。泥岩小礫を多く含んだ層の上に、にぶい黄橙色の粘性砂質土が堆積している。遺物の出土は皆無に近かったが、最終確認としてあけたNo.11トレンチで炭化物と焼土を含んだ土坑（SK1001）を検出、青磁片も出土した。そこで、同様の堆積状況を示す部分を本調査対象とした。

第2調査区は、遅れて用地が取得された部分である。6ヵ所にトレンチを設定、掘り下げたところ、No.5・6トレンチは採土により削平されており、No.1・4トレンチは第1調査区に似ているが、遺構面にあたる層が安定していないので、本調査対象からはずした。No.2・3トレンチでは、本遺跡で最も明確な弥生時代の遺物包含層を確認し、広がり の推定できる範囲を調査対象とした。

第3・4調査区は、併せて4ヵ所で試掘したが、いずれも遺物の出土はなく、堆積状況は不安定で本調査の対象からはずした。

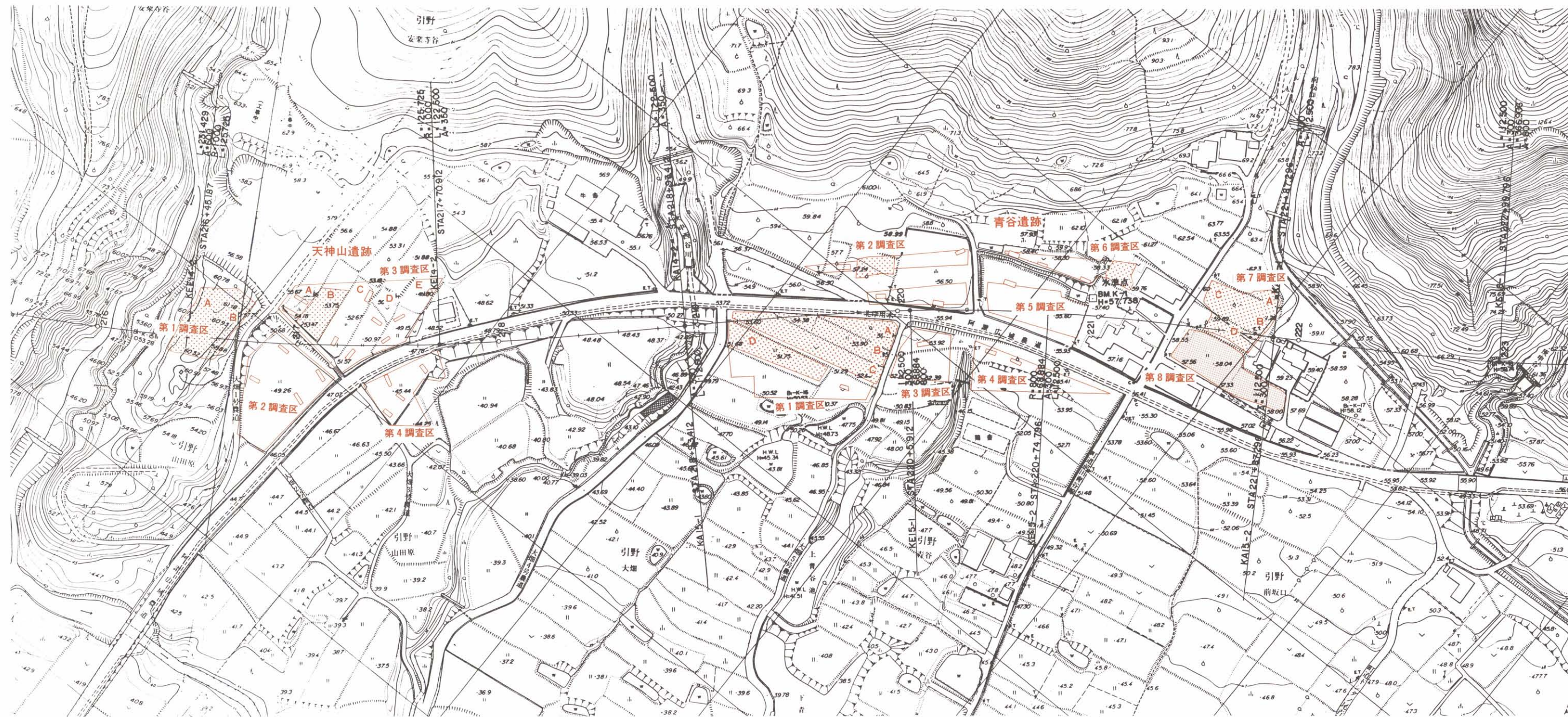
第5調査区も、現況は土置き場であり、採土等で攪乱が激しく放棄した。

第6調査区のNo.1～3トレンチでは、耕地整理による削平により、本調査の対象からはずした。No.4・5トレンチでは、出土遺物はないが堆積状況から、遺構面の残存が推定できるので、本調査の対象とした。

第7調査区は耕作の関係でやや遅れて10ヵ所試掘調査を行った。No.3トレンチから弥生土器片、No.9トレンチで土坑を検出し、その覆土からサヌカイト片が出土した。従って全体を本調査対象とした。

青谷遺跡（第2次）

第7調査区の南に隣接する地点の調査で、前年度に続き、第8調査区とした。東西両端に南北のトレンチをいれ、第7調査区と基本的に同じ土層を示す部分が確認されたので、全面を発掘対象とした。



第3図 調査地位置図

- 平成2年度調査区
- 平成3年度調査区
- 試掘トレンチ



(4) 調査日誌抄

天神山遺跡

1990年

- 5月11日 機械掘削による試掘調査開始。
- 5月15日 第1・3調査区で遺物包含層・遺構確認。
- 5月17日 試掘作業ほぼ完了。
- 5月21日 試掘結果により調査範囲を確定。
- 5月22日 第3調査区№2トレンチのSK1001調査。
- 5月25日 第1調査区A地区、第3調査区B地区、機械掘削開始。
- 5月28日 第1調査区A地区、人力掘削開始。



写真1 天神山遺跡 調査風景

- 5月30日 第1調査区A地区、遺構検出。
- 6月1日 第1調査区A地区、遺構検出・掘り下げ。第3調査区B地区で人力掘削開始。
- 6月8日 第3調査区B地区、住居跡の検出。
- 6月12日 第1調査区A地区、調査終了。第3調査区B地区ではSB1001の掘り下げ開始。
- 6月13日 第1調査区B地区、機械掘削。
- 6月14日 第1調査区B地区、人力掘削開始。
- 6月26日 第1調査区B地区、遺構検出。

- 7月9日 最後の土層図終了により調査完了。
- 7月12日 埋め戻し作業完了。

青谷遺跡（第1次）

1990年

- 5月10日 試掘着手。第1調査区、9ヵ所。
- 5月15日 再開。第1調査区で、遺構検出。
- 5月17日 第1・3～6調査区の試掘調査を完了。
- 5月19日 第7調査区、試掘。
- 6月4日 第1調査区C地区、機械掘削。
- 6月6日 第1調査区C地区、人力掘削開始。
- 6月13日 人力掘削完了。
- 6月18日 遺構検出開始。
- 6月25日 遺構平面図作成。
- 6月26日 調査区壁土層図をのぞいて完了。
午後からは第6調査区の掘削にかかる。
- 6月27日 第1調査区A・B地区、機械掘削。
第6調査区は人力掘削完了。
- 7月5日 第1調査区A・B地区、人力掘削。
- 7月9日 第1調査区、人力掘削続行。第6調査区は遺構検出。
- 7月11日 第6調査区完了。第2調査区、試掘調査。
- 7月17日 第1調査区A地区、遺構検出。B地区、人力掘削ほぼ完了。D地区および第2調査区、機械掘削。
- 7月18日 第2調査区、人力掘削開始。第1調査区も検出・実測作業続行。
- 7月24日 第1調査区A・B地区、平板測量による遺構配置図作成。第2調査区、掘削続行。

- | | | | |
|-------|--|--------|-------------------------|
| 7月27日 | 第2調査区、人力掘削完了。第1調査区D地区に移る。 | 12月2日 | 人力掘削。 |
| 7月30日 | 第7調査区A・B地区、機械掘削。第1調査区では実測と人力掘削を続行。 | 12月5日 | 調査区中央部の堆積厚く、機械を導入、掘削開始。 |
| 8月1日 | 第1調査区D地区、人力掘削完了。第2調査区は遺構検出。 | 12月10日 | 調査区の精査。遺構検出されず。 |
| 8月6日 | 第1調査区A・B地区、調査完了。D地区では、遺構検出・掘り下げ。 | 12月12日 | 調査区・土層の実測。写真撮影。調査終了。 |
| 8月11日 | 本日より15日まで、盆休。 | | |
| 8月16日 | 第1調査区D地区、調査完了。第7調査区A・B地区、人力掘削完了。遺構検出、掘り下げ。 | | |
| 8月21日 | 第7調査区、平板測量。第2調査区再開、遺構掘り下げ。 | | |
| 8月27日 | 第7調査区A・B地区、調査完了。 | | |
| 8月28日 | 第7調査区C・D地区、機械掘削。 | | |
| 8月30日 | 第7調査区C・D地区、人力掘削開始。 | | |
| 9月3日 | 第7調査区C・D地区、人力掘削完了。 | | |
| 9月5日 | 第7調査区C・D地区、遺構掘り下げ。第2調査区、実測中。 | | |
| 9月7日 | 第7調査区・第2調査区とも残件処理。調査完了。 | | |
| 9月12日 | 事務処理完了。挨拶回りの後、現場撤収。 | | |

青谷遺跡（第2次）

1991年

- | | |
|--------|-------------------|
| 11月22日 | 機械による第8調査区の両端を試掘。 |
| 11月28日 | 人力掘削開始。 |

2 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

天神山遺跡は、徳島県板野郡上板町引野字山田原 1 - 8 他に、青谷遺跡は引野字青谷 25 - 1 他に所在する。

四国山地に源を発し、徳島県北部を東流し、そして紀伊水道に注ぐ吉野川は河口部に広大な三角州である徳島平野を形成している。本遺跡は、その吉野川の左岸、河口部からは約 20 km 付近の阿讃山脈の南麓に位置する。天神山遺跡は標高約 60m の阿讃山脈から南に延びる尾根上に、青谷遺跡は南流する小河川に挟まれた標高約 51 ~ 61m の緩斜面に立地する。阿讃山脈は地質学的には中生代に堆積した砂岩・泥岩の互層による和泉砂岩層により形成され、その麓を徳島の地質構造を和泉層群と三波川変成岩帯とに分ける中央構造線が東西に走っている。本遺跡の周辺には、その中央構造線系の断層がみうけられる。

(2) 歴史的環境

本地域での旧石器時代の遺跡としては柿谷遺跡⁽¹⁾が挙げられる。徳島県内でも類例の少ないチャート製の国府型ナイフ形石器が出土している。また上板町引野の出口遺跡⁽²⁾ではサヌカイト製のナイフ形石器が表面採集されている。

縄文時代の遺跡としては土成町の西谷遺跡⁽³⁾がある。縄文から中世にかけての複合遺跡であるが、縄文時代後期の深鉢、浅鉢、注口土器を出土する貯蔵穴の可能性をもつ土坑が検出されている。また上板町神宅字山田^{かんやけ}で 1953 年に縄文時代後期の磨消縄文をもつ土器片が採集されているが⁽⁴⁾この周辺では縄文時代の遺跡は確認されていない。

弥生時代の遺跡としては、神宅字山田の阿讃山脈の尾根上から 1915 年、神宅銅鐸と呼ばれ扁平紐式 6 区画袈裟襷文銅鐸⁽⁵⁾が出土している。その銅鐸と関連付けられる弥生時代の集落は確認されていない。上板町大山中腹の畑遺跡や、本遺跡の西南の平野部に広がる土成町高尾の熊ノ庄遺跡なども散布地として知られている。また前述の西谷遺跡では弥生中期から後期にかけての住居跡・土坑が検出されている。

弥生時代から古墳時代前期にかけては、天神山遺跡の一つ尾根を挟んだ西の尾根上に安楽寺谷墳墓群⁽⁶⁾がある。弥生時代の土器棺墓群と石室墓、そして古墳時代前期の竪穴式石室 2 基が確認されている。もう一つ西の尾根上にも、安楽寺谷墳墓群の竪穴式石室と同時期と考えられる十楽寺山古墳⁽⁷⁾がある。



第4図 周辺の遺跡分布図

古墳時代中期でまず触れておかなければならないのは、土成町高尾の扇状地上の水田中に位置する土成丸山古墳⁽⁸⁾である。徳島県の円墳では唯一周濠をもつもので、規模は東西43m、南北39m、高さ6.5～7m、周濠は幅11～14mが推定される。徳島県の中期を代表する大型古墳である。他にこの地域で現存するものの中で、中期の構築が考えられるものは確認されていない。

古墳時代後期にはいと、阿讃山脈の南麓を中心に多くの古墳が築かれた。本遺跡の周辺部においても明神池、天神山古墳群が1963年の埋蔵文化財包蔵地調査⁽⁹⁾で報告されているが、具体的様相は不明である。前述の柿谷遺跡では後期の横穴式石室8基と石室墓が検出されている。柿谷遺跡は古く「百塚」と称されていた場所の比定地のひとつである。また後期の集落遺跡としては上板町東部の神宅遺跡⁽¹⁰⁾があげられる。遺跡の東の台地上の山崎古墳群⁽¹¹⁾と時期的に一致し、古墳群を構築した集団の集落と考えられる。

歴史時代としては上板町から吉野町にかけての沖積平野上に、五条、六条、七条の地名や直交する道路畦畔から条里遺構の一部に比定される地域⁽¹²⁾がある。また山麓周辺には伝承で平安時代に建立されたとされる、西光廃寺、安楽寺跡、十楽寺跡の伝承地が点在し、特に青谷遺跡の南東部は西光廃寺伝承地とされ八葉複弁蓮華文軒丸瓦が出土している⁽¹³⁾。十楽

寺のすぐ西の谷には十楽寺遺跡⁽¹⁴⁾があり、徳島県内でも古い時期に属する8世紀後半から9世紀にかけての須恵器窯に伴う灰原が確認されている。^{おおやま}大山中腹の^{たいさん}大山寺では大治元年(1126年)銘をもつ経筒⁽¹⁵⁾が出土している。また泉谷の^{わせん}和泉寺においても1918年に経筒⁽¹⁶⁾が出土している。

参考文献

- 上板町史編纂委員会『上板町史・上巻』『上板町史・下巻』上板町 1983
- 郷土研究発表会『総合学術調査報告 上板町』郷土研究発表会紀要 1981
- 児島忠平『泉谷郷土誌』1963
- 児島忠平『松島町誌』1967
- 『土地分類基本調査 川島』国土調査 経済企画庁 1971
- 菅原康夫『日本の古代遺跡37 徳島』保育社 1988
- 天羽利夫・岡山真知子『徳島の遺跡散歩』徳島市民双書 1985

注

- (1) 石川直章・武蔵美和「柿谷遺跡」池淵 茂「試掘調査」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 1, 2』1991
- 藤川智之「柿谷遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 3』1992
- (2) 天羽利夫「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化3』1976
- (3) 結城孝典「西谷遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 2』1991
- 結城孝典「西谷遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 3』1992
- (4) 『上板町史・上巻』参照
- (5) 梅原末治『銅鐸の研究』1927
- (6) 小泉信司「安楽寺谷墳墓群」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 3』1992
- (7) 立花 博は『土成町史・上巻』等で古墳の構築時期を5世紀以降にしているが、菅原康夫『日本の古代遺跡37 徳島』(1988)により、その構築形態の類似が指摘され、また両古墳の距離的關係から前期に位置付けるのが妥当と考えられる。
- (8) 天羽利夫他「土成丸山古墳調査報告」『徳島県立博物館紀要』第18集 1987
- (9) 徳島県教育委員会社会教育課調査 1963
- (10) 徳島県教育委員会『平成元年度県営園地整備事業上板東部地区 発掘調査実績報告書』1990
- (11) 徳島県教育委員会『山崎古墳群 現地説明会資料』1986
- (12) 福井好行「阿波の条里」「阿波の条里 補遺」『阿波の歴史・地理』1964
- (13) 前掲(4)
- (14) 久保脇美朗「十楽寺遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 2』1991
- (15) 徳島県教育委員会『徳島県の文化財 第一集』1954
- (16) 蔵田 蔵「経塚論 11」『MUSEUM 第179号』1966

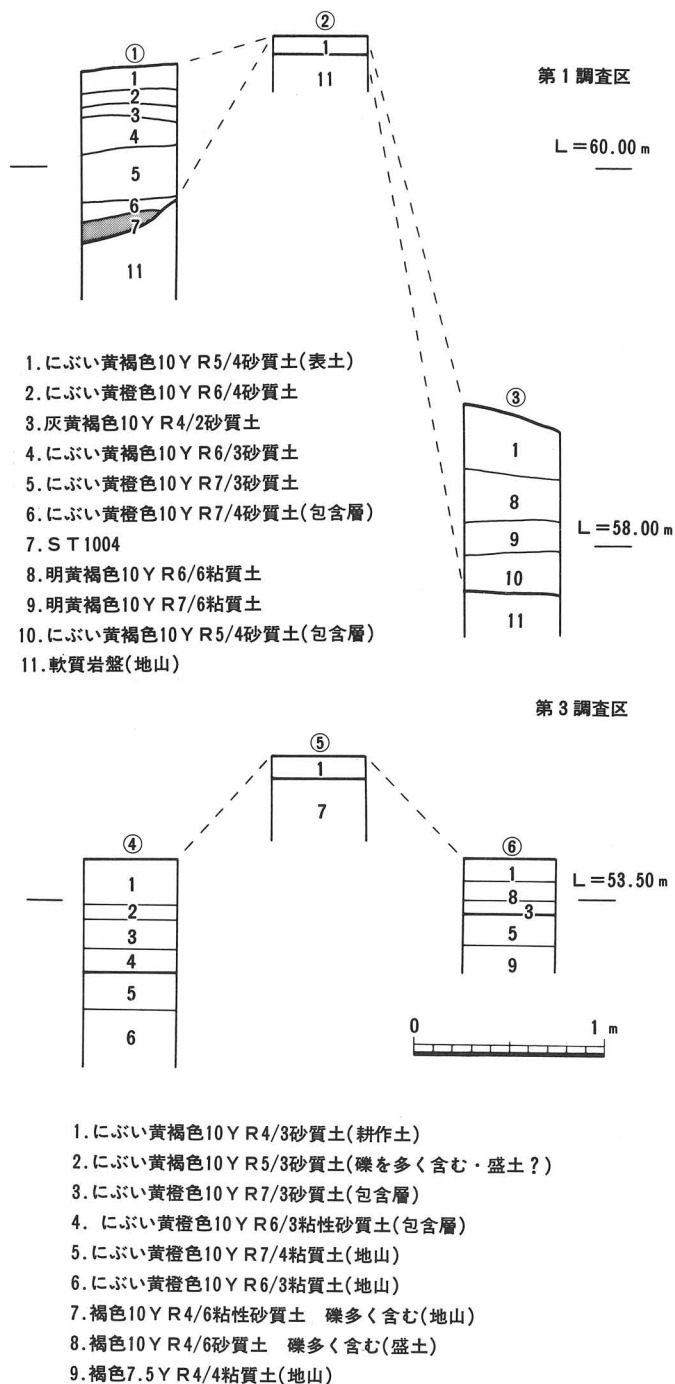
3 調査成果

A 天神山遺跡

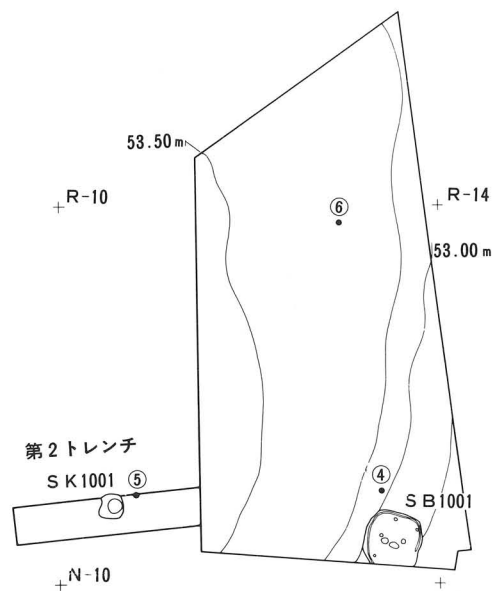
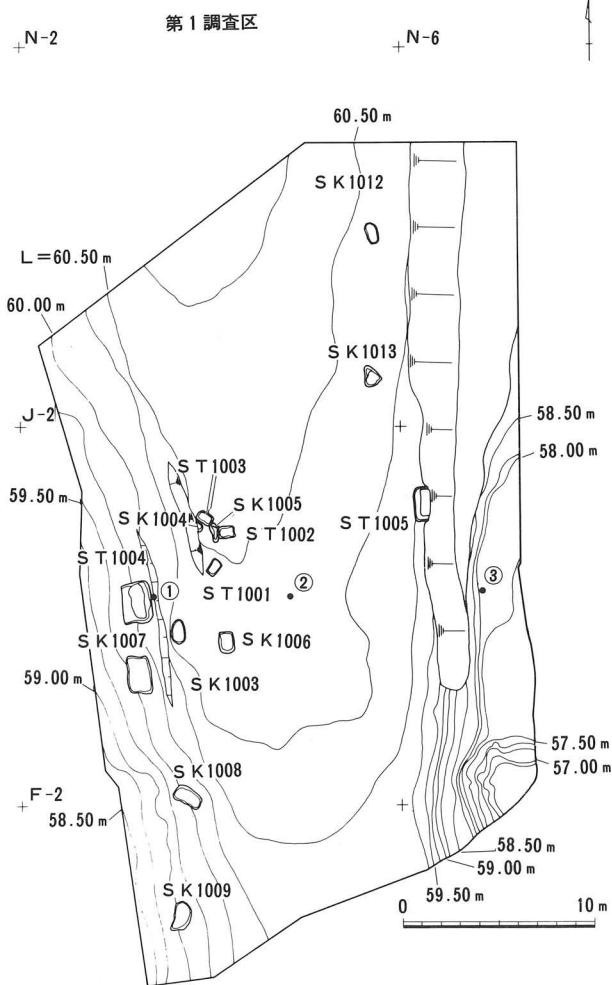
(1) 基本層序

本遺跡の堆積は、削平・盛土等がかなり行なわれているものの、遺構面の確認できた第1調査区、第3調査区B地区では比較的単純な堆積をなしている。したがって、第5図に示した柱状図がそれぞれの調査区の基本的な堆積状況を示している。いずれの柱状図も、試掘トレンチのものを利用した。なお、柱状図の位置については、第6図に示している。

第1調査区は南に延びるなだらかな尾根である。この尾根は、後世の改変が激しく、先端部分は墓地として利用され、調査地の北隣は採土により切りとられ、南隣は貯水タンクが建設されている。調査地も尾根頂部が削平され、畑地となっているのをはじめ、両斜面部にも手が入っている部分がある。柱状図①～③をみて明らかなように、尾根頂



第5図 天神山遺跡 基本土層実測図



第3調査区

第6図 天神山遺跡 遺構配置図

部②地点は削平された地山に表土がのっているだけである。両斜面部には弥生時代の遺物を少量含んだ第6層、第10層がある。①地点では、遺物包含層上の堆積は比較的安定した状況を示す。③地点では、すぐ北側で斜面が削られている影響があるのか、第1・8・9層については安定性に欠ける。

第3調査区A・B地区は、斜面部を近世に屋敷地として、さらに段々畑に改変した地点である。⑤地点は表土直下が10cm大の礫を多く含む地山層となる。便槽（SK1001）もこの面で検出されていることから、おそらくこの上面が近世末まで屋敷地として利用されていたと考えられる。④・⑥地点は、調査前には藍畑として利用されていたが、耕作土下は、両地点とも盛土と考えられる10cm程度の礫を多く含む層を間に挟み、④地点では2層の、⑥地点では1層の包含層が存する。第3層は弥生時代から近世の遺物を含む。第4層は弥生時代の遺物包含層である。第5層を地山とするが、弥生時代の遺構面が残存するのは④地点付近の狭い範囲だけと捉えており、⑥地点では後世に遺構面が削平されて、新しい遺物包含層（第3層）が上に被っていると考えられる。

(2) 遺構と遺物

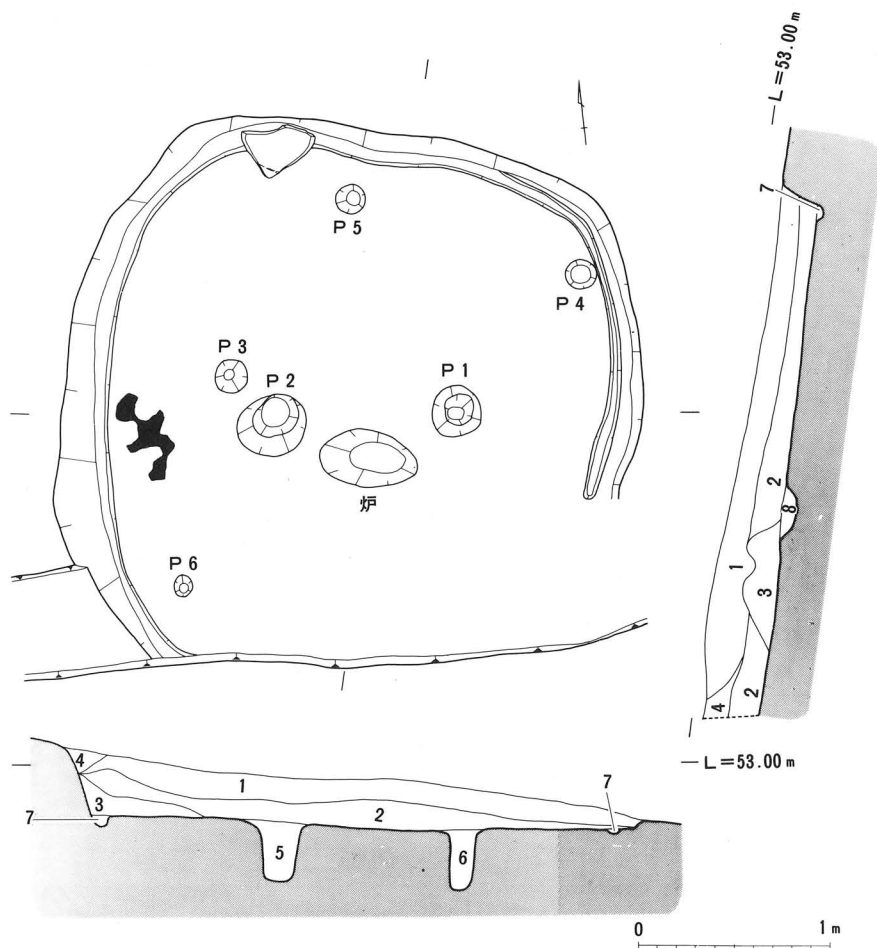
遺構の配置については、第6図に示すとおりである。第1調査区は、尾根の東西の斜面近くに遺構が残存している。検出された遺構は、土墳墓と考えられるもの5基、土坑9基である。出土遺物からみて弥生時代後期を中心とする時期のものであると考えられる。第3調査区は、A地区の試掘No.2で近世の民家の遺構が、B地区では、弥生時代の遺構面の残存面積は少ないが、後期前葉の竪穴住居跡が1基検出されている。

①弥生時代

竪穴住居跡（SB1001）（第7図）

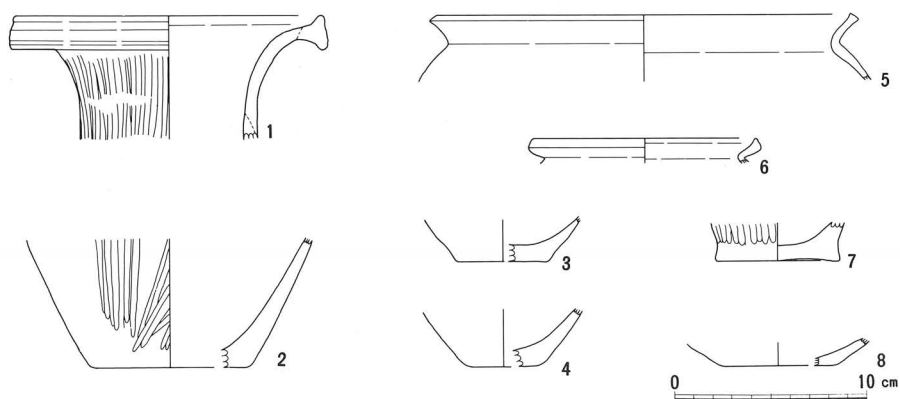
一辺3.05mの隅丸方形のプランを有し、深さは西側で28cm、東側で10cmを測るが、南東部分は壁を欠失している。幅10cm前後の周壁溝を巡らす。住居中央部に長軸52cm、短軸30cmの楕円形を呈し、深さ7cm程度の浅い炉がある。ピットは6ヵ所検出し、検討の結果、炉の両端にあるP1・P2が、深さそれぞれ30cm、32cmを測り、この2ヵ所を支柱穴とする構造であったことが推定できる。

住居北端の緩いコーナーに砂岩台石が据えられ、周辺にはサヌカイトの剥片が散乱する。台石の際の壁に密着して石鏃（第9図13）、炉の際の床面でも、石鏃（第9図12）が出土しているのをはじめ、覆土中から、合計6点の石鏃が検出されている。

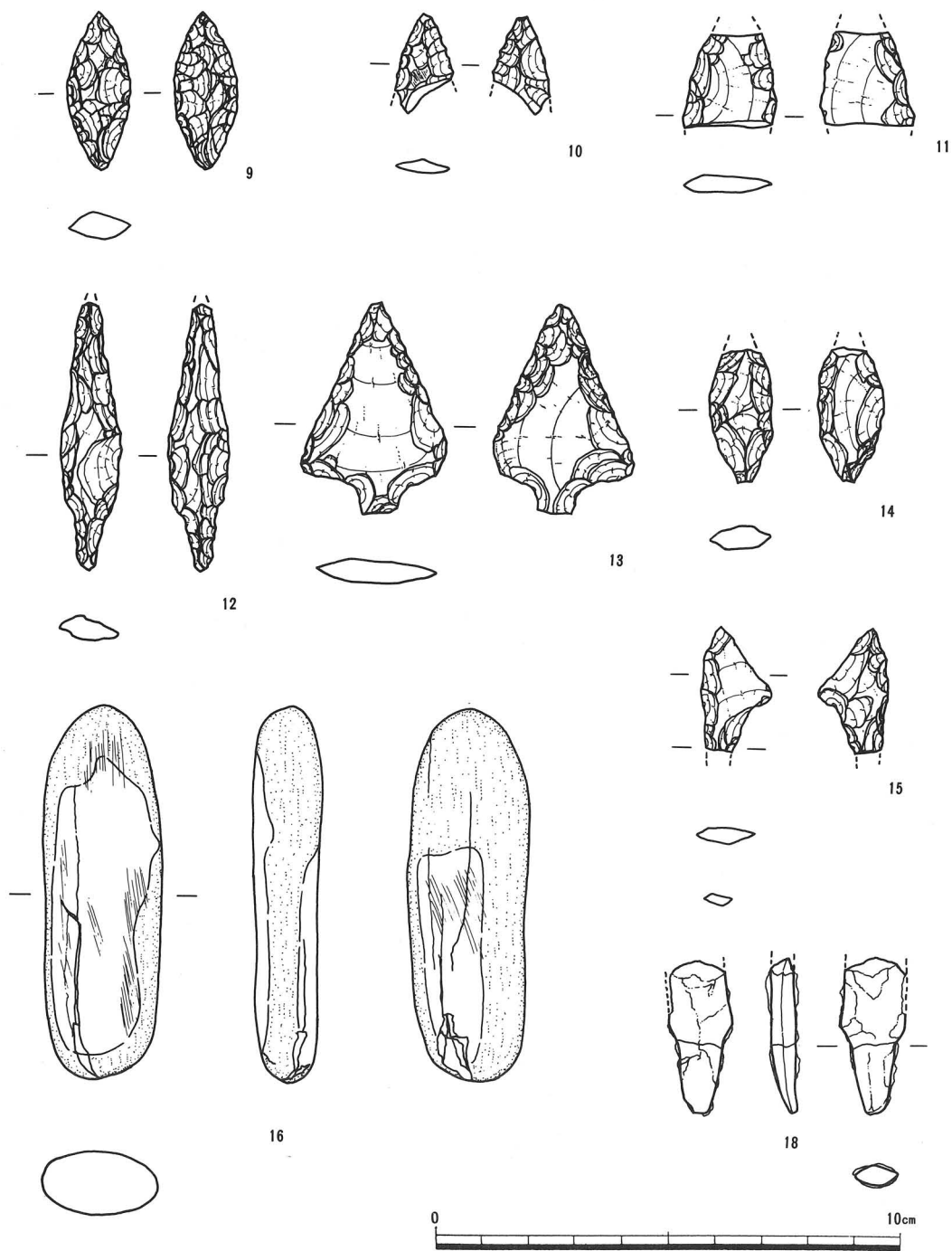


- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1. にぶい黄橙色10Y R6/4砂質土 | 6. 黄褐色10Y R5/6粘質土(炭化物含む) |
| 2. にぶい黄橙色10Y R5/3粘質土 | 7. にぶい黄橙色10Y R6/3粘質土 |
| 3. にぶい黄褐色10Y R5/3粘質土(炭化物、焼土含む) | 8. 黄褐色10Y R5/6粘質土(炭化物、焼土多量に含む) |
| 4. 明黄褐色10Y R6/6砂質土 | (アミの部分は炭化材のひろがり) |
| 5. 明黄褐色10Y R6/6粘質土(炭化物含む) | |

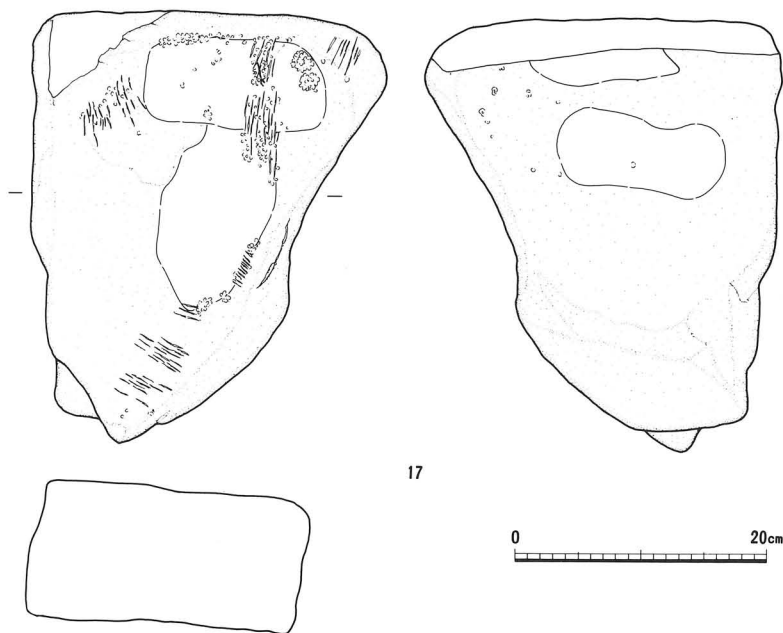
第7図 SB1001実測図



第8図 SB1001出土遺物実測図 (1)



第9図 S B 1001出土遺物実測図 (2)



第10図 S B 1001出土遺物実測図 (3)

西壁際の床面には炭化材が散乱し（第7図 網の部分）、焼土痕もみられる。土器もこの付近で集中して出土している。

出土遺物（第8～10図）

覆土からの出土遺物は、弥生土器片234点、石鏃6点、石錐1点、磨石1点、サヌカイト片26点、結晶片岩5点、鉄鏃（？）1点、それと前述した砂岩台石である。

弥生土器は細片が多く、全体を復元できるものはないが、辛うじて実測可能な個体8点を図示した（第8図）。1は、広口壺である。直立する頸部から緩やかに外反する口縁部を持ち、口縁端部は上下に拡張して2条の擬凹線を施す。頸部外面はタテハケ調整、内面および口縁部はヨコナデで仕上げられている。5・6は甕で、「く」の字状に屈曲して外反する口縁部を持ち、端部は、5は平坦に、6はやや肥厚させ下端を曖昧に納めている。底部は7がやや傾向を異にしているが、平底で、外方に直線的に立ち上がる。これらの特徴から、後期前葉の様相⁽¹⁾を示すものと考えられる。

9～14（第9図）は、石鏃である。うち4点は破損しているが、6点ともに、長さは復元すれば3cmを越える大型品で、形態的にバラエティに富んでいる。松木武彦氏は戦闘用石鏃の基準として、3cmを越えるものを提唱している⁽²⁾が、いずれもこれに該当する。11～14が1次剥離面を中央部に残し、縁辺を調整した粗雑なつくりであるのに対し、9・10は全面

に細かな調整を行っている。

15は、サヌカイト製の石錐である。錐部を欠損している。

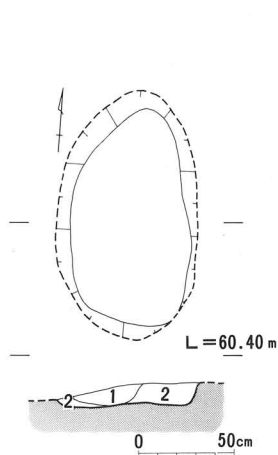
16は、磨石である。黒色片岩製のこの石器は、両端の丸い偏平な棒状を呈し、表裏面に研磨された面を持っている。同様の石器は、同じ吉野川流域の土成町北原遺跡東地区土壌3、西地区土壌11、北原～大法寺遺跡S K1009、前田遺跡S B1004で出土している⁽³⁾。研磨面が凸面を呈しているので、磨石としたが、どのように使用されたものかはいずれの場合も不明である。

17は砂岩の台石である。表裏面とも一部に弱い砥面をもつが、特に表面に筋状の敲打痕を多数残す。

18は鉄製品である。鉄鏃の基部とも、刀子の基部との見方もできる。

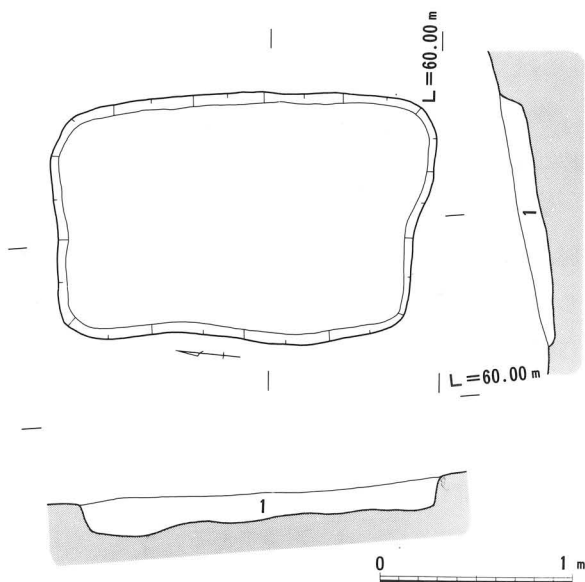
土坑（S K1003）（第11図）

第1調査区の尾根頂部に近い平坦面で検出された楕円形の土坑である。上半は削平されているものと考えられ、現存規模は長軸1.3m、短軸0.75m、深さ14cmである。断面形は浅い皿状を呈する。弥生土器片59点と、炭化物を出土しているが、土器は細片であり、時期決定は困難である。他の土壌墓と考えられる遺構とも平面形等で異なり、性格については不明である。



1. にぶい黄橙色10Y R6/4砂質土
2. 明黄褐色10Y R7/6砂質土

第11図 S K1003実測図



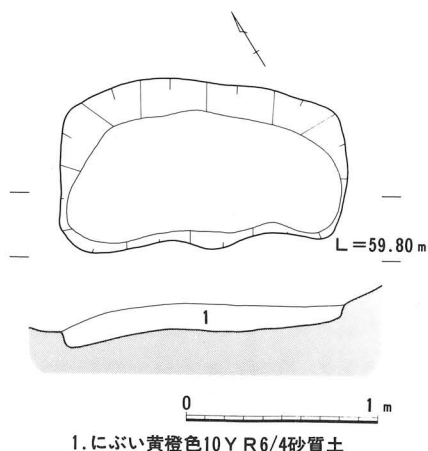
1. にぶい黄橙色10Y R7/4粘性砂質土

第12図 S K1007実測図

土坑（S K 1007）（第12図）

第1調査区西側の斜面部、土墳墓（S T 1004）に並んで検出された長方形の土坑である。規模は長辺1.93m、短辺1.32m、深さ15cmを測る。断面形はほぼ長方形であり、底面は谷に向かってやや傾斜する。覆土は分層できず、S T 1004ほどには硬く締まっていない。

出土遺物は弥生土器の細片が2点と炭化物少量である。覆土の状況も隣接する土墳墓とは異なっているが、規模・方向等は同じ傾向を示すことから、墓の可能性も考えておきたい。



第13図 S K 1008実測図

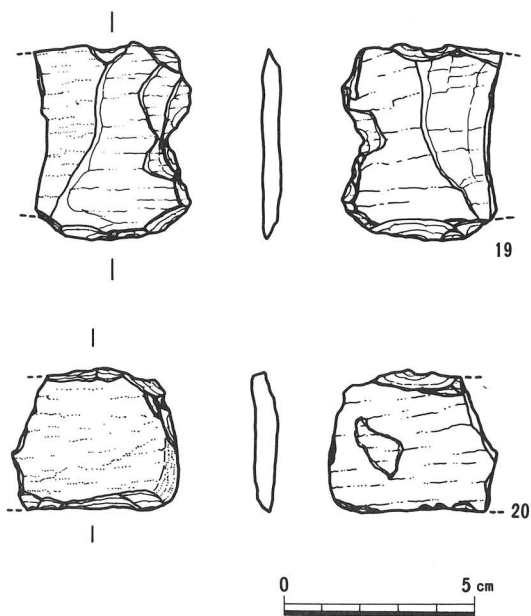
土坑（S K 1008）（第13図）

第1調査区西側斜面部で検出された、長方形の土坑である。規模は、長軸1.5m、短軸0.9m、深さは中心部で15cmである。断面形は不整な長方形を基本とするが、底面は、平坦ではなく、やや波打つ形状をしている。性格等については不明である。

出土遺物（第14図）

弥生土器片2点、打製石庖丁片2点、炭化物少量が出土している。弥生土器片は細片であり、時期決定は困難である。打製石庖丁（第14図19

・20）はいずれも破片で全体形状は不明である。19は端部に袈りをつけ、刃部の調整もしっかりしている。20は袈りがみられず、刃部の調整も粗い。石材はいずれも石英質を多く含んだ結晶片岩である。



第14図 S K 1008出土遺物実測図

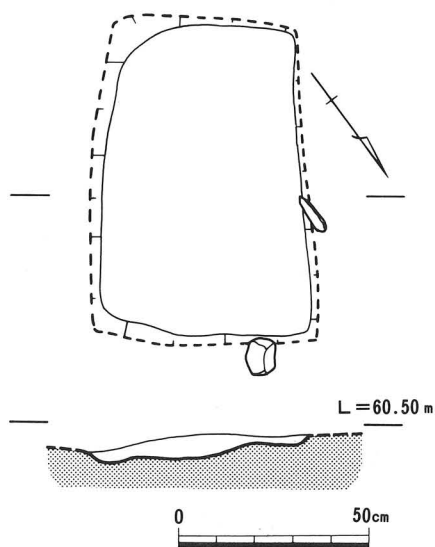
土墳墓（S T 1001）（第15図）

第1調査区の西側尾根頂部に近い地点で検出した長方形の土墳墓である。上半部は削平され、底面に近い部分のみ検出された。規模は長辺は0.9m、短辺0.58m、現存の深さは7cm

である。北辺に白色円礫（石英）、西辺に沿って打製石庖丁が出土しているが、これが副葬遺物の一部と考えられる。

出土遺物（第16図）

前述した打製石庖丁1点、白色円礫1点のほか弥生土器片20点が出土している。弥生土器片はいずれも細片で、時期決定は困難である。打製石庖丁は完存品ではあるが、両端に抉りもなく、成形しただけの粗雑なつくりのものである。石材は結晶片岩であるが、絹雲母の多く含まれた部分を使用している。

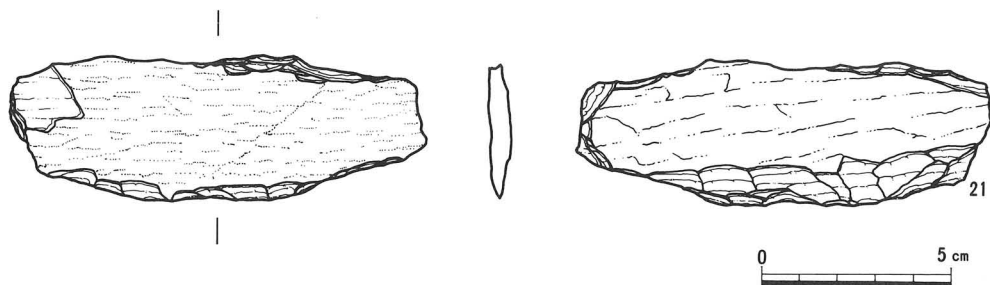


1. 明黄褐色10Y R6/6粘性砂質土

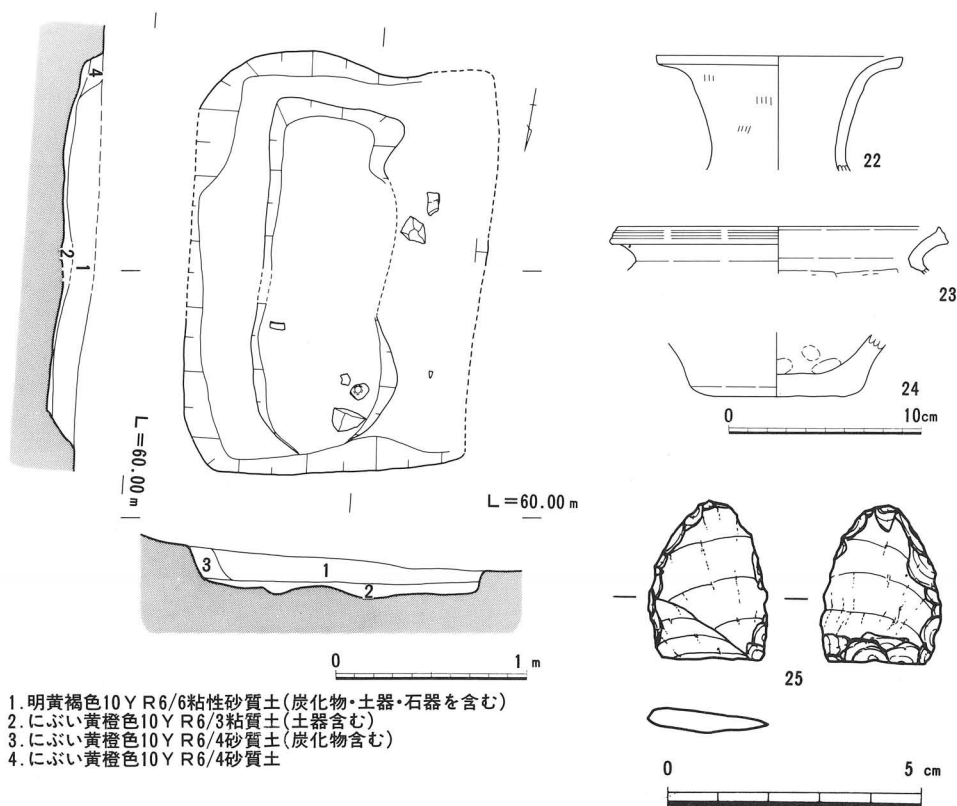
第15図 ST 1001実測図

土壌墓（ST 1004）（第17図）

第1調査区の西側斜面部で検出された土壌墓である。試掘時の東西トレンチで遺構の中央を一部掘り抜いたこと、斜面の堆積が不明瞭であったので、土層観察用の畦で谷側のプランを確認したことから、図では推定線が多くなっている。規模は長辺2.18m、短辺1.55mの長方形のプランをもち、深さは東壁で23cmを測る。土壌中央部で、1.85m×0.68mの範囲にわたり、3～4cmの浅い落ち込みを検出した。覆土は非常によく締まっており、炭化物と弥生土器片を含んでいる。他に、石鏃、スクレイパー、台石が出土しており、副葬遺物と考えられる。中央部の落ち込みは不明瞭であり土層観察でも主体部の側板の立ち上がりは確認できなかったが、木棺直葬の可能性も考えられる。時期は甕形土器の形状から弥生時代後期前葉と考えられる⁽⁴⁾。



第16図 ST 1001出土遺物実測図

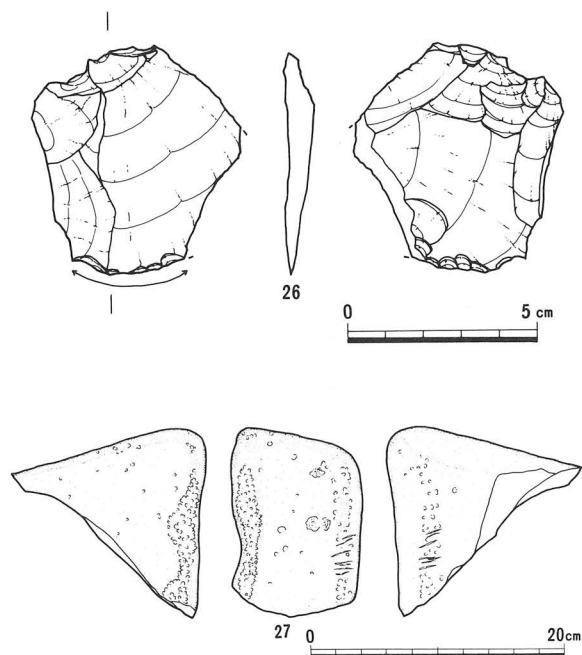


第17図 ST 1004実測図

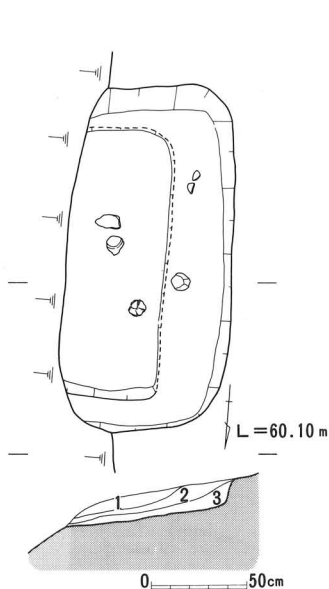
出土遺物(第18図)

弥生土器片26点、石鏃1点、スクレイパー1点、砂岩台石1点、サヌカイト片10点、結晶片岩1点、炭化物が出土している。

弥生土器は、ほとんどが細片である。22は広口壺形土器である。やや開き気味の頸部から、緩やかに屈曲して外反する口縁部をもつ。端部の形態はやや損傷を受けているが平坦に納めているものとみられる。23は甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁部を肥厚させ、端部に2条の擬凹線、体部内面の上端までのヨコヘラケズリが特徴である。24の底部は表面の剥離が激しく、

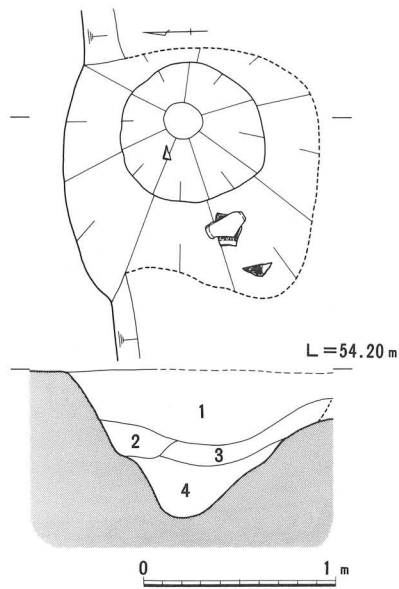


第18図 ST 1004出土遺物実測図



1. にぶい黄褐色10Y R6/4砂質土
2. にぶい黄色2.5Y 6/4粘質土(炭化物・土器含む)
3. 灰黄色2.5Y 6/2粘質土(炭化物・土器含む)

第19図 S T 1005実測図



1. 明黄褐色10Y R6/6砂質土
2. 黄褐色10Y R5/6砂質土
3. にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土
4. 明黄褐色10Y R6/8砂質土

第20図 S K 1001実測図

調整などの特徴を確認できないが、砂粒を極めて多く含む。

25の石鏃は、縁辺の調整が非常にうまく、粗雑なつくりのものであり、未製品との見方もできる。26はサヌカイト製のスクレイパーである。一部を欠損しているが、下辺に軽い両面調整の刃部を形成している。

27は砂岩の台石である。欠損しているが、稜線部を中心に粒状および筋状の敲打痕がみられる。

土壌墓 (S T 1005) (第19図)

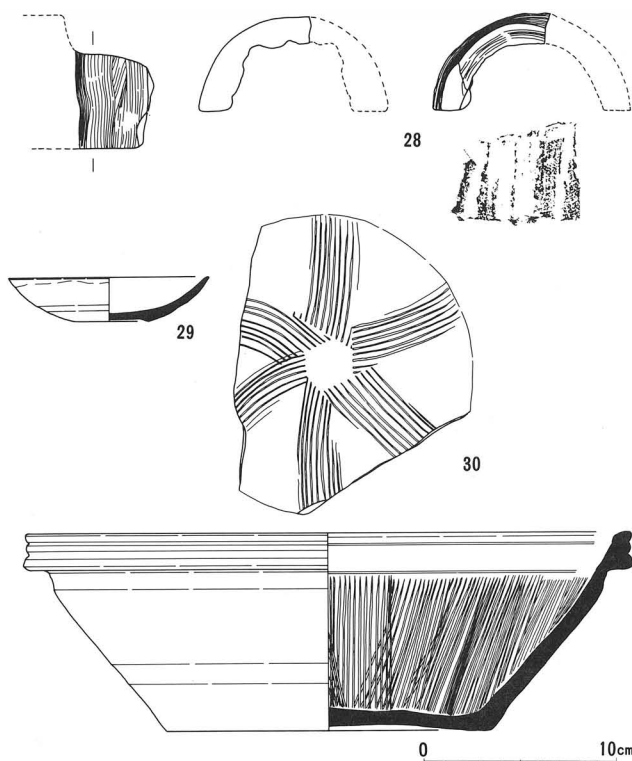
第1調査区東側斜面部で検出した土壌墓である。斜面側半分を後世の削平によって失っている。規模は、長辺1.85m、短辺は残存部分で0.86m、深さ12cmを測り、長方形のプランを有している。覆土は粘土質で、非常によく締まっている。中央部にS T 1004と同じように、3 cm程度の浅い落ち込みがみられ、長さ1.42m、残存幅0.52mの規模を測るが、明瞭ではない。

覆土中より、弥生土器片69点、サヌカイト片1点を出土するが、土器はごく細片で、風化も激しく、時期を決定することは困難である。しかし、規模、構造が似ていることから、S T 1004と同性格、ほぼ同時期の遺構であると考えられる。

②近世

便槽（S K 1001）（第20図）

第3調査区の試掘トレンチNo.2で、表土直下で検出された。確認のためトレンチを広げたところ、炭化物と焼土の詰まった浅い土坑（S K 1002）が検出され、民家別棟につくられた便所と風呂の焚き口であることが判明した。S K 1001は残存部で1.3m×1.4mの隅丸形状のプランを有する。断面形状は屈折した三角形形状を呈し、深さは86cmを測る。陶器播鉢、



第21図 S K 1001出土遺物実測図

灯明皿、丸瓦の玉縁部分が出土している。便所廃棄の際の儀礼と考えられ、民俗例が知られる⁽⁵⁾。

播鉢の形状から時期は18世紀後半期が考えられ、聞き取り調査ともほぼ一致する。

出土遺物（第21図）

28は丸瓦の玉縁である。表面をハケメ調整、内面に布目を残す。黄橙色を呈し、煤の付着がみられる。29は灯明皿である。京焼で、口縁部から内面に浅黄色の釉を施し、外面に煤の付着がみられる。30は備前系の播鉢である。体部内面に13～14条の櫛描条線を隙間なく施し、底面は、放射状に8～9条単位で施される。口縁端部は肥厚し、2条の凹線を巡らせる。

③遺構に伴わない遺物（第22・23図）

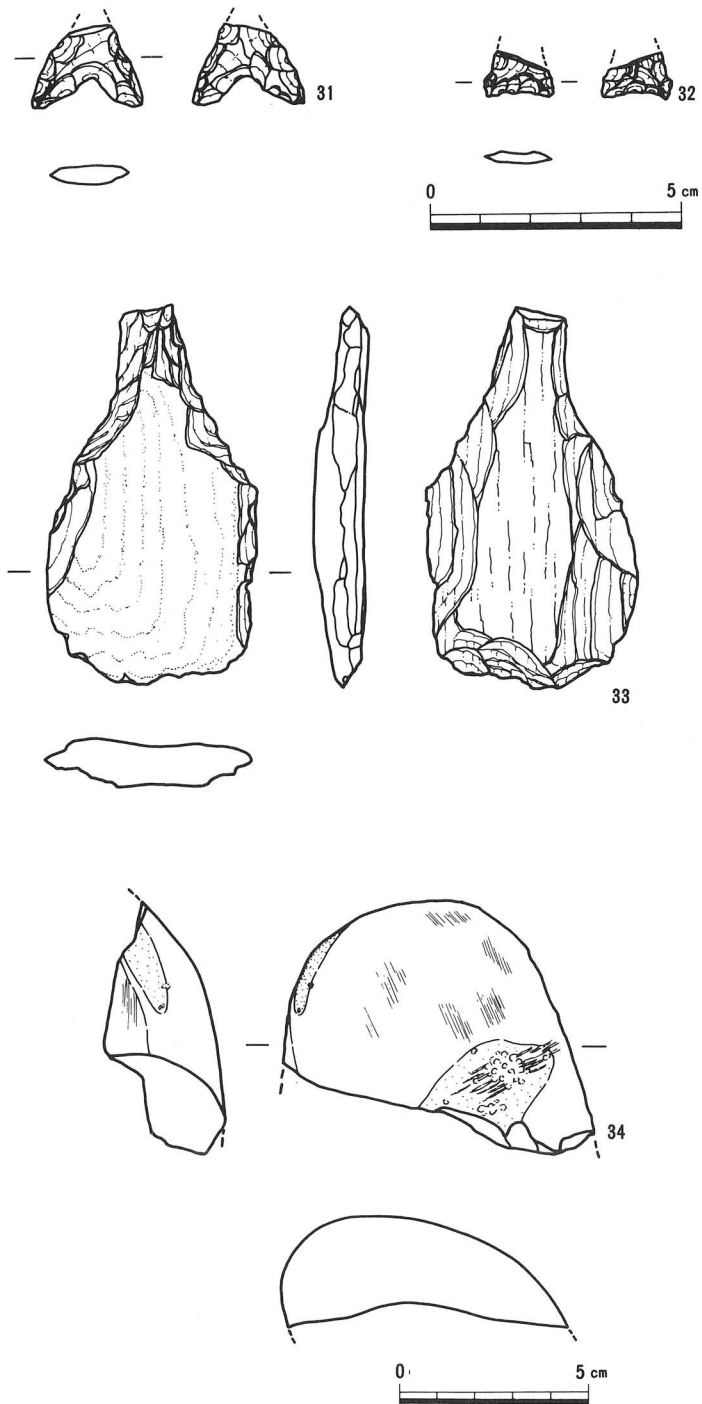
31、32は石鏝である。31は第1調査区の表面採取であるが、風化の度合いが他と較べて著しく、基部の挟りも深いことから、縄文時代のものである可能性が高い。32は第3調査区で出

土し、S B 1001に関連する時期のものではないかと考えられる。

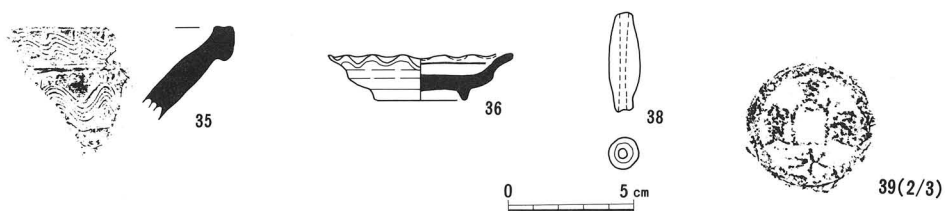
33は結晶片岩製の打製石斧であるが、基部と体部が肩をもって区別される、いわゆる有肩石斧Ⅰ型の類⁽⁶⁾であり、土掘り具として使用されたものであろう。弥生時代の遺物包含層から出土している。

34は磨石である。破損品で、全体像は不明であるが、楕円礫であったと推定できる。ほぼ全面を磨面としており、一部にしか自然面とみられる部分は残っていない。自然面の一部に粒状・筋状の敲打痕がみられる。石材は、肉眼観察では石英班岩とみられる。

35は須恵器である。第1調査区南東部斜面、F-7グリッドから出土した。器台の口縁部とみられ、口縁端部外面と、口縁直下に櫛描波状文を施す。古墳時代後期（陶邑編年

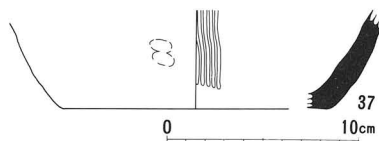


第22図 遺物包含層等出土遺物実測図 (1)



T K 209段階)と思われる。

36は瀬戸・美濃系の輪花皿である。削りだし高台で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部を棒状工具によって押さえる。高台裾を除き、浅黄色の釉を施す。



37は須恵質の搗鉢である。内面の条線は5条 第23図 遺物包含層等出土遺物実測図 (2) まで確認できる。

38は紡錘形の管状土錘である。39は銅銭、「寛永通寶」。径24mmを測る。

(3) まとめ

天神山遺跡は、調査対象地内の、耕地整理・採土等による旧地形の改変が激しく、尾根の部分および東斜面のごく一部で弥生時代の遺構面が検出されたほかは、遺構面は残存していない。尾根の部分では、頂部が削平されているものの、斜面部では土墳墓とみられる遺構5基、土坑9基が検出された。土坑は、確定できないものの、土墳墓ないしはそれに近い性格を持つものと思われ、土墳墓（S T 1004）と同じ後期前葉を中心とする時期が考えられる。この尾根上は墓域と考えられる。

集落の存在については、東斜面部で検出されたS B 1001が所属年代もほぼ一致し、その一部を構成していたと考えられる。しかし、一辺3 m強の小規模住居1基のみであり、戦闘用石鏃が多く出土していること、炬が浅く小さいこと、常時使用された住居と考えるよりは見張り小屋的な存在であった可能性がある。この斜面部の弥生時代の遺構面は現在では住居跡周辺を除いて失われているが、比較的深い庚申西谷川に面する斜面部に集落の中心があったと考えるよりは、調査区外の尾根の南側周辺が、遺物散布地として知られており、この周辺を集落の中心と推定しておきたい。

この地域は1963年の文化財基本調査で天神山古墳群とされる地域の一部に含まれている。同古墳群については、その後調査もなく、実態はまったく不明であるが、須恵器器台の出土

は、削平された尾根頂部にかつて古墳が存在した可能性を示唆するものと考えられる。

注

- (1) 吉野川下流域での土器編年で後期の開始については、確立しているとは言えないが、諸特徴は、中期末から後期前葉の微妙な時期の様相を示しているものと考えられる。なお、吉備・讃岐地方、あるいは県内で後期初頭に位置づけられる土成町北原遺跡の広口壺は口縁端面が内傾するのに対し、本遺跡例は端面が直立することに特色が見いだせる。
- (2) 松木武彦「弥生時代の石製武器の発達の地域性－特に打製石鏃について－」『考古学研究』35－4 1989
松木氏は、佐原 真氏の1964年の論（「石製武器の発達」『紫雲出』詫間町文化財保護委員会）を踏襲しながら発展させ、狩猟用石鏃と戦闘用石鏃の区分の境界値として、全長30mmもしくは重量2gを目安として設定し、これ以上の値を示すものを戦闘用石鏃と捉えている。
- (3) 谷 匡人・林慎二『土成町北原遺跡－内陸工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』徳島県教育委員会1988
久保脇美朗「北原～大法寺遺跡」高岡裕「前田遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報V o 1. 2』 1991
- (4) 口縁端部の凹線も退化しており、甕形土器の内面ヘラケズリが下半部から、上半部までおよぶ段階を、後期の始まりのメルクマールとする考え方に従い、後期前葉のものとする。
- (5) 便所廃棄の際、便槽に農具などを入れる例がある。燈明皿や播鉢といった生活用具を廃棄時に投入するのも、同様の例と考えられる。
- (6) 神村 透「石製耕作具」『弥生文化の研究 5 道具と技術 I』雄山閣 1985

B 青谷遺跡

(1) 基本層序

本遺跡の基本的な層序は第24図に示した通りである。各調査区とも、耕地整理等の削平・盛土を行っているところが多くみられる。また、遺跡の範囲が広いことから、各調査区ごとで異なるが、比較的単純な堆積状況をしめしている。したがって、柱状図で提示している。柱状図の位置については、第25～27図にその地点を番号で記入している。

遺跡の西端を庚申西谷川、中央に青谷、東端に前坂口谷川が南流するが、いずれも小河川で、遺跡周辺では開析作用は進んでいない。前坂口谷川で小扇状地状をなす他は、山麓緩斜面である。土質は、扇状地の多い阿讃山麓には珍しく、泥岩風化土が主体をなしており、砂岩はあまり含まれていない。第1調査区から200mほど庚申西谷川をさかのぼった地点で、中央構造線断層系の破碎帯が観察できる。

第1調査区は、泥岩小礫を多く含んだ堆積層を地山とし、その上に黄褐色ないしは、にぶい黄橙色の泥岩風化土の5・6・8層が遺物包含層として被る。遺物の所属年代は旧石器から近世の間と幅広いが、密度は薄い。その上層については、段々畑に耕地整理された際の盛土等が堆積している。

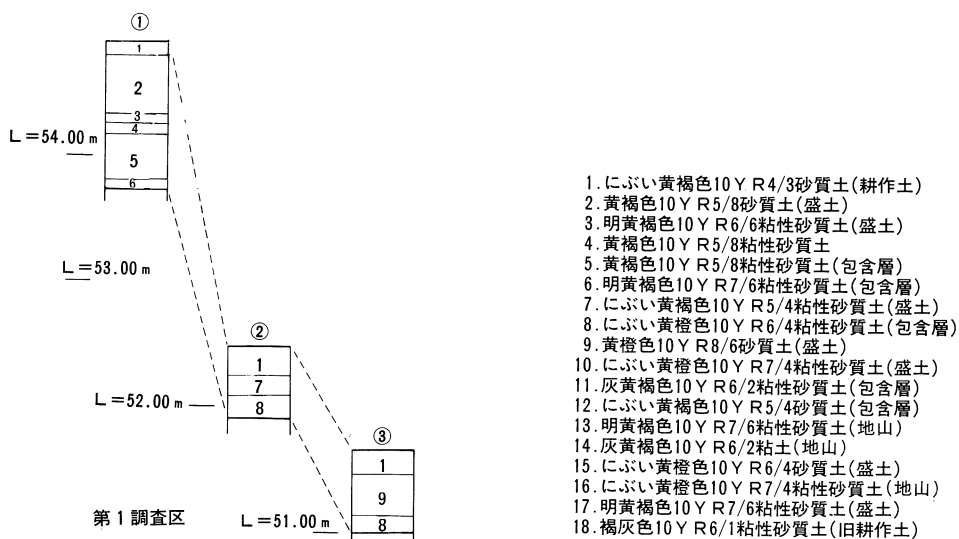
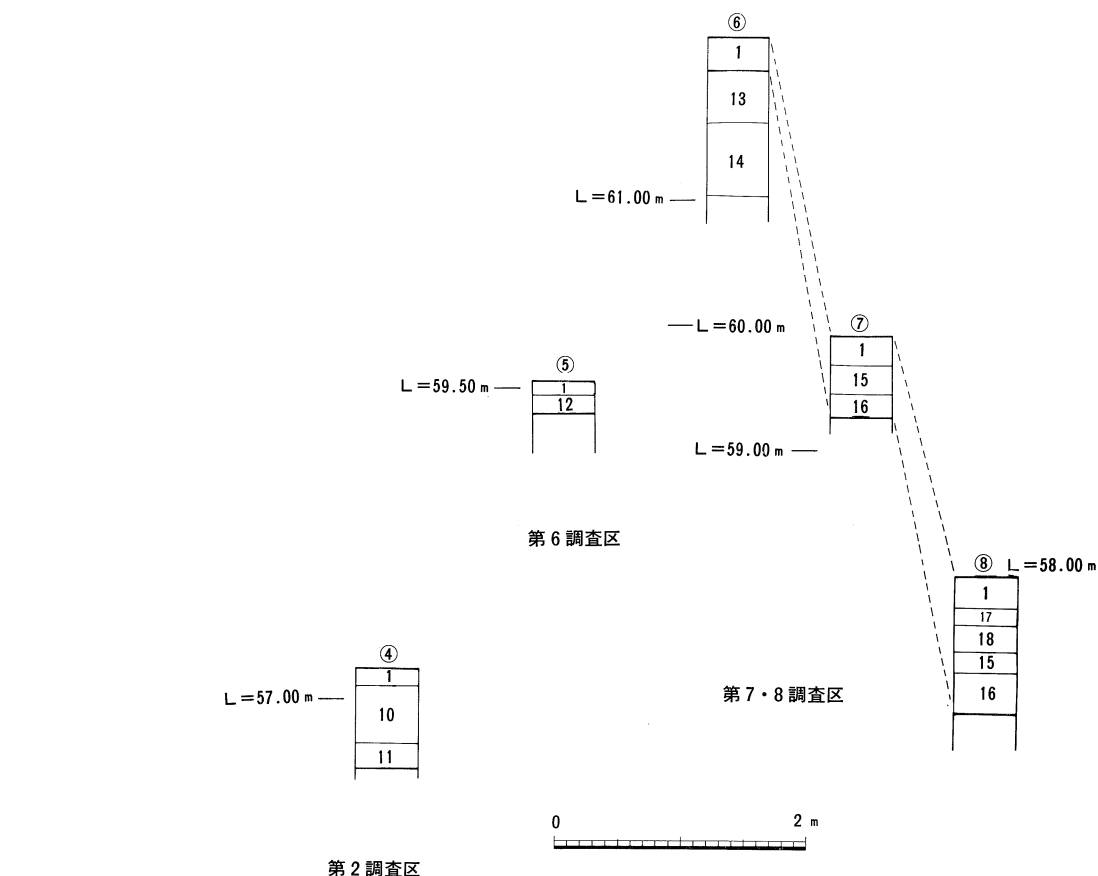
地山下層の暗褐色砂礫層中からも、第1調査区D地区で削平された部分から縄文時代早期に特徴的とされる形態の石鏃が出土し、炭化物が付近に散った状態が観察されたので、精査を進めたが、遺構は検出されなかった。早期の包含層ないしは遺構面の可能性は残るが、この砂礫層を分層することはほとんど不可能であったので、断念した。

第2調査区は、本遺跡では最も明確な遺物包含層が存在する。段々畑に耕地整理され、果樹園となっていたが、果樹を植える掘り方も、遺物包含層にはほとんど影響を与えていない。基本の堆積は表土、盛土、遺物包含層、地山である。出土遺物は弥生時代に限られる。

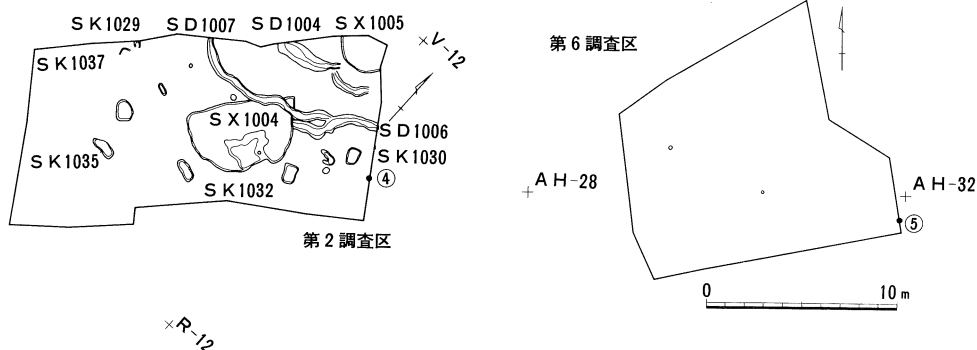
地山は第1調査区と基本的に同じで泥岩小礫を多く含んだ堆積層である。

第6調査区は、表土下は遺物包含層にあたる層が堆積するが、遺物の密度は極めて薄い。遺構面は他の調査区と同じである。

第7・8調査区も基本的には同じであるが、⑥地点は耕作土下が遺構面と捉えられ、⑦・⑧地点では16層が遺物包含層、15層は古い時期に耕地整理した際の盛土と考えられる。第8調査区はさらに水田化したために、北側を削り、南側の旧耕作土上に盛土が行なわれている。16層は、縄文時代以降の遺物が包含されているが、その密度は薄い。



第24図 青谷遺跡 基本土層実測図



第26図 青谷遺跡 遺構配置図 (2)

なお、⑥地点の14層は、第2調査区の遺物包含層と同じような堆積状況にある。チャート剥片、上面からチャート製石鏃が出土しているが、この層が削平により露出している第7調査区B地区の北東部では、それ以外の遺物の出土はなかった。第2遺物包含層の可能性があったが、遺物の包含密度はかなり薄いと考えて、露出地点だけの精査で終了した。

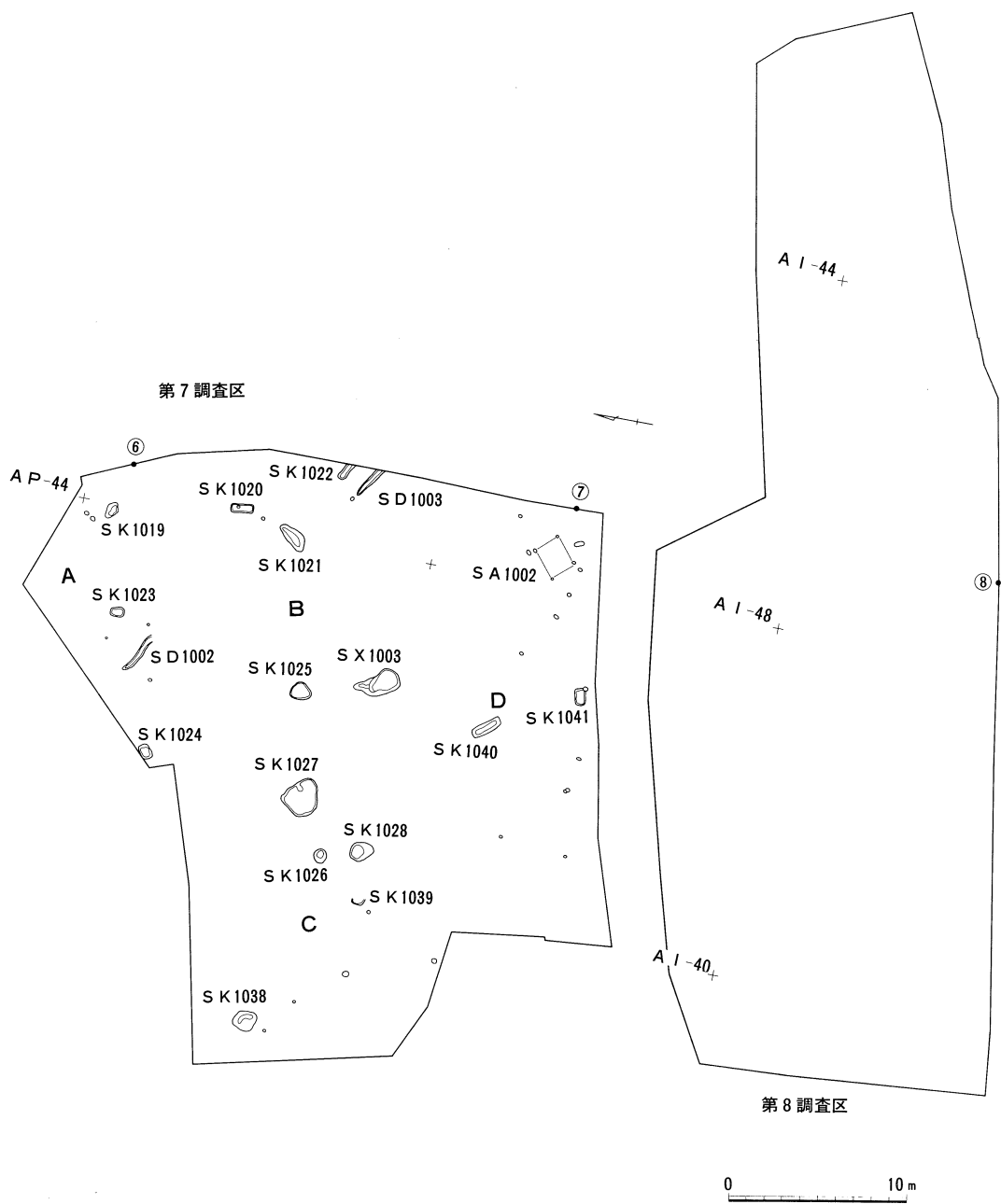
(2)遺構と遺物

第1調査区(第25図)は、畑地一筆ごとにA～D地区の副記号を付けているが、各調査区とも北端は削平され、遺構面が残っていない。特にD地区は東南側の一部に遺構面が残存するだけである。遺構面の残存部分では、弥生時代の可能性のあるものから、中近世にいたる遺構が検出されている。土坑19基、ピット82基、溝1条、流路1条であるが、このうちピットは、1間×1間の建物跡になるもの1軒、および、柵列状に並ぶ箇所が3ヵ所あるが、いずれも所属時期等は不明である。

第2調査区(第26図)は、弥生時代の遺構が、土坑9基、ピット4基、溝4条、不明遺構2基検出されている。溝はSX1005を囲むように、弧状に巡りその外側に土坑・ピットが検出されている。

第6調査区(第26図)は、ピット2基が検出されているのみで、所属時期も不明である。

第7調査区(第27図)は、耕地整理で棚田になっているが、上段の水田をA地区、中段の水田を分割調査にともなって、東半をB地区、西半をC地区とし、下段をD地区とする。調査地はB・C地区の北辺で削平を受けているが、ほぼ遺構面は残存する。土坑14基、ピット29基、溝2条、不明遺構1基が検出されているが、弥生時代のものを中心に、縄文時代の可能性のあるものから、中近世のものまでが混在しているとみられる。このうち、SD1002・SD1003の2条の溝はA地区とB地区で検出されているが、本来は同一の遺構が削平によって分離したもので、途中にある弥生時代とみられるSK1021の存在から、かなり新しい時期の

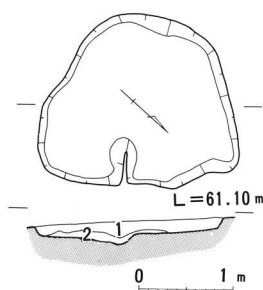


第27図 青谷遺跡 遺構配置図 (3)

ものと考えられる。また、D地区東端で、1間×1間の建物跡が検出されたが、所属年代は不明である。

第8調査区(第27図)は、北半が完全に削平され、遺構面の残りは南半に限られるが、遺構は検出されなかった。

①縄文時代



1. にぶい黄褐色10Y R7/4
粘性砂質土
2. 明黄褐色10Y R7/6粘性
砂質土

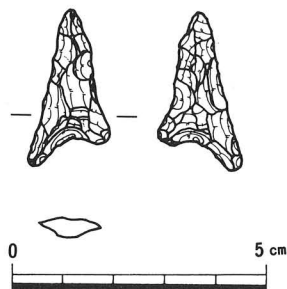
第28図
S K 1027実測図

土坑 (S K 1027) (第28図)

第7調査区B地区で検出された土坑である。不整形であり、長軸2.1m、短軸1.8m、最深部で24cmを測るが、北東辺中央部に、地山の稜が残り、2つの土坑の切り合ったものとも考えられる。混入の可能性も考えられる石鏃が1点出土しているだけで、性格等是不明である。

出土遺物 (第29図)

1は凹基無茎の石鏃である。サヌカイト製で、形状から、縄文時代のものと考えられる。

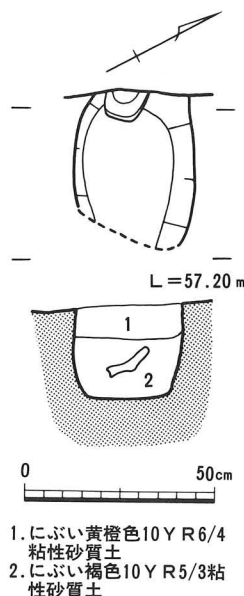


第29図
S K 1027出土遺物実測図

②弥生時代

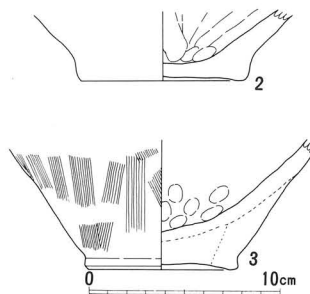
土坑 (S K 1029) (第30図)

第2調査区の北端で検出された土坑である。土坑の南端を試掘により欠失し、北端は調査区外に延びている。規模は長軸の検出部分で0.4m、短軸は0.3m、深さは25cmを測る。覆土は2層に分層できるが、いずれも締まりがある。弥生土器以外には出土遺物もなく、性格も不明である。



1. にぶい黄橙色10Y R6/4
粘性砂質土
2. にぶい褐色10Y R5/3粘
性砂質土

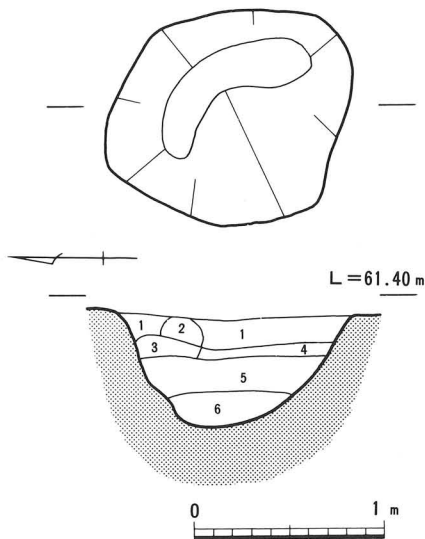
第30図 S K 1029実測図



第31図 S K 1029出土遺物実測図

出土遺物（第31図）

弥生土器片が2点出土している。いずれも壺形土器の底部とみられる。2は内面のユビオサエ、ユビナデが目立つ。3は、底部輪台技法を用い、体部外面はタテハケとナデ、内面はユビオサエが顕著である。他の包含層等の出土土器にも共通するが、全体のプロポーシオンや口縁部形態の判然とするものはほとんどなく、時期の決定には良好な資料とはいえない。



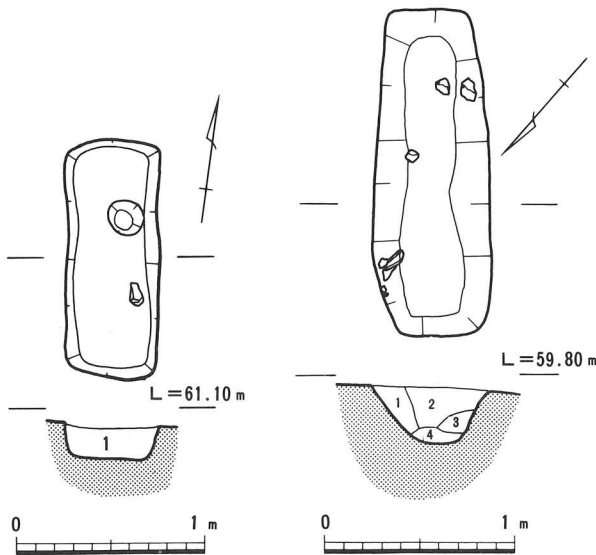
1. にぶい黄褐色10Y R7/4砂質土炭化物含む
2. にぶい黄褐色10Y R6/4砂質土(焼土含む)
3. にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土(焼土・炭化物含む)
4. にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土
5. にぶい黄褐色10Y R7/4粘性砂質土
6. 明黄褐色10Y R7/6粘性砂質土

第32図 S K 1038実測図

土坑（S K 1038）（第32図）

第7調査区C地区で検出された土坑である。不整楕円の形状を呈し、長軸1.4m、短軸1.25mを測る。断面形はU字状を示し、最深部で、54cmを測る。覆土は6層に分層でき、1層には炭化物粒、2層には焼土塊、3層はその両者を含む。土坑壁は直接熱を受けた痕跡はない。遺

物は、弥生土器片が、13点出土しているが、いずれも細片で、図化できるような個体はない。



1. 明黄褐色10Y R7/6粘性砂質土

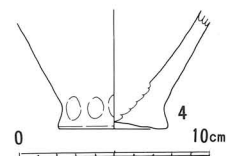
第33図
S K 1020実測図

1. 明黄褐色10Y R7/6粘性砂質土
2. にぶい黄褐色10Y R7/3粘質土
3. にぶい黄褐色10Y R6/4粘性砂質土
4. にぶい黄褐色10Y R6/4粘質土

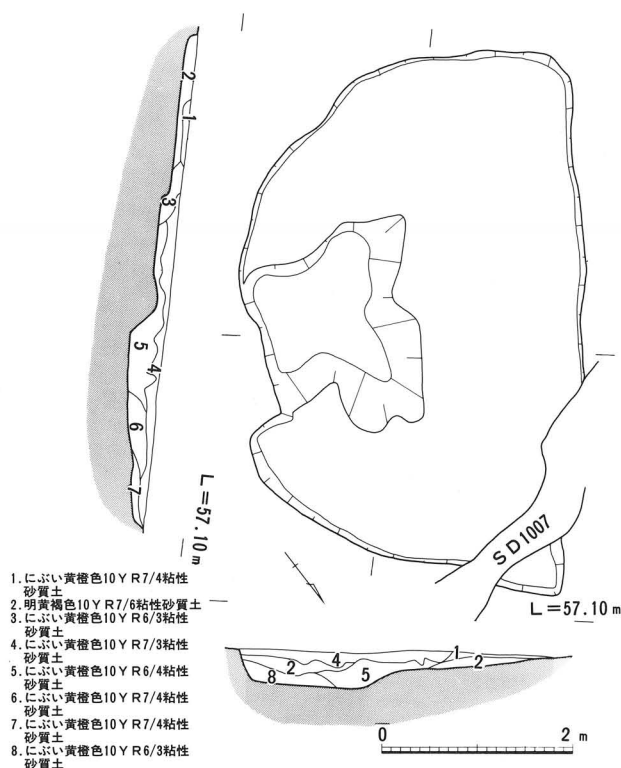
第34図 S K 1040実測図

土坑墓（S K 1020）（第33図）

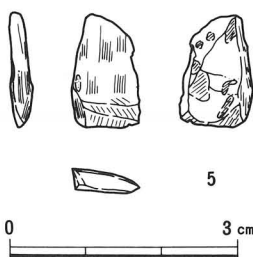
第7調査区B地区で検出された。長辺1.26m、短辺0.5mの長方形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さは16cm



第35図
S K 1040出土遺物実測図



第38図 S X 1004実測図



第39図 S X 1004出土遺物実測図

土坑 (S K 1002) (第40図)

第1調査区C地区で検出された不整形の土坑である。長軸2.0m、短軸1.6m、中央の最深部で25cmを測る。断面形は中央のくぼんだ逆台形に近い形状をしており、杯蓋と思われる須恵器の細片が1点だけ出土した。しかし、性格等は不明である。

土坑 (S K 1001) (第41図)

第1調査区C地区で検出された隅丸方形形状の土坑である。規模は、長軸1.02m、短軸0.65m、深さは30cmを測る。断面形は、逆台形状を呈し、上面はやや盛り上がる。赤褐色の焼土

不明遺構 (S X 1004) (第38図)

第2調査区、中央部で検出された不整形形状の遺構である。長軸5.8m、短軸3.17m、中央部で長軸2.3m、短軸1.6mの不整形に一段低くなる。深さは最深部で36cm、周辺部で12～3cmを測る。弥生土器片等を出土している。

出土遺物 (第39図)

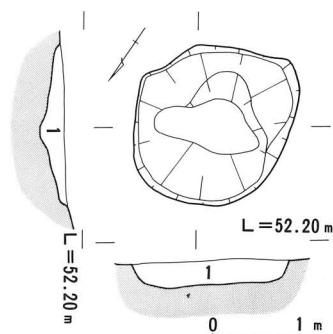
出土したのは、弥生土器片20点、磨製石斧状石製品1点、チャート小礫1点、とわずかである。弥生土器片には図化に耐えられるものではなく、時期決定は難しい。

5は、磨製石斧状石製品である。蛇紋岩製で、長さ1.5cm、幅0.85cm、厚さ3cmと非常に小さいもの

である。両面・側辺ともに、一部には自然面・剝離面を残すものの、丁寧に研磨されている。しかし、この大きさのものを最初から意図したとは考えにくく、磨製石斧の破損した剝片を研磨・成形したものではないかと考えられる。

③古代・中世

と、炭化物がつまり、他には青磁と陶器の細片が各1点みられただけである。試掘で一部が確認された当初は、炭窯を予想したが、規模が小さく、炭生産の遺構とは考えにくい。同様の出土状態を示す遺構はS K 1014、S K 1024、S K 1026、S K 1041があるが、円形のもの、隅丸方形形状のものがみられる。用途は不明である。

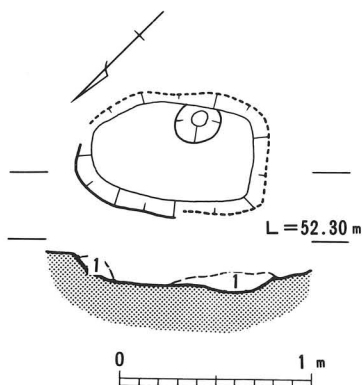


1. 明黄褐色10Y R6/6粘質土

第40図 S K 1002実測図

④遺構に伴わない遺物（第42～44図）

6はナイフ形石器である。サヌカイトの縦長剥片を利用し、断面は台形に近い四辺形を呈す。基部および左側縁に細かな調整を施す。国府型ナイフの分布圏の中で異質なものとなることができ、彫器である可能性も残している。第1調査区の遺物包含層から出土している。



1. 黄褐色10Y R5/6砂質土炭化物・焼土を多量に含む

第41図 S K 1001実測図

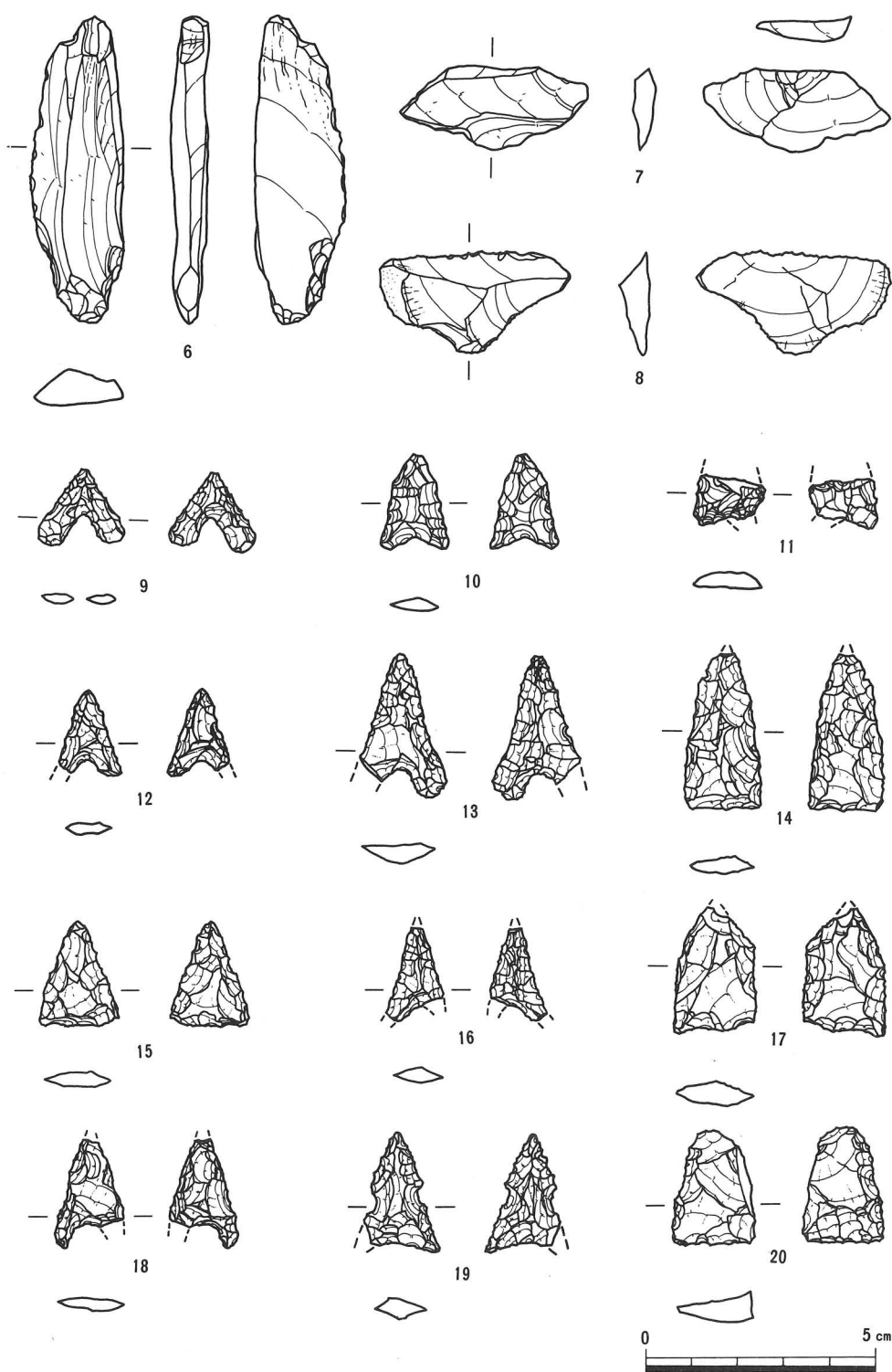
7・8は横長剥片である。7の石材はサヌカイトで、風化が激しい。打面を形成し、連続的に剥離されたものの一つであると考えられる。主要剥離面側には打瘤が観察できる。その後の加工・調整は行な

われていない。8の石材はチャートで、特に顕著な加工・調整が行なわれているわけではない。第7調査区の遺構面の下40cmの灰黄褐色粘土層から出土したのでとりあげた。

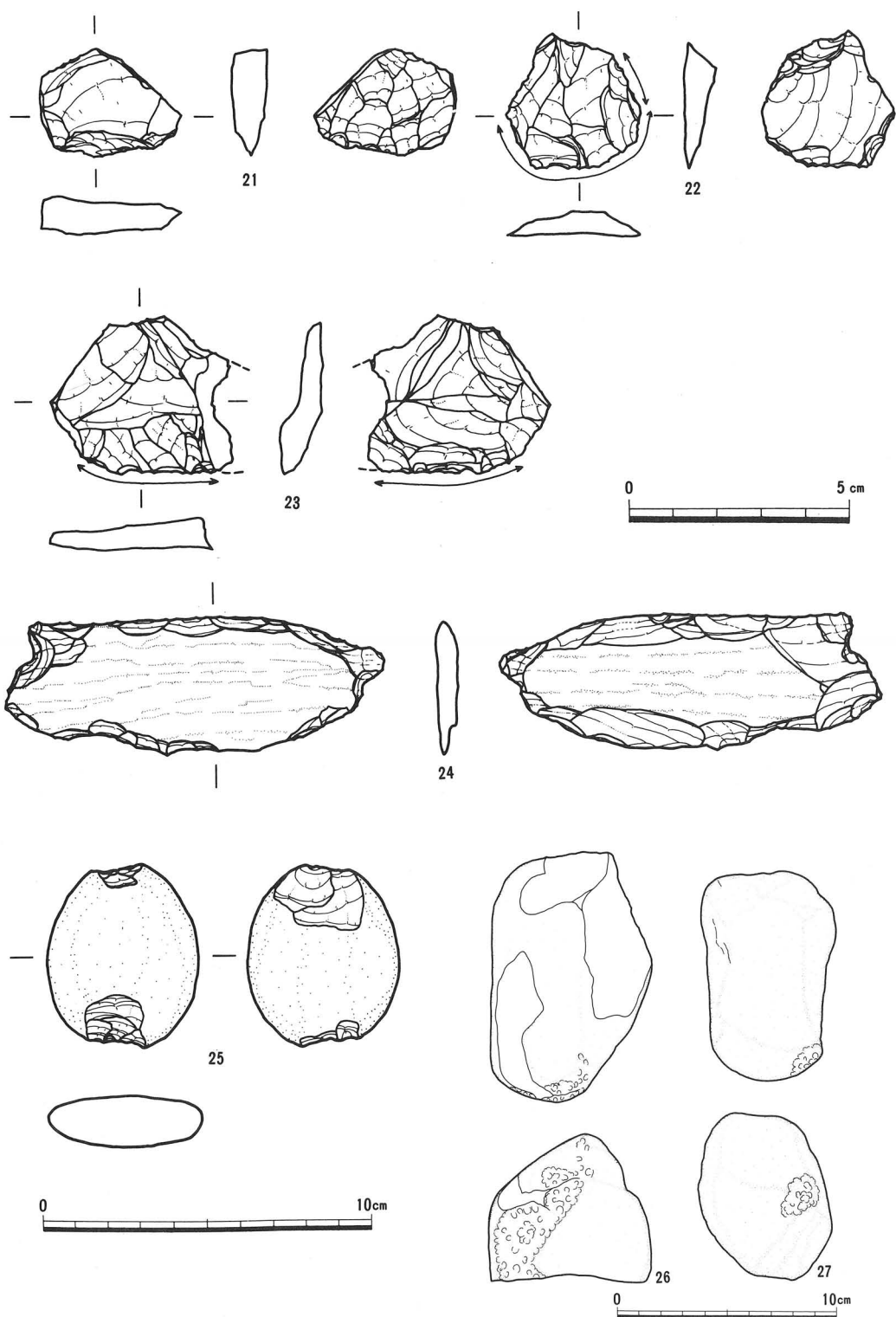
9～19は石鏃である。9は、正三角形で抉りの深い、いわゆる鋏形鏃である。第1調査区D地区の削平された部分の、暗褐色砂礫土中から出土した。鋏形鏃は、早期・押型文の時期に特徴的なものとされており、近辺で該期の生活跡が発見される可能性を残している。

10と11はチャート製の石鏃である。10は、白色のチャートを使用し、無茎凹基で基本形は五角形を呈する。第7調査区の灰黄褐色粘土層の直上で出土した。出土層位から、縄文時代でも古い時期に属するものと考えられる。11は、黒色のチャートが使用されているが、先端部および、脚端部を欠損しており、全体像は不明である。

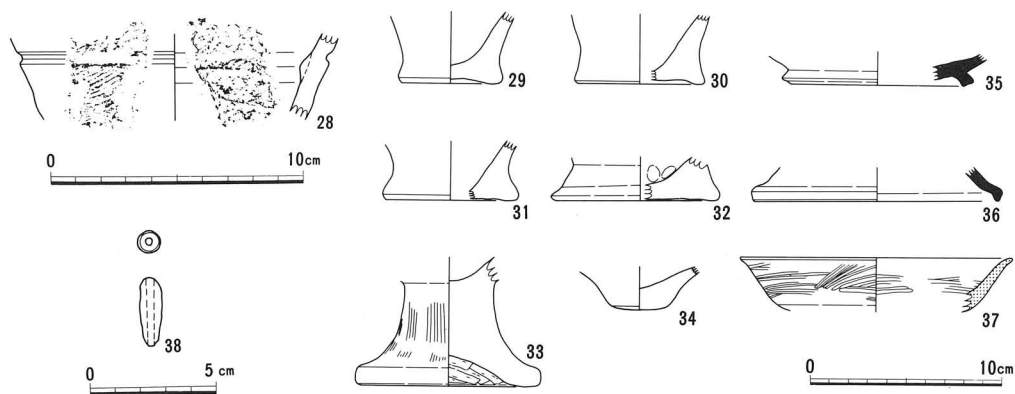
12～18はいずれも遺物包含層から出土したもので、すべて石材はサヌカイトである。12・13・16・18は深いU字状の抉りをもつ凹基無茎鏃、19は浅い弧状の抉りを持つ凹基無茎鏃で、これは両側縁にも抉りを持つ特異な形状を示している。また、14・15・17は平基無茎鏃である。形状などから13・14・18が縄文時代のもの、残りは弥生時代のものと考えられる。



第42图 遺物包含層等出土遺物実測図 (1)



第43図 遺物包含層等出土遺物実測図 (2)



第44図 遺物包含層等出土遺物実測図 (3)

20は、剥片であるが、下辺と左辺に丁寧な、調整が施されている。石鏃の未製品かと考えられる。

21は、楔形石器である。下辺を除き裁断面で、下辺は両極打法による。

22・23はスクレイパーである。22は主として片面調整、23は両面調整による刃部形成がなされている。

24は石庖丁である。緑色片岩の偏平な自然石を利用している。両端部にわずかではあるが抉りを施す。

25は石錘である。偏平な円礫の両端を打ち欠いている。

26・27は叩石として捉えた。26が石英、27が黒色のチャートであり、敲打痕は判然としない。両者とも遺構面上で並んだ状態で検出された。吉野川北岸地域で弥生時代の墓に伴う白色ないしは黒色の円礫ではないかとも考えられたが、それにあたる土坑も検出されず、敲打痕らしき部分をとどめることから、叩石とした。

28は、縄文土器の浅鉢である。小片から径を起こしたので、やや不安な部分がある。外面に1条の沈線、内面には断面三角形の貼付突帯を巡らし、両者でくびれのような形状をなす。内外面ともに無節Lの縄文を施す。

29～34は弥生土器である。29～32は甕の底部と考えられる。いずれも、底面は薄く、底部端を外方に拡張させている。33は脚台部である。接地面が大きく、中実の脚柱部をもつ。わずかに残る受部の傾きから台付鉢とみられる。以上はいずれも第2調査区の遺物包含層から出土した。これらは弥生時代中期の様相を示すものと考えられる。

34は鉢の底部と考えられる。丸底に近いもので、時代は下るものではないかと考えられる。

35・36は須恵器である。35は杯の底部、断面方形の貼付高台をもつ。高台の形状から陶邑編年TK7段階が考えられる。36は脚台部である。端部を下方に拡張し、外彎気味に内傾する。上限は陶邑編年TK217段階まで上る可能性がある。

37は瓦質土器の杯である。横方向のヘラミガキが目立ち、口縁端部は尖り気味に仕上げている。16～17世紀に位置づけられるのではないかと考えられる。

(3)まとめ

青谷遺跡は、耕地整理・採土等による原地形の改変などにより、調査区が点在するような形となった。検出された遺構は、集落的様相を示すものではなく、第2調査区でやや密度が高いが、全体には散在的で、遺構の性格の判然とするものはほとんどなく、特に住居に関する遺構がない。

遺物の面からみると、旧石器時代のナイフ形石器・横長剥片、縄文土器・石鏃、弥生土器、須恵器、土師質土器、陶磁器類など少量ではあるが、多種にわたり出土している。

このなかで、チャート製の石鏃は、包含層出土であるが、石器石材利用の点からも着目されてよい遺物のひとつであろう。チャートを産する三波川帯・秩父帯である県南地方では、廿枝遺跡、古屋岩陰遺跡はチャートを主体とするが、石材としてはサヌカイトも優勢で、時代が下るほどにその傾向が強いと言われている⁽¹⁾。吉野川流域地方では、小形の剥片石器の素材はほとんどがサヌカイトであるが、チャート製の剥片石器は、赤坂遺跡(Ⅱ)の石核、桜ノ岡遺跡(Ⅲ)の細石刃、金蔵～上井遺跡の旧石器群、前田遺跡の有舌尖頭器、柿谷遺跡のナイフ形石器など、近年その例は増加している⁽²⁾。それらの諸例は旧石器ないしは縄文時代の古い時期にあたるものと考えられており、本遺跡例も同様のものと考えられる。県南地域との交流を考える上でも貴重な資料の一つといえよう。

注

(1) 久保脇美朗氏のご教示による。また、高島芳弘氏のご教示によると、県南・那賀川中流域の相生町鮎川で486点の石器を採集しているが、そのうち400点がサヌカイト製、84点がチャート製であるという。時期は採集土器から縄文時代後期が考えられている。

(2) 久保脇美朗「金蔵～上井遺跡」高岡裕 他「桜ノ岡遺跡(Ⅲ)」『徳島県埋蔵文化財センター年報V o 1. 1』1990

松永住美 他「赤坂遺跡(Ⅱ)」高岡裕「前田遺跡」池渕茂 他「試掘調査」『徳島県埋蔵文化財センター年報V o 1. 2』1991

第1表 天神山遺跡遺構一覧表

遺構名	検出地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S B 1001	3区 B (N-13)	305	(305)	28~10	隅丸方形	弥生土器 石鏃 サヌカイト片 台石 磨石 炭化物	弥生 後期前葉		7, 8, 9, 10
S K 1001	3区 B (N-10)	(130)	(140)	86	隅丸方形	陶器	近世	便槽	20, 21
S K 1002	3区 B (M-11)	120	70	(3)	隅丸方形	炭化物 焼土	近世	風呂の焚き口	
S K 1003	1区 A (G-3)	(130)	(75)	(14)	楕円形	弥生土器 炭化物	弥生	上面削平	11
S K 1004	1区 A (H-3)	(45)	(45)	(22)	不整形	炭化物	不明	上面削平	
S K 1005	1区 A (H-4)	(98)	(55)	(18)	不整形	炭化物	不明	上面削平	
S K 1006	1区 A (G-4)	(115)	(81)	(11)	長方形	炭化物	不明	上面削平	
S K 1007	1区 A (G-3)	193	132	15	長方形	弥生土器 炭化物	弥生		12
S K 1008	1区 A (F-3)	150	90	15	長方形	弥生土器 炭化物 打製石庖丁	弥生		13, 14
S K 1009	1区 A (E-3)	150	90	11	楕円形	炭化物	不明		
S K 1012	1区 B (L-5)	116	63	8	楕円形		不明		
S K 1013	1区 B (J-5)	121	85	15	不整形		不明		
S T 1001	1区 A (H-3)	(90)	(58)	(7)	長方形	弥生土器 打製石庖丁 白色円礫	弥生		15, 16
S T 1002	1区 A (H-4)	(65)	68	(10)	長方形	炭化物 弥生土器	弥生		
S T 1003	1区 A (I・H-3)	80	57	10	長方形	炭化物	弥生		
S T 1004	1区 A (G・H-3)	外218 内185	外155 内68	外23 内44	長方形	弥生土器 サヌカイト スクレイパー 石鏃 台石 炭化物	弥生 後期		17, 18
S T 1005	1区 B (I-6)	外185 内142	外(87) 内(52)	外(12) 内(3)	長方形	弥生土器 炭化物	弥生	半分削平	19

() は残存長

第2表 天神山遺跡 S B 1001出土遺物観察表

番号	器種	層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
1	弥生土器 広口壺	覆土	口径16.2	直立する頸部からゆるやかに外反する口縁部をもつ。 口縁端部は上下に拡張し、端面に2条の弱い擬凹線を施す。	口縁部内外面ともヨコナデ。 頸部内面はヨコナデ。 頸部外面はタテハケのちヨコナデ。 2カ所外傾接合痕が観察できる。	1mm砂粒 多含 石英 チャート	(内) 浅 黄橙 (外) 橙	
2	弥生土器 壺(?)	覆土	底径8.4	底面は平底を呈し、体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面 タテヘラミガキのちナデ。 底面および内面はナデ。	2~4mm 砂粒含 結晶片岩 石英	(内) 黒 褐色 (外) 浅 黄橙	
3	弥生土器 壺(?)	覆土	底径4.6	底面は平底を呈し、体部は内彎気味に大きく外方にたちあがる。	内外面ともナデ。	1~3mm 砂粒含 石英 結 晶片岩	(内) 橙 (外) 赤 褐色	

番号	器種	層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
4	弥生土器壺	覆土	底径3.8	底面は平底を呈す、体部はわずかに内彎気味に大きく外方にたちあがる。	外面は剝離のため不明。 内面はナデ。	1～2mm 砂粒含 石英 結 晶片岩	(内) 黄 褐色 (外) 橙	
5	弥生土器甕	覆土	口径21.8	内彎する体部から「く」の字状に屈曲して、外反する口縁部をもつ。 口縁端部はわずかに肥厚させ、平坦におさめる。	口縁部内外面はヨコナデ。 体部は剝離のため内外面ともに不明。	1～2mm 砂粒含 石英 結晶片岩	(内) 暗 灰黄色 (外) 黄 橙	
6	弥生土器甕	覆土	口径10.6	体部から「く」の字状に屈曲して、外反する口縁部。 端部は肥厚させるとともにわずかに上方に拡張し、端面は平坦におさめる。	剝離が激しいが内外面ともヨコナデ。	1～2mm 砂粒含 石英	(内外) 黄橙	
7	弥生土器甕	覆土	底径6.6	底面はほぼ平底を呈する。	体部外面はヘラミガキ、外面はヨコナデ。底面はユビナデ。内面はナデ。	1～3mm 砂粒含 石英	(内) に ぶい橙 (外) 浅 黄橙	底面に黒斑あり
8	弥生土器壺(?)	覆土	底径5.8	底面は平底を呈す。体部は直線的に大きく外方にたちあがる。	内外面ともナデ。	1mm以下の微砂粒含 チャート	(内) 浅 黄橙 (外) に ぶい橙	

番号	器種	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
9	石鏃	覆土	3.4	1.3	0.6	2.5	完存	サヌカイト	凸基無茎鏃
10	石鏃	東西ベルト	(2.1)	(1.2)	(0.3)	(0.6)	基部欠損	サヌカイト	表面中央に擦痕あり
11	石鏃	覆土	(2.0)	(2.0)	(0.4)	(2.4)	先端部 基部欠損	サヌカイト	
12	石鏃	床面	(5.8)	1.3	0.6	3.62	先端欠損	サヌカイト	凸基有茎鏃
13	石鏃	壁面	4.6	3.1	0.5	5.9	完存	サヌカイト	平基有茎鏃
14	石鏃	覆土	(2.9)	1.4	0.5	(2.1)	先端部欠損	サヌカイト	凸基無茎鏃
15	石錐	覆土	(2.7)	1.5	0.35	(1.15)	錐部欠損	サヌカイト	錐部厚0.2cm
16	磨石(?)	覆土	8.2	2.5	1.5	50.7	完存	黒色片岩	表裏両面に磨面および擦痕あり
17	台石	床面	34.7	28.4	11.2	17250	完存	砂岩	表面の上半部に弱い砥面、筋状の敲打痕多数のこす。 裏面の一部に弱い砥面。

() は残存長

番号	器種	地点 層位	法量・形態の特徴・技法・その他備考					
18	鉄鏃	覆土	残存長3.4cm	幅1.4cm	厚さ0.5cm	刀子基部との見方もできる。		

第3表 天神山遺跡 S K 1008出土遺物観察表

番号	器種	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
19	石庖丁	覆土	(4.1)	(5.2)	(0.5)	(15.7)	半分欠損	紅簾石片岩	端部抉りあり。
20	石庖丁	覆土	(4.4)	(3.8)	(0.7)	(15.3)	〃	石英片岩	端部抉りなし。

() は残存長

第4表 天神山遺跡 S T 1001出土遺物観察表

番号	器種	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
21	石庖丁	覆土	11.1	38	0.8	37.9	完存	雲母片岩	両端抉りなし

第5表 天神山遺跡 S T 1004出土遺物観察表

番号	器種	層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
22	弥生土器 広口壺	覆土	口径13.0	やや開き気味の頸部からゆるやかに屈曲して外反する 口縁部をもつ 口縁端部は平坦におさめる	口縁部内外面にヨコナデ 頸部外面はタテハケのちヨコナデ。 内面はタテ方向ナデ。	2mm大砂粒 含 結晶片岩	(内) 暗 灰黄色 (外) 明 赤褐色	
23	弥生土器 甕	覆土	口径16.9	体部から「く」の字状に屈曲する。 口縁部はわずかに上下に拡張し端面には2条の擬凹線を施す。	口径部内外面はヨコナデ。 体部内面はヨコヘラケズリが観察できる。	2mm以下 砂粒多量 含 結晶片岩 絹雲母	(内) に ぶい黄橙 (外) に ぶい黄	
24	弥生土器 壺	覆土	底径8.6	底面は平底を呈す、体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面底面はナデ。 内面一部ユビオサエ痕をのこす。	2～3mm 以下砂粒 極多含 石英 チャート	橙	黒斑あり

番号	器種	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
25	石鏃	覆土	5.1	2.3	0.4	3.2	完存	サマカイト	未製品(?) 平基無茎鏃
26	スクレイパー	覆土	(5.5)	6	0.8	(27.6)	一部欠損	サマカイト	下辺に軽い両面調整による刃部形成
27	台石	覆土	(15.3)	(15.6)	(10.4)	(1,950)	欠損	砂岩	角を中心に敲打痕、一部に筋状の敲打痕も観察できる。

() は残存長

第6表 天神山遺跡 S K 1001出土遺物観察表

番号	器種	層位	法量・形態の特徴・技法・その他備考
28	丸瓦 玉縁	覆土	2～3mm砂粒含(泥岩・石英) (内) 黒褐色(外) 黄橙。丸瓦の玉縁で布目痕残存、外面ハケ調整が行われている。内、外面とも左半部分にすずの付着あり。

番号	器種	地点 層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
29	施釉陶器 皿	覆土	口径10.6 底径3.8 器高2.3	口縁端部から内面に施釉 内面には嵌入がみられる わずかに上げ底を呈し体部口縁部は内彎して大きく外方にたちあがる。	ロクロナデ 内面ハリササエ痕が1ヶ所確認できる。	ほとんど 砂粒含ま ず	(釉) 浅黄色 (釉以外) 淡黄色	京焼系(?) 燈明皿 外面煤付着
30	陶器 挿鉢	覆土	口径31.8 底径17 器高10.4	底面はわずかに上り底を呈す 体部はやや内彎気味にたちあがり口縁部は外方に大きく拡張する。 口縁部に2条凹線がめぐらされている 体部内面は13～14条単位の櫛描条線が全体的に施され内底面は8～9条単位で放射状に施される。	外面は強いヨコナデで成形されている。	1～2mm の石英粒	内外 暗赤褐色	明石焼(?)

第7表 天神山遺跡 包含層等出土遺物観察表

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
31	石鏃	1区表探	(1.6)	2.25	0.35	(0.91)	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎鏃
32	石鏃	3区B	(0.9)	1.4	(0.2)	(0.25)	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎鏃
33	打製石斧	1区A	10.1	5.6	1.3	83.30	完存	紅簾石片岩	
34	磨石	1区B	(6.7)	(7.8)	(2.6)	(152)	欠損品	石英班岩	ほぼ全面磨面 上面と左側面に擦痕が見受けられる 一部に自然面をのこす

() は残存長

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
35	須恵器 器台	1区		外反する口縁部端部は上下にやや 拡張し上端面は凹面に仕上げ下端 面は平坦に仕上げる。 口縁部外端面および頸部外面には 櫛描波状文を施す。	内・外面ロクロナデ。	密 砂粒なし	灰白	
36	施釉陶器 輪花皿	3区	口径7.4 底径4.4 脚台部径3.6 器高 1.8	体部内面に1条の浅い沈線がみと められる 底部・低い高台付き。 体部は内彎してたちあがりゆるや かに外反する口縁部をもつ。口縁 部は波状をなす。	高台裾をのぞき施釉されている。 口縁部は棒状工具によるおさえによ る。 内外面ともに基本的にロクロナデ。 高台は削り出しか(？)	1mm弱 微砂粒 釉厚0.3mm	(釉) 浅黄 色 (地) 淡黄 色	瀬戸焼(？)
37	陶器 擂鉢	3区B	底径14.0	底辺から体部はわずかに内彎気味 に外方にたちあがる。内面の櫛描 条線は5条まで確認できる。	外面ナデ・ユビオサエ 内面ヨコナデ	若干5mm 砂粒含 石英粒	(内) 暗緑 灰色 (外) 明青 灰色	備前焼(？)

番号	器種	地点 層位	法量・形態の特徴・技法・その他
38	土錘	3区B	長さ4cm 最大径1.2孔径0.4重さ6.43 1～2mm大の砂岩粒 片岩粒多く含む。浅黄橙色 紡錘形の管状土錘
39	銅銭	3区B	径2.4cm「寛永通宝」

第8表 青谷遺跡遺構一覧表

遺構名	検出地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S K 1001	1区 C (I・J-14)	102	65	30	隅丸方形	青磁 陶器	中近世	炭・焼土たまり	41
S K 1002	1区 C (K-17)	200	160	25	不整円形	須恵器	古代(?)		40
S K 1003	1区 C (K-17)	155	80	19	小判形		不明		
S K 1004	1区 C (H-6)	103	68	15	隅丸方形	炭化物	中近世(?)		
S K 1005	1区 A (M-15)	112	66	15	方形		不明		
S K 1006	1区 B (K-12)	108	57	12	隅丸方形	縄文(?)土器 サヌカイト	縄文(?)		
S K 1007	1区 A (M-12)	165	64	24	方形		不明		
S K 1008	1区 B (K-11)	148	80	10	隅丸方形		不明		
S K 1009	1区 B (J-10)	138	42	20	小判形		不明		
S K 1010	1区 B (J-9)	119	75	18	不整形		不明		
S K 1011	1区 B (J-9)	100	41	27	楕円形		不明		
S K 1012	1区 B (J-8)	66	56	11	円形		不明		
S K 1013	1区 A (M-16)	186	(108)	10	不整形		不明		
S K 1014	1区 D (G-13)	60	52	12	不整形	炭化物・焼土	中近世(?)	炭・焼土たまり	
S K 1015	1区 D (F-12)	(44)	(80)	14	不整形		不明		
S K 1016	1区 D (F-11・12)	132	82	10	方形		不明		
S K 1017	1区 D (G-11)	108	64	6	楕円形	縄文土器	縄文(?)		
S K 1018	1区 D (F-10)	(62)	102	16	方形		不明		
S K 1019	7区 A (AO-43)	102	68	16	不整形		不明		
S K 1020	7区 B (AN-44)	126	50	16	方形	サヌカイト片	弥生		33
S K 1021	7区 B (AM43-44)	190	80	40	小判形		弥生(?)		
S K 1022	7区 B (AM-44)	(90)	(40)	14	小判形		不明		
S K 1023	7区 A (AO-42)	78	60	24	隅丸方形		不明		
S K 1024	7区 A (AN-41)	86	60	16	不整形	炭化物	不明	炭・焼土たまり	
S K 1025	7区 B (AM-42)	120	100	16	不整形		不明		
S K 1026	7区 B (AL-40)	82	74	14	円形	弥生土器・炭化物	中近世(?)	炭・焼土たまり	
S K 1027	7区 B (AL・AM41)	210	180	24	不整形	石鏃	縄文(?)		28, 29
S K 1028	7区 B (AL-40)	140	108	30	楕円形	サヌカイト片	弥生(?)		
S K 1029	2区 (S-9)	(40)	30	25	不整形	弥生土器	弥生		30, 31
S K 1030	2区 (T-12)	88	60	8	不整形		弥生		
S K 1031	2区 (T-12)	100	54	18	不整形		弥生		
S K 1032	2区 (T-11)	100	68	26	方形		弥生		
S K 1033	2区 (S-11)	110	52	12	楕円形		弥生		
S K 1034	2区 (T-10)	68	24	18	小判形	弥生土器	弥生		
S K 1035	2区 (R-10)	134	46	16	小判形		弥生		
S K 1036	2区 (S-10)	112	86	10	不整形		弥生		
S K 1037	2区 (S-9)	(58)	(14)	(16)	不整形		弥生		
S K 1038	7区 C (AM-38)	140	125	54	不整形	弥生土器 焼土 炭化物	弥生		32

遺構名	検出地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S K 1039	7区 C (A L-40)	(72)	(46)	(18)	隅丸方形		不明		
S K 1040	7区 D (A K-42)	174	62	30	方形	弥生土器片	弥生		34, 35
S K 1041	7区 D (A J-42)	94	60	13	不整形	炭化物	中近世	炭 焼土たまり	
S K 1043	1区 A B (J-10)	64	29	28	楕円形		不明		

遺構名	検出地点	規模 (cm)			断面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長さ	幅	深さ					
S D 1001	1区 D (F-9~11)	1120	100 (最大) 28 (最短)	12 (最深) 6	U字形	陶器・縄文土器	中近世 (?)		
S D 1002	7区 B (A L-44)	146	25~38	6~8	U字形		不明		
S D 1003	7区 A (A D-42)	250	26~34	4~6	U字形		不明		
S D 1004	2区 (U-11)	334	90	50~13	V字形	弥生土器 炭化物	弥生		36
S D 1005	2区 (U-11)	222	26	7	U字形	弥生土器	弥生		
S D 1006	2区 (T-10~11)	470	45	18~27	逆台形	弥生土器 炭化物	弥生		37
S D 1007	2区 (T-9~10)	776	42	9~18	逆台形		弥生		
S R 1001	1区 C (G・F-3)	—	85~115	42~75	不整形		不明		

遺構名	検出地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S P 1001	1区 C (H-11)	25	20	40	円形		不明	柵列 2	
S P 1002	1区 C (I-10)	12	12	15	〃		〃	柵列 2	
S P 1003	1区 C (I-10)	20	20	17	〃	弥生(?)土器片	弥生(?)	柵列 2	
S P 1004	1区 C (I-10)	15	15	18	〃		不明	柵列 2	
S P 1006	1区 C (H-8)	12	12	10	〃		〃	(S A 1001)	
S P 1007	〃	21	21	26	〃		〃		
S P 1008	〃	18	18	11	〃		〃	(S A 1001)	
S P 1009	1区 C (G-7)	15	15	20	〃		〃	(S A 1001)	
S P 1010	1区 C (G-4)	23	23	13	〃		〃		
S P 1011	〃	20	20	12	〃		〃		
S P 1012	〃	65	30	13	楕円形	弥生土器片	弥生(?)		
S P 1013	1区 C (I-11)	15	10	25	〃		不明	柵列 3	
S P 1014	1区 C (I-10)	23	23	12	円形		〃		
S P 1015	1区 C (G-4)	40	24	10	楕円形		〃		
S P 1016	1区 (I-10)	20	20	10	円形		〃	柵列 3	
S P 1017	〃	12	12	10	〃		〃	柵列 3	
S P 1018	1区 (J-19)	17	17	15	〃		〃	柵列 2	
S P 1020	1区 A B (M-17)	23	11	27	〃		〃		
S P 1021	1区 A B (M-16)	22	19	15	〃		〃	柵列 1	
S P 1022	〃	22	21	15	〃		〃		
S P 1023	〃	18	18	20	〃		〃		

() は残存長

遺構名	検出地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S P 1025	1区A B (L-16)	17	16	21	円形		不明		
S P 1026	"	24	21	13	"		"		
S P 1027	1区A B (M-16)	20	17	14	"		"		
S P 1028	"	20	19	14	"		"		
S P 1029	1区A B (L-16)	18	18	10	"		"		
S P 1031	1区A B (L-17)	24	18	8	"		"		
S P 1032	"	28	24	16	"		"		
S P 1036	1区A B (L-16)	26	20	11	"		"		
S P 1038	1区A B (N-16)	21	19	28	"		"	柵列 1	
S P 1039	"	20	18	12	"		"		
S P 1041	"	21	19	11	"		"	柵列 1	
S P 1042	"	22	20	11	"		"	柵列 1	
S P 1043	"	27	24	10	"		"	柵列 1	
S P 1047	1区A B (N-15)	19	18	10	"		"		
S P 1056	1区A B (N-14)	13	12	14	"		"		
S P 1058	"	14	13	13	楕円形		"		
S P 1059	1区A B (N-14)	32	25	15	楕円形		"		
S P 1060	"	16	13	14	"		"		
S P 1061	"	34	28	10	円形		"		
S P 1062	"	28	24	17	"		"		
S P 1067	1区A B (M-14)	24	17	12	"		"		
S P 1068	1区A B (M-13)	22	20	23	"		"		
S P 1069	"	20	20	17	"		"		
S P 1070	"	28	20	23	楕円形		"		
S P 1072	"	21	17	13	円形		"		
S P 1073	"	18	17	12	"		"		
S P 1074	"	17	13	11	"		"		
S P 1076	"	26	23	10	"		"		
S P 1077	"	36	21	19	楕円形		"		
S P 1078	1区A B (M-11)	24	19	11	円形		"		
S P 1079	1区A B (L-11)	22	20	15	"		"		
S P 1080	"	18	17	10	"		"		
S P 1082	1区A B (L-14)	29	28	38	"		"		
S P 1084	1区A B (L-13)	18	18	9	"		"		
S P 1087	1区A B (K-12)	25	18	21	楕円形		"		
S P 1089	"	18	17	13	円形		"		
S P 1090	"	18	17	12	"		"		
S P 1091	1区A B (K-11)	18	17	10	"		"		
S P 1092	1区A B (J-11)	20	19	21	"		"		
S P 1094	1区A B (K-9)	19	13	11	"		"		
S P 1096	"	17	16	14	"		"		
S P 1097	1区A B (J-9)	19	17	18	"		"	柵列 2	

() は残存長

遺構名	検出地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S P 1099	1区 A B (K-8)	18	16	16	円形		不明	棚列 2	
S P 1100	1区 A B (J-8)	19	18	11	"		"		
S P 1101	"	15	145	10	"		"		
S P 1102	"	20	19	17	"		"		
S P 1103	"	15	15	13	"		"		
S P 1105	1区 A B (K-11)	39	16	32	隅丸方形	土師質土器	中近世(?)		
S P 1106	1区 A B (J-9)	18.5	18	21	円形		不明	棚列 2	
S P 1107	1区 D (G-12)	24	24	22	"		"		
S P 1109	"	18	18	18	"		"		
S P 1110	1区 D (F-12)	26	18	13	楕円形		"		
S P 1111	"	20	24	10	不整形		"		
S P 1113	1区 D (F-10)	20	20	26	円形		不明		
S P 1114	"	20	20	23	楕円形		"		
S P 1115	1区 D (F-11)	20	20	15	円形		"		
S P 1116	1区 D (F-10)	20	20	16	"		"		
S P 1117	"	16	16	13	"	炭化物あり	"		
S P 1118	"	16	16	11	"		"		
S P 1119	"	28	22	21	楕円形	弥生土器(?)	弥生(?)		
S P 1120	"	18	18	32	円形		不明		
S P 1122	7区 A B (A O-43)	24	24	27	"		"		
S P 1123	"	26	26	21	"		"		
S P 1124	7区 A B (A M-44)	22	22	14	楕円形		"		
S P 1125	"	25	19	12	円形		"		
S P 1126	7区 A B (A O-42)	17	14	14	"		"		
S P 1127	"	20	18	18	"		"		
S P 1129	7区 A B (A N-42)	20	18	16	"		"		
S P 1132	2区 (T-12)	33	33	11	"		弥生(?)		
S P 1133	2区 (S-11)	28	20	24	"		"		
S P 1134	2区 (T-10)	34	14	11	楕円形		"		
S P 1135	"	21	20	10	円形		"		
S P 1136	7区 C (A C-38)	22	17	14	"		不明		
S P 1137	"	16	15	11	"		"		
S P 1137	"	16	15	11	"		"		
S P 1138	7区 C (A C-39)	38	31	18	"		"		
S P 1140	"	33	29	17	"		"		
S P 1141	7区 D (A K-44)	22	18	13	"		"		
S P 1142	7区 D (A J-44)	38	16	14	楕円形		"		
S P 1143	"	22	20	13	円形		"	(S A 1002)	
S P 1144	"	16	13	8	"		"	(S A 1002)	
S P 1145	"	59	25	26	不整形		"		
S P 1146	"	38	21	21	"		"	(S A 1002)	
S P 1148	"	25	21	19	円形		"		

遺構名	出土地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S P 1149	7区D (A J - 44)	16	13	15	円形		〃	(S A 1002)	
S P 1151	〃	21	16	16	〃		〃		
S P 1152	7区D (A J - 43)	31	19	35	楕円形		〃		
S P 1154	〃	22	19	17	円形		〃		
S P 1156	7区D (A J - 42)	25	24	19	〃		〃		
S P 1157	〃	30	16	13	不整形		〃		
S P 1159	7区D (A J - 41)	22	17	16	円形		不明		
S P 1160	〃	22	19	16	〃		〃		
S P 1161	〃	18	18	12	〃		〃		
S P 1162	〃	19	17	54	〃		〃		
S P 1163	6区 (A H - 30)	18	18	18	〃		〃		
S P 1164	6区 (A H - 29)	16	16	14	〃		〃		

遺構名	出土地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S X 1003	7区B (A L - 42)	260	134	16	不整形	サヌカイト片	不明		
S X 1004	2区 (S T ~ 10 ~ 11)	580	317	36	不整形形状	弥生土器・石斧等	弥生		38, 39
S X 1005	2区 (U - 11)	(266)	(168)	25	隅丸方形	弥生土器	弥生		

() は残存長

第9表 青谷遺跡 S K 1027出土遺物観察表

番号	器種	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
1	石鏃	覆土	3.1	1.5	0.45	1.19 g	完存	サヌカイト	凹基無茎鏃

第10表 青谷遺跡 S K 1029出土遺物観察表

番号	器種	層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
2	弥生土器壺 (?)	覆土	底径8. 6	・底面はわずかに上げ底。 体部は外彎気味に外方へのびる。	内面ユビオサエ・ユビナデ 外面ヨコ方向ナデ	2 ~ 3 mm大砂粒含 石英 砂岩 結晶片岩	(内) に ぶい橙 (外) 橙色	
3	弥生土器壺 (?)	覆土	底径8. 1	・底面はわずかに上げ底を呈す。 体部は内彎気味に外方に立ち上がる	体部外面はタテハケ。一部ナデにより消されている。 内部はユビオサエ・ナデ 底面板削り	2 ~ 3 mm大砂粒含 結晶片岩 石英 砂岩	橙色	

第11表 青谷遺跡 S K 1040出土遺物観察表

番号	器種	層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
4	弥生土器甕	覆土	底径5. 7	・底面はわずかに上げ底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	体部外面タテ方向ナデ 底部外面ユビオサエのちヨコナデ 底面・内部はナデ。	1 mm大砂粒含 石英 砂岩	にぶい褐色	

第12表 青谷遺跡 S X1004出土遺物観察表

番号	器種	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
5	磨製石斧状 石器	覆土	1.5	0.85	0.3	0.3	完存	蛇紋岩	

第13表 青谷遺跡 遺物包含層等出土遺物観察表

番号	器種	地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
6	ナイフ形石器	1区A N-15Gr	6.7	2.1	0.8	11.22	完存	サヌカイト	縦長剥片を利用。彫器の可能性あり。
7	横長剥片	7区A	1.8	4.1	0.55	3.44	完存	サヌカイト	
8	横長剥片	7区A	2.2	4.2	0.7	4.26	完存	チャート	灰黄褐色 粘土層出土
9	石鏃	1区D	1.65	1.9	0.25	0.45	完存	サヌカイト	凹基無茎。いわゆる鉄形鏃。 暗褐色砂礫層出土。
10	石鏃	7区A	2.1	1.5	0.3	0.81	完存	チャート	凹基無茎鏃。灰黄褐色粘土層直上
11	石鏃	1区B	(1.1)	(1.5)	(0.35)	(0.62)	先端欠損	チャート	凹基無茎鏃
12	石鏃	7区D	(1.9)	(1.3)	0.3	(0.47)	脚部欠損	サヌカイト	凹基無茎鏃
13	石鏃	7区	(3.1)	(1.8)	0.4	(1.61)	脚部欠損	サヌカイト	凹基無茎鏃
14	石鏃	7区D	(3.4)	1.7	0.45	(2.27)	先端欠損	サヌカイト	平基無茎鏃
15	石鏃	1区B	2.3	1.75	0.3	1.15	完存	サヌカイト	平基無茎鏃
16	石鏃	1区D	(2.0)	(1.3)	0.35	(0.52)	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎鏃
17	石鏃	1区	(2.8)	1.8	0.5	(2.74)	先端欠損	サヌカイト	平基無茎鏃
18	石鏃	2区	(1.9)	(1.45)	0.3	(0.72)	先端脚欠損	サヌカイト	凹基無茎鏃
19	石鏃	2区	(2.6)	(1.5)	0.45	(1.3)	脚部欠損	サヌカイト	凹基無茎鏃。側縁中央に抉りあり
20	剥片	1区B	2.6	1.9	0.6	3.16	完存	サヌカイト	下辺と左辺に念入りの調整痕、石鏃の未製品(?)
21	楔形石器	1区B	2.4	3.2	0.8	(8.02)	一部欠損	サヌカイト	下部をのぞき截断面、下部は両極打法による
22	スクレイパー	7区A	3.1	3.1	0.75	5.76	完存	サヌカイト	主として片面調整による刃部形成
23	スクレイパー	1区D	(4.2)	3.65	0.75	(11.15)	一部欠損	サヌカイト	下面両面調整による刃部形成
24	石庖丁	7区	11.6	4.3	0.7	59.5	完存	緑色片岩	両端部抉りあり、両極打法による刃部形成
25	石錘	7区A	5.6	4.6	1.55	62	完存	緑色片岩	両端打ち欠き
26	叩石	2区	11.5	7.9	6.5	(750)	一部欠損	石英	白色 一方端に敲打痕あり
27	叩石	2区	9.6	6.2	7.7	650	完存	チャート	黒色 一方端に敲打痕あり

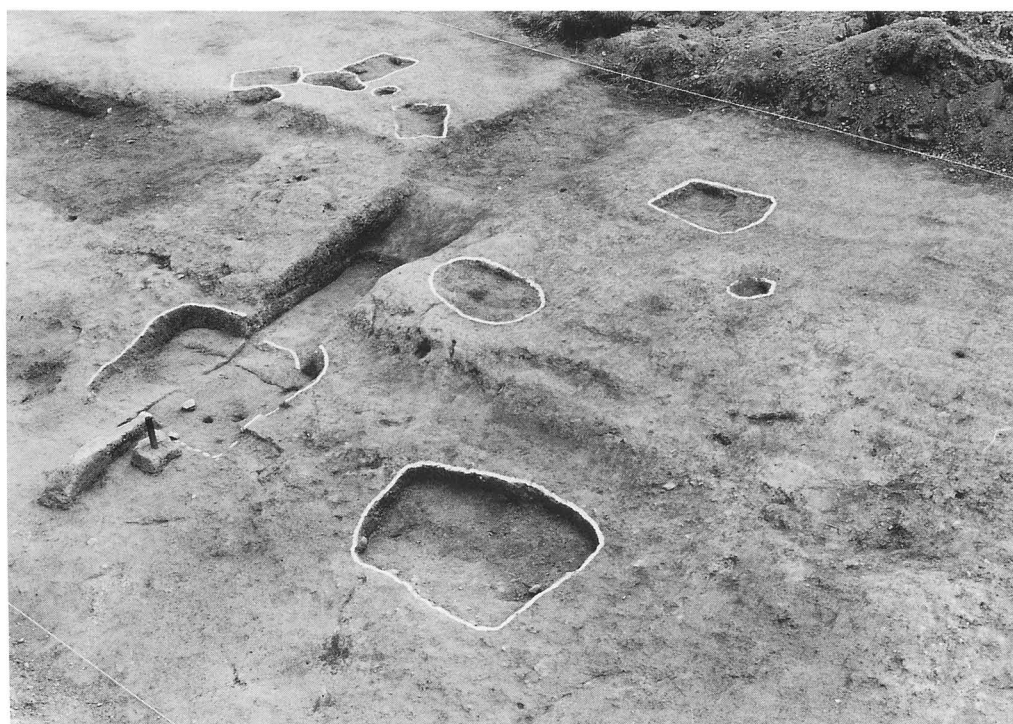
() は残存長

番号	器種	地点	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
28	縄文土器 浅鉢	1区D		外傾する頸部(?)外面に1条の沈線、内面には1条の断面三角形の突帯を巡らす	無節(L)の縄文を内外面に施す。	2~3mm大砂粒 結晶片岩 石英	橙色	
29	弥生土器 甕(?)	2区	底径5.0	底面はわずかに上げ底を呈し底部端を外方に拡張する。底部うすい。体部はやや外彎し、たちあがる。	内外面ともナデ。	3mm大砂粒 結晶片岩 砂岩 石英	橙色	
30	弥生土器 甕(?)	2区	底径6.8	底面はわずかに上げ底で、底部端をやや外方に拡張する。底面うすい。体部はやや外彎気味に外方へ立ち上がる。	内外面ともナデ	2~3mm大砂粒 砂岩 石英 結晶片岩	明赤褐色	
31	弥生土器 甕(?)	2区	底径6.8	底面はわずかに上げ底を呈する。底面薄い。底部端やや外方に拡張。体部は外彎し外方へ立ち上がる。	外面ヨコナデ。底面内面はナデ。	2~3mm大砂粒 砂岩 石英 結晶片岩	明褐色	
32	弥生土器 甕(?)	2区	底径8.8	底面は平底を呈す。底部端を外方に拡張する。体部は大きく外彎し外方へ立ち上がる。	外面ナデ 内面ユビオサエ	2~3mm大砂粒 砂岩 石英 結晶片岩	明赤褐色	
33	弥生土器 台付鉢	2区	底径9.8	脚端より接地面をもち、大きく内傾する。脚柱は中実で直立する。受部は深い。	脚端から脚台部外面にヨコナデ 脚柱部外面クテハケ。 底面ケズリ 受部内面ナデ(?)	2~5mm大砂粒多含 石英 砂岩 結晶片岩	橙色	
34	弥生土器 鉢(?)	1区D	底径3.2	底面はやや丸底気味 体部は大きく外彎して外方へたちあがる。	外面丁寧なナデ 底面内面はナデ。	砂粒含む2~3mm大結晶片岩 砂岩 石英	橙色	
35	須恵器 杯	1区D	脚台部径9.0	断面方形の貼付高台をもつ 体部外面はゆるやかに内彎し外方へ立ち上がる	ロクロナデ 高台貼り付け	0.5mm大砂粒含む 石英	灰白色	
36	須恵器 脚台部	1区C	脚台部径12.8	脚端下方にやや拡張 外彎気味に内傾する脚台部	ロクロナデ	0.5mm弱砂粒含む 石英	灰色	
37	瓦質土器 杯	1区B	口径14.4	体部は直線的に外方へ立ち上がる。口縁部外彎気味。端部は尖り気味におさめる。	内外面ともヨコナデのちヘラミガキ	0.3mm砂粒	暗灰色	

番号	器種	地点 層位	法量・形態の特徴・技法・その他備考
38	土錘	8区	長さ(2.7cm) 幅0.9cm 孔径0.3mm 重量184g 0.5mm大砂粒若干含 淡橙色 一部欠損 管状土錘



天神山遺跡 調査前全景（東より）

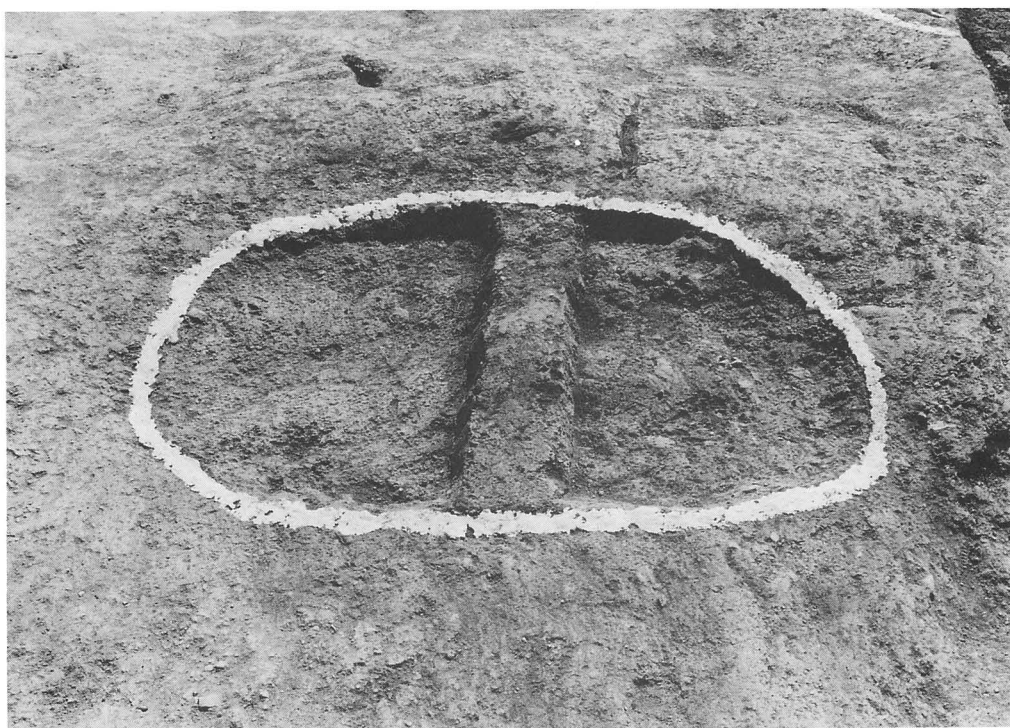


天神山遺跡 第1調査区A地区遺構完掘状況（西より）

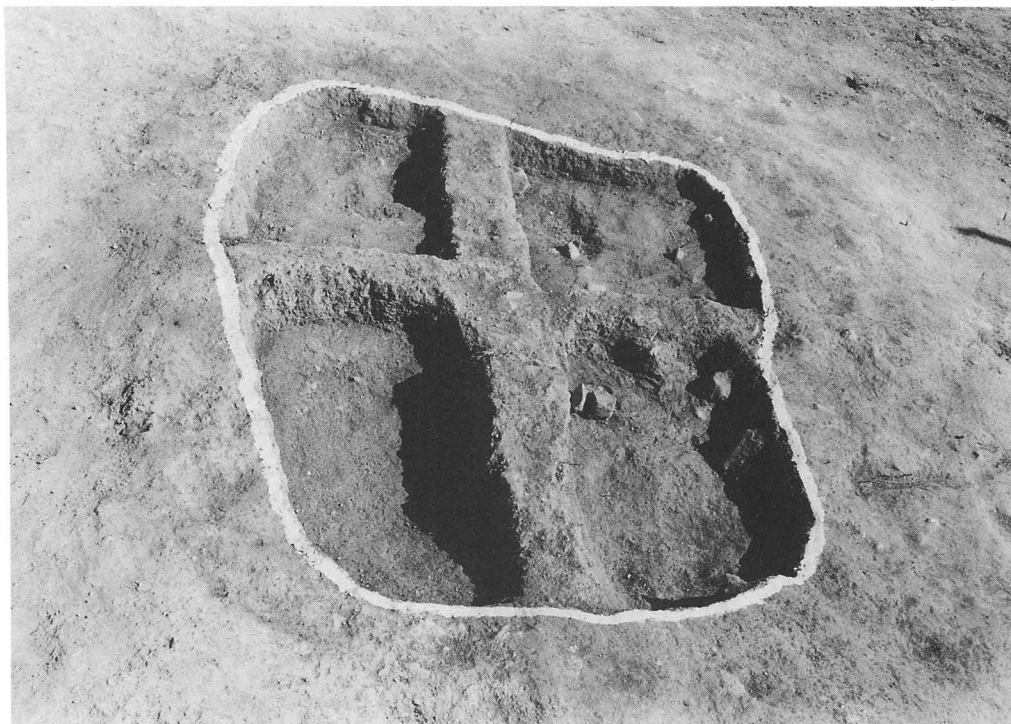
図版 2



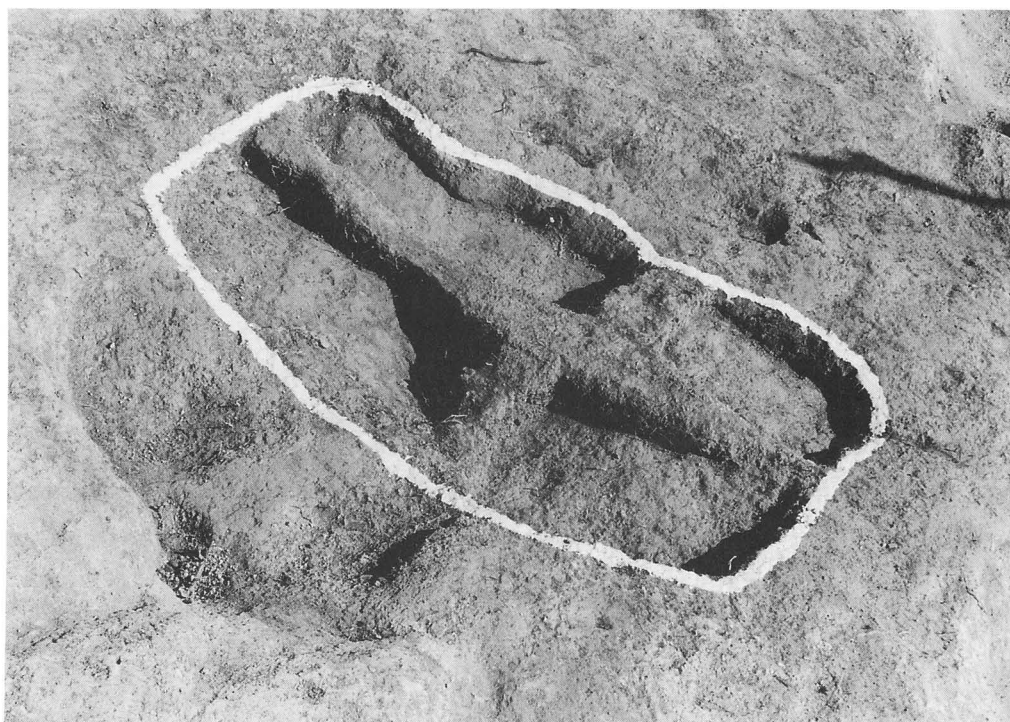
天神山遺跡 S B 1001完掘状況（東より）



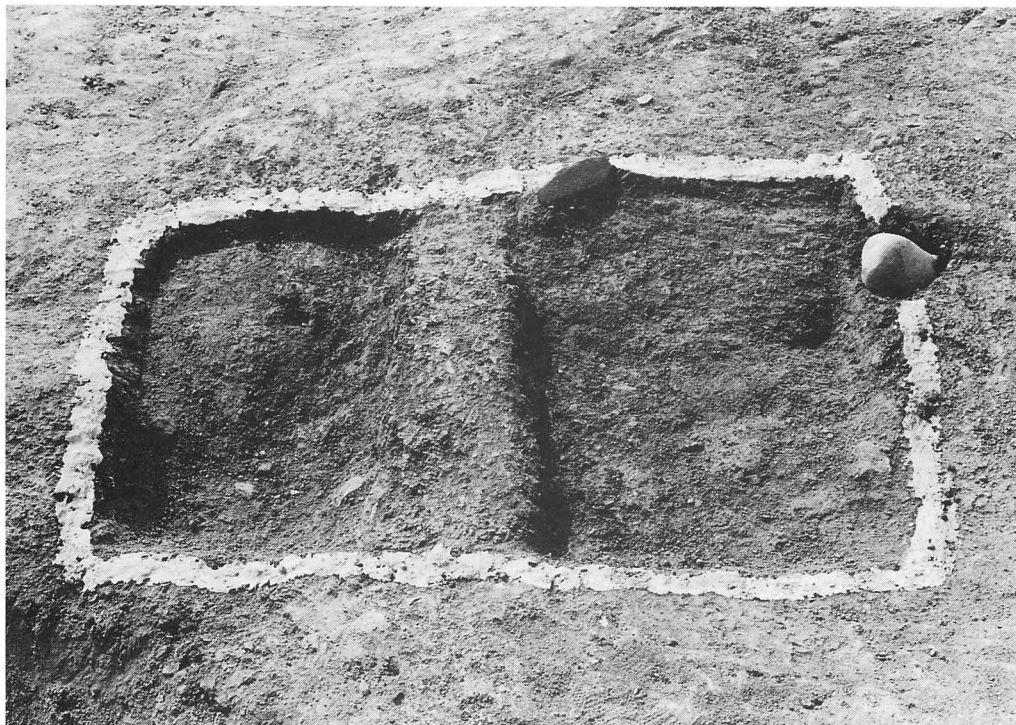
天神山遺跡 S K 1003掘り下げ状況（東より）



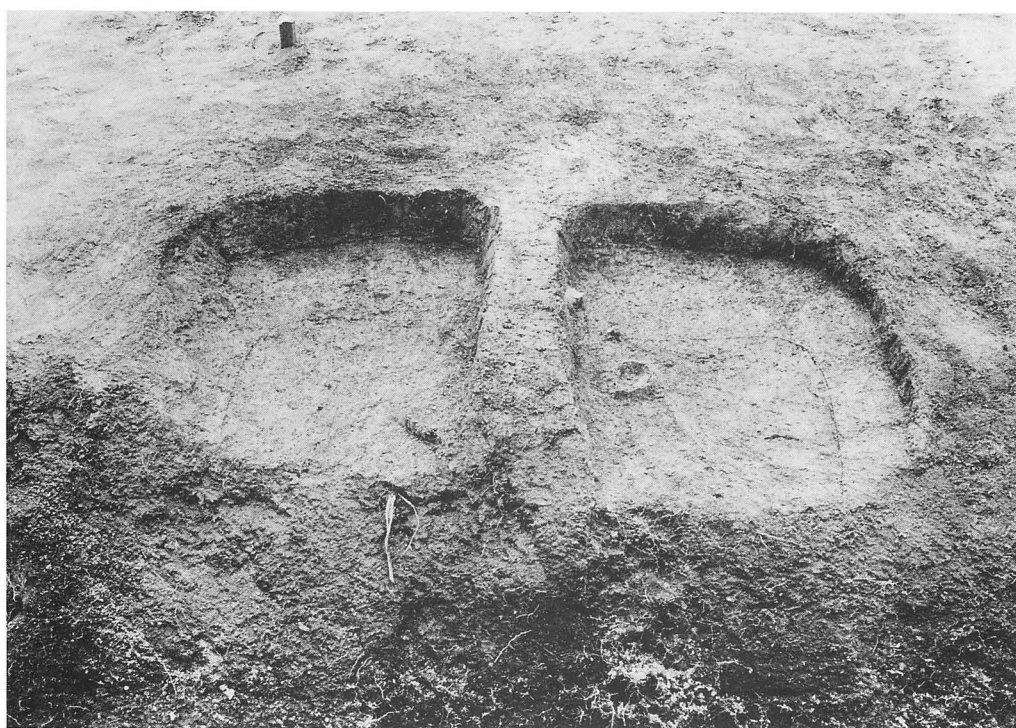
天神山遺跡 S K1007掘り下げ状況（北より）



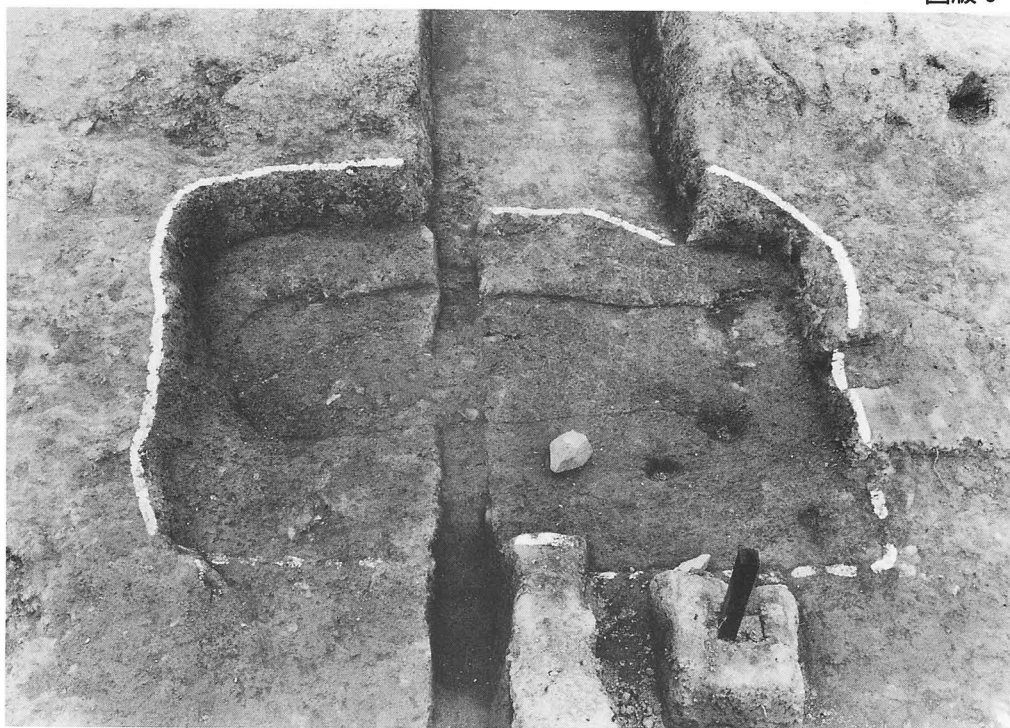
天神山遺跡 S K1008掘り下げ状況（北より）



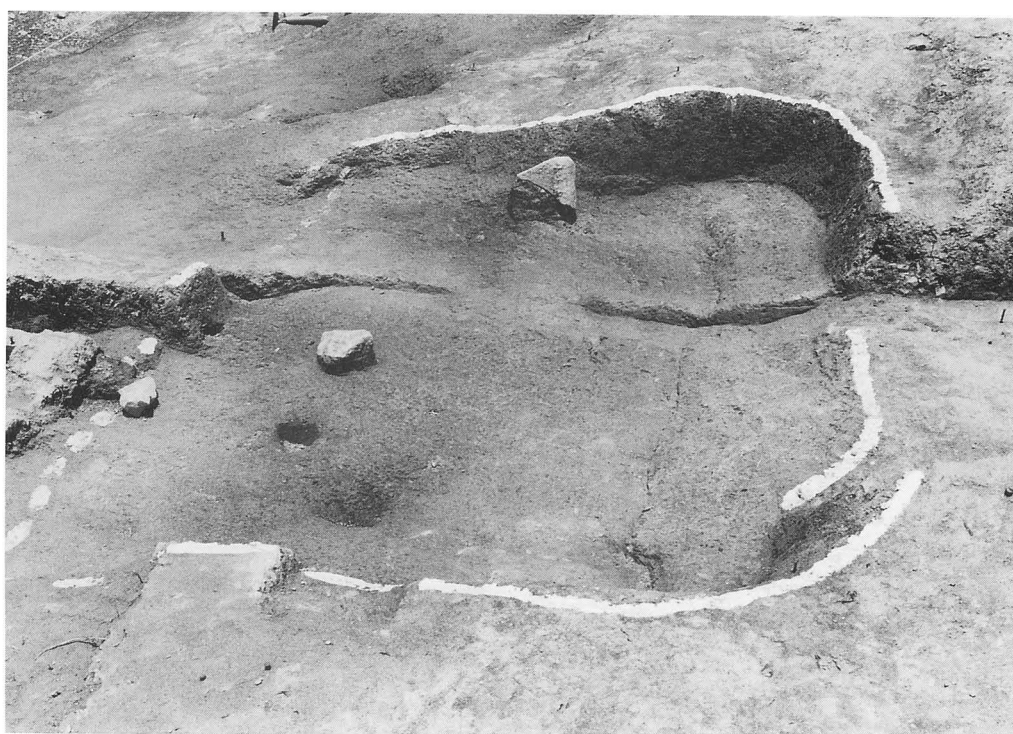
天神山遺跡 ST1001掘り下げ状況（東より）



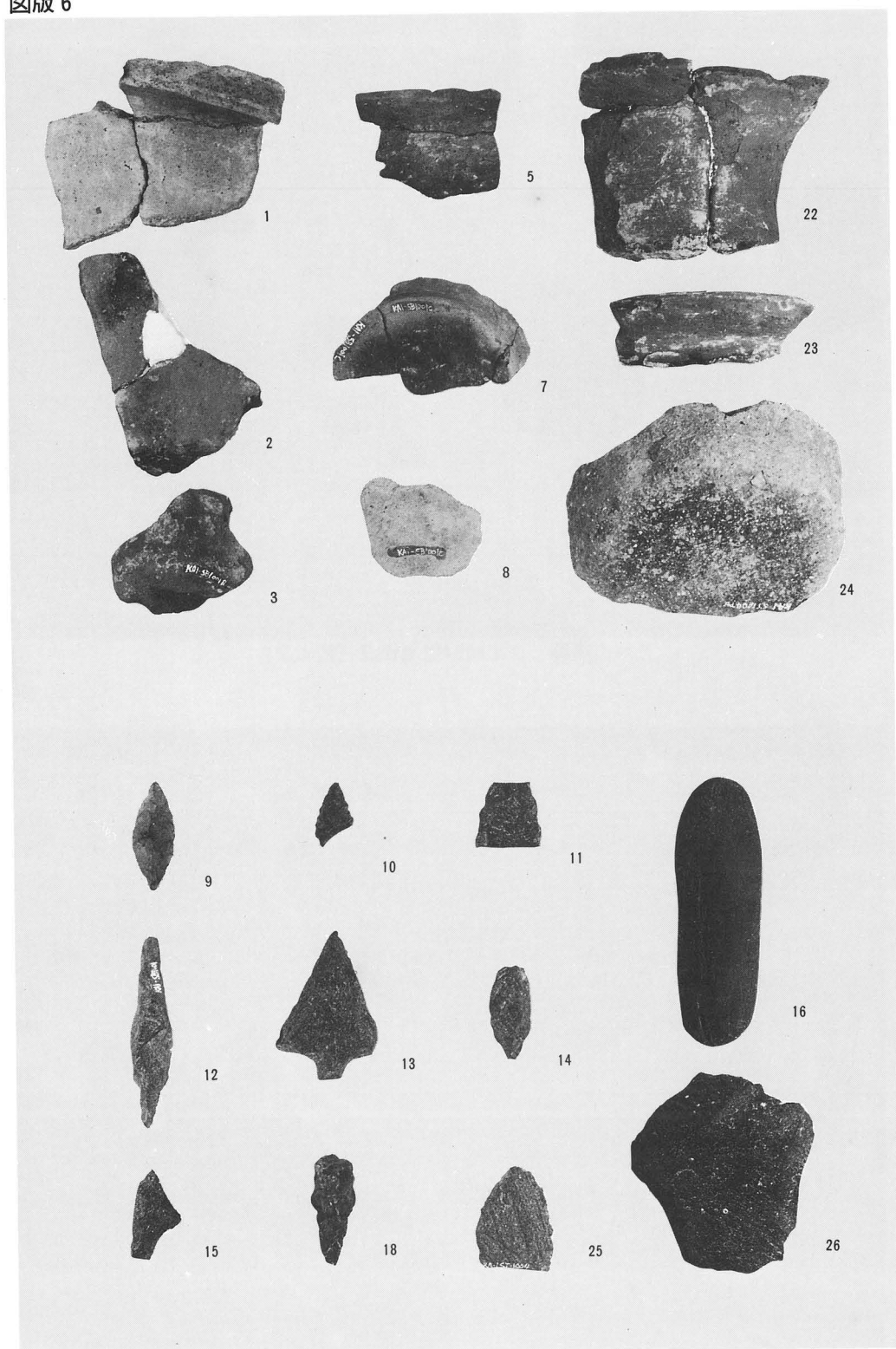
天神山遺跡 ST1005掘り下げ状況（東より）



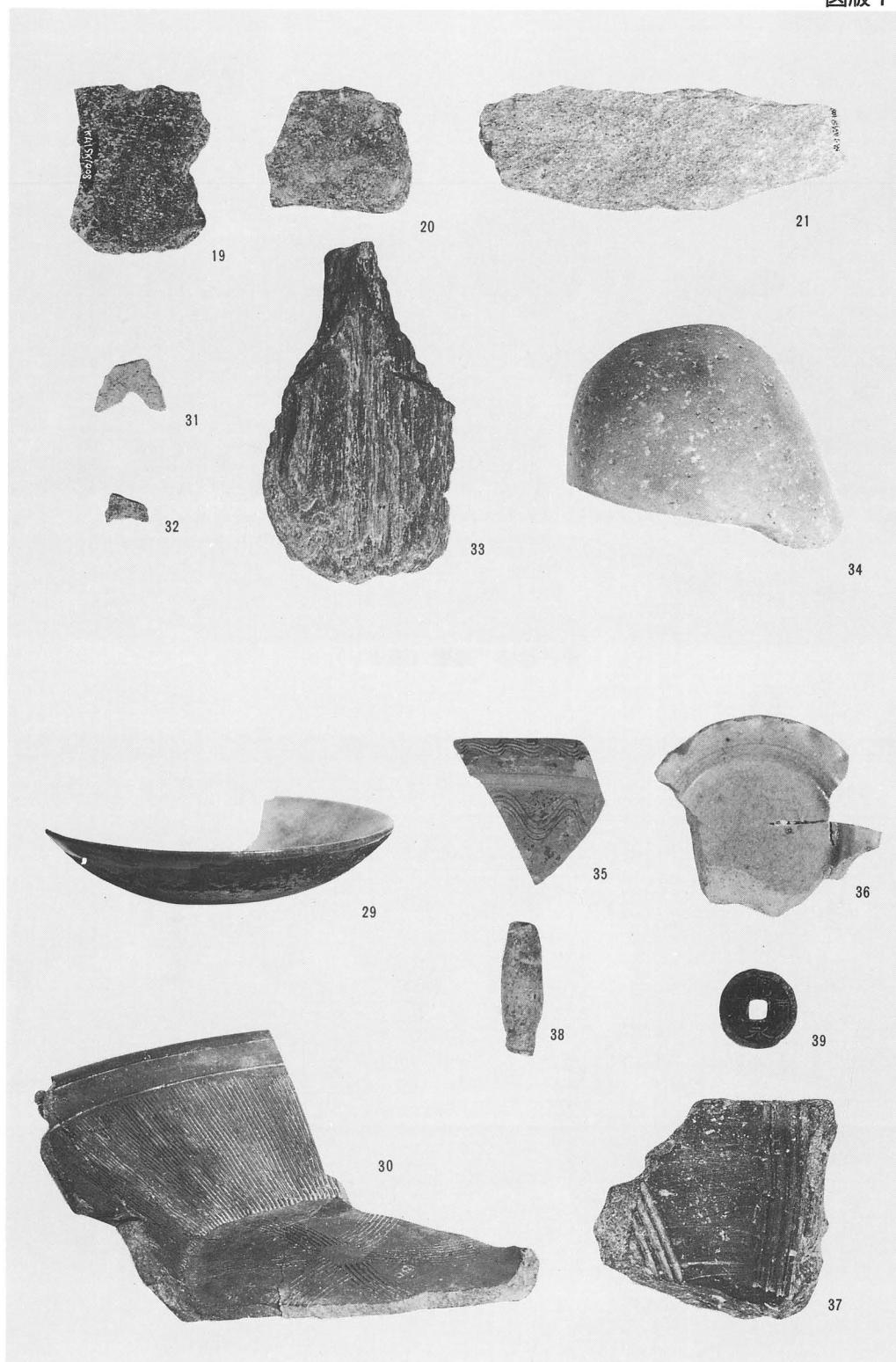
天神山遺跡 ST1004完掘状況（西より）



天神山遺跡 ST1004完掘状況（南より）



天神山遺跡 出土遺物 (1)



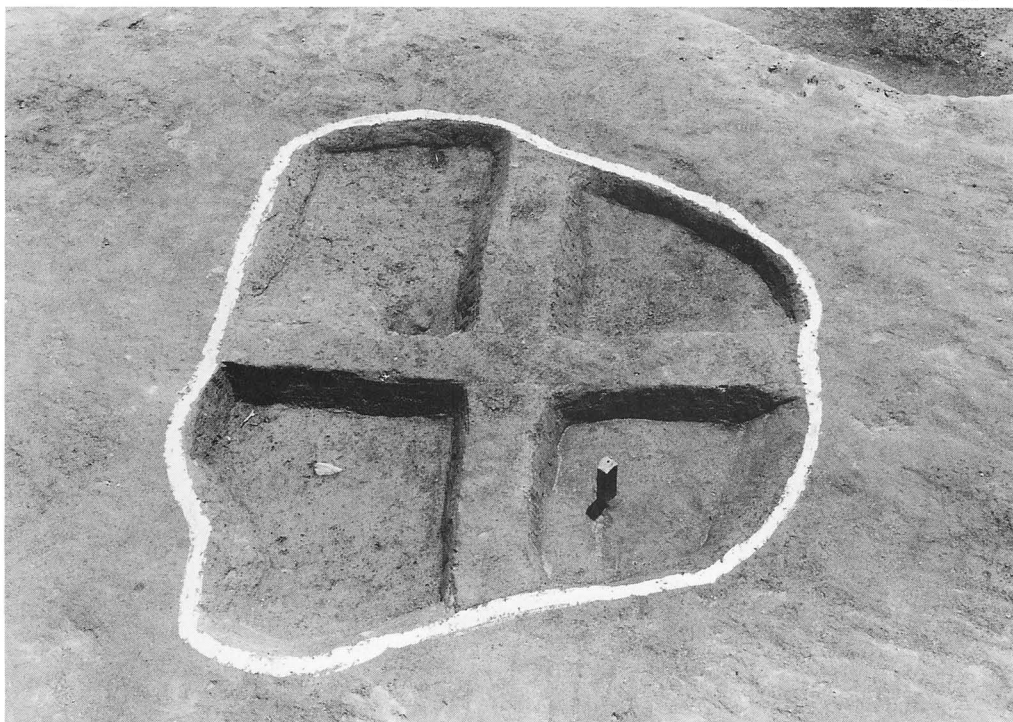
天神山遺物 出土遺物 (2)



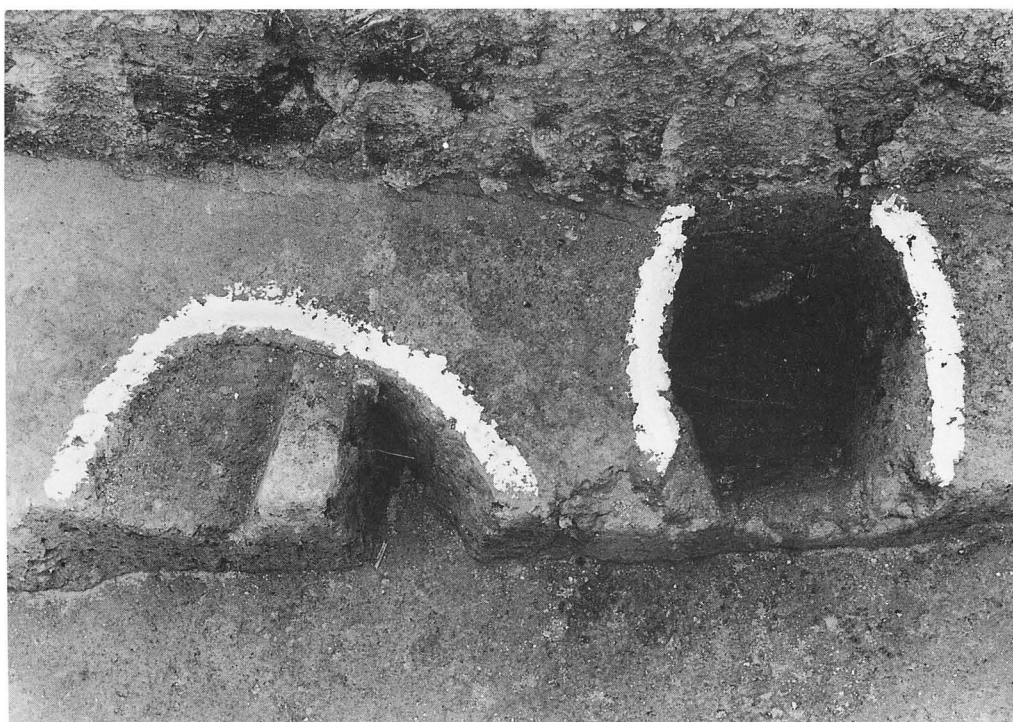
青谷遺跡 遠景（南より）



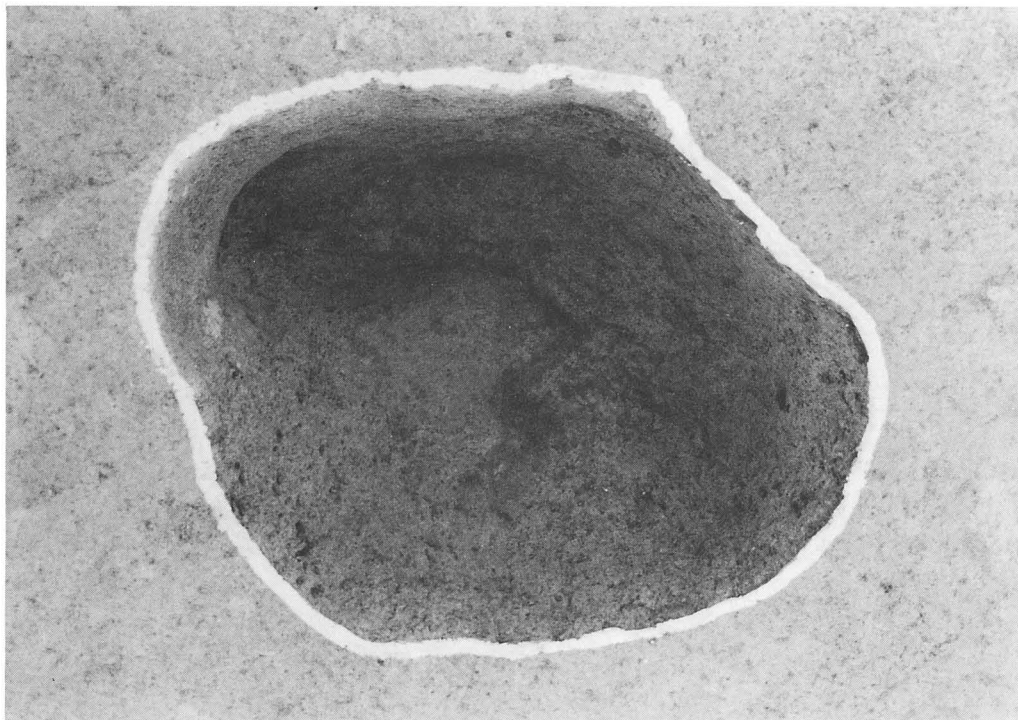
青谷遺跡 第7・8調査区調査前状況（北より）



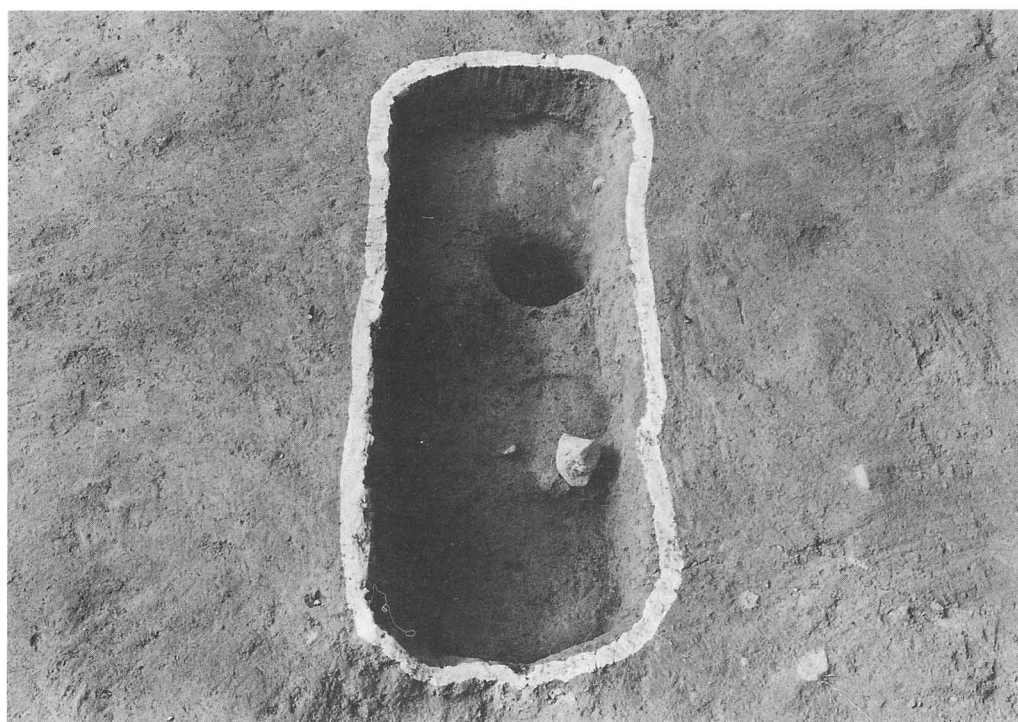
青谷遺跡 S K1027掘り下げ状況（北より）



青谷遺跡 S K1029・S K1037掘り下げ状況（南より）



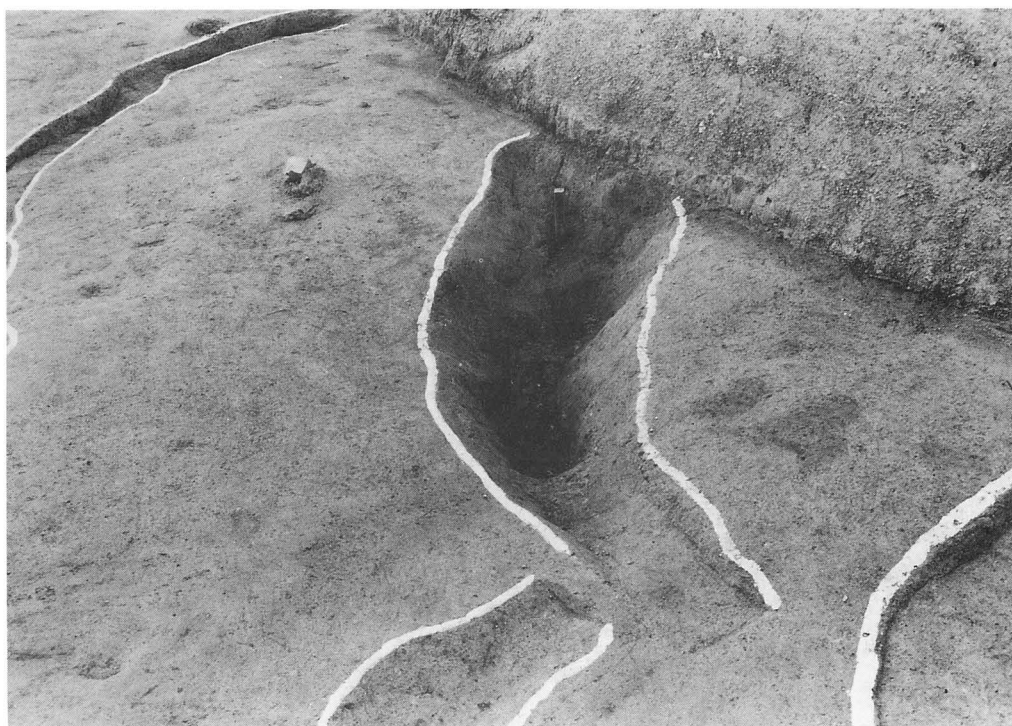
青谷遺跡 SK1038完掘状況（西より）



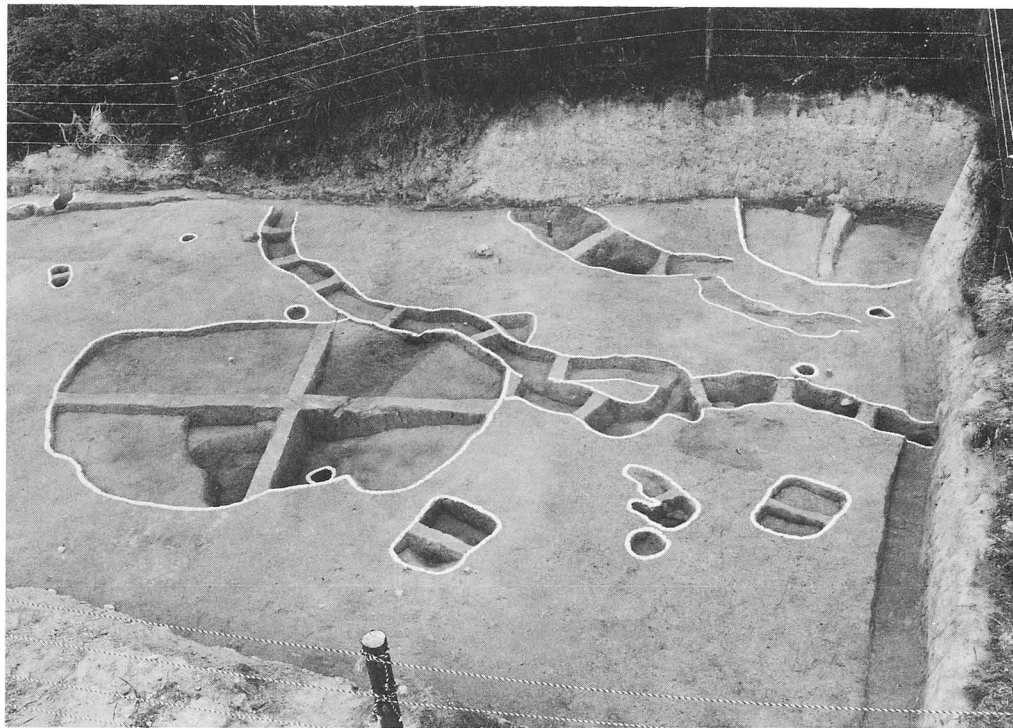
青谷遺跡 SK1020完掘状況（南より）



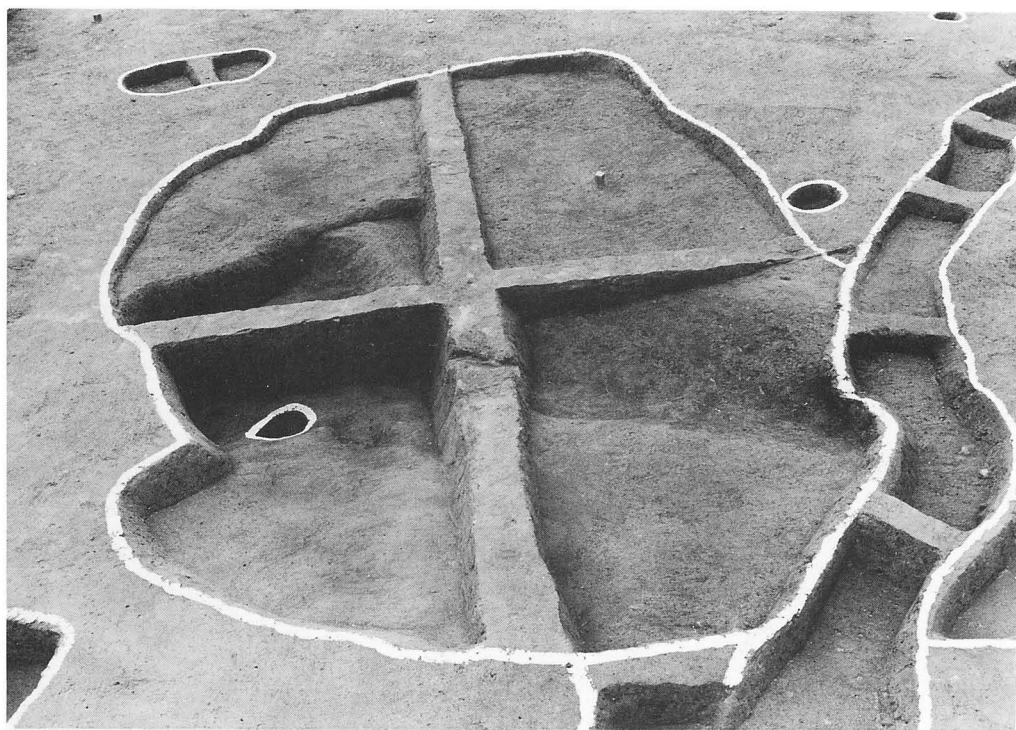
青谷遺跡 SK1040完掘状況（北東より）



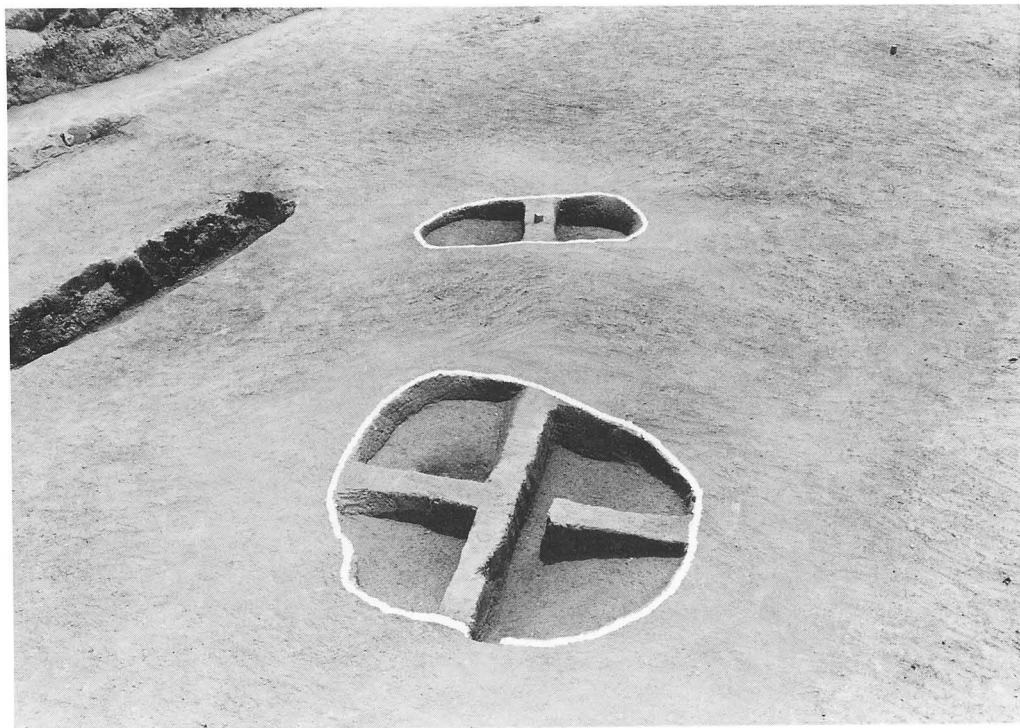
青谷遺跡 SD1004完掘状況（東より）



青谷遺跡 第2調査区遺構掘り下げ状況（南より）



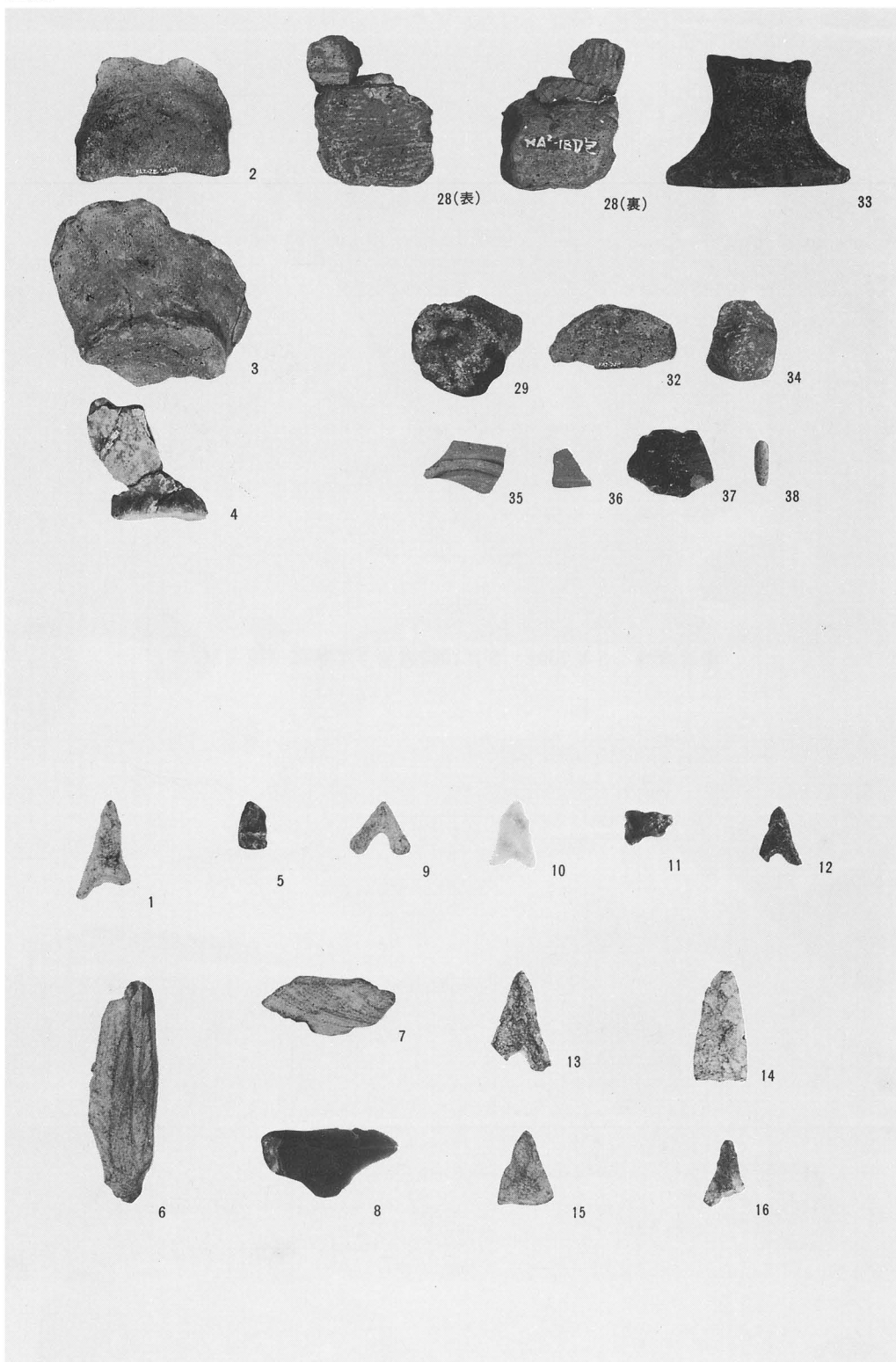
青谷遺跡 S X1004・S D1007掘り下げ状況（東より）



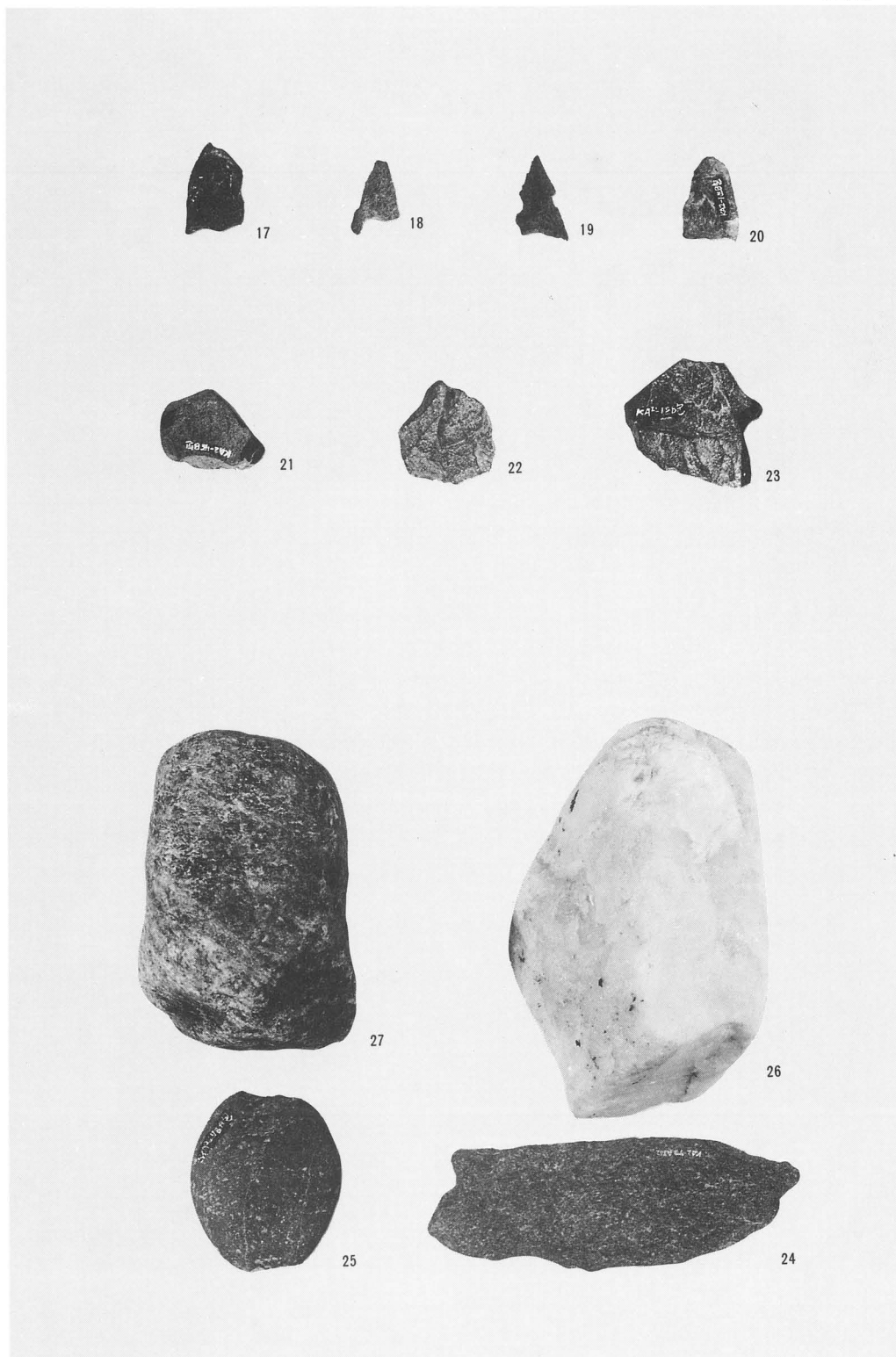
青谷遺跡 SK1002・SK1003掘り下げ状況（東より）



青谷遺跡 第8調査区完掘状況（西より）



青谷遺跡 出土遺物 (1)



青谷遺跡 出土遺物 (2)

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第1集

四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 1

発行日 平成5（1993）年3月

編集 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
〒779 - 01 徳島県板野郡板野町川端字関ノ本25番
TEL (0886)72 - 4545

発行 徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

印刷 (株)教育出版センター